

形代の呪術師

夢食いバグ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

血の縛りにより、呪力を取り込み続ける。

いずれ人がそして己が赦される時がくるまで……

目次

検閲済み	
継木家	1
当主	18
はじまりはじまり	
どうか	36
加茂家	51
禪院家	65
呪術高専東京校	78
やくわり	91
しんこう	103
交流	116
交流	2

交流	3	140
糸絡		154
糸絡	2	166
糸絡	3	178
糸絡	4	192
初版（原作開始前時点のキャラクター設定&周辺設定）		209
加筆修正（項目1）		219
対の呪い		232
対の呪い	2	243
対の呪い	3	255
対の呪い	4	267
対の呪い	5	

399	2	河川敷の殴り合い(河川敷ではない)
386		河川敷の殴り合い(河川敷ではない)
375		はじめまして、今晩は
346		幸せの味 小話 京都高専サイド
327	1	幸せの味 小話 京都高専サイド
304		304 幸せの味 小話 東京高専サイド
293	2	ゴミ袋か、雑巾か
280		ゴミ袋か、雑巾か

498	2	溢れた水
486		溢れた水
469	3	インク漏れ
456	2	インク漏れ
445		インク漏れ
429		四人目
411		河川敷の殴り合い(河川敷ではない)
3		河川敷の殴り合い(河川敷ではない)

検閲済み

継木家

「ねえ、おじさん。いつものお話してよ！おじさんのお化け退治のお話

寝たふりしてるでしょ！僕いつも楽しみにして眠いの起きてるんだよ！お話ししないならこのまま夜更かしするよおじさん！」

今日もいつものように綺麗な月が浮かぶ夜に、座敷を駆け回り逃げながら奥に向かう。そうして冷たい部屋の襖を開けて布団にいつも潜っているおじさんに話しかける。

いつも真正面からおじさんに会おうとすると、家の人たちが邪魔してくる。

おじさんが忙しいやら、現人神だから、当主だから、とか家の人たちは口うるさく言つて離そうとしてくるが僕には関係がない。

おじさんはこの家のなかで偉い人だろうが、すごい人だろうが僕にとつてはおじさんだ。

優しい優しい楽しいお話を聞かせてくれるおじさん。

両親？がいなくなつてた僕を拾つてくれた存在だ。

「ふわあ．．．またこの糞餓鬼が。眠いなら、眠りやー良いだろ、身長伸びなくなんぞ。やーい、ちーびちーびと言われたいのかー。後まだ29才だおじさんじゃなくてお兄さんと呼べ」

僕が枕元で騒いだのに気がついて、おじさんは布団をモゾモゾさせて起き上がった。そうして僕の頭をガシツとつかんで髪をグシャグシャにさせられる。

激しく怒るわけではないが、毎回ちよつと呆れたようにやるのはどうなのだろうか？と思っている。僕は頭が悪い割にそれなりに考えてやってるのだ、きつとこのようにしなければおじさんとお話なんて出来ないだろうことは分かりきっていたのだから。

後29才でおじさんじゃないって言うけど、後1日で30才な事は知っていた。だって家の人たちがやたらと普段より騒がしかったからだ。前の年の同じ時ぐらいよりも何故か忙しなかったのが可笑しかったけれども。

「えー僕はまだ成長期なの、これぐらいの夜更かしじゃちびになんないよ！牛乳飲んでたくさん動いてるしさー、ドッジボールじゃ皆に頼りにされてるんだよ、毎回ボールに

当たらないから陣地に最後まで残ってるんだよ！

おじさん29才といつても、後1日で30才じゃん！僕にとってはお兄さんじゃなくておじさんだよ」

そういうえば、グシャグシャされ続けた頭が痛くなる。

おじさんの痛いところをついてしまったと僕はとても反省した、それほどまでにとっても痛い。

孫悟空の輪のように、頭を暫くおじさんに片手で締め付けられた後離された。

「いいい」

僕が頭を擦るように抱えた様子を見て、一つ溜め息をついた音が聞こえた。

「あのな、30才は世間から見ればまだとても若い方だぞ。それに俺はな、生涯ピッチピチのお兄さんだからな。

……ああそっぴいえばもう30か……」

「うん年取るのそんなに辛かった？僕は大人になるんだーって前の日とか近くになつたらワクワクするのに。大きいケーキとかご馳走とかもあつて」

「あー本当に口の減らない餓鬼だな、お前も元気な餓鬼じゃなくて俺のようにちゃーんとした大人になつたら恐れるようになんだよ。ってこんなこと話してきたなら本当にさっさと寝ろ。」

俺はねみーって言ってるだろ」

あつそっぴい、僕はおじさんのお化け退治のお話しを聞きにきたんだつた。そういうものに関わるお家みたいだけどよく分からない、5才でそういうものが分かるようになるって教えられたような気がするけど……そういう事を感じたことが今まで無かつた。だからおじさんが話すお化け退治のお話しは、どこか非現実的で漫画やゲームのような素敵な物語のように思っている。

「そうだよ！それを聞きにきたんだよ僕。おじさんが話そらすからだよー」

「逸らしたのはお前だ餓鬼、まあいい話すからそれが終わったらすぐに寝ろ」

おじさんはそういうと、昔使ったであろうボロく赤みのある黒いインクで汚れた手帳を取り出した。

そうしてあれも言ったこれも話したと、頭をかきながら内容を選び始めている。

「はーい！そういうえばおじさん、30才の誕生日だよ、僕からプレゼントあげようと思
うんだ何がいい？」

パラパラとめくられる手帳を眺めながらなんとなく口に出した、子供の僕には特に高
いプレゼントとかそういうものは出せるわけではないが………せつかくのおじさんの

誕生日なのだから僕なりに祝いたかった。

だって大人？になってからそういうものを祝うのは無くなってくることは知っていたから。

「じゃあ、ホットケーキ。

夜に焼いて持つてくるぐらいは出来るだろう？ 餓鬼のお前でも。つかお前にはそれぐらいで丁度いい身分相応の贈り物だろ。

おっとこの話は丁度いい、聞いて眠れねえとか言うなよ」

おじさんは、僕にたいして求めるプレゼントを言いながら手帳をパラパラとめくつて間に指を挟んで読むところを決めた。

そのからかうような表情にどこかイラツとした。

その僕のイラつきも分かっているのか、今度はなだめるように頭をおさえてくる。

「まー俺にとつてはホットケーキは珍しいからな、甘味というど皆勝手に高いケーキやら皇室御用達の和菓子とか持つてくんだよ。たまーにはそういうもんを食いたい時もあんのにポテトチップスとか言つてもピザポテトや堅あげポテトとかそういうの持つてこねーし。」

さて心の準備は出来てるか？」

「はーい……………」

なんだか丸め込まれたような気しかしなが、ここでまだ話しているとお話を聞けずに終わる予感しかなかったのでほっぺたを膨らませて黙ることしか出来なかった。

「じゃあ、車での交通事故がやたらと多かつた場所のお話をしようか。」

あるところに、3人の呪術師がおりました。その術師達はこの脱線事故が多かつた場所を化物のせいと気付き化物を探すために調べておりました。

そうするとある1人の女性がその3人に声をかけます。

『……は危ないですよ、こちらへ』と

声をかけられた3人は、その女性におどろおどろしい気配を感じ祓おうとします。そもそもここには人がいるわけがないのです。

本性を見破られた女性の形をした化物は3人に襲い掛かります。その化物は、落ちていく恐怖を知っていました。だから落ちていく力を使います。

3人の術師は、それに対してそれぞれの持った術そして力を合わせて化物を引き剥がし弱らせて祓いました。

そうしてここでは交通事故があまり起きないようになりました。」

「ありがとうございます！」

僕は話が終わったおじさんにお礼をする。

毎回聞いているけど、本当の話とは思えなくてこれが僕の知らないところで起きてるんだと思うと子供なりにロマン？を感じる。

そうするとおじさんは布団に潜って手だけだしてふった。

「本当にこんなんで喜ぶんだから餓鬼だよなあお前は、ストーリー性も糞もないぞこんな。さあ寝た寝た俺は寝る、起こしても起きん。」

「ありがとうー、まだお話ある?」

「……………」

あっおじさん寝てる……体を揺すってもびくともしない、これ寝たふりじゃなくて本当に寝てる。

「ふわあ……僕ここで寝ちやおうかな、部屋に戻るの面倒くさくなっちゃった。おやすみ」

「うんっ？」

僕が目覚めたのは、自分に与えられた部屋だった。側には家の人がいてぶつくさ言ってくる。

「またあのお部屋に入ったのですか！何度も何度も言っておりますよね。当主様はお忙しいと……当主様は気を許しておられるようですが、後すつかり寝坊されておられますし……」

特に部屋がボロいわけではないけど、やっぱりおじさんの部屋と比べると少し見劣りしてしまう感は否めない。

「聞いておられますか！」

「うん聞いてる……でも今日は休みなんだからいいじゃん。しかもおじさんの誕生日なんでしょ皆騒がしかったから僕知ってるよ。」

休みだから、おじさんの部屋に忍び込んだんだしね。

一応学校では遅刻したりとかしたくないし、そこら辺はちゃんとしたいい子のつもりである。

今日の夜にまたおじさんの部屋に行つて、ホットケーキを持っていくつもりだ。焼きたてじゃなくていいだろうおじさんのことだし。

………出て行つちやつたかまあどうでもいいけど

と家の人が僕の部屋から出ていく様子を眺めて、学校から出された課題に手をつけながら勉強機の横に置かれていた二枚の4枚切りの食パンとバター、ジャムとベーコンエッグとトマトのスープに適当に手をつける。

多分今日もまたおじさんはつまらないことをするんだろう、家の人は大切なことを邪魔してはならないことと言うがそれよりも僕ともっと遊んでほしい話してほしい。

言うなら、まだ僕は子供なんだからもつとかまってほしい。拾われた僕にとっておじさんは唯一の血の繋がってないとしても家族のようなものだから、両親もろくに覚えてない僕にとっての。

家の人は僕がおじさんに会おうとすることを邪魔するから、面倒くさい……気を遣ってくれるし代わりに遊んでくれることもあるけれどこれ以上に何で邪魔をするのかと言う感情がどうしても勝ってしまう。

「……………ホットケーキ焼く」

今なら炊事場には誰もいないだろう、さっさと済ませるため元気よく駆け出した。

「継木様 継木櫻様」

俺の部屋の前に、いつものように着物の女性が現れる。明日休みだとだから平気だと昨夜部屋に入ってきた餓鬼のせいで寝不足ぎみではある。

もう朝の支度は出来ているのだが、体の節々が痛いしだるい。まあ何時ものことだし今日で解放されると思うと少し気だけは楽になる。

「ああ当主としての任を全うするでしょう。今日が最期なのはわかってるから。

それを望んでいるんだろ？」

そう返せば、黙り沈黙した。

当たり前だから何も言うことはない、それだけのこと。

呪いの受け皿 呪いの放棄先 呪いの身代り

言うなればそう言うこと、いつか人が赦されるその日まで呪いを背負い続ける。まるでどこかの礎にされた救世主サマのようだなと境遇を見返す度に毎回思っている。

「まあ機嫌が悪いわけではない、硬い顔をするな。今日で俺の番はしまいな事は皆分かっているだろう？」

これで30、今までうっかり死ななかつたことを誉めてほしいぐらいだ。」

そうやって、顔に隠すための布をつける。そういう縛り……いや風習だ。人が祭りで着物を着るような慣習となつたもの。

外に出るときに囲まれては持たないからとは思つが……家以外の場所を知らない俺には無意味に近い行為だ。

足袋をはき、座敷に上がる。そこには呪いを呪力を抱えた人々がいる。低級呪霊がついているものも幾人か確認できた。皆俺の姿をみると平伏する。

何時ものような光景だ、俺自体が特別だとしてもどう思われてようがすることは同じだ。

「(術式 災回)」

定位置に正座し、集まつた人達の呪力を残穢すら残さないほど周囲から回収してい

く。

呪霊は、呪術師や呪詛師ではない人間の漏れた呪力から生まれる。その漏れ出た呪力を呪霊を生まないようあらかじめ奪うのが継木家の役割であり呪いと戦い方。

「（だけれども、それだけではどうしようもないこともある。もう無色の呪力ではなく、呪霊として形となったものはこの呪術の範囲外で回収しきれない。）」

そして、幾人かの呪霊が取りついているのに目配せをすると恐縮したり歓喜に震えるような様子を見せた。

根本的に言えば呪力は、負の感情のエネルギーとも言え換えてもいい。それを惹き付けやすいのは同じ者なのだろう、それが悪とは言い切れない。

そのようなって生まれただけ、またはその様に歪められただけなのだから。

「そちらの方々、少し来てください。今日は貴方とお話をしましょう。」

そういうえば、目配せをした者たちはいそいそと近くにきた。今日は3人、やつぱりどこか疲れているような精神が不安定な様子だ。

呪霊は強力なものでも、弱いものでも人の心の隙に入り込む。元々弱つているところに更に入られたらそれはそうなるのも当たり前のことだろう。ずつと見てきてなれたものだ。

「継木さま、最近何故か職場の皆に無視されるんです！仕事任せようと思つたら……」
「ずつと信じていた親友に、彼氏取られたんですー。彼氏もお前ブスだからいい財布だったよつて。」

「バスケしてたんすけど、足怪我してもうできねえつて医者に言われて。」

そう三人とも勝手に喋りだした、それらは俺にはどうこうできない。個人の問題だからでも呪力の仕業であればそれはこつちの領分だ。

「そうですか、そうですか。」

相づちをうち相手に合わせ、周囲の呪力を取られたことで弱った呪霊を祓い一つ一つ呪力そのものに戻していく。低級だからアレは出さなくてもいいが……二級〜一級のものとなると、隔離してやる必要があるので今日は面倒がなくていい。

後は、30分程度会話を続け終わりにしよう。

「少しは楽になりましたか？またいつでも来てください、私はいつでもここにいますので。」

そうやって話をお仕舞いにして、血を染み込ませた布切れが入ったお守りをそれぞれに渡す。継木家特有の血の呪いによる簡易的な呪具、これで暫くは場所を知ることができきる。

もし呪霊にまた取りつかれたときにすぐに気がつけるだろう。

………もう俺の代は今日で終わりだが、次のやつも同じ血の呪いの持ち主だ。変わりはしない。

当主

「おじさんやつと終わったのー!? もう夜になっちゃったんだけど！遊べないじゃん！嘘つき」

最期の仕事が終わわり、儀式のようなうわべだけの30才の盛大な祝いを受けたあとさっさと寝ようと思ったとき。餓鬼が駆け寄ってきてボコスカと叩いてきた正直痛くも痒くもない。

てかもう日付すら変わるぐらいなのだが、こいつはいつまで夜更かししてるんだ。

「そんな約束した覚えねえが？あとやつと終わったんだから寝させろ。もう目を開いていたくねえ。」

怠い体を動かし布団に入ろうとすると、電子レンジに入れて暖めたばかりなのかくそ

熱いホットケーキを顔にむけ投げて張り付けてきた。

やっぱり最期の時までクソ餓鬼だわこいつ。

「あぢつ何するんだ、こいつ。」

そう言うてすぐにつけられた物をはがし、頭をグリグリと仕置きをする。

「だって、ほしいっていったのおじさんじゃん！ いたいたい頭割れるー」

そうギャンギャン喧しく騒ぎながら、もう眠りたい俺の邪魔をしてくる。寂しいのは分かるがそこまでになるか？

とりあえずくっそ熱いレンジで加熱しすぎなホットケーキを冷ますように寒空の元に放置する。

「割れない割れない、そんなんで騒いでたら色々切りがねえぞ。おまえだつて男だろ？そんなぐらいい我慢しろ。」

後あれは冷めてから喰う。」

「えー！もう今日終わっちゃうよ、そうしたら誕生日プレゼントの意味ないじゃん！」

「もう十分祝われて疲れてんだよ。」

「じゃあ一口だけでも良いからさ、昼に僕の時間削って作ったんだよ！それをそのままとかー」

あー話にならない、まあ餓鬼だから仕方ないところもあるのだろうが本当に甘やかしすぎというかなんというか………

仕方ない、俺が喰えばこいつは大人しくなるだろう

そう思い、放ったホットケーキを拾いサララップを外し一口齧った。味は、普通の甘い生地だまあだいぶペツタンとしているが。

「ハイハイ喰ったぞ、あり」

頭を撫でようとするが……………

視界がグルンと逆転し、端から黒く黒く染まり始める。

もう終わりだ、こいつの相手を終わらせるぐらいの時間はあると思つてた。

もう一日が終わる、役目も終わる、もうどうでもいい、あいつも、仕えてる奴等も、俺を褒に崇める奴等も、全て今日俺にとつても総てにとつても意味はなくなる。

これもある意味での呪殺となるのだろうか？

そう考えると忌々しいほど良くできた呪いだ、押し付けるだけ呪いを押し付けて後は勝手に呪いによつて自滅する。

「ねえおじさん？寝てるのおきて……………」

電話っ！救急車呼ばないと、おじさん死んじゃう！皆も呼ばないと死んじゃう。」

そう言つて知識が足りない割には、頭自体は回るらしいあいつは異常に気がついたとたんに鬱陶しく俺の身動きが取れない体を擦るのをやめ。真つ青な顔をしながら静かな夜の屋敷をドタドタと騒がしい音をたてて駆けていく。

死ぬまで、いくつの時間が掛かるのだろうか。痛みはない、恐らく次の継木に引き継がれているのだろう。声を出すのすら億劫で最期の気紛れに手を動かさそうとしてもピ

クリとも動かない。

だんだん心臓辺りに冷たいものがピトンピトンと溜まっていくような感覚がする。これが溢れたら死ぬのだろうか？

そんな事を考えていると、あの餓鬼が呼んだらしい家の者が続々と集まっていた。特に助けようとかそう言うのはない。

只膝について俺の息の根が止まるのを待ち続けているだけ。

「おじさん！救急車呼んだよ！皆可笑しいよなんでなにもしないの？このままじゃ死んじゃうよ！

おじさん！おじさん！救急車呼んだからそれまで頑張つて！死なないでもっと遊びたい。」

あいつが、騒ぎ立てながら俺に寄ってきた。もう無駄なのに抗っている、まあ俺のためにご苦労な事だともう音しか聞こえない真つ暗になった空間で思う。

恐らくあいつのことは家の奴等は止めてはいない、俺の最期はもうとつくに決まっ

いる。

「おじ……………イツ」

ドサツとナニか重いものが倒れる音がした、苦しむような子供の声も聞こえた。

その瞬間確信する、俺にとっては最もなつてほしくは無かったどうしてよりもよつて……………

こいつが次の継木、俺の後の役目を担うもの。

その瞬間、絶対に伝えなければいけないことが一つあるその一つだけでも伝えなければならぬ。

俺は声に出てるかわからない出ていたとしても聴こえてるかどうかわからない。

《己の名前を忘れるな》

そう叫び続ける、なんでもつと早くになんでもつと準備をなんでもつとこいつの願いをそう頭のなかでさつきまでは無かった死に向かうまでの後悔が溢れていく。

伝わったのだろうか、伝わってなかったら俺とても滑稽だよなハハハ己の呪いすら遣
せず後継ぎに押し付けるのだから。

ごめん



そしてどうかこいつだけは

今日はとても良い天気で、雲一つもない晴天

昨日は大切な親代わりのようなおじさんの命日

必死に助けようと救急車を呼んだことまでは覚えていて、だけどそれと一緒に僕も運
ばれて今この真つ白な天井。

痛い気持ち悪い、吐き気がする、ぐらぐらする。

昨日からずっと、身体の中をぐちゃぐちゃにされたように気分が悪い。おじさんも死んだなら僕もこのまま死んであつちにいききたい気分。

そうやって病院のベットの中で、くるまっついていると。

静かに扉が開いた。入ってきたのはいつもおじさんの近くにいた女の人ゆつくりとだけでもしつかりと僕の側に近付くと口を開いた。

「継木 櫻様お具合のほどいかがですか？」

「僕はおじさんじゃないよ。」

「そうですね、先代継木家当主は役目の最期を昨日全うされて逝きました。その次の当主があなた様なのです。」

そう彼女は、僕がおじさんの後を継いだと言った。

からかいや冗談ではない事を示すようにおじさんが持っていた古びた巻物を手渡してくる。

なんとか手を伸ばして、巻物を開いてみる。

そこには、大量の文章が細かく書かれているし更には巻物はいくら捲つても終わりがなくずつとなにも掛かかれていない茶こけた古い紙がどこまでも永遠と続いていた。

「……………これはおじさんの?」

「そうです、これは先代継木家当主が代々受け継いできた呪いを扱う術と血の縛りの詳細です。

継木 櫻様貴方はもう術式を行使し継木家当主としての役目を果たし始めています。体調が突然優れなくなったのもその役目の一つのせいです。

先代継木家当主の具合があまりすぐれてはいないことは、継木様もお分かりでしょう。」

不思議な巻物の内容は僕には難しい漢字がつかわれているのと文字が崩れすぎていてよく読めないけど、僕が巻物をなんとなくみてみると色々と話をしてきた。

なんだか僕が当主?であることの証明のようなお話し、おじさんも死んで色々突然で痛くて気持ち悪くて頭が回らない。

「つまりこの痛さとか気持ち悪いのはそのせい?」

「はいそうです。」

「なんで?そうなるのおじさんもずっとそうだったの?」

「ええ、先代も同じような感覚を持つていたと思われる。私達の継木家の血は少々特殊なものが流れております。」

詳しくすると長くなります……

なるべく短く言うならば、この血を継ぐ者の呪いを収集し呪いによる害を受け入れる事ができる者が継木家の当主となり代々当主となった際には継木 櫻というお名前でお呼びすることになります。

その気分の悪さは血を分けた者の呪いによる害と生み出し漏れでた呪いを受け入れている証 つまり当主としての証となります。」

とても長い話で半分も聞いていられなかったが、僕をやたらとおじさんの名前で呼ぶ理由は分かった。

そしてこの苦しみに慣れないと一生ろくに動けないだろうという半ば諦めにも近い確信も。正直ふざけんと思う、だけれどもそれを行動に出す気力も削がれているような気がする。

「おじさんもそう呼ばれる前の名前があったということ？」

「先代はいくつかの例外になります、生まれ落ちた時点で当主としての役目を担っておりました。ずっと継木 櫻様でございます。」

「……………」

へえそうなんだと思いつつ、窓の外を見た鳥が空へと飛び立っていく様子をぼーと眺める僕から特に話したいことが無くなっていった。

「後の事は、こちらにお任せください。継木家当主 継木 櫻様、退院後お迎えに参ります。」

他の事項や、知るべき事などはお迎え後お知らせ致します。」

向こうも一先ず伝えたいことは言い終わったらしく気まずい無言の時間が幾時か経った後、言葉を残し去っていった。

僕は巻物をベットの横のテーブルにおいた。

今さら気がついたが個室の病室で、色々と小綺麗に纏まっているこれも当主になった

という現れなのだろう。

そう適当に考え、痛みから逃げるように眠りにつきたいと目を閉じる。

考えるのはおじさんの葬儀には出たいという事、もし出れなくてもお墓の場所は絶対に教えて貰う絶対にだ。

ずっと続く痛みの中なんとか眠りにつく。

「こりやひでえな、餓鬼以外全員くたばってるじゃねーか……特にイテエから来てみればこの様か。」

ヒーローは遅れてくるというが 呪術師は手遅れな時にしかこれねえって事だな。ハッ、くそが。」

瓦礫の隙間から今より若いおじさん？だろう人をみていた。すると手を掴まれず
りと引つ張り出される。痛いはずなのだが夢なのか、痛みも掴まれた感覚も感じなかつ
た。

「……………」

僕は、色々と言いたいことはあったが声には出せずに無言になった。
色々と言いたいことはあったが声には出せずに無言になった。

まるで映画を流してみるように淡々と確定している行動が流れていく。

「お前名前は？とりあえず安全にはなつてはいるが、名字は分かるがなあ……表札は見
つかつてるし。」

「……………」

「とりあえず外でるか。」

そういうと、おじさんだろう人は僕の手をとり色々と崩れ果てた場所から出ていく。そして僕は抵抗せずについていっていた、そして学校のような場所につれていかれて白い部屋に入らされた。

汚れた服をとられると色々傷がついていた。火傷や青痣が服で見えないところに多いように見えた。

「こいつのこれは呪霊による傷か？」

「いや、呪霊によるものはここにはないね。全部他の要因だよまあ普通の傷もなんとかやれるし、かるーくやつとくよ。」

櫻君の頼みでもあるしね。」

「ありがとうございます、呪霊による負傷はあると思ってたのでこちらの勘違いですがよろしくお願ひいたします！」

「……………」

そう言つておじさんは部屋を出ていつて、医者のような人に色々湿布を張られたり骨折れてないか診られて。帰りに一緒に帰ったここまで僕は一言も話していないや話そうと思つても声が出ない。

「継木家当主としてこいつを迎え入れる！」

と僕を家に連れてくるやいなやおじさんは色々言つていた、家の人は特に何も言わなかったが善意というよりは無関心という方が近い。そのまま空き部屋までつれていかれて。

そこを使つていいといわれ、たつたままだと埃とかすごいかと掃除を始めていた。まあでも軽い掃除ですむぐらいの汚れで、これでいいだろうとおじさんは空き部屋に入つてここは安全だと示すようにくつろぎ始める。

「大丈夫だから、入って良いぞ。怖いものはないからな？」

「……………」

そうやるとしびしびと言った様子で体が動き始め、部屋の端っこにちよこんと座るようになしていた。

「お前の部屋なんだから、もっと自由にして良いんだけどなあ。名前はいえないのか？」

自己紹介が遅れたが継木家当主 継木 櫻という。当主、当主と堅苦しく呼ばれてることが多いがお兄さんでもなんでも好きに呼んでくれ。」

「名前わからない、ついてはいるだろうけど呼ばれたこと無い……」

やっと僕の声が出た、相変わらず勝手に出すかんじになってしまいが。その声を聞くとおじさんは頭をすこし抱えて。しばらく悩んだのち部屋から出ると紙と筆を持って戻ってきた。

「なら俺表札でなんとか名字分かるから、つけても良いか？名前無しとか分かりにくいし。」

「……………」

そうすると紙に筆で、さらさらと僕につけられるだろう名字と名前を書いていく。書かれた字は正直に言えばなんとか読めるというような丸文字で癖はある。

「紀野 楓（きの かえで）とお前の事を呼ぶことにする。それで良いか？戸籍調べて終わるまでの間になるかも知れないがどっちなか好きな方使え。」

つけた名前の書いた紙を部屋の戸に張り付けた。

それを見て僕は

「かえで」

と一先ず自身につけられた名前を呟いた。

「もう疲れてるだろうから寝ろ、今日は櫻お兄さんがついてやるから。」
「……………」

おじさんに、促されるとすぐに僕は眠りについた。

夢の中で眠りについた瞬間

目が覚めた。時間は朝ではなく深い夜の時間で、体の芯まで凍るような肌寒さに襲われた。

「そういえばおじさん『己の名前を忘れるな』ってとても消えそうな小さな声で言っていた。僕の聞き間違いかも知れないけど。」

紀野 楓 という名前を忘れずにいれば良いんだよねきつと。」

はじまりはじまり

どうか

「継木 櫻様お疲れさまでした、お大事になさってくださいこちらはいつでもお待ちしております。」

朝から病院から出ると、院長も揃って多くの従業員からのお見送りを受けた。なんだか大げさ過ぎるような気もしなくもないが………継木家からの支援が多いのだろうか？

こちらを迎えに来た家の人も病院の方と何か話しているのが見えたがだいたい十分ぐらいで終わり

「こちらです」

と戻って車への案内をされた。

まだ具合は悪いが、なんとか病院を退院し（継木家とかなり縁がある病院だから本来よりだいぶ前に退院させてくれた）

車の外の景色を眺めながら、家に戻り。

おじさんの屋敷で行われる葬式に出た、次の継木家当主として。

「きつくはありませんか？ 櫻様、唐突でしたからまだ合せが出来ておらず申し訳ありません……………」

「仕方ないよ、昨日今日の話なんだから。気にしなくていいよ僕も当主になるって昨日初めて知ったしびびくりしている。」

「そうでございますか……………櫻様」

正装なのか、いつも儀式でおじさんが着ていた服を何人かで着させられた。見た目よりは大分動きやすい服装であるが、体格の差なのかブカブカしている部分が多くて不愉快な気分させられた。

葬式もどこか、儀式めいていた。

表では表してはいないが、そこにおじさんへの悲しみ等は含まれていないように仮面をつけたような顔をみんなしていた。

ただの一つの区切り後始末といえはいいのだろうか？

僕はまだ幼いと言う事で、進行など全ては他の人が行っていてただそれをあの時の夢のように眺めてるだけだった。いやもしかしたらこっちのほうが夢なのかもしれない

と思うほどに。

微睡み、落ちそうになる度にふっと意識を戻すことを繰り返しながら時間を過ごす。聞いた話だと、継木家は火葬はしない土葬で樹の下に初代から全ての当主が埋められている。

僕もいずれはその樹の下に逝くのだろうと、ぼんやりでもおじさんと一緒のところなら良いと感じていた。

その後は、櫻の樹の下に埋められるおじさんを見た。顔には布を被せられ何故か心臓あたりが赤く花を添えたように滲んで染まっているのが見えた。

深く深く一人分の穴の奥に、おじさんの亡骸は置かれパサリパサリと土がかけられ見えなくなっていく。

「待って……」

「……………櫻様お静かに、お願いいたします。」

思わず駆け寄ろうとしてしまうが、周囲の人間に抑えられた。当主としての行動では

ないと……

思わず後でおじさんに会うため掘り返してやろうか?と思っただけその眠りは僕にも妨げてはいけないものだとは分かっている。

「(でも、病み上がりに肉大量に食わせるのはいかがなものか?)」

葬儀が一段落し、その後食事を取ることになったが何故か自分の皿にだけ肉を細切れにして焼いたようなものが乗せられていた。

食ってはみたが、食べたことは無いが内臓つぼくて硬くてとても美味しいとは言えたものではない。だけれどもおじさんが言っただとおり残さない様にゆつくりだが頑張った。全て自分の身になるとずっと言われていた。

なんとか食事が終わったあと、当主として各地の挨拶回りがあるらしい……僕に言われたのは櫻様は、まだ若いお話等はこちらで行いますので心配なさらずとのことだった。

正直今のところは継木家のお飾りなんだろうと子供ながらも感じた。

呪術御三家?と呼ばれる家に最初に回り、その後細々とした関連がある呪術家、呪術以外の関連がある組織の順でかなり数があり特に御三家は最も気を使いますので備え

てお眠りください

と夜にもなっていない時間に言われた。

とうか呪術御三家から話してほしい、僕全く知らないけど様子から色々と偉いことはわかるけど……何話しかけられても黙ってるのがいいかな。

まだ具合悪いしずっと。きつと治ることは無いんだろうな治つてたらきつと前々からおじさんの時から治してるだろうし。

そう思いながら忙しかった一日をめるように布団へと潜つて暗闇に沈んだ。

「おじ……………イツ」

僕は倒れた、おじさんは横にいる。苦しい、体中が全てナニカに無理やり変えさせられていたような、僕が僕じゃ無くなってしまふ。

視界はもう真つ黒でなんにも見えない、目を開けても真つ黒で感覚もどこかふわふわしていた。その中で

おじさんの声細く叫ぶように

「己の名前を忘れるな」

と言う声にもつかない音を感じる。

おじさんもそうなのだろうか、一人は寂しいから手を伸ばしたいがどこに伸ばせばいいか今僕に手がついているのかすら分からない。

救急車の音が聞こえない。

.....

そのまま意識を無くす、そうなると思っていた。だけれども目が開けた

「何で？」

そこには一本の櫻の大樹、あの庭で見た木と全く同じに見え僕は顔が半分もうずぶずぶと底なしの沼に沈むように土に沈んでいた。

不快感はなく、むしろ母の母胎に戻るような心地よさがあったが……

「このまま、よくわからないけどやられるんじゃないやだめだ！」

急いで足掻いて藻掻く、だけでも水を掴むように手応えがなく次々とすり抜けてもう鼻だけしか出ていないようになったとき。

沢山の誰かに背中を押された、その手はきつと僕と同じようにここで足掻いた者たちの手なんだろうと察した。ゆっくりと沼から自身が押され浮かんでいく、完全に浮かんだ……

「今なら僕でも引つ張り出せるから！」

そうやってすぐに体勢を立て直して地面に手を入れようとする就先程までの沈むような底なし沼でなく硬く拒むようになっていた……

きつと木の下に、あの人達はいるのだろうか。

「引つ張り上げられなくてごめんなさいでもありがとう、ここは本当にどこなんだろう……」

そうやって何か出口でも何でもないかと辺りをうろつく、現実とは思えないほど広く

広く広がっている空間。

心地よくけれども自分を持たないとまた落ちていってしまいそうな感覚もある。

ここに来るまでを思い返してみると、かなり欠落している記憶があった。自分の名前や年齢、家族のこと、楽しかった旅行。それらがあつたと言う事は思い出せるが内容がまるで黒塗りされた新聞のようにカランと欠けていた。

「まず真つ先に思い出さなきゃいけないのは僕の名前だよね……おじさんも最期にそう言ってたからきつと大切なこと。」

それに混乱せずに、いられたのはおじさんからの言葉があつたからだつた。

でもそれ以上にここで何をすれば良くなるのかが分からなかつた。さつきみたいにならないようする為に、自分をすっかり認識し続けなければならないのはわかつたけれども。

「櫻折ってやろうかな。僕じゃ枝ぐらいしかいけないだろうけど。」

何も行わないよりも、やって悪化しても好転してもやることがあつたほうが正気を保てる。そう思い僕はなんとか木によじ登り、手に届きそうに折りやすそうな枝をポキッ

と手折った。

すると紅い血液のような樹液がドロドロと折った枝と木の断面から溢れ出しびっくりして木から落ちた。

落ちてても夢で落ちるように痛みは感じず衝撃もなかった。同時に夢なら悪夢だから早く覚めろとも思ったが。

「……………で本当にどうしよう。」

不気味にタラタラ血のようにドロドロとして紅い樹液を流し続ける樹の枝を持つてると、どこか懐かしい他人の記憶が自分の中に流れてきた。

今でも生きているような僕とは全く関係のない他人のことなのに鮮明で懐かしいと思ってしまうような記憶。

あの櫻の中に閉じ込められていたのだろうか？

「もしかしたらこれになにかあるかもしれない。」

そう思いやることを見つけ、自我を失わないように確かに自分は僕はここにいます

ずつと思ひながら多くの他人の懐かしい記憶を辿るように中に入り込む。

そこには呪いとのかいや、何気ない幸せな日々、悲しい裏切り、幸せの絶頂、緩やかな終わり。

多くの人のすべてを見られた訳ではない一部だけれども、それは全て幸せな記憶でもなかったが辛くて残酷な記憶だけでもなかった。

そして僕にとって大切な記憶もあった。継木の意味、今僕の置かれている状況がやつと理解できるぐらいの情報も。

「これが僕の継木の呪いか……もうここに来た時点で手遅れかもしれないけど、おじさんの事もあるし最後まで抵抗させてもらう簡単に吞まれたりはしない。」

吞まれないため、自分を守るカラを作る。やり方は今ので見た一回でできなくても何度でもやる。

ここにこうしていられたのは僕が初めてみたいだから、領域はただの区切り、決別の印。

名はそれを示す、証。形を保つためのモノ。

たとえ櫻と違い花をつけることも実ることが許されないとしても、名前を奪われたと

しても。

「領域展開 夢幻書房（ムゲンシヨボウ）」

そこに小さく塗りつぶされ現れた世界は、たくさん本がある書庫の形をしていた。中央には一つの座るための椅子と机、僕は一つ本を手に取つたとあの櫻の枝と同じように記憶が流れてきた……

アレと同じということは本当に今感じている自我はハリボテみたいなもので手遅れなのかもしれない、けれども足掻く時間も手段もできた

ならば

僕は中央の椅子に座り次から次へと本を手に取り読み込んでいく、その度に他の人の記憶を脳に駆け巡らせながら必死に次へと進む。

その存在を取り返すまで、己を失うわけにはいかない。それこそがおじさんからの願いで僕の小さな小さな抵抗。どうか己が尽きる最後の最期までさせてください。

今回は夢を見なかったが、何故か朝から騒がしい。

「継木家の櫻の枝が折れている。」

「誰だっ誰がやったんだ!？」

「今までこんなこと無かったぞ、これは今代は厄があるかもしれん！」

「そんなこと言わないでください。」

庭のあの土葬の櫻の枝が折れたという騒ぎらしい。今日は御三家に朝から準備して向かわないといけけないのに不運というかなんというか……………

「ひとまずは、櫻の手入れを今後とも十二分に行いましょう過ぎてしまったものは仕方がありません。」

と取りまとめ役の人が一言言つてひとまずは収まったようだ、僕は今日もあの堅苦し
い正装をしていくようになると思うと気が重くなる。

流石に御三家にいつもの服装では行けないと何回も言われたので従うし自身でもそれはだめなのはわかる。

「ご飯は用意してくれるそうだが

「朝」飯は食べない、緊張で吐きそうになるなら内容物ないほうがいい。」

と言つて断つた、腹が鳴らないように水は飲んだが……せつかく作つてくれたのに残してしまうのもあれなので家に帰つてから貰うとも言つたが。

「当主様にそんな冷めたものを食べさせられません！ 帰られた際にはちゃんとしたものを作り直します。」

と焦つたような、少し怒るような、感じて言われおじさんが僕のホットケーキぐらいの雑な料理がたまに食べたくなるといった気持ちになる気がした。

「あそうか……なら適当に食べるでも捨てるでも処分してくれ。」

無理に引き止めることもするのもアレでどう返答すれば良いのかわからずとりあえず会話を切るために言葉を紡ぎ。

「今日から3日間御三家をそれぞれ回るとだけしか聞いてないけど、まずはどこからいくのかな？知らないけど……………」

と正装に着替えさせられながら、予定を聞いた。御三家についてそれぞれ詳しく知っているかなんてほとんど聞かれないだろうし、ただの入れ替わりの挨拶に偉い人が根掘り葉掘りするわけでもないだろう。

「今日は加茂家に向かうことになっています。」

当主本人との主なお話はこちらで行いますので……………」

継木 櫻様は次期当主の加茂憲紀様とお話される事はあるかもしれません…………年齢はだいたい3年ほど上の方でございます。」

「そうなんだ、失礼がないように気をつけるけど……………もしなにかしたらフォローお願いしてもいい？」

歴史が深いところは良くも悪くも、特色的な規則がある。それを無意識に気が付かず破ってしまうかもしれない。

笑って許してくれる程度のものであればいいが、牛や豚を食べてはならない規則のものに気が付かず牛や豚を食べさせるようなことがあれば絶縁などもあり得ることは分かる。

「もちろんでございます、そのために我々は居るのですから。継木 櫻様は居るだけで尊い存在なのです、その役目を穢さない為それだけでございます。」

「そこまで固くならなくてもいいよ？」

本当におじさんもずっとこんな感じだったのだろうか、いずれ慣れるとは思うけど……いつ慣れるのか、落ち着けるのはまだ随分時間が掛かりそうだと思いつながら。

複数人での正装の着付けが終わり、簡単な身支度を済ませ車に乗り込む。

御三家の家で遠い順から向かうという話を車の中で聞き、加茂家が継木家から一番遠いのかーと思いつつ、ゲームなども持ってこれないので窓の外の動く景色をボーッと見ながら時間がすぎるまで目を閉ざした。

加茂家

継木家が当主替わりの挨拶に来るらしいと、周囲の加茂家の人間がヒソヒソと話をするのがあたり中から聞こえる。明らかに歓迎ではなく、拒絶や否定嫌悪そのものであるのがわかるほどに内容は陰湿だ。

なら何故わざわざ関係を持つているのか？

それは継木の血が決して、加茂家に混じらないようにする為と言われた。術式によるものではなく、血そのものが呪われている。

血を縁として一人の形代が、漏れた呪力を集め、呪いを引き受け、記憶を引き継ぐ。

形代は、血により選定されるそしてその形代となる人間が当主となる。

実力も高潔な血統も何もかも関係がない、すべてを引き受ける形代が当主として崇められる。

もし継木の血が混ざれば、加茂家の誰かがいつ継木家の形代になるかわかったものではない。もしそれが相伝の術式を持つ可能性がある者だったら目も当てられない。

決して混ざらないように、継木家から継木家の血を呪術家で継いでいるものがないか情報を渡させているのだ。その為に関係を持ち続けているのだ。

他の2つの家五条家、禪院家でもそうだと聞いている。

だが呪術家でも、継木の呪われた血をあえて混ぜ受け入れるものもいる。それは呪霊または呪詛師を相手取ったときの死亡率が格段に下がるからとしか言いようがない、形代が受け入れられない程呪力による負傷を負わない限り全ての負傷は形代の苦痛として変換される。

厄を背負う、身代わりとしてとても優秀なのだ。

形代自体も非呪術師、呪術師問わず血の繋がりを持ったモノの漏れ出た呪力を集め膨大な呪力総量を持ち得ている為よっぽどのものでない限りは形代は受け入れる。

「警戒していかなくては。」

ここに今の継木家当主がいる。

現当主は今別の座敷で、継木の血を継いだ呪術家がどこなのか一から十まで聞いていると思う。

服を呼吸を整える、次の加茂家の当主として侮られないように威厳を見せなければと扉を開けた。

そこにいたのは、まるで死体のような深い黒い目をしたかなり幼い男。

継木家の当主なのだろうか？

「こんにちは、本日は当主変わりの挨拶へと伺わせてもらいました。

継木家当主 継木 櫻 と申します。

名前だけでも覚えてくださると嬉しいです。」

そう思っているうちに男は、自身が継木家当主であると明言した。すんなりと耳に入る底冷える冷たい空気のような声をしている。

にしても私が言えたことではないが、本当に年下で今の時点で当主になるとは精神的にも経験的にも不足すぎではないのか!?

「正直僕も突然昨日今日と当主と言われてやってるだけなので呪術がなんなのかもわかりませんし……まあこれから僕自体とは30いや24年長くてもその程度の付き合いだとは思うので。」

驚かせてしまいましたね、貴方の話は家の者から聞いております加茂憲紀様。

お互いの交友を深めるため、何か僕について分からないことがあれば遠慮なくお聞きください答えられる範囲でお答えしますのです。」

「まっつてくれ、何故年数をそんなに決まってる風に言えるんだ。」

突然の発言に思わず口を出す。

自身の驚きと焦りを悟ったように、男 継木 櫻から発された発言は到底自己処理しきれない内容を多く含んでいた。

昨日今日とは何なのだ！

呪術を知らないだと、呪術家の当主だろう？

なんで年数をはっきり決めるように言えるのだ、その年に当主を辞めるのかそれとも自死でもするつもりなのか！

そんなまとまらない感情から出た落ち着きのない脈絡すらない言葉

「……………いえ、本当におじ…………先代当主が死んで僕が次になりました。僕は、先代当主に拾われ特に呪力も無く見えることもなくこの年まで過して呪術にも関わらずいました。先代から呪術師のお話だけは好きで聞いてました、本当にあるものとは思っていませんでした。」

感覚としては、眠る前に読んでもらえる絵本かな？

僕は今6歳です、先代は30を迎えて死にました。

先々代もそのもつと前も、皆30を迎えると死にます。けれどもその前に死ぬ事も無かった、必ずその年を迎えると 死ぬ いや

それまで死なない、死ねない

のほう为正しい……？継木の当主は呪いで死にます、呪われて誰に殺されるまでもなくひとりで死ぬんです。

そう聞いてます。」

まだ6歳という幼さの男は、呪力という普通の非呪術師の世界であれば異常にこれまで気がついてこなかった事。

当主は必ず30になると呪いで自死すること。

それを理由として淡々と答えていた。呪術の世界でもこれは当たり前として、済ませてしまつていいのだろうか？自身が死ぬという事にも抵抗がなさすぎる気がするのだ。

家の者から話されたことが思い起こされる、呪いの身代わり。

文字通りの 肉体 精神 魂 すべてを捧げる善き生贄の姿こそが継木家当主。

「怖くないのか？」

その言葉を口に出したとき、どんな顔をしていたのだろうか。ありえないというある種の否定だろうか、身の上に対する勝手な同情だろうか……

この加茂家に同じ年に来た時の自身と重ねても、彼の言葉は全く咀嚼し呑み込めるようなものではない。

「怖いか怖くないか……正確に言う実感が無いからだと思います。

本当に突然です、でもなんとなくそうなるんだなーと思うしかないんです。

今の僕は呪いよりも銃とか大切なものを無くす事の方を怖いと思うんです、きつとこれから呪いのほうが怖いと感じるようになったらその死が怖いか怖くないかわかると思います。

今はその質問の答えは僕にはわかりません、

ごめんなさい。」

男は目を閉じて、ごめんなさいと謝った。

その時にちよつとした罪悪感と共に、その男いや継木家当主に対する警戒感は完全に消えた。

この人は、手探りで物事をなんとか見繕いながら正解を探しているだけ知らないことばかりなだけであると。

よくよく考えれば当たり前だ、どれだけ曰く付きの家だろうと当主は人間だ。

しかも呪術に染まりきっていない只の人間なのだ、血の呪いを受け役割を突然背負うことになっただけの。

「本当に、知らない事が多いようだな。」

「本当に知らない事ばかりですよ、これから嫌でも無理でも色々経験することになると思ってます。」

「……………加茂憲紀個人としては、継木家当主 継木 櫻ではなく継木 櫻としての話が聞きたい。こちらとしても当主ではなく加茂憲紀として話す。」

「……………」

死人のような、底の見えない吸い寄せられるような漆黒の目がこちらを見据える。そこに感情を読み取ることができない。

すうっと一つ息をすい出た一声は、

「気分が、悪いです。吐きそうです、頭がいたいです、お腹の中に手を突っ込まれてぐるぐるぐちやぐちや混ぜられてる気分です。

横になつて微睡んで気絶でも昏睡でもなんでもいいです。意識を失いたいです、手放したいです。

それぐらい体とか、色々な具合が悪いです。当主？と呼ばれるようになってから。

貴方との話は頑張つて言つてました。

正直あちこち苦しいです、本当に痛いのかそれともあちこち気持ち悪くて幻覚のように痛いのかもわからないです。」

形代として受けている苦痛、そのものだ。

血の縁を持つすべての者の呪力と呪力による害を受け入れる、苦痛が代償ならばそこから逃げるすべなど用意されてもいない。

あれほどまでの苦痛を受けているように見えるのに精神の崩壊がなぜ起きないのか？いやそれは逆だ起きてしまったら苦痛が代償として機能しなくなる。

逃げることは叶わず、狂うことで和らげることさえ許されないのだろう。それ故のあの生気を失った目。

息を呑んだ、口が乾いている。

「そうか……横になるといい、それを踏まえていくつか君自身に聞きたいことがある。いいか？」

その苦痛に、寄り添うことはできない。

下手な同情は不味い

だがその精神を理解することはできるんじゃないか、シンパシーは全く感じない同じではない。当主に関わる似たような立場だが、それに対する感情も立場も与えられたのか与えたのかも。

「……………すいませんでは、遠慮なく……………」

質問いいですよ、僕に聞きたいことが山程貴方にはありそうに見えます。」

まるで限界まできて、崩れるようにドサツとまるでモノが、落ちたかのように横になると。焦点が合わないのか瞳孔を暫く左に向けたり下に向けたりして、こちらに向けてくる。

「呪霊は見えているか？」

「なんか初めて見るものが多くなったのでアレが呪霊だと、認識のすり合わせはしてな

いので。」

「術式持ちか？」

「当主になったからにはあると言われてます、無自覚に使ってるかもでも意識的にはしてないです。」

「好きな食べ物は何？」

「ホットケーキ、やつすい粉で作ったような薄っぺらい。」

「友達はいるのか？」

「居たけど、今だったらいないのとおんなじ。」

「嫌いな事は？」

「英語、イントネーションが悪いらしい。」

「拾われたと先程言ってたが理由は？」

「呪霊？で生き残り一人それが僕。」

こんな感じで、淡々と一問一答を二人で繰り返して行く。内容自体に対する意味は込められてない、お互い見ているのはその時の揺らぎ。

声や会話のトーンテンポ、体の動き

お互いの本質を見ようとしていた。

「家族がか……悪いことを質問してしまったあまりに深く突っ込むものではなかった

な。」

「別に、家族はおじさんだけだから。」

僕にとつては最初っから。

アレは只の不運いや幸運なのかなよくわからないや、僕としては幸運だったのかもしれないけど。」

会話の初めから感情がないように淡々としていた声に抑揚が付き、目に感情が籠もったように見えた。それだけでほんの少しだけでも、己とは違う思考感情が理解できたような気がするのだ。

「おじさんは、前当主のことか？随分慕っているように見えるが……」

「僕の前の当主だよ。アハハ、僕にはお兄さんがいればこうやって話してたのかなあ……」

おじさんぐらいとしか、よく会話してなかったから。居なくなること考えてなかったや。」

どこか寂しそうに笑っていた、初めてする6歳という年齢相応の表情や声。

胸の奥が締め付けられ、何処かキリキリと音がなる。感情移入し過ぎると問題があるとわかっている。利用するだけ利用し傍観する、それが加茂家当主としては正しい行動なのだろう。

「……………そうか、今はこれだけでいい。」

そうやって口を閉ざす、もう今は開きたく無かった。だが次の一言でその身勝手な思いは砕ける。

「質問を質問で返すなどは言うけど、その質問に答えられれば別に問題はないわけなのにどうしてそうなるんだろうね、どうどうめぐりになるからかな？」

僕も一つだけ質問いいかな？

この加茂家に君の家族はいるの。別に言いたくなければ言わなくてもいいし嘘ついてもいい、きつとそれぐらいの関係だから。」

閉じた心の芯を突き刺す、まるで言った言葉が返ってくるかのように的確に痛いところを一つついでくる。

確かに、こちらだけ質問をしていた返さないのは失礼いや不自然だろう。

出そうとする声、喉で止まる。だが捻り出す、これはやらなくてはならないことであらう。

「父様はいるでも母様は……………」

「そっか、無理に言わなくてもいいよ喉が引き攣ってる。」

「……………」

途中で止められた、とても良く人を見ている。

次期当主としてもつと腹芸も、できるようにならないと見透かされてしまうといふことか……

それとも、継木の当主としての才覚か

「そろそろ、血の繋がりの話が終わる時間かな……偉いところも大変だね。それがそれである為に色々する必要があるんだから。」

権利としなければならぬ行動は同等で釣り合いが取れるものとか……

ずっと寝そべっていた体を起こし正装についたホコリ汚れなどを手でパンパンと落とすように叩く。

座り方を正座になおし、向き直った。

「今度はいつ会えるんだろうな。少し崩した会話はなかなか出来ないこういう立場になつてしまうと。」

「会いたいと思えばいくらでも継木家は歓迎いたします。こちらから向かうのは……正月頃ですかね。」

あと継木 櫻としてですけど、加茂 憲紀様をお兄さんと呼びすることがあつてもいいですか？

今日は楽しかったです。」

「兄か……、あんまり人がいない所でならいい渾名のような物だろう。こつちも弟と

でも言おうか？」

そうやって、口角を上げて了承の微笑みを見せる。

当主としてと個人としてのやりたい行動は違う、けれども母親の為に立派な当主としての行動を取らなくてはならない。

ならばこういうことぐらいはやる。

「どうぞお好きな時に。」

継木 櫻はその了承の言葉を聞くと、満足げに笑いこっちも好きに弟と呼んでいいと返す。

お互いもうそろそろ別れの時間と、座敷からたち背を向けそれぞれの方向へと歩いていく。加茂家からのお出迎えはなく継木家は帰路につく。

「兄………そういえば、私は一人っ子だったな。なかなか悪くない響きじゃないか。」

禪院家

「また見れなかった。」

時間があるときにちよくちよく見ている巻物には、詳しい事は歴代当主の記憶から引き継がれます。と書かれている部分が多い。なんとも不親切なことであるが……

巻物の内容自体は、術式開示?と同じようにすべての人間が知れるような秘匿されたりしていない誰でも接続できるオープンな情報らしい。まあ呪術に関わっている人しか見られないような細工はしろと言われ本当の大昔よりはすべての人間が見られるわけではないよう。

家の者に聞いてみると、当主は当主としての力を引き継ぎ認識した後は夢などを通して歴代当主の記憶をたどり力を得ると言っていた。皆が引き継ぎ持ち得る当たり前とも言えるその力、特異な形質。

……その歴代の当主とやらの過去の記憶の夢を見れないと言ったら、排斥は無かった。いつものように継木 櫻様は、生きてるだけでお役目を果たし生きてるだけで我々にとっては尊い存在です。

とみんなが皆、口を揃えて言った。一人ぐらい悪態ついている奴がいたほうが面白い

ぐらいだったのにまるで機械のように見えてきた。

どいつも、こいつも同じ顔。

「……………オエっ」

夜に食べた、飯が胃から迫り上がってきたものをとりあえず近くにおいていた桶に吐き出す。消化途中なのかどうなのか黄色がかったドロドロの液体、豪華な食事も消化してしまえばみんな同じこんなゴミ

……………昨日加茂家に行ったとき朝食食べなくて正解だったな、きつと目の前でゲボ吐き出してるわ。次期当主様の前でやったらどんな事になっただろうか想像するだけで寒気がする、寒気自体はいつも走ってるが。

次期当主の人はいい人そうだった、でも人なんて立場によって行動は変わる。心情が根が清く美しくあっても、大きな組織で動けば……………

力とは人を縛りつける一種の鎖でしかない。他者も己も関係ない。おじさんも同じだったのだろうかと考えるがそれで今の苦しきの気を紛らわしているだけかとも思うと自分自身が醜くて心の底から笑えてきた。

葬儀で、肉とか食べたのが奇跡だな。

固形物は、駄目になっていきそう。

ゲロとかって水分多いみたいだけど、脱水症状これから出たりするのかな？

と何処か他人事のように思いながら、今日は禪院家に行くのかと夕食時に話された次の予定について思い返していた。

「正直今日ずっと布団で寝たい。」

昨日言われたことで大切そうな事

「継木 櫻様、明日の予定なのですが。禪院家の当主様が直接話されたいと仰っております。前当主様との付き合いもありますので……………」

つまり、加茂家とは違い当主直々に会えとのお達しが来た。一応継木家当主と言ってもお飾りのようなものなのだから、組織経営的に考えると僕は無視してもいいと思ってしまいが結構な物好きなのだろう。

「……………が禪院家……………か。」

加茂家でも思ったが、継木家の家が貧相に見えるほど無駄にでかい屋敷だ。人が多いのかそれとも見栄っ張りなだけなのか。

名家は見栄を張るのも仕事の一つでもあるから、それ相応と見るべきか。

家の人達に着させられた、堅苦しい正装を整え簡単に髪を正す。

「……………そっちからの迎えはやっぱり

ナシか。」

加茂家でも思ったが、どうやらウチの家は大手を振って歓迎されるようなものではないような事は分かってきた。その理由はまだ僕には分からないが。

だけれども関係はそれぞれ深い、継木家ができた当初からこうして交流をしていたのだろう。

そうすることでメリットがあるのか、はたまたしない時のデメリットが酷いのか……「(僕自身には関係のない話だけど。)」

招かれていない、ナカを進む。訓練としてバシンバシンと木を打ち合うような音。それは術としての物ではなく殺し合いで使われるような血生臭さが残るもの。

「(呪を祓う事しかないんだろうな、この禪院家の命題は……そのお陰？でまだ社会として成り立っている一つの要因かもしれないけど。)

害をなそうとするより、無関心でいたほうが利益の溢れぐらいはあるって事かな？」そんなことを歓迎されてないのは分かりきっていたので、こちらも口に出して言うほどの勇氣も度量も力も無いので内心だけで思いながら当主の座敷に進み障子を開けた。「コイツが次の継木か！ハツハツハ湿気たやつだ。あやつの後とはな。」

まず感じたのは酒臭さ、その後には威厳を感じる声。おじさんよりはかなり年をとっていた。僕が死ぬより早く死ぬのかなそれとも僕のほうが早く死ぬのかなそう思いなが

ら。

「始めまして、継木家当主 継木 櫻と申します。禪院家当主 禪院 直毘人様先代と長らく関係が深かったことは家の者から聞いております。」

とりあえず、格式を保った返答をした。

作り笑いはいつの間にかできるようになるものだ、心をカラにして。あの時のおじさんのマネをする、おじさんのそういうところが嫌いだったが嫌いな行動にも理由があることを知った。

「ああ、本当に死んだのだな継木。」

あやつの情け無い最期でも酒のつまみにでもしたかった。」

直毘人と名前がついた人間は、一瞬思い詰め真実を確かめるように真顔になりその次の瞬間には真意を隠すようにおじさんを唾った。不思議と不快な気分にはならなかった、きつと僕と同じでおじさんをおじさんとして見てくれていた人のような気がしたから。

勝手な同調だ、人の心なんて分かり会えるはずがないのだからそれぞれ身勝手に他者に像を押し付けているだけ。

「……人の死に様ほどつまらないものは無いですよ。」

「誰だって最後は気になるモノ、どれだけ駄作だろうが最終回は気になるものであろう

?しかも気に入ってた傑作の者とあれば。

さしずめ、続編といった所だな。」

「随分仲が深かったようで、禪院家当主の期待に添えるかは私でもわかりませんがね。同じく持ちつ持たれつ良好な関係をこれからも築けていけたらと思っております。」

「あやつと違つてどうも硬い奴だ、相手にしててつまらん。」

少しなにか言えばすぐに突つかかつてきて反応が愉しいものだったのがなあ。そのせいで、危うく呪具庫や訓練場がお釈迦になりかけたが。

冗談を本気にしよつてまさか本当にやるとは思わなかったし、あやつにできるとも思わなかった。

互いの若気の至りといったところか。」

お互い仮面をつけたように、意味もない揚げ足を取るような軽口の言い合いをしていたが……

おじさんといった禪院家で何やらかしたんだ。

そりゃ歓迎されなくて当然だわ、圧倒的にこちらの有責でしかない。お家取り潰しの危機が現当主の口からサラツと語られているのだが。

……加茂家とか五条家とかその他色々という問題遺してるかもしれないと嫌な想像がついた、もう歓迎されてない問題は諦めようだいたいこつちが悪い可能性が高

い。

「そうですか、先代が申し訳ありません。」

「気にしておらんよ、それ程までに記録にも記憶に残る愉快な奴であつたというだけだ。

一つ聞か、こつちから嫁でも取らんか？」

………血の繋がりを持つてしてお互いを人質にし、強固に保つとはよく聞く特に驚くことじゃない、話してる僕の年齢を全く考えてないだけで立場としてはおかしくは無い。

落ち着け

僕に近い人をあてがえばいいそれで目的は達成、お互い円満そうこの当主様は現在進行系で酔っ払いながら話してるのだ。

こちらもそう相手すればいい、お互い酔っていたとそれだけの事だと。

「継木家は、血に問題があると聞きましたかが禪院の血を穢すとは言われませんかね。それだけが心配です、継木家当主として。」

「だから、嫁を出すと言つておる。継木を禪院に入れるのではない、継木に禪院の者を混ぜるのだ。」

「そうですかなら、家の者に印として成立つ人の選定を頼みましょうか。友好の証としてですから、おめがねに叶う人でありましょう。」

そう政略なら、当主でなくてもいい繋がったという事実があればいいのだ。本来ならこつちが嫁を出すのが基本であるが継木の血の問題がどうしてもある。

だからこそその禪院家側からの、こちらに嫁入りさせるといふ発言なのだろう。

あくまで嫁入りしたら禪院家との繋がりを持った人物でもありつつ、姓が継木となり禪院家の者ではなくなる。

禪院の血が継木に犯される事はない。

「お前に向けてだ、継木家当主 継木 櫻」

クソジジイ、こつちが提案してやってんのにそれに沿つとけや。

と思わず口から出そうになるのをなんとか抑えて、ちよつと頭の中で思考する。6才のさらに当主にほぼ無理やりなつたばかりのやつに考えさせることじゃないと思う、と
いふかわざとやってるだろこのジジイ。

そういう事は、実際にそういう事してるのに言ってくれお飾りだぞこちらら。

「継木当主の寿命ご存知で？ 末永く縁を繋ぐのにはいささか不向きかと。」

「あやつから散々耳にタコができるほど聞いたとるわ、30だろう？ 初めて見たとき赤子の状態でこちらの方が当主だと女が一人きおったからな、気が狂ったと思つたわ！

呪術師の世界など、いつ死ぬかわからんむしろいつ死ぬかとつくに分かつてる方が利点がある。それにすぐにくたばるわけでもあるまい？」

「……………確かにそうですが、私個人では決めかねる部分が多いですかね。禪院家との繋がりや喜ぶべきものとしてくれるでしょうか……」

なんて返せばいいのか、弱い頭では思いつかない。まず一旦保留までに持ち込むことを考える。

お互い組織で動いている。禪院家の当主禪院直毘人は知らないがこっちは継木家で敬われていることは十分死ぬほど感じるが権力があるわけではない。権力あっても僕らはあんまり使おうとも思わないから自動的に僕のそういう行動は周囲によって決められる。

僕の意志だけで完全に決めることは不可能。

「もうそっちの家の者とは、話はつけておる。さてそれを踏まえてどう出るか？」

愉しそうですね、外堀から埋めてやがった。……………家のものが当主と会うことを強調してたのはコレもあつたのかもしれない。

僕はそう決まっているのなら特に逆らう理由も感情もない、嘘かどうかを確認する必要はあると思うが。

「……………わかりました、家の者ともう一度話し合い詳しい話は返答させていただきます。

話は人伝に聞くといつも誰かの都合よくネジ曲がるものですから。」

僕は立ち上がって去るために襖に手を付ける、きつとこの当主が言いたかった事も終

わりなのだろう。

立ち去るのがわかってか、禪院の当主は酒を呑む手を一旦止めた。

「すぐに決まる話でもない、時期が来たらこつちからまた話をつけよう。それまでに良い返答を考えておけ。」

その時の表情は、誰かの困る顔が楽しくて仕方が無いとでもいうかのようだった。

おじさんと長い付き合いのときもそんなのだったのだろうか

「では、また正月にご挨拶に伺います。その時には話は纏まってると思われますのでお待ちください。」

別に結婚を決められるのはいいが、話はしてくれと思う。どうせ子供は作らないし、作れないから本当に形だけのものだし。

心臓が悪い、いい話だと思つてのサプライズとか思つてそうだがこつちにはただのハプニングだハウレンソウしてくれ。

そうやって、帰るために長い廊下を歩いていると黒い髪の女の子がボロボロの体で人目をさけるように歩いているのが見えた。

この家の様子じゃ、普通興味すら持たれないと思うのになんでわざわざこんなことをさせられなくてはならないのだろう。目を合わせるととてつと逃げ出した、僕は咄嗟に追いかけた意味は特に無かった。

放っておく理由がなかった。

その女の子はとても足が早かった、僕も運動にはそれなりの自信があるはずだが当主になつての気分の悪さも相まってどんどん離されていく。

「いつまで追いかけてくんだよ！しつこいな！」

女の子が初めて声を出した、元気がいいといえれば良いのかそれとも自分を保つためなのか……

この家の女性の扱いは、とても良いものとは僕の口からは言えない。男性だから良いとも言い切れはしないどちらにも不自由で窮屈だ。

「いやー怪我してるから、それに逃げることはないと思うー！」

「フツーに転んだんだよ！ついてくんない！」

………僕の目でみても、転んでそんな殴打痕のような傷はつかないと思う。

体力的にもそろそろ持たないし一か八か。

「わかった僕は、ここで止まるから君も立ち止まってほしい。立ち止まらないなら追いつける。」

そう言った、立ち止まらないならそれでいい仕方がないことキツイが根性はあるつもりだ体力が持つまで追う。そう決めた、逃げられたらそれが運命だったということ。

「………はあ、わかったよ。てかここまで追ってくるってどんな執念だよ。ストーリーカー

か？」

そう言われて辺りを見返すと、ちよつとした林の中だった。追いかけるのに集中して気が付かなかつた。

女の子は呆れている。

「……まで来たのか？ 気が付かなかつた。

あのさ、その怪我大丈夫？」

「私は人一倍頑丈に出来てんだよ、心配ないからさつきといけなんにも出来ないのに突っ込んでくんな。」

「……アハハいらぬ情だったよね、ごめん。お詫びにコレあげるいらなかつたら捨てていい。僕食べられなくてここでは多分珍しいから。」

下手な同情は悪意よりも、本人にとつては害である。分かってたけどその見極めがまだできていなかった。

この子は安い同情を、してはいけない子だった。

……袖からいくつかのキャラメルや、チョコを取り出して渡す。当主になつてから口につけられなくなった好きだったお菓子、家ではこういうものはあまり出てないだろうしこの子なら隠すのも得意だろう。

「何なんだよコレ？」

「お菓子僕の好きだった、ちよつと食べられなくなつちやつて。でも消費しないとやかく言われちやうから。」

継木家ではもう、僕は食事をあまり取れないようになってるのはもう知られている。だからこういう細々としたお菓子を持たせられている。だけでもういらぬ。

「なるほど、いらぬーからやるってことか。貰えるもんは貰つとくよ。」

「だげど名前ぐらひは聞かせろ、私を追いかけ回したんだしな！」

「継木家 当主継木櫻だよ。まためぐり合わせが良ければ会うかもね。」

呪術高専東京校

次は五条家のはずなのだが。

「どうして宗教系の学校？」

「五条当主様が、こちらにいらつしやるからです。高専は呪術組織の一つでありそこを今の拠点とされております。」

それに寮住まいとなるため、五条家に直接赴いても五条家当主、五条悟様には会えませんが。」

「他の近しい五条家運営者みたいなものでもいいと思うけど。」

「五条家は、当主様の力が強い家でございますので。」

「ふーんそっか。」

継木家と大体同じだと思えばいいだろうけど、それよりも本人に集中する力が大分多いのだろう。

こっちは家が当主としてののあり方を決めるが、そっちは当主が家としてののあり方を決定するみたいなのかなあ。

「……………後今言うのも失礼ですが、ちゃんと食べられておりますか？家に仕えるすべて

の者が継木 櫻様を心配されております。」

「問題ないよ、昨日もらったお菓子は食べたししばらくは大丈夫。」

ほら袖の下空っぽ、ゴミは適当に捨てたけど。」

「……ポイ捨てはいけませんよ。」

「わかつてる、おじさんにさんざん言われた。」

夕飯は食べたが朝に吐き出してしまった。自分自身としては飲み物でなんとかしている。それでも胃から昇ってくるが……

自らの腹の中に無理やり物を入れて溶かして自らの一部とする行為が、苦痛でしかない。

「結局どうすればいい?」

「まず、夜蛾様にお会いしてください。夜蛾様も前当主様とお付き合いのある方でございましたので話も早いでしょう。」

「……場所は?」

「職員室にいらつしやるようです。」

「わかったよ。」

でもこれで主な家の挨拶は終わる、その後細々とした外回りは残るだろうが急を要するものではないだろう。後はゆっくり寝られる、夢は見ないが痛みや不快感から逃げ

られる。

だんだん嫌なところが似てくる。

来訪者用のタグを入り口でもらい、首にかける自身の名前がきっかりと継木 櫻と入っていた。

大丈夫だ、僕はキノ カエデでもある。

「失礼いたします、こちらに夜蛾様がいるとお聞きしたのですが……」

ふわふわとした自分自身を確かめながら扉を開ければ、昨日あつた当主よりも一回り程度若い男がチクチクとぬいぐるみのような裁縫をしていた。

趣味なのかそれとも呪いに使う媒介なのか、どちらにしても愛らしい姿をしているようにみえる。

「次の継木か、死んだんだなアイツは。」

話はもう聞いている、五条の所に案内しよう。五条もアイツの事は知っている話は早いだろう。

「ついてこい。」

「ありがとうございます。裁縫の途中に申し訳ありません。」

「呪骸作りだ。」

「ええそうですか。」

夜蛾と言う男は、自らの手を止めて席を立ちついてこいと自らをさそう。

僕はその背中についていきながら、学校の中を見渡していく。僕の、通っていた学校よりも木造の部分が多く旧校舎のようだけれども管理がしっかりしている。

なんとというか雰囲気は学校というより、軍隊の予備施設みたいな行つたことないけどそんな感じがある。前々にテレビで見た警察学校の雰囲気と似てる。

和気あいあいというよりはピリピリした緊張が常に走っているような感じとか特に。

「先代と知り合いのようですが、何かありましたか？ 継木として不甲斐ない限りではありませんが。」

先代当主の方々達の記憶の引き継ぎができなくて、そういうところを全く知らず当主として置かれていますので。」

なんとなく何気なく、そう言ったら場が凍った。元々冷え切っていたがそれ程までにイレギュラーで異常で悪い意味で異端な事なのだろうか。

夜蛾と言う男は、足は止めずに数秒間返答を考えるような素振りを見せて発言に対して口を開く。

「アイツとは逆か、アイツは生まれた時から先代とやらの記憶をすべて引き継いでいた。文字通り母の子宮にいるときから夢として見ていたとき。」

継木 櫻お前のほうが、通常に近いと思う。全く見れないと言うのが、少し出されて

いる資料とは違うが個人差だろう。

五条相手は、適当に流せ。

おそらく五条はアイツ基準で話を進める。」

「ハハハ、継木家でも僕は前例がない話のよう……先代はいくつか前例があるみたいな感じでした。

でもありがとうございます。

そういうわけで、夜蛾様と五条様のことは全く知りません。五条様はどのような方なのですか？会う前に少し知りたく思います。」

夜蛾と言う男は、僕がおじさんより遥かに弱くなってる？ような事は知ってるのだろう。知っているというよりも察しているのほうがいいかもしれないが。

おじさんはきつと最初っから知ってるように話していたのだろう、僕の時でも何度か知らない道の先を見てるような言動はあった……

それこそが継木の本来自然と受け継ぐ力

五条 悟？と言う人はよく知らないが、おじさんと比べられたときにどんな反応をするかよくわからないけど僕よりは確実に夜蛾と言う男は五条 悟の事を知っているだろう。

「……………会ったほうが早いだろう。」

こつちに五条がいる、入れ。」

聞こうと思つた矢先に、僕はある一つの教室の扉の前に立たされた。質問はする必要がないと思つたのかそれともちようと言わなくていい理由ができたのかどつちでもいい、最初から五条家当主ということ以外わからない状況で今代替わりの挨拶をすることになるのだけは事実であつた。

伏黒 恵を禪院家に行かせないように、高専に掛け合い庇護下に置いた。

その時に色々と揉めたが、抑え込み続ける事でなんとかはなるだろう。

そして、今日夜蛾センサーに伏黒 恵の件で色々したこと引き換えとしてここで待つていろと灸をすえられているところだ。正直めんどくせーとどうでもいいと言う感情のみが今俺の中にあつた。

誰が来るのかも教えてもらつてはいない。来ればわかると言われただけ不親切にも程がある。

「……………会つたほうが早いだろう。」

こつちに五条がいる、入れ。」

待たされた教室の外から夜蛾センサーの声が出た、さて待たせたやつはどいつだろうと思ひながら扉を見やる。

「こんにちは、継木家当主 継木 櫻 と申します。

貴方が五条家当主の五条 悟様ですね。お初にお目にかかります、今回は当主代替わりの挨拶へと伺わせてもらいました。」

扉をガラ……と、なるべく音を出さず静かに入ってきたのは、伏黒 恵と同年代のよくなガキが一人。本来のこの時間なら学校に行つてるところだろう。

アイツと同じような服装を着させられて、服に着られているという言葉が似合うように覇気や気力が目に見えて失っている。

生きているだけの死体

簡単に言い表せば、そう答える。

似ているところは何を見ているのか分からない黒い黒い底が見えない目だけ。

「只のガキだな、待つてて損したー」

「ええそうです。」

俺が返した言葉に、その子供はニコニコして返答するだけ。心の底からなぜだが気味が悪いと思つてしまう。伏黒恵のほうが大人びてはいるが子供らしい子供だった。

こっちは大人びてはいないが、子供として本来あるべきものが欠けている。

あつちには、津美紀という心の支えのようなものがある。俺にも夏油という親友がいる。

「継木家当主なら、僕のことだいたい知ってるんじゃないのー？」

前の代の時は、色々知っている事を前提として話されてさー流石の僕でもびつくり仰天」

そう言いながら俺は、サングラスを少しずらす。六眼は呪力を可視化することができ、相手の呪力の流れその他諸々を見れる。

呪力とは相手のいわば精神の状態だ、こういう話でよくわからないときもだいたい使える。

「残念ながら、僕は貴方のことを全く知りません。先代は継木として優秀な異常でしたがこっちはまだ本来受け継ぐモノが見られてません。」

不良なエラー品ですよ。前例がない珍しい現象ではありますけど。」

相変わらず継木の呪力は、全てが混ざり合って膨大な呪力を扱っているというよりは膨大な呪力に侵食されて襲われているようにしか見えない。

俺から出るロスが少ない水滴ぐらいの呪力も、そっちに向かっていくのが見える。

「……………」

俺は少し違和感を持ち、目を凝らす。唯一ちゃんと混ざり合っていない呪力が極めて少量だがあった。まるで集まってくる膨大な呪力から逃れるようにアイツはすべて混ざりあつた物を持っていたのに。

これが継木の普通なのだろうか。

それともこつちの方がイレギュラーなのだろうか、このガキが言うには前に会った継木当主もイレギュラーであるとの事だが。

「中々面白いことになりそうだ。」

「えつと話聞いてます？母が枕元で聞かせる子守唄ぐらいにくだらなくてすぐに寝られるような話ではあると思いますけど。」

「えー最初から言つてー、聞いてなかつたわー」

「……………ハッ？」

「すいません、では簡単に継木家当主ですが先代の記憶の引き継ぎがないので貴方のことを五条家当主五条悟様としか知りません。」

「つまりキミは記録ナシってことかー」

呪術自体知らないように見える。俺は呪術界では割と名は通つてる、それなのに名前しか知らないのはいささか不自然だ。

突然呪術の世界へ入れられた

そういう感じ、一般人の非術師から呪術師が生まれることはあるが基本的には呪術師から次の呪術師は生まれその時の思考も教育される。

継木家においての教育……呪術師としての思考の矯正の主な一つが、記憶の継承なの

だろう。

現時点の力は強くないむしろ弱い、だがもしアイツ……先代程度またそれ以上に力を持つように育ったらそれは確実に伏黒 恵のように次を担う呪術界勢力になる。

しかもまだ思考が整ってない状態で今ここで継木家当主としている、無知とも言えてしまうが逆に引き継ぎによる凝り固まった思考が一切ない。

腐ったミカンだらけの呪術界でいい劇薬になる、凝り固まった古臭い思考から新しい思考をいちから仕込むことができる。

確実に30才まで生き残れる可能性が高いのも大きい、逆に30才になれば死ぬが。「まあそうですね、これからゆっくり脳無しですが詰めていこうと思つてます。」

その前に思考がだいぶ、見たところちゃんとイカれてはいそうだが大人しい外部にそれがいかなない事が欠点といったところか。自己変化で完結できちゃうイカれ、文字通りの死んだ思考。

「……………まあこれからも長い付き合いになると思うし、僕君の家に突撃かましちやおうかなー★」

「ちゃんとお話つけてください、家の者も困つてしまいますので……………」

「気まぐれだからさー、そんなときはそんなときでしょ。五条家当主五条 悟だしね、継木家としても無視は出来ないでしょ？」

「……………親睦を深めてお互い友好的でありましょう。」

言質は取った、同年だし恵と接点を持たせるのも良いだろう。

後は、なるべく上層部とは接触させないようにこちらで色々とする必要がある。せつかく思考が真つ白なのだ確実にこちらにつける。

「じゃあよろしくねー」

「……………こちらこそ末永い縁であることを願います。」

俺は相変わらず死体のような調子のガキに手を振った。ガキも帰るのか扉に手を付けて静かに閉じる。

イカれてはいそうだがその方向性が、向いているか向いていないかのベクトルとして違うのが本当にアイツに似ている。話していて思った。他者や世界を変えるものではなく自己変化で済ませてしまふ、そういう類のモノ。

呪術師は基本的に世界を変える。呪術の極致、領域展開も自身の生得領域を広げ世界を自身の力を持って変革させるモノ。

アイツが言ったことを思い起こさせる。

元々生得領域があるならわざわざ広げる必要がない、その中に相手が入り込めるように無自覚に身を溶かささないように守ってるものをちよつとだけ世界に溶かしてやればいいと。

1から作り上げるのではなく、元々あるものを使えば簡単なものに何故しないと。

理解ができないが、アイツは本当にそうやった。あのガキも同じような所に到れるイカれ方なのだろう。

「終わったか五条。継木の当主はどうだった。」

「ほんとーに暗いやつだよ、本当にアイツの継ぎとは思えないぐらい。」

ガキが去ったあとと暫くしてから、夜蛾センサーが入ってきて会った時の様子や感想などを突っ込んできた。アイツは夜蛾センサーとも付き合いがあったし気になるのは気持ちとしてわかる。

「でも中々芽自体はあるように見える。」

「六眼か？」

「そう僕の六眼がいつてる。あれはアイツに近づけるよ、希望観測だけど下手すると超えられるかもね。」

そう六眼で現状は見れても未来は見れない、してるのはあくまで期待でしかない。

「そうか、良くやってくれ。恐らくは継木家として継木櫻は呪術高专に入れるだろう。」

東京校か京都校かはまだ決まってないがな。」

「東京校か京都校ねえ……」

俺は一人だけ最強では意味がない、それだからこそ今動いている。

継木 櫻は、俺の願いの一つになってくれるだろうか。

やくわり

3日間ぶっ続けの呪術御三家代替わりのご挨拶が終わり、次の日丸1日寝込んだらしい。

その事を目を開けて、デジタルの時計の日付を見て気がついた。朝頭が回らないだろうによく気がつけたなと感じた。

僕は整えられた布団から身体を起こし、横に丁度おいてあつた湯呑に入った白湯を飲んだ。

頭をかくとごしやごしやと鳥の巢のように絡まっている、僕が梳かす訳ではなく何もかもやられるが……長くなりそうだと憂鬱な気分になった。

「でなんで起こしてくれなかつたの、いや怒ってるわけじゃ無いけどさ。普通に起こされるもんだと思つてただけ……」

家の者に、髪の毛を梳かされながら顔に粉や目に線を入れられる。そういえばおじさんもこうやって何か顔に塗っているようなことあつたけ……

そう思いながら、促されるままに目を閉じる。やつぱりまばたき等の動きがあるやうりづらいことこの上ないのだろうか。

「疲れておいででしたようですし、先代も先々代も深く潜るという意味で長い眠りにつくこともありました。当主としては一ヶ月程度眠り続ける事も珍しくありませんでしたので……………」

申し訳ございません。」

真つ暗な視界に、言葉だけが響く。

そういえばまだ夢は見られていない。だが変な感覚はそこにあるような感じはした。ナニカが突つかかっているような、挟まって遮られているようなそういう本当の意味での深い投身を妨げるような。

家の人達が言う当主が夢を見ると言う事が底なし沼に沈む事ならば、底ができてしまいそれ以上沈めなくなった。

きつとこういう事なのだろう。

「いいよ、でも僕と当主は同じじゃないことは理解してほしい。僕は僕。」

後今更なんだけどき、なんで名前教えてくれないの一度も聞いたことないけど。」

出来ないことは仕方ない、そう割り切つて会話を続ける。家の者の返答が申し訳無さそうで、相変わらずどういつもこいつも変わらなくて対応することちが疲れてくる。

そうして何となくの質問を口にした、そういえば自己紹介すらこの家では聞いたことが無かった……………他の家や呪術高专ではない人もいたが自己紹介する人はいる。

他の人に自己を紹介する、それが無い。

気にして無かったが、コレはヨソから見れば大分可笑しいのではないのか？

「……………そうですね、今の継木 櫻様ですそれは重々承知しております。家の者すべて。」

継木家にとって名前は重要な要素、として他の家よりかなり深く考えられております。名前とは個を示し、形質を決定する最も足る要素なのです。

言葉として、言い放つてしまえばその名に身を固定することになるといふ考えを持っているのです。」

名をあえて語らず、無くすことで個と言う事縛りから逃れようとしてると言うことらしい。

境界線を区切りをとことん無くす、そうしようとしてるのは何となく分かっていた。血の縛りという呪いなんてその最も足る事だろう、人の負の感情を呪霊という一つのものになる前に取り込むのだ。

目の化粧が終わったのか、目を開けていいと合図をされ従う。薄い人工的な明かりが、真つ暗だった視界を浸食し景色を彩る。

「つまり僕は、継木 櫻 に固定されてるって事になるのかな？家の人達風に言えよ。」

当主は、同じ名で呼ばれ続ける。ソレはきつとこの継木家での一つの区切りいや縛りであり呪い。

当主がこの名前を持つのか、この名前を与えられたものが当主なのか最初はどちらかなのかきつと分かりはしない。だけど家の者は、継木 櫻を当主の名前として呼び続けるのだろう。

「当主としての、力を引き継がれその力を安定させる為にお呼びしている理由もありません。」

……ひよつとすると、記憶とかの本来あるべき引き継ぎがうまく行かないのはおじさんとの約束のせいかも知れないと。家の者の言葉で、思いついた。

己の名前を忘れるなど……

紀野 楓 という名前、それが残っている僕の中でだから 継木 櫻では完全になつていくわけではない。

そう考えれば、色々と個人的辻褄が合う。深くもぐれない突っかかりはあの忘れてはいけない名前だ。

「固定させちゃえば、ブレないって事が今の僕は、ぶれているか何か突っかかっているか……そういう事なのかな？」

ひよつとしたら、力を継いだなんて勘違いかもしれないよねハハハ」

継木の当主として必要な力を失うことになるとしても、この名前だけは忘れてはいけない。それがおじさんの最後の願いだから。

だからこそ、こんな欠陥品なのだろうが。

継木家当主としてゐるなんて、夢であれば良かったのに。

「…………それはありえませんが、貴方こそが継木家当主 継木 櫻様なのですから。」

僕が言うのと、すかさず家の者たちは否定はしてこなかった僕は否定こそ欲しかったただ何処かへ元々に戻れると思っていた。

都合のいい存在だよねどっちもお互い。

そう思うと心の底から乾いた笑いが出てくる、極限まで行くと楽しくなるものだ。

「うんそつか。で今日はどんな事をやればいいのか？寝てていいなら寝るけど僕は。」

楽しくなつて笑いながら今日の予定を聞く、挨拶まわりは急ぐものはない。おじさんが僕だと考えると、きつと普段のやくわりが溜まっているだろうから。

きつと。

「今日は、呪力の収集となります。いくつか上層部より呪霊が発生しそうだという箇所に向かい、継木の血を継いでないもの達以外の漏れ出て滞留した呪力を吸い上げます。

……………基本的には、このような当主としての業務が多くなります。殆どの場合一級術師1名がサポートして付き添い継木 櫻様の護衛にあたります。

呪力を自らの身体を持ってして浄化できませんが、呪力が形となった呪霊には基本的に優位なものではありませんので……」

家の者は、そう言つて廃墟等の今回回つていくだろう箇所には赤い印がついた地図を手渡す。

僕は、それを見たがざつと三十近くありこれは夜中までかかるだろうと目測をたてた。渡す時に今回は初めてなので軽くと話したため

本来はこれよりもつと多くの箇所をめぐり、呪力を集めていくのだろう。そりやおじさんも毎回疲れるよね、夜にお話ねだったの悪かったかな。

護衛が毎回つくのか、あの時のお話とかその呪術師さんの事だったりするのか？

呪霊はまだ、とても凶暴なのは見たことがない。僕じゃとても太刀打ちできない事だけはなんとなくわかる死なないとしても。

「……つまり不味いやつに当たったら、その術師さんを放置して逃げろって事？」

「そのとおりでございます、継木 櫻様。継木家として家の人者たちの総意は貴方様の身の安全が一番ですので。」

「……………」

本当に継木家は継木以外どうでもいい存在なのだろう、家の者が放った言葉に見捨てることへの悲しみや罪悪感はこちらにはなかった。

「今日はよろしく願います。戦いはてんでできないので……楽厳寺様ですよね。一級呪術師と聞いております。場所としては最初なのであまり危険はない所と言われてますがこんな事に付き合わせてしまい申し訳ないです。」

車に乗せられてしばらく移動し、1つ目の目的地につくとそこには一級呪術師だろう人物がギターを持って僕を待っていた。

名前はたしか楽厳寺さんと聞いている。かなり年上で初めての当主としての役割だ、全く護衛したことがない人物でないだろう。

きつとおじさんもこの人に護衛してもらったことがあると思う。

「若いからな仕方あるまい、先代の小さい頃と比べるととても良い子に見えるな……。とすまないすまない、わしの後ろにちゃんとついて来い来い。ちゃんとして護衛したるわ。」

貫禄のある佇まいで、気味が悪い空気の中僕は彼の後ろを歩きながら周囲を見渡す。小さな呪霊がこちらに来るたびに、ギターの弦を一つ弾く一つの音でパンつと次々と弾けるように弱い呪霊が消えていく。

消えた呪霊の散り散りになった、呪力を感じて集めていく。また同じく呪いにならないように。なんとなくやり方は分かった、集めるたびにさらにいつもより気分が悪くな

るから。

「そうですか、足は引つ張ると思えますけど……仕事はやれると思うので。」

「そう固くならんでも良い、まだ10にも満たんのに完璧にやろうとするのがおかしいんじゃない。わしのような年寄りに任せておればいい。」

「頼もしいですね。」

この人は僕より先に死ぬのだろうか、それとも後に死ぬのだろうか。でもいつか別れることは確実なのだ、それは僕が決まった寿命でなくても同じこと。

後でこの楽巖寺さんの好きなお菓子でも聞こうかと思う、これから生きてる限りは付き合うことになるだろうから。

正直に言えば、加茂家の次期当主さんと同じぐらい親しくなっても大丈夫な気がする。

いい人そう、只の勘だけ。

「ボーツとしちよるな！ そろそろこの呪霊多い処に入るからな、気張れ。」

声に驚いて、向き直るとそこには潰れた大きな呪霊が一つ殴られ潰れていた。口から足が生えているように見えるがそれはよく見ると千切れた本物の人間の足だと気が付き。

ここは本当に危険な場所なんだとやっと知覚した、もし一人だったら丸呑みにされて

いるだろうなきつきの呪霊に。

「貴方がいて良かったです。」

「それが仕事じゃ。気にせんとけ。」

そうやって深くまで歩いていく、何かを倒す為ではないそういう特定の目的がなく彷徨く呪霊になる前の呪力溜まりを解消する役割なのだからそれはそれで当然か。

呪霊を倒しては、散り散りなつた呪力を吸い上げ場所自体に溜まっていく呪力を吸い上げる。あらかた綺麗になつたらまた次の場所に向かうのだが………こういう物は掃除と同じで完璧を求めるといつまでも留まることになるだろう。

お互い慣れてるのか向こうも同じ考えのようで。

「そろそろ切り上げて次に向かうとするかの、継木は平気か？」

「僕は、平気です。貴方も疲れたら言ってください。かなりの箇所巡るので時間とか体力とか使うので。」

そうやって、車まで戻ろうとすると呪霊の食いかけで遺されたのか首ががネジ曲がり折れ壊れた人形のように腹から内蔵が飛び出した死体を見た。

目が開いている。

「少し、待ってもらってもいいですか。」

僕は、待ってもらうためにここの呪霊に喰われたと思われる死体を指差した。

すると何故か怪訝な顔をこちらに向けて。

「死体か……まあいいもうここは安全じゃろうて……、本来ならいや何でもないわ。」

「では、時間取りますが失礼しますね。」

僕は、死体の前に近づいて手で見開いた目を閉ざした。その後袖から香を取りだし近くにおいて火をつける、静かに細くか弱い煙が立ち上った。

いつからか当主がやり始めた行為、でも最初からの風習というわけではないから絶対にやれと言うものではないが……

嘘でも慰めや安らぎがあつてもいい。今こうしてるのがどれ程の悪人かそれとも善人か、そんな事は関係がない。最後まで誰だつて何者だつて、救いを求めてもいい本当に救われるとは限らなくても。

「名前は何んだろうな、失礼します。」

服を弄ると、内蔵にあたり服が血で汚れる……でもそのこと自体にはなんとも思わなかった。なんとか学生証らしきものを見つけ名前を確認する。

「……………わかつた君は、こういう名前をつけてもらったんだね。お疲れ様後はゆっくりお休みなさい。」

僕は、君のことを覚えているよ。

それが役割の一つでもあるから。」

僕は、名前をしつかりと覚えその場を立ち去り彼の元に戻る。まだ回る場所は山ほどある、合流して車に揺られて朝から晩まで同じようなことを繰り返した。

名前も呪霊の形もすべて覚えた。

その時には、すっかり夜も深くなり冷たい風が吹いている。この服は動きやすいのはいいが風が吹くとどうにも肌寒く感じる。

「お疲れ様でした、ありがとうございます。ちよつと余計なことに時間使わせてしまつて。」

お辞儀をして、少しの謝罪をした。今回は、死体を見かける事が多かったそのおかげで袖に持っていた香をすべて使い切ってしまった。僕は、そのままでも良かったが見るに見かねたのか香の補充に一旦家に戻らせてもらったのだ。

「それが継木家なのだろうか？呪術界でも、かなり特異な形質を多く持つ。それが一種の縛りでもあるのであれば仕方あるまいよ。」

後払った呪霊の数覚えておるか？」

「637ですね……………人から生まれた者たちですからね、覚えていますよ。忘れませんよ。」

僕はそう言って笑った、本当にいい人だ。

呪霊は悪ではない、人によつて生まれたある種子の様なものだそれを呪いにより消してしまふのだから覚えておく必要がある。

確かにそこにいたんだと、人と同じように。

「そうか、先代も同じように呪霊すらすべて覚えておつたわい……………」

少し気が早い話なのだが、もし良ければ京都校で学ばないかの？ 東京校もあるのは知つとるか？」

「東京校の呪術高専には、五条家の挨拶のときに一度伺いましたが京都校もあるんですね……………」

京都校で教鞭も握つてるとなると本当に多忙な中来てくれたのだなと感じた。

距離的には大体同じ程度だとは思うが……………」

「具体的にどつちに行くかは家の者が決めると思いますが、こつちでどうかは言えませんけど。もし京都校に行くことになったら僕は嬉しく思いますね。」

「そうか……………」もし京都校に来ることになったらこちらも歓迎する。」

しんこう

「学校に行きたい。」

おじさんが使っていた、大きな部屋から溢れた言葉は虚空へ消える。日数も時間もたち、何もかも慣れてきた呪術師をつけられ訳のわからない場所を彷徨きより気分を悪くしたり。

救いとやらを求める人の、呪力を取ったり大体取ると気分がスッキリするのかお布施とやらをしてそのまま帰っていく。

勉強はちゃんとさせられてはいるが、学校には行かせてもらえない。

「まあでもこんな事にならなければ行きたいなんて思わなかっただろうなあ。」

同年代の話し相手がほしい、ちゃんとともに話せる相手がほしい。家の者はいつも通りだしなにか目的がわからず来る人は精神病んでたり心酔してるようなのばかりだし。

ちゃんと僕的に話ができるのは、かなり年の上の人か加茂家の次期当主さんぐらいしかない。次期当主さんは立場があるからな、簡単にお友達ってわけでもないし。

「敬語？いつ外せばいいんだろう、いつも使ってるけどその内外せるかな。」

もつとこんな碎けた言葉をいつも使ってたような気がする、それも遠い夢の様にそういうことでもしてたと思ひ出の一つになりそうだ。

そう言えば、僕の通っていた小学校の名前は何だっけ……………

「……………もういいか。こんな事やつても仕方が無いよねおじさん。今日も一日頑張つていだけそれでいいんだよ。」

そうやってなんとかのそのそと寝具から出て、襖を開けるといつも通りに家の者に一から十まで身支度をさせられる。

今日は、特に珍しく何も予定が無いそうだが当主として基本的にするべき事や人間としてするべき事はその分溜まっているので実質休み無しと言つてもいいだろう。

なんとというか上の人たちが全員が全員優雅に暮らしているとかほざいてるのいたら殴りたくなりそうだ。

「……………頂きますね、今日も朝からありがとうございます。」

「本日は、継木 櫻様に何も予定などは入っておりませんので疲れを休めてください。家の者達に何なりと所用などあればいつも通りお申し付けください。」

朝食を頂くとき、どうにも味はするのだが美味しいとは感じる事ができない。精進料理の様なものでは決してなく、寧ろ味としても人として好むような整ったもの。

出る品も毎回違っている。

……裏で嘔吐することは、なんとか辞める事ができたが油断すると胃から迫り上がってきて吐きそうになるのには変わりがない。

唯一違和感というかそういう感覚薄いの、ほぼ水だけという揚げ物はこれは無理と初手で頼んだ為今の所は、当主となって最初に揚げ物が出てきたとき以外は出ていない。

油が多い肉も駄目になった。

「……………」

ただひたすらに、口に物を入れ胃袋に流し込む。そうしないと動く為の熱量が得られないとは嫌になる。いつその事光合成でもできてそれで済めばいいのに。

やくわりを背負ってなかったら、この食事も美味しいと食べられたんだろうなきつと。

「……………今日もお口に合いませんでしたでしょうか……………」

「いや僕の方の問題だよ、気にしてなくいい。お水ありがとうもうなくなつてたみたいだね。」

今日も同じ、そんな定例文のような会話を。後味の悪さを消すように継ぎ足された水で流した。

様子を見ると何処かバツが悪そうにしているが、理由がわからない紛れもなく僕個人

の原因でしかないのに……………

「所で今日は本当に何も無いようだけど、変わった事は無いかな……………新聞やテレビよりも聞くのが早いから。」

「継木 櫻様にとつては下らないのとの一つでしょうが……………」

そう言われ、淡々と昨日の出来事や今日の天気を聞く。不思議とそういうものを忘れることが少なくなったような気がする。

細かいところまで思い出そうと思えば思い出せるのだ、何故か思い出せない部分が不穏にも残るが。

勉強も、一度した事があるかのように行えばすぐにできてしまう。これも継木故の事なのだろうか。

継木になってからのすべての事が出来事が書架から、本を引っ張り出しているかのようだ。

……………なんでこの例え使ったのだろう、僕あんまり本には触れてなかったと思うけど。

「ありがとう、下がっていいよ。僕コレ入れるの時間かかるから仕事に戻って。僕にだけ、時間使わせたら大変だろうから。」

まだ料理は半分以上残っていた。

なんとか朝食という、普通の人間ならば軽い食事とも言えるものを何時間かけて終わらせた。

本当に最初の頃は昼も一般的には豪勢で整った昼食が出されていたが、僕の様子をみてなのか出ないことのほうが多くなった……そちらのほうが楽だし嬉しいが。夕食もなくなってほしい。

「……………」

屋敷の中をうろつき、桜の木に向かう。今は咲いてはいないが……

周りもゴミなど一切なく、大きさも相まって何処か神聖な雰囲気漂わしていた……この家の核となる呪物らしい。

桜が花をつける春には、近づいてはならないと言われているが……

当主と同じくこの継木家では、信仰され崇められているらしい。

「……………おやすみ。」

僕は桜の根本で、眠りにつく。

目を開けるとそこには広大な草原が広がっており、桜の花びらが散っている。

視線を上に向ければ、大きな桜の木が満開という言葉が似合うようにすべてが淡い花で満たされていた。

「……………ここだと具合悪くならないんだよね、でも時間は過ぎないし何も持ち込めないから現実逃避にしか過ぎないんだけど。」

ここは皆の精神に必ずあると、信じられている場所らしい。簡単に言えば、死ぬ前個としてあるときは別々だが肉体から精神の崩壊後ここに一旦戻ってくる。

その後にもまた個として生まれ落ちると。

肉体が先が魂が先がという話があるが、こちらに言わせるならどちらも無からきており魂も肉体もさしたる違いがなくどうという記録や、記憶が刻まれているかというらしい。

無に近づく事こそ……………とね。

アホらし

「……………にしても、折れたの治らないな精神世界 ある種の共有された生得領域なら壊れること自体がある意味異常事態なんだけど。」

上書きされて全く別空間としてやられてるならともかく、文字通り一部とはいえ破損している。

あの桜の大樹からここに来れる存在は、僕のように継木の当主の資格の一つらしい。

適正……………ある種の浸食多い人は現実に生得領域を植え付ける楔から行かなくても直接ここにこれるそうだけど。

ここの空間を家とするなら、その鍵やキレイに整えるための選定をするハサミを持っていてある種の管理の役目があるのが当主だろうか。本来開いていない空間を無理やり開けさせるための只の穴の気がしなくもないけど……招待するだけで誰かを拒絶するとかないようだし。

生まれながらに生得領域は決まってると言われてるが、現実と同じような光景を生み出しそれを多くの者に小規模でも埋め込んで同一化させる。

春に近くに行かないようにと家の者全てに周知させれるのは、ここの空間とあまりにも重なってしまうからなのだろう。

現実のこの木を桜としてこの空間をある場所の同一座標の別空間と固定する、良くできた実体のある現実と区別がつかない集団幻覚のようなもの。

だから本来破損することなんてありえない。

「(ここ)まで時間がある程度立つても治らないとはね……：：：集団で同じ夢見ているような存在なのに。全員が全員桜が壊れるようなそういう認識もしてないだろうし。」

継木家の書物として残してあった記録でも、こういう事は無かった。僕と同じく悪い意味でイレギュラーが起きている。

まだ30になるまで時間がある、それまでにどれだけのハプニングがあるかと考えそうになるが今から頭が痛くなりそうなのがいやで思考を放棄した。

「はあ………とりあえずここで時間なんて気にせず休もう。物理的な時間経過はないし、それはそれで辛いんだけどね。」

「ここは気も体も楽し、苦しいものではないがここで過ごしても現実では全く時間が過ぎていない。」

「幾らいても現実逃避にすらならない、只の虚像だし虚栄なのだ。」

「おじさんは、ここに来ているところは見たことなかった。使わずとも来れたからに構わないと感じる、だってあつたら普通に使う僕だって使っているし。」

「なんとか精神を保っているのは、逃げられないけど立ち止まれる場所があるからなのだろう。走り続けるのは疲れるのだ、走らなければいけないと知っていても。」

「壊れたら元も子もないだけかもしれないけどね、寄生者が寄生元殺すなんてわざわざしないだろうし。」

「僕だったら殺さないように、同時に生かさないようにゆつくりじつくりやる。継木なんてそんなもんだらう。」

「ゲームや漫画本でもある程度の面白い事持つてこれたら、いいんだけどねあつちでやると色々うるさいし………人招待できそうだけど普段は一人だけだし。」

「使えるならそれでいいか、心を無にして楽にするにはここよりいい場所はなく使えないよりはいい。」

「……………」

目を覚ました、こっちは見ればまばたきしている一つのシーンと同じようなものだろう。

腹にまだ物が入ってる感覚があるのがその証拠にほかならなかった。

「何もやることは無いしなくていいとは言っても、コレからあんなとこずっと彷徨く事になるんだし……………稽古ぐらい必要だよね。」

体の具合は相変わらず、なんかいいって感覚忘れた。いつもと変わらない。」

僕は腰にある、一本の棒を見た。コレが呪具らしいあの木から一回だけ切り出されそれを形にしたもの。

刃はなく、呪力を込めることで刀身を顕現させる。この投信は物理的な干渉はできず呪力のみに影響を与える物らしい。つまりこれで呪霊は切れるが、人間や物は切れずに透過する。

人を死なせることは無い武器

と言ひ換えられる、斬られた相手は内部から呪力が奪われるまたはポツカリと消失する感覚はあるらしいけど。

等級は確か……………聞いても、当主様が代々受け継ぐ物等級等の尺度ではかりえるもの

ではありませんと熱っぽく盲目的にいわれて聞けなかつたし。

故に呪詛師との戦いでも、代々当主は殺す事は無かつたらしい殺さないだけとせずと言われ続けてもいるらしいが

道具がいくら良くても、使い手が今は僕だしね。

「何もかも宝の持ち腐れって奴なのかな、または道具は使い手を選ぶ。」

それに見合うだけの使い手にならないと、コレの本領はともじやないけど出せない事は確実にわかっている。呪力のみに影響を与えるという事は、純粋な呪力しかこれで防衛することができないとも言い換えられる。

呪霊であれば、呪力でのみ作られた攻撃や技を使うだろうが呪いを扱う人間だと話が違ってくる。殆どの人間は呪力が宿った物を扱う、つまり物体に呪力を宿して技を繰り出すのだ。式神は例外として、呪力による身体強化術式による物体への干渉など
……

コレで呪い部分のみ切り取っても残りの物理的な物で、負傷を受ける。正直防弾チョッキ着てる方がこの場合の攻撃にはよっぽどいい。

そういう呪具だと思う。

「やれるだけやってみるか、護身程度にでもやれる方がいい。本当ならそういう立ち回りとかも元々最初っからあるんだろうけど……」

見れないならそれはそれでね。」

1から積み上げていくしかない、改めて心に決めて一人誰も使っていない座敷の一つに入り。

刃がない、得物の柄を握った。

そして武器を使っていた呪術師の見様見真似で何度も何回も力を込めて振るう。

きつと当主には、型が無かつたんだろうきつと戦い方にもし型があればそれが記憶で得られるとしても教えてくれただろうから。

教えてはならないのだろう、型ではなく何十年何百何千もの積み重ねこそが本来得られそれを振るっていくのだろう。

だけでも僕にそれは無かつた。

そこに近づくために、なんの為に近づくのかわからなくても効率的でなくてもがむしやらにまずやってみるそれから始めた。

まだ、外で呪力吸い取る時には呪霊と戦わせてくださいなんて言えてないけどね………もしもがあつたら責任はあつちについてしまうし。

「やっぱり、ないものは無いんだな僕　これで何処かへ一歩進んでるのかすらわからな
いや。」

教えを請うには、やっぱり呪術高専からかなあ………京都校に今からちよつとずつ

通ってみてもいいのかな。だけど当主としての色々があるし……呪術を学ぶというよりは唯一のモラトリアムとしての面が強いような気がした。

家の者に呪術高専について話した時に

継木家はこのように呪霊を、払い鎮めますが他の者たちの一般的な鎮め方がありません。それを見て知る為に高専に入ることになります。

任務が与えられますが、もし危なくなったらすぐに逃げてください。……でも基本的には危険度があるものは与えられることは無いです。

と、行っても結局継木家の当主として防衛はされるらしい。任務が呪術高専から直接になるかんじだ。

「……………やっぱり教えは必要だよなあ、行くなら4年間その時間を大切にしたいし。」

「継木 櫻様つ五条様が一人男の子供を連れていらっしやっっておられますー」
あの時来るならアポ取れつつたよな、五条家当主こっち珍しい休みだぞ。

そう思いながら顔を覆う、五条当主以外にも一人子供がついているらしいあいつの様子だと好き好んでついてきたわけじゃないだろう。

知らずに流されてか、無理やりかの二択。

「……………分かった僕が出る、君達は客室に御茶とカステラでも用意しておいて。で場所

は？」

「玄関で今の対応しております。」

せつかく比較的静かに過ごせると思ったのに。

交流

「遅れまして申し訳ございません、こちらが予定を認識していないようです今確認中でして。」

目の前にいる、継木家当主だと思われる病人と見まごうような少年が貼り付けた笑みを浮かべながら口調は淡々としてながらも奥底に怒りや呆れの感情を滲ませていた。

「あーいいよ、突然サプライズって奴。最強の五条が突然来たなんて驚いたでしょ。」

そんな中五条は、サプライズとして来たというが火に油を注ぐという行為がわかっているのだろうか？それともあえて神経を逆撫するような行為しているのだろうか。

いや何も考えてないだろう。

静と動のように、一切動きのない相手の当主と動きが多い五条がそれぞれ軽い漫談のように話している。

「どのようなご要件か簡潔に、ただ遊びに来たと？貴方様のことですそうではないでしょう？」

相手は早く話を切りたそうに話を進める。五条その態度にも我関せず………：というわけでもなさそうではあるが表情からは全く喜怒哀楽を読み取ることができない。

まるで能面を被っているようだ。

「面白くないなーもつとこうない？びっくりした〜とか腰抜けた〜とかさあ。」

それに相反するように、表情豊かに会話を勧めていく……………結局俺が連れてこられた目的は何なのだろうか。

簡単には言われたが、ここに俺が意味が全くわからないので早く帰りたい。

「常識と言う事が基礎から抜けていることはちゃんと改めて認識できたことだけが収穫ですかね。」

「酷くねー、僕しよげちやうよ。」

「勝手にしててください、カステラ時間が立つと乾いてしまいますので。早く頂いたらいかがですか?」

「さり気なく僕に黙れって言ってる?ねえこれ。」

「で後そちらの方は?」

「聞いている?」

漫談の様な二人のやり取りを、どこか遠目で見ていたが相手の目線がこちらへ向いた。

向いた目は虚空のように、底なしに黒く黒く濁っていた。死人の目はこんな感じなのだろうと思う程に。

「そりゃ知らないよね。恵って言うんだ、自己紹介よろしく。」

「伏黒恵です。」

五条に促され、自身の名前を名乗ったすると当主は各人それぞれに用意されたカステラを指さして。

「そうですか恵さんここに出した菓子は、遠慮せず食べてください。特に面白いことは無いですから。こんなくだらない話し合いより日々の勉強や娯楽優先したい年でしょうし。」

後お茶無くなりましたら頼みますのでご遠慮なさらず。清涼飲料水は揃ってないですが、果実系のものはあると思うので……………」

そう話している、口調や態度は変わらないが何処か分厚い当主と言う皮が少しさけて年相応の幼い中身が見えたような感じを覚える。

ただぼぼ無理に連れてこられたと察し、気を使っているだけかもしれない。

「特製献上五三焼佳好帝良っていうカステラみたいだから、遠慮せず貰ったほうがいいよ恵。」

……………結局どうしてこんな場所にいることになったのだろうか。

カステラに目を向け、誤魔化すように黒文字を手に取り菓子を一口に切って口に含んだ。

「恵一、ちよつと今日休みでしよ！連れていきたいところあつてさー。」

時より五条によつて連れ出されることがある、父が禪院家とやらに俺を売つた時にそれを阻止する為にとあちこちの家に戻つて行つたときよりは落ち着いて入るが。

こういう風に突然来る。連絡ぐらい入れろ、津美紀が困るだろうが。

生活の資金や保護者の代わりに印その他諸々数え切れない恩人ではあるがそう思わざるおえない。

「なんですか急に、学校は休みですけど。」

俺は顔を顰めて、学校は休みであるというのが五条には関係のないこと。

常識等という、理論には縛られない。

「はい！ジャー決定、特になんにも予定ないでしよ！ボートしてるより有意義だと思うよ。」

個人の都合など、取り分けて関係なく事を進める。たちの悪い嘘のような冗談のようだがそれを現実にする力を持っているのが五条という恩人だ。

俺は諦めて、そこへ向かうという車に乗り込んだ。五条は俺の横に乗る。

エンジン音を響かせ、住宅地から閑散とした静かな山を切り開いてできた道路へと入っていく中で五条が説明するように口を開いた。

「で今行くところだけど、ここから結構遠いんだよねー休みじゃないと到底行けない距離恵の家からざっと片道走りっぱなしで7時間。都心に近いなら新幹線でとか考えられるけど、最寄りらしい駅からもクソ遠い。」

継木家と言う呪術界でそれなりに名が広まっている一つの呪術師の家系なんだけどさ。その当主と、君大体同じ年なんだよねーしかもなりたてほやほやだから顔合わせつてやつ。」

片道7時間で、往復14時間と行つて帰つてくると……さらつと一泊二日になるよ
うな感じがするのは気の所為だと信じたい。

呪術界御三家に関連した他の根回しのために呪術家を巡つた時でも、ここまで辺鄙な場所は無かつた事に違和感を感じる。あくまで御三家という大きな枠組みのうちの一つだからで、他にももつと辺鄙な場所で活動している呪術家もあるのだろうか。

「俺と同じ年ですか？普通そんなのが当主になんてなれるんですか？そもそも継木家の事を知りません。」

継木家に行く、という事は分かったが五条の話だとかかなり交通便が悪い場所に継木家がある。呪術界ではそれなりに名の知れた呪術家である。今は俺とほぼ年が同じで当主になつたばかりのやつが治めている。

事ぐらいしか継木家の事自体はわからない。

特に俺と同一年の奴が、一つの呪術家治めているとは普通はそんな事は無く……いや呪術の才がずば抜けているならあり得なくもない。

呪術界とはそういうものなのだから。

「あーそこからね、呪霊の生まれ方は僕君に教えたよね？復習つてやつ。」

五条は俺の話の話を聞くと、頭をかきながら一つ欠伸をついて呪霊の生まれ方について話してきた。呪術師としては基本的なことだが、そこにさっきの話の何処が関係がするのだろうかと思いつながら。

「……………人から漏れ出た呪いが、蓄積してそこから呪霊が生まれる。呪いは呪いでしか祓えないと。」

「正解、流石恵飲み込みが早いね。話が早くて助かるよ、で継木家は呪霊を発生するプロセスの前段階から影響を与える。」

人から出る呪いが蓄積し呪霊を発生させる前にこっちで漏れ出た呪いを処理してしまえばいいってね。」

普通の呪術師より、かなり独特らしい事が呪霊を発生するプロセスの前段階から影響を与えるという言葉からすぐに読み取れた。

呪術師は呪霊を祓い、呪いを祓い、呪詛師を無力化するのが主な仕事となるが……

その中でも主だったものは呪霊を祓う事だろう。

人の負の感情から生まれ出る呪霊それはどこから来るかと言われれば。

「呪術師とかの呪を扱える人物が呪霊を生まない話もしたよね?」

「普通の非呪術よりも、溢れ出る呪力が遥かに少ないからですね。」

非呪術師から漏れ出る呪力からと言われている、実際に人の負の感情が、溜まりやすい時期や人が大量に集まるイベント時には多くの呪霊が生まれそして集まる。

都会と田舎も人の数の差から、呪霊の多さや力に大きな差が生じる。

呪術師は、素質が物を言う数が少ない故に慢性的に人手不足でもある。

「溢れ出る呪力や、場所に溜まった呪力を雑巾で拭き取るように根こそぎ集める……：……言い換えれば、呪力操作が効かない非呪術師の代わりにある程度の呪力操作を行っていると云えばいいかな。」

呪術師は、呪力を自らの体内に留めて溢れ出る呪力量が少なくなってるけど。

継木家いや当主は、周囲から呪力を集めて体内に留めて溢れさせない事で代わりを担う。非呪術師でも実質的に呪術師と同じ様な状況になるって感じだね。」

呪霊が生まれる前の、プロセスから影響すると話されてはいたが実際のやり方らしいものを聞くと異常としか言えず深い理解はできそうになかった。

呪力そのものを、吸い取る。

それは例え出来たとしても直に、呪力の害を受けるに他ならないような行為だろう。

自身の呪力だからこそ、呪術師は呪力を扱えるのであって反転術式で生まれるプラスの呪力ならともかく呪力は何もしなければマイナスの力……害にしかならない。

「呪術師からみたら、トンデモですな……漏れ出る呪力や溜まった呪力を吸い上げて自らの体に留めるとは。」

そんな多くの他者のマイナスの力を、自身に溜め込み平気なのであるか？逆に平気いや人としての体を保てるのが当主とされるのだろうか。

「最初の質問への答えだけど、そういう体質の奴を当主に据えてるから僕の六眼と無限の抱き合わせみたいなもの。まああつちの場合必ず一人はそういうの存在するけど。」

当主が死んだら継木の血を持つ人間から一人ぼんつて感じて補充される。」

最初に俺がした質問は、何故俺と同じぐらい幼く呪術師としての経験もない子供が当主とされてるのか……結論はそういう体質持ちを本人の適性背景関係なく当主として据えるからか……

「当主が死んだら次が現れるから、そういう体質持ちは血を持つ中から一人になるからそれを自動的に次の当主に据えるの繰り返しか。」

御三家に置き換えて考えると、相伝の術式持ちが家の血を持っている人必ず一人生まれそれを能力関係なく当主に据えて。当主が死んだらまた相伝の術式持ちが生まれるのが継木家

そのこの所も、呪術家として異常なのか。

「そう、必ず 当主Ⅱそういう体質持ち

それが継木家ちなみ今言ったのは、すべての呪術師が簡単に知れるようになってる。他では機密として厳重に管理される事とかもね。」

「秘伝なんてなさそうですね、継木家には……………」

……………情報を全部出すなんて縛りのひとつなのだろうか。それとも、純粹に公開してるだけなのだろうか。

「こういう事は、大体隠すか秘匿するからねえ古臭くて陰気な奴らは。良くも悪くも呪術師の家としては方向性が珍しいんだ。ちよつと似てるのは狗卷家かな？」

呪術師としてこれからやってく事になるなら、多かれ少なかれ関わることにはなるからね。早めに合っておいて損はないと思うよ。」

「……………」

確かにこんなトンデモなら、呪術界でそれなりに名が通ることは十分に理解できる。

同じ年故に活動時間がかぶるから、多かれ少なかれ関わることになるかと五条は考えているのだろうか……………それともまた別な事情なのか。

そう俺があーだこーだ考えていると。車がキキツととまり五条が車から降りて一息をすつて次に出した言葉は。

「五条家当主 五条悟がきたよ。つて当主櫻君に伝えてくれないかな？」

だった、かなり大きな声だったのか奥に見える屋敷の中から人が一人パタパタとかけていく音が聞こえた。

大きな門の横の一人出れるような扉から、和服を着た女性がこちらを覗いたやいなや。

「五条家当主様でございませうか!?少々お待ち下さい。当主にお伝えしてきます。」

とだけ言い残し、また世話しなく掛けていく様子が見える。ああコレは確実に継木家は、五条 悟が今日来る事を知らされてなかったのだろう。

「……………コレあらかじめ継木家の方に、連絡いれてないですよ？慌ててますし明らかに突然来た反応ですけど。」

「突然来るかもって言ったし、そうしてるだけだよ。」

五条は、特に悪びれもせずになんか言い放った。適当な部分が多い人であることは十分知っているが。

「……………はあ。」

思わず、少しため息をついてしまっても俺は悪くはないだろう。

中で急な来客について話しているだろう……………普通の来客なら突っぱねれば良いが今日来た相手は 五条 悟 である。

二十分程度たち、先程扉から俺達の様子を覗いていた着物の女性が綺麗なお辞儀をしながら。

「遅くなりまして申し訳ありません。お上がりくださいのご案内いたします。」
門を鍵を取り出し開け開く。

そこには、呪術界御三家には大きさ等は劣るがしっかりと綺羅びやかさや華やかさが削ぎ落とされた様な洗練された屋敷が一つあった。

中に入ると五条は、慣れたように靴を脱いで上がり俺もそれについていく。

奥へ奥へ屋敷を進んで行くのかと思いきや、割と浅い場所で案内人の女性は立ち止まった。

「こちらに継木家当主 継木 櫻様がいらつしやいます……。」

立ち止まった先にあるのは、一つの襖。

その先の継木家当主はいるのだろう。

「どーもー僕来たよー。」

「……………」

五条が最初に、襖を開け部屋に勢いよく入る。

ああ俺はこうしてここにいるんだった。

カステラの下にある溶け残ったザラメをガリつと歯で潰しながら、今の現状へ意識を戻す。

「で、僕が君に言いたかったことは恵に良くしてほしいなあって感じかな？ 同年代だしー」

「同年代だからって必ず交流があるわけではありませんけどね。」

突然カステラをすべて食べきったと思えば五条は立ち上がり襖に手を付けた。

「というわけで、後暫く二人でよろしく！ こういう話は僕みたいな年長は邪魔になっちゃうからね☆」

「突然、えっ?」

「……………あ?」

突然五条 悟は、部屋から出ていった。あとに残るのは呆然と口を開けた当主と困惑で頭が回らなくなった俺の二人だった。

交流 2

五条が突然出ていった中騒がしい盛りの中の男の小学生に当たる子供二人いるとは思えない静かで重い雰囲気は漂っていた。

「……………なんとなくああいう感じとは分かってたから気にしなくていい。

「本当に伏黒君の貴重な休みの時間をこんな事に使わせてしまつて……………兄弟とかともゆつくりしたいだろうに。」

あの五条が、突然連れてきてどうして放置するんだ。空気が大変なことになつてしまったじゃないか。

そこをどうにか処理して返すのが当主としての仕事の一つであるが相変わらず毎日思っている、コレ僕の年ですることじゃない。

そう思いながらもなんとか、空気や重たい雰囲気を減らすように言葉を紡ぐ。恐らく伏黒恵は多かれ少なかれワケアリと言うところだろうか、もしもともに両親がいたら五条が連れて出せるはずもないし。

たとえばその両親が、里親だとしてもだ。

そしてワケアリでもなんでもなく普通に呪術師を志望として偶然にも五条と関係が

あつて来た可能性があるとしてもこの年じや僕と同じで若すぎる。

もし伏黒恵に親族がいるのであれば、兄弟がいる可能性が一番高いだろうという勝手な妄想だ。

「そちらこそ、突然みたいだし。俺は貴方を攻める気はないです。えつと念の為聞きませけど、貴方が継木家当主 継木 櫻ですか？」

伏黒恵は、ペコリと頭を下げた。別に下げなくてもいいのに大体アイツのせいなんだから。

ああ確かにこつちから直接当主としての名前は言つてなかつたな、そりや僕が当主だろうつてのは先程の会話からだいたいわかるだろうけど色々確定しないだろうし。

不安定なまま話すのは相互誤解を引き起こすからね、どんな事でも前提を確認するのはいい事だ。たとえしつこいと思われてもね。

「そうですけど、基本当主としては実際に動く事は殆ど無いのでお飾りみたいなものですよ。

継木家自体に用があるなら、僕よりも家の者達に声をかけたほうが手っ取り早いです。もしかしたら五条さんもそれで席を立ったのかも……………」

僕は伏黒恵と言う僕と同じ年ぐらいの少年の返答に、自分の肉体に架せられた名を肯定する。

紀野 楓こそが僕にとつての忘れてはならない本来だが、当主として今は継木 櫻であるのだから。それを否定するつもりはない……………

当主としての崇められて入るが権力は相変わらず無いのではつきり言うのがこつ恥ずかしいとかかなんと言うかな気持ちではある。

家の者に悪意がないのは、僕としては分かっているつもりではあるが。そのうち年取つたら出来ることが多くなるだろうか。

「……………もしそうだったらきつとろくでもない話してるな五条さん。」

その言葉を聞いた時、伏黒恵は少し顔を下げて困つたように紡ぐ言葉を少し濁すようにしてお茶を啜つた。

最初から同年代の方が来るとわかつていたなら。

お茶じゃなくてそれらしい飲み物にしたのにサイダーとかコーラとか果物のジュースとか、でも喉を潤すのならやっぱりお茶が一番いいのだろう。

そう思い込むことにした、過ぎたことは変えようが無いのは事実だし。

「同感です、まあちよつとした嵐や大雨が来たと思う事にします。」

例え五条が家の者でどんな事を話して画策していたとしても、僕には権限がない。もし五条でなく他の者がそういうものを話していたとしても結局は同じでただ従うだけ。

家が当主としての振る舞いやあり方を決定づけるそこに自らの意思は入ることは無

い……………

そう思うと、特に不快さは他と大したことがないかもしれない苛つくには苛つくが。「少し、移動中に継木家の話は聞いたが……………呪力を吸い上げるってそうなのか?」

目の前の伏黒恵は、中身が半分程度減ったお茶を置いて少し疑問に思っているだろうことを口に出した。その声に宿る感情は、事実の確認ではなく本当なのかと言う疑い。来るまでの間に、色々この家の概要みたいな話を話されたのだろうか……………大体の継木家に関する情報は公開しているが聞いたりしても信じられない人は一定数いるし嘘は書いてないと思うんだけどね。

時間が経つうちに変化して、古い物は残っちゃってるだろうけど……………
「質問ですかね? まあ呪術師の常識なら可笑しい現象ですからね。」

本当です、実際に体感しないと伝わらないと思います……………僕に周囲や血の繋がっている人物の呪力を集め溜め込む性質を持っています。」

普通の呪術師をちよつと見て、大体は呪力は放出つまり内から出す物だと知った。刻まれた術式または後天的に作った術式を介しても呪力は外に出すものに違いない。その逆に外から内に取り込むものがこつち継木の当主ではデフォルトなのだ、やっ
てることが正反対。

もし継木家自体に、それなりにでも力がなかったらきつと生きたまま脳みそとか色々

調べるために開かれてただろう……まあ死体だとその力はどつか行くみただけど。負の感情由来の不思議。パワーが呪力だ、術式と言う仕組みがあることも相まってどんな事があってもおかしくは無い。僕もその中の呪力による事象一つだろう。「そういう体質持ちが当主として、据える事は聞いている。実際にという事は、もう十二カしているのか……」

確かにこの家は呪力の残穢すら見えない……呪術師の家なら多かれ少なかれ多少は……呪力を集めるが故にか。」

ああそこらへんは知ってるのか、移動中どこまで僕のいや継木家のことを話したか分からないけどいちいち説明するよりは早いしお互い気楽だからまあいいか別に。

伏黒君他の呪術家にも行ってるのか、まあこんな辺鄙な継木家にこさせられるぐらいだからもつと大層な五条家とか加茂家とか禪院家とかとつくにもう行ってるよね。

そういえばなんとなく顔が禪院家の人達に似てなくもないような………？

五条家と禪院家って仲悪かったよねもしかしてその関係でかな？でも五条家は色々あるだろうけど五条悟がそこらへん気にするとは思えないんだよね。

継木家を見て呪力の感じが少し違うって分かるのは、かなり僕と違って頭が良くて聡明な子なんだろう……呪術師になんかならなきゃいいのに、きつと無理なんだろうけど。

「残穢すら集めて溜め込むですよ。本当に気分が悪くてしかたが………オット失礼。」

ナニカああ戦闘ができる呪術師の方についてもらって、呪いの吹き溜まりを渡り歩いてますね。

本当なら呪霊等が発生しないようにずっと居るのが、一番いいんでしょうけどそういう訳にもいきませんから。」

そういう体質とはいえ、呪力を体の中に溜め込むのは気分が悪………コレはあまり言わないほうがいいか。口に思わず出してしまったが。

僕はもう発生してしまった呪霊は対処しようがないだから他に呪術師がつく、方向性がまだ決まってなく形がないものは内側に貯めることはできる。

祓われて形を失った呪霊………も呪力の一つであるから集まってるらしいがそういう場所に居る時点でかなり気分が悪くなるので変わった感覚自体はあまりしない。

「呪霊は一つの場所だけで出てくる訳ではなく、人の負の感情が集まる場所全てから出てくるから………渡り歩くか。」

それだと日本各地を巡る事になるな、呪力の吹き溜まり………そんな場所なんてはいて捨てるほどある。」

それを聞いてちよつと頭を回したかったのかそれとも、逸したかったのか伏黒恵は力

ステラを突付いた。

関係のない話になるがこういうお茶菓子で塩味の物つてあるのだろうか、煎餅ぐらいしか思い浮かばないが会話となると咀嚼音が煩いし向いてないか。

確かに人の感情が吹き溜まる所なんて山ほどある。僕は便利な清掃業者か？

「まだ、年が年ですし。当主になつたばかりなのであまりにも遠い場所の案件は家の者が調整してくれてますね。」

「10そこらになれば、そういう物も今まで貯めてたのもあり今の状態から更に増えると思うと……………」

「……………引つ張りだこみいだな。」

「嬉しくありません。殆どそういう物で埋まつてるのでこれ以上とか深夜や朝からしない」と間に合わないのです。」

本当に嬉しくない、今でもこういう休日（五条悟がアポ無し突撃かましてきたから消えたが）以外にはホラースポット巡り廃墟巡り等など一日一箇所ではなくいくつもいくつも何十箇所巡っているのだ。

確かに今は遠出となる所には行かないようになってはいる、けどもいつかはかなり遠い場所にも呪霊が発生する前に呪力を無くしに行くだろう。

そう考えると今から気が滅入ってしまいそうになる、これ以上ってどんな予定になる

んだか……体壊すいや元々壊れてるようなもんか。

「随分詰まったスケジュールみたいだな……学校行く暇あるのか？」

今では懐かしい響きの言葉を、聞いた。

「そうだよ、普通は学校行って先生に叱られてたまに宿題忘れて友達とくだらない事を言い合う年だ。」

目の前の少年は、ちゃんと通っているのだろう。異常に飲まれずにいやコレから異常に触れていくのかもしれないがだからそういう言葉を言えるんだ。

そういう可笑しさに気がつけるんだ。

もうすでに、鮮明では無くなった肉が腐れ落ちて骨だけとなった死骸のような色の付かない懐かしいで済ませてしまえるようになった記憶を追憶しながら。

「当主に祭り上げられてから、行つてないですね……懐かしい感じはありますが忙しくて忘れてしまつて。勉学とかは今でもついでいけますよ。」

僕最近物覚えがとも良くなりましたし。」

こう言葉を発する。

ドコカ僕自身の事なのに他人事のように、どうしようもない事なのだ。別に困つたことでは無い、いつもの間にか最初は気がついていた異常が日常当たり前の事とすり替わっていた。

本当にそれだけの事なのだ。

「途中で行かなくなつた……だど? 継」

それだけの事だと思ひたかつた。

きつとこの後には、心配する言葉が出るのだろう。それがきつと伏黒恵にとつての当たり前の一つなのだろうから。

「そこまで驚く事ですかね? 不登校みたいなのですよ、時間的に中学行けるかどうかですかね……呪術高専には通えるみたいですけど。」

東京の方が、京都の方がはまだ僕にはわかりませんがね。伏黒君は呪術高専に通うことになるなら多分東京かな、五条さんと関係が深いようだし。

もし僕が東京の方に行くことになったら、よろしくお願いしますねー」
でもその言葉を聞きたくなくなつた。

正しく 優しく ある意味身勝手な

ちやんと理解してしまえば、守つていたくだらないモノが壊れてしまうような気がしてならなかつただから。

僕はわざと遮るように、早く早く頭から出た嘘だらけの単語を繋いで文章化し喉から音として変換する。

そういうわがままで、身勝手に自己中心的で醜く見るに耐えないモノ

吐きそうだと、自分が自身が気持ち悪い。

ああ本当に気持ち悪い。

まだ呪いに身を浸す事になったのに、どこかいつかは戻れるそういう気でいたのか？
逃げ道なんてないの？進む目的すら結局は人任せなのに？

傲慢だ。

「……………」

……………ああ表情に出してしまったのかもかもしれない、言う言葉は間違ってたなかつたはずだ。それは心には思っていない事だけだ。

当主としては、まだ駄目らしい。

ちゃんとしてたつもりだったんだけどなあ……………慣れてついでのかな、心と体を切り離すそれがうまく行かないや。

「どうしました？」

なんとか仕切り直そうと、こちらをお茶を口にしました。吐きそうにはならないが、美味しいとは感じられない。

ちゃんと葉を濾して淹れているのだろうか、細かく残った葉のザラザラとした感触が不快に感じる。まあ食に關しては飲むことも食べることもいつもそうだから変わったものではない。

その不快感でなんとか思考を戻す。

次に出たのはどうしました？と言う心配、伏黒恵の心配の言葉を遮ったのによくもまあこんなことを言える立場になったものだ。

「いや何でもな」

その時に襖が、勢いよくパンツと音をたてて開いた。きつと家の者では無いはずだ。

「恵ー、呪霊退治行くよー。後家の者と話しつけたから継木君もね。」

そこには、五条悟がいた。空気を変えられたから救いにも見えるが休日に入仕事を入られた。

というかお前がアポ無しで突撃してきたり、僕と同じ様な子供を連れてきたりしてたからこんな事になったのだから感謝の念は一ミリも沸かないのは非情なことでは無いと思う。

「……………嘘はつく利益は今は無いですね、ちゃんとした物に変えますので少し待っててください。この衣服などは仕事用ではないので。」

本当にごめんなさい、伏黒くん後で菓子など適当に用意しますので親族と御召になつてください。」

家の者に言ったことは、ホントだろうもし嘘だったら僕が玄関から出ようとしたらその時点で止めるはずだからそれでわかる。

念の為着替えと称して時間を稼ぐことにはするが………本当に疲れる。

伏黒君宛には、茶菓子やら持たせよう。ここに来る時点で相当時間を使わせてるのは
確実なのだからちよつとした詫びだ。

交流 3

仕事用に少し服を整える。

この服は堅苦しくはあるが、ちよつとした休日用だけあつてかなり緩くしてある………戦闘時にはダボダボすぎる服は向かない。

毎回着させられる時はに2、3人でしないととてもじゃないと出来ない服装だが、その後の簡単な調整ぐらいであれば僕一人でも出来るようになるんとか練習を繰り返して慣れさせた。

見た目は地味な割に色々手順など色々多くて面倒くさい服だ、ちゃんと着れば動きやすくはあるけど。

「はあ休みなのに、仕事入れられたんだがやっぱりろくなこと無かつたな。」

一人で整えながら、ぼやく化粧室に行く前に家の者を一人ひつ捕まえて本当かどうかを聞いたら本当のようで………

なんというか疲れる。いつも疲れて入るけど、体じゃなくて心のほうが。

「仕方がない、本当に権力なんて無いに等しいからないか。」

お飾りというがなんというか、崇め奉りはするがそこに個が存在するとはあんまり思

われてない感じがある。神様へのお祈り、遠い存在そうだからこそ。ただそこにアリ 見ているだけ。

まあ僕にとってはもうどうでもいいけど、そんな事を思いながら玄関へと長い長い廊下を古い木造建築特有のギシギシと音をたてて向かう。

壊れてるわけではなく、防犯目的があるということをなんとなくテレビで流れていた番組の内容であつたなそう関係のないことを頭の隅に浮かべていた。

「戻りました、さっさと済ませましょう。この時間なら一箇所ですよね？」

玄関から出ると、伏黒恵と五条悟が車の前で待つていた。運転席にいるのは家の者だろう、さっさと終わらせよう。

呪力を取るのは気分が悪くなる。

だけれどもそれがこの名に与えられた、家から決められた役目としてあるのだから。どこかに行こうとしてもこの体でどこに行けるのだから？

車に乗り込む。

いつもの車だ、座る場所も同じ。

「うんそうだよー、本当はもつと回りたかつたんだけどねー流石に無理だったわ。恵も同伴なのがまずかつた？」

車に乗るとき五条悟から発された言葉に伏黒恵が、怪訝な表情をした。突然の、呪霊

退治だそんなふうにもなる。

あと一箇所なのは、体裁を保つだけで突然来て仕事取り付けた奴相手には結構な温情だと思う。

そう思いながら窓の外を見た、日が暮れ始めているつく頃にはもう夜になっているだろう。

「……………」

「それ以前の問題では？」

取り敢えず、伏黒恵が同伴だから巡れないことを否定する。それもあるとは思いますが理由の大半は突然来たことそれのみである。

そこらへん反省してほしい。

「なにか言った？」

まあ五条悟には無理だろうが。

そういう人間なのだから、きつとこの精魂が治るとしたら霊的に生まれ変わる以外に無いのだろう。

呪術師として狂気に吞まれず務めていられるのは大なり小なり、こういう性質だ。だからただでさえ素質を持つものが少ないのに更に減っているのだろう。

すべての物事は悪い方を水準に合わせられるものだ、桶だつて横に穴が空いていたら

その穴の高さまでしか水は入らないそうそれだけのこと。

「今日行くのは集合墓地しかも、手入れ放棄されてるやつ何か田舎って感じの場所だねー」

放棄されてるとか人減ってるの極みって感じで、まあそれなりに人は来るみたいだけど肝試しとか遊びでね。」

五条悟は、移動中手持ち無沙汰なのか今回行くであろう場所を話し始めた。それはどこかつまらなそうで……当然ここに強力な呪霊が現れそうな場所など、思いつかない。

継木家の周辺でそんな呪霊が発生しそうなところなどそんなものしかない、人が少ない所に構えているのだ。都心とは逆の意味で比べ物にならない、田舎と呼べるのかすら怪しい。

村すらない廃れた土地だ。

昔の栄華も何もかも忘れ去られた、その後の残骸しか残っていない。そんな物だ。

「伏黒君もさっさと行きましょう。完全に巻き込まれた形になりますが面倒な仕事は早く済ませるに限ります。」

ポーと外を眺め続けると、静かに停止したことに気が付き直ぐに降りて袖から呪具を取り出す。

出ると呪力の気の強さを肌で感じた、心臓に水を垂らされている気分だ。冷気含んだ夜の風で、頭を覚ます。

終わらせよう、今回はいつくも回る必要はない。そう思い込ませ伏黒恵に声をかけ、するとそれに反応を返すように影絵を作るような素振りをする

「そうだな……………玉犬、まだ弱いですけどコレで。」

黒い黒い闇から狗が二匹いつの間にかもとからそこにいたかのように、光を示すような白と影を示すような黒の毛皮を纏って出てきた。

これはきつと禪院家の相伝十種影法術なのだろう……………やつぱり伏黒恵は禪院家関係なのだろうか。

無理やり血縁辿られて引き取られそうになったとか？御三家は相伝至上主義みたいな部分もあるし。

まあもし強い術式が途中で生まれたらそれが相伝として格上げされる事例もあるにはあるだろうけど。

「その必要は薄いみたいです、流石といえるかなんというか。他称も自称も最強は伊達では無いですね、なら早く終わるかどうかは僕次第ですか……………」

少し時間かかるかもしれないです。」

伏黒君はピリピリしてるようだけど、五条悟は一瞬で出てくる呪霊を蒸発させてい

く。

そこに戦いではない、純粋な殺戮というよりはもはや当たり前という現象と言えるほどに……最強をありありと見せつけられるようだ。

呪霊相手の時間は計算しなくていいだろう、後はこつちがどれだけ早く呪力を取れるだけ。

「無理はしなくていい、無理させてるのはむしろこつちの方だからな。」

表情で察されたのか、伏黒恵がこちらを心配してきた。確かに休みの時に来ているから、休まってそれなりに回復した時ではない……

本調子とはいかないか。

「うんー？少し弱い呪霊でも残したほうがいい？でもまだねー恵式神出してるみたいだけれど今はまだ僕の戦つてるところで学んで。」

「呪霊のこしたほうがいい？そんな事ありません、むしろ漏らさずお願いします。僕だけじゃないので……最低限の自衛は今学習中です。」

そんな中、五条悟は淡々と呪霊を倒していく。軽口を叩く余裕も有り余ってるのだろう。ああ足取りが重い、歩くときにジャリッジャリッと土と石が混じり合った音が響く。

「なあ継木、その武器はなんだ呪具か？」

「……………その通りで呪具です、本体は柄だけなんですけどね。まだ伏黒君の術式みたいに使って慣れてなくて。」

そんな時に伏黒恵がこちらを覗いてきた、コレが気になるのだろうか確かにあまり見ない呪具だろう。

伏黒君は、多少でも呪術師の生命線の一つでもある術式を晒したのだこっちも手を明かさなければ不平等だと思った。

「戦うのはお互い今時点では殆ど経験なしか……………柄が本体の呪具か、初めて見た。」
「ちゃんた刃物見たいな見た目ですけど、物は切れないんですよねこれ。」

すり抜けるんです、でも式神は呪力からできてるので気をつけてくださいね……………うっかり玉犬二匹に怪我させてしまったら。」

物が斬れない呪具、呪いを斬る呪具。

刀身は恐らく呪いを、扱える才があるものしか見えないだろう。物質に付属しているのではなく文字通り呪力のみでできているのだから。

……………正確に言うなら斬るといふより、固まった呪力を溶かす方が近いのかもしれない。性質を変化させられた呪力を元の只の呪力に戻すのだ。

式神は呪力のみでできているからこの呪具は、かなり危ない代物だろう。

「……………わかった、玉犬はお前の持つてる呪具から少し離す。」

「そうしてくれると僕も安心です。」

呪力でできてくるとはいえ、動物とかは斬りたくない。呪霊もできるなら斬りたくない、正直戦いたくない。そんな思考を喉で殺しながら懸命に表情を作る。

「二人して結構話してるねえ話でもあった？」

僕達二人が仲良さそうに見えたのか、五条悟が嬉しそうにどんどん進んでいく。

仲良くというよりは、なんとか二人して空気を取りまとめようとしているような感じではあると思うのだがやはり精神の構造自体が違うのだろうか？

伏黒恵も、僕も真っ暗な夜の中においていかれないように必死に追いかけていく。呪力にあてられ気分が悪いがこれで終わりだと思えばなんとか休まずに行けそうだ。

そうして暫くあるき回るうちに、五条は六眼を開けて周囲を見渡した。

「やっぱり継木は、僕の中から見ても凄いなね溜まり淀んでた呪力がすっからかんだ。

吸い取るだけでも、結構な事なのにこの量となるとね僕も驚き。」

そうすると、手を叩くパチパチとした弾ける音がある。白々しい、けれども呪力が見える眼で見ているのだから文字通りすっからかんなのだろう。

適当な部分が多いが、五条悟でしか見えないモノには価値がある。

「なんですかその白々しい拍手は面倒です、気分が悪いので早く車に乗り込みますね。一箇所だけなので……もう真夜中ですしね、一泊だけしてあとは帰ってください。」

もう虫すら鳴かない真夜中だ、五条悟はどうでもいいが伏黒恵をそのまま返すのは忍びない。

風呂と寝床を貸してから朝に返そう……きつと僕の意見でもそれぐらいなら家の者は聞き届けてくれるだろう。

「やつさしーねえ」

「五条さんは反省してください。」

伏黒君とは、五条悟についての愚痴なら確実に話が合うだろうな。

俺は、結局日帰りにはならず朝継木家を出ていくことになった。夕食もご馳走になって、帰りに継木家当主 継木 櫻 から何日分かになりそうなカスタラや羊羹煎餅等など大量に袋に入れて渡してきた。

雑多に入れてはいるが、かなり格式が高そうなお店の物だろうと素人ながら分かる。

お菓子を渡された時、直接玄関まで出向いてきた彼はとても申し訳無さそうにしていた………

断るにも断りきれず受け取ったが………この大量の菓子や開けていた時間を津美紀にどう説明しようか、とそんなことを考えていたときに。

「恵継木家当主見て、どう思った？」

俺の目から見た、当主の印象などを聞いていた。俺としては悪い人間ではないとは思
うが……………

「病人としか思えませんでした。ちよつと触ったらポキつと折れてしまいそうな。」

力があるとはいえ、とてもそれを負担させるようなそういう人物には見えなかった。
自分の意志でやつてるように見えないのだ、だけれども無理やりされてるようにも見え
ない。

もしそれを表す言葉があるとするならば、選択肢を与えられずいやそれを問う前に奪
われきつてるような。

俺にだつて選択肢はあつた、実質無いに等しいものだつたが……………

「あーそれ僕も思った、前見た時よりもほんのちよつと体の方はマシになつてる様だけ
ど。それ以外何か悪化してない？目つきとかアレ年頃の小学生のやつじゃないってー
それはさておき、アレが継木の力つてのは分かつたかな？聞くだけじゃ伝わりにくい
と思つてね。」

五条悟は、笑いながら肯定した。

その後に俺を連れてきた本当の目的であろう、継木の当主の力について聞いてきた。
「その為だけに連れていったんですか。」

確かに嘘ではありませんでしたね、呪力を根こそぎ持つていくつて話は。あの場自体に

溜まりきった呪力が探そうとしても感じ取れないほど無くなっていた。」

確かにあれは、直接見たら異常現象という他ならなかった。まるで空間の呪力が栓の抜かれた風呂の水のように当主の元へ吸い取られていくのだ、呪力は五条悟のように見る事は出来ないが。

継木の仕事が終わった跡は、何もなかった。文字通り五条悟が術式や呪力を使った痕跡である残穢も俺の残穢も何もかも呪力の全て。

「あんなのトンデモ現象だからねえ、僕も先代の継木の呪力を集めるところ見るまでそんな事信じてなかったし。見たらすぐにわかったけど。」

「呪力を呪霊という一つの形となつて発生する前に場所から取り無くしてしまうか………」

聞いた話だとアレを何十箇所も巡つて行っているのだろうか………呪霊の発生を前の時点から抑える。その仕組みが分かった気がした、生まれる前に祓っているのだ。

………釣り合いは何処で取っているのだろうか、アイツのあの病人のような様子がこの代償か？

「実際それで、やった場所からは呪霊完全に発生抑えることは出来ないけどかなり発生率減るんだよね。」

あつちへ行つてこつちへ行つて、ある時は呪力発生させてそんな悩みある人集めて人

から取つてとコツコツコツ毎日毎日ジミーな作業繰り返してるワケ。」

真面目な事だよねえ、と何処が呆れたように言った。何かを祓う実感もなく呪力を奪う。

それはとても虚無に溢れている行為なのだろう、それをずっと続けている。

「普通の呪術師でも人手不足で、休み殆ど無いのにそういうもの取れないな………学校にも行かなくなったと言っていた。」

「呪術界では、継木家当主はこう言い換えられる事がある。呪いの身代わり、善き生贄、呪いの受け皿、呪いの放棄先、優秀な形代、呪われた血などとね。」

継木家当主として据えられた瞬間否応なく呪力を吸い上げるためにお役御免………死ぬまで、人生缶詰確定つてコト。

いやー僕から見ても酷い酷い。呪術家は糞なの多いけど、また別方面の糞だね。利用しているという認識なんてしておらず奇跡だ功績だと崇めてるのが尚更質が悪い。

まあそうしないと純粹に呪霊の数今より確実に増えるからね、今の数や強さの質で済んでるのは継木の影響は確実にあると思うよ。」

「……………」

やっとわかった気がした、分かっている気になれた気がした。あの継木は近くにいた人間に、人として見られていないのだ。

それは決して蔑まれて行われるものではなく、寧ろ崇められ讃えられ行われているのだ。五条悟の言うように質が悪い、純粋な劣悪な悪ならばまだ救いがあった。

追い詰めているような行為が、呪術的に呪霊を無くす善でもあるのだ。

そんなモノを表す言葉なんて。

生贄

しか思い浮かばなかった。

「でそんな家の当主の唯一言つていいほどのモラトリアムが、呪術高専に通う4年いや3年間……同期代との交流や自衛手段を高める目的でもあるみたいだけど。

僕が聞いたところ東京高専に行くことになったみたいだから、恵も良くしてやってね。」

「それ完全に行く場所指定させてますよね?」

何処に向けるのかも分からない感情に口を囁んでいた時に、東京高専に行くと五条悟は話した。

あの席を外したときにこの事も話したのだろうか、……………ひよつとするとあの呪霊退治を急に入れたのもコレを誤魔化すためだったのかもしれない。

「嫌だなーちよつとオネガイしただけだよ。」

「……………」

「そんな顔しないでよ、恵。」

「貴方からのオネガイなんてほとんどの人間からしたらほぼ命令みたいなもんですよ。」

俺の禪院家行きを止めたのだ、継木家は当主は東京高専か京都高専に行く事になる。それをどちらかにするかなんて五条悟の力を使えば朝飯前だろう。

「ヤダ俺ってそんなに強い……………」

まあ最強だからね☆

戦いだけじゃないのさ。」

糸絡

「継木家当主 継木 櫻です。この度はこのような場を禪院家で用意していただきありがとうございます。」

その目の前の継木家当主継木櫻と名乗る冷えた氷のない水のような声をしている、家が決めた婚約者予定の者は浮世から離れているように見えた。

表面上は笑顔と見えるが、底に何があるのか見えない……もしかしたら何も無いのかもしれないとも思えるほどに。

その浮世離れた目の前の私とほぼ同じ年の男が、結納の契約には似つかわしくない。綺羅びやかとはとても言い難いが、素人目から見ても分かるほどに繊細な白の刺繍がされている黒の装束を身に纏っている……

だけれどもそれが失礼だ無礼だ等決して言えないほどに、男自身が醸し出す空気には、まるで彼専用の特注で拵えた一点物の様にあっていた。

まるで彼岸からのお迎えのようだ。

「禪院 真依です、この度はお越し下さりありがとうございます。よろしくお願いいたします。」

私は、その言葉を言う。めでたい結納の話ではあるが、結局は政略……家の為の事を私という体が使われるだけ。

禪院家にとって女とは、炊事や洗濯掃除などの家事や身支度をやらせる雑用のみの小間使いと子供を産ませる腹……他の家と関係を結ばせる為の道具でしかない。

そうして強力な術式を持つ血を取り込んで無駄に大きくなつていった家でもある、コレがこの女のアタリマエ……

「……………一度会いましたか？」

ただ結末は変わらないのだから早く相手の機嫌でも取つて終わらせよう。そう考えていた時に相手が私の顔を見てその一言を口にした。

口説き文句のような言葉だがその意味合いを一切含んでないと感じることは出来る。只の疑問を口にしただけのような、含みを一切持たない言葉。

「いえ一度もお会いした覚えはありませんね。」

それに私は否定を返した、もしそれが含みを持たせていたなら相手の機嫌を取る為にわざと曖昧にしただろう。それが、優位になるから。

だけれども何処が最初から、そんな事通じないような気がしてくる今まで合ってきた大人含めた人と尺度が……………思考の方向性が違ふと。

一度会いましたか？の一言で察した。

優しくしてくれると思った、襲われた。気に食わないからと、殴られた。どうでもいいから、何もしない。そのどれも当てはまらない。

「そうですか、何かこういう事になってしまいましたましたが本当に……」

僕でよろしいのですか？ 貴方も。」

「いえ、そんな事はありません。この縁談を受けてくれたことを心から感謝致します。

私も貴方で幸せと思います。

「これからもよろしく願いますね。」

そう、決まりきった答えを返した。それ以外の事をここで言ったら………唯一の私が私で決めた安らげる居場所すら、奪われていや家の人達に壊されてしまう事は分かっている。

まだ上手くすれば、何とかなるかもしれないそんな根本的な問題の後回しばかりするしかない。どうにも出来ないしする力もないから。

隠れて本当に言いたいことを、何を言いたいのかすら分からずに喉で殺す。生まれる前の赤子を殺す為に柔らかい据わっていない首に手をかけて締めていく様に何かが毎回回すり減っていく。

いつもの事なのに。

「まだ言える段階ですらないですもんね。お互いにお互いを知らなすぎる。どこが嫌と

か、どこが良いとか、まだ分からないも、前提すら無いようなものですし。

なので傲慢ですが、僕はこれから貴方に手紙を送ろうと思います。開けるのも、読むのも、返事を送り返すのも、好きな時にしてください。

僕が勝手にすることなので。読むのが面倒だったら捨ててください。

纏めて燃やしてもいいです。」

そこから言葉は相手の喜びでは無かったが、私にとっては予想外としか言えないモノ「えっ?」

手紙を送るそれだけ。

それをすると言われた、表情や声音はからかいやジョークではない一つの手段として話しているようだった。私が知らない事を知ってもらおう為の。

目の前にいる 継木 櫻 も、コレが家同士の政略による婚姻である事は知ってるだろう、知らないのなら………

こういう事になってしまった

何て言うはずが無いのだ、私は思わず意図しない声がコップに入った水が、揺れで溢れて漏れるかのように零れ落ちた。

きつとその時の私の顔は、鳩が豆鉄砲を食らったという言葉がよく似合ってるだろう。

「交換ノートでもいいですよ？そこら変にこだわりは無いので、毎日話すことは難しいので妥協というかなんとかそういう感じですよ。」

コイツは、いつの時代の人間なのか？

いや政略結婚の時点で時代錯誤の産物な行為でそれをやっている家同士で言えた義理ではないが。一体どこの少女漫画から知識を取ってきた？

それとも只愚直に素なのか？

何もかも、わからない中で唯一分かるのが、私を尊重した上で事を成そうとしてる。

違う懸命に真剣にしようとしている。

その一つだけが、言っている内容ではなく声で伝わってくる。

「でもノートだと真依さんが、好きな時に返答できないじゃないですか………したくない時に。だから手紙を勝手にコッチが送ります。」

僕を知った上で考えてください。

本当に大丈夫かどうかを、真依さん自身が幸せになれるかどうかを駄目なら駄目なところを直せるようにします。

どうしても無理なら、他の方にできないか家の者含めて相談します。僕個人としてはそういうつもりです。」

「……………あつそうですか。」

真正面から真つ直ぐ向けられた目に、思わず口を閉じるのを忘れる。次の言葉を紡ぐ思考を一瞬奪われる。

ろくな返事が返答が出来なかった、初めの時から面白い冗談ですねと茶化せば良かったのに。

「どうかしましたか？少し聞き取りづらかったなら、もう一度分かりにくかったときから言いますけど……」

私のちよつとした不審な様子を見て怪訝そうに、まるでそれが当たり前かのように返してくる。禪院家がふつうからしたら何もかも狂ってる事は私は分かる。

だけでも、貴方をふつうと全く言い切れないのはこちらの目が濁ってるのかコレがそうだと認めたくないのか

それとも、コイツはコイツで狂ってるのか。

「はい確かに、お互い全く知りませんからねいいですよ。返答は遅くなってしまうかも知れません。」

手紙でもノートでも………」

………：相手が勝手に送ると言ってるのだから、返答も何もかも関係ないそう心の奥底で思いながら何とか返す言葉を頭の中で組み合わせる。

正直に言えば、ここままで不快や嫌悪は感じなかった。悪い人ではないだけでも

……何故か深く深く見ようとする、不気味さや不穩さが口の中に入った砂の感触のように残る。

底が見えないのか、底抜けなのか。

純粹な良い人で、済ませてはいけない。

という事が頭の中でチカチカと、危険信号のような音と光を幻視する。私は他人に氣を使うほどのお人好しじゃないはずなのに……

「じゃあ遠慮なく送りますね、僕は貴方のことを知りたいと思つてますけど。

貴方がどうかはわかりませんが、それを知る術は僕にはありませんから。そうなのかどうかは、貴方だけにしか無いんです。

僕が勝手に決められません。」

勝手な言葉をつき連ねて、継木 櫻は席を立つ。いつの間にか、約束の時を一時間も過ぎていた。

早く終わらせようと思つていたのが嘘のようだ、まだこの喉に突つかかる出来てしまった違和感を飲み込めるの程の理解は到底できていない。

「今日は、お互いの顔合わせだけ……みたいですし。お別れですかね。」

顔合わせだけで、どっと疲れたような気がする。禪院家の奴らに似ていたなら相手するにはまだマシだった、でも全く違う思想が相手だったのだ。

呪術家なら、禪院家が極度に先端化してるだけで……似たような部分は多い所がある。

男尊女卑も術式の強さや、呪力の強いを見るのも……けれども継木 櫻はアレは継木家にどういう風に育てられたの？

それとも、元来からあなのの？

「名残惜しいですが、ちよつとお仕事があつてコレで失礼させていただきます。」

「まつ……まさか本当に、ほぼ毎日。」

内容もしっかりと作文用紙3枚分ぐらいある手紙送ってくるなんて思わないじゃない！しかも割と読むと内容がしっかりあるし。」

私は、ゴミ箱に捨てられていた高そうなお菓子の空き缶を今日届いた手紙を入れるために開ける。

もうそろそろ早くも満タンになりそうで次のお菓子の缶とか入れられるものを探さないか、と思つてしまう。燃やしてしまつてもいいが……この得体のしれないあいつに対する違和感をどうにかしたい。

手紙の内容を読んでも、今日したことやきれいな風景とかその他色々書いてあるだけで私に関するような物は冒頭に書いてあるお日柄もよろしくぐらゐの挨拶程度の物。

……色々書いたり写真送ったりするわりには何故か食事に関するものが一切入っていないのは少し気になるが。

少しは、一回ぐらい忘れるものじゃないの？こんなもの。サボるものじゃないの？こんなもの。

「どんだけ真面目なのよ、その真面目さこんなところに使っていないで別の所に使いなさいよ！何なのよアイツ。本当訳分らないわっ！」

これで僕の事を知ってください？ですって手紙の内容自体は普通だけど行動が全くわからないのよ！」

連続的に見ずに細切れで見ただけとその内容自体は、私でも普通と見られる部分はある。それなりの内容の、例えばこれだったら手紙を一ヶ月に2・3回とか……多くても一週間に一回と思う。だけれども書いたであろう日付を見ると実際に手紙を送りますと言われてから。

1日も欠る事なく毎日書き続けてるのだ。

だけれども、もし一通でも内容が雑だったり等の手抜きさえあればまだ何とか理解できた……けれどそれすら無かった。すべて原稿用紙3枚程度の文章量で、書いた日付が本当ですと示すかのようなビデオカメラで取ったであろう写真何もかもきっちり揃っていた。

まあなんでか、飴玉とかラムネとか小さいお菓子も中に入ってるのだが………見ずに捨てる事をあんまりしないで欲しいからなのかどうかもわからない。

でも確実に嫌がらせや冷やかしでは無いと言うことがはつきりと分かってしまうのが、余計に性質が悪い真剣に誠実にまともによつたしやろうとした結果がコレなのだ。

もしかしたら何も見ずに燃やすかもしれないと、下手すると燃やしていると毎日も毎日送ってくるだろう。

「何だー真依そんな声荒らげて、そこまで大きい声だとあんまり家の奴ら来ねえ場所でも聞こえつぞーってコレ何だ………」

うわっココにあるの全部お前宛の手紙じゃねーか！ナニコレ何十日分あるんだ？結構大きな菓子の缶だろこれえ。

蓋が変形してるし、しまんなくなりそうって相当だぞ!」

私の思わず大きく出た声が聞こえていたのか、遠くから走って真希お姉ちゃんがよつて来る。そして何だ何だ？と何処がワクワクした好奇心に身を任せるように、私が手に持っていたお菓子の缶の中身を除くと顔を着色料を使ったのかと思うほどに真っ青にさせた。

手も衝撃でなのかわナワナと、何を掴むでもなく動いている。

「ああおっ………お姉ちゃん、ちよつと前に縁談でお見合いさせられたんだけど。その

相手から………配達距離とかもあってバラバラだけど日数的にはほぼ毎日送ってるみたい。

それですぐに埋まっちゃって………」

とりあえずこの様子だと、説明しないと不味いだろうとだんまりだとなるのか分からないと思つて。

私は、大量に手紙が入った缶を横目に見ながら………そう言う………」

「うわあ変に気に入られたか？無理やり妹を襲つて来るような奴なら○○○○蹴り飛ばして××して★★★してぶっ殺してやる。」

声は冷えているが、内容が明らかにひどくてやりそうな感じだ。ああこのままの内容相手にやったらお姉ちゃんの身体能力も相まって死ぬ。

「それはやり過ぎ………死んじやうでもありがとうお姉ちゃん。内容自体は大丈夫本当に、自分のことしか書いてない。えっと少し見る気になるだろうし？」

「んっどれどれ私の妹に出してるやつは………継木なるほ………えッアイツかつ!?継木櫻かつ!」

何考えてんだアイツ。コツワ………あーでもアイツならコレやりかねえー

悪いやつでは無い寧ろ呪術師とかそういうの抜きにしても善良。それは私からも言えるが、ちよつと今度あつたら絶対に締める。」

別にくる事自体は私は問題ないのだ、頻度と中身の量の釣り合いが圧倒的に取れてないだけで……もし毎日来てても短い文章ならばそうなのだろうと受け取れただろう。

ああそうなんだろうなと読み取れただろう。

そういう部分を含めたことを言つて、お姉ちゃんに手紙の一つを見せるために渡せば送り主縁談相手の名前に真つ先に反応した。

そうして……何度かあつたような口振りをする、もしかして一度あつたことがありませんか？の確認つて……お姉ちゃんの事？

「えっお姉ちゃん知り合い……だったの？」

「ああそうだよ、家の奴らに絡まれて少し大したことねえ怪我した時に追いかけて回された。」

スピードや地の利はこつちにあるはずなのに、みよーにうまくついてきてな……理由は心配してとのことだ。」

糸絡 2

「継木 櫻が？お姉ちゃんとても足速いよねそれに追いつけ…………た。」

お姉ちゃんが継木櫻の事を知っていた、知り合いということにも驚いたけど…………あんなのが追いつけるの？

ありえない程に足が速いし体力もあるのに、呪力の強化使っているから…………

あの病人のような体で？

更にほとんど知らない場所で？

「足で追いついたってよりは、察しが良すぎるって感じだな…………何度曲がり角で巻いても私が、行った方の道を当ててき向かってきやがった。未来予知でもしてるんか、アイツ。」

私を探してそれが追いついていたって感じで。まさか継木 櫻が妹の真依の縁談相手だったとはな…………もつと注意して見ていれば良かった。」

お姉ちゃんは、あーと言いながら頭をかいた。

察しがいい…………あの時もあったけど、よく観察してるのだろう細かな事も自然と飲み込んでしまう。だから追いかけて、見つけられたのだと感じた。

何故か純粹にお姉ちゃんに追いついた訳じゃなくて安心した私が出た。

婚約は急に突然嵐のように伝えられた、私の意見とかはそこには全くなくて。多分お姉ちゃんに伝えられると煩いからって……………

でもそうやって心配とかしてくれているのが好きで、とても嬉しい何がどうなるわけでもないのに。それだけで私は報われていると感じる。

「確かに手紙の内容は普通だな……………ほぼ毎日届いてると文章量が多いだけで……………、まあしばらく様子見るしかねえな。」

とても嫌ってわけじゃないだろ？」

お姉ちゃんは、手紙を流してパラパラという音をたてて読んでいく。そうして一つため息をついた……………内容が内容だけに突っ込める所が探しても無かったのだろう……………

あつたらそれを元に直ぐに、私達がどんな状況かわかっても抗議に行こうとするそういうお姉ちゃんだ。

あくまでおかしいのは、頻度と内容の量の釣り合いが取れてないこと……………確かにとても嫌って感じではない。

禪院家の、家の人達は嫌い。

だけでもそれに至る事は理解はできる、女だから呪力も少なくて弱いから……………双子だ

から。どうしようもない部分だけどそういうのがこの家の呪術御三家としての当たり前だからで。

継木 櫻は、嫌いではない。

だけでも根本から理解できる気がしない、同じ人間のように今の時点では思えない。こつちを大切にしようとしているという事だけは、言葉から行動から確実に伝わってくるのに。

どこまでも続く夜の森を、歩いているような気分させられる。

分かるうとしなければいい、考えを放棄すればいい、一番楽で簡単な解決方法はそれなのにそれを何故か私は、選びたくなかった。

「……………返信しようかは考えてる。」

少し考え込み、ポツリとお姉ちゃんにアイツに、継木櫻にあいつのようにとは行かないが手紙を出そうかと漏らす。

選びたくなかった理由はわからない、正直なんだか負けた気分になるからも一つあるかもしれない……………

もし本当にそうなら私は随分と子供らしい理由で継木 櫻の事を知ろうとしているのだらう。

負けた気がする

そんな単純で、どこかこの家では諦めていた感情で。そんな者を全く思考が理解できない訳のわからない相手に私の中で静かにぶつけてる。

別の言い方をするならば、底が見たいとも言えるだろう。人らしい部分を掘り出して何とか自身の中で咀嚼しようとしているのだ。

「ならその時に不満なこと全部書いちゃえばいいんじゃないか？アイツならすぐやめそうなへタレだし。」

そういえば、お姉ちゃんはいんじやねーの？とほだらかに笑った。私の行動を止めはしなかった、初めての自分からの行動だったのかも知れない。

そう考えると途端に、笑えてきた。

本当に無自覚に殺してきた感情が、硬い硬い土から若芽が出てくるように。コレがどうなるのか分からない、でも……………

「へタレってハハハ

ねえお姉ちゃん、お姉ちゃんが知ってる彼のこと教えてほしいな。手紙書こうと思うから。」

今はこのまま任せてみようと思う、これをこの若芽を殺す必要なんかないのだ。

「まあ嫌だったらやめりゃいいしな、いいぜ私か知ってることだったら話してやるよ。」

お姉ちゃんは得意げに私に向かって指を指した、そういえばお姉ちゃんも手紙を書いて

たことあるのだろうか。

……結果を言えば、お互いそういう経験はなかった。だからで二人で四苦八苦しな
がらあーでもないこーでもない、家にろくにかわいい紙はないので返信用に入れてた
のか入っていた白紙の紙に二人で背景として薄い花の絵を書き込んだ。

その上に色々な内容を書き込む。

お姉ちゃんも書いている……お互いの書いてる内容は見ずに封筒に入れて見られ
ないように、お昼の残りのご飯をこつそりくすねてそれをノリ代わりにしてしつかりと
封をした。

「これでいいかな？」

「おーなかなかいいんじゃないやね、送るには問題無さそうだし。てか手紙の中に切手と手紙
入れるための封筒用意しておくとか本当に何なんだアイツ。」

手紙ごとに何処行つて買つてるのか知らねえが、観光名所が入ってるやつだし。」

切手はろくなお小遣いなんて無いからどうしようと思つていたけれども……小さ
くてそして内容などに気を取られていて気が付かなかつたが……。

中に切手が入っていた。それも、手紙の内容にあつたいたであらう場所の観光名所の
写真や特有のキャラクターのイラストの物だ。

「あの手紙の中によく見たら、行ったところの名所みたいな写真とかも入ってたしね

……
……
「これとか海……」

この家から遠出したことがない、私には知らない景色お姉ちゃんもきつとそうなのだろう。

「たくつ文句私のも含めて書き連ねてやったし、コレで色々変わるだろ。」

「……よく届く事自体には、気分的には悪くはないんだけどね。」

まさか毎日書いて送ってくるなんて結構いや、かなり驚いただけで。嫌なら捨てていとかも言われたし……」

ただその行動についての理解が出来ないや、追いつかないだけで。禪院家の女性蔑視とは違う、悪意はないだからこそどうしたらいいのかわからない。

だからきつと、彼を理解したいと思うのだろう。多分それは純粋な好きとは違う。

「そうか、気が利くのかきかねえのか。空気読めるのか読めねえのか分かんねえ奴だな。」

はあとまた、お姉ちゃんはため息をついた。恐らく私とほぼ同じ気持ちなのだろう。

「とつとりあえず、これで出すから。」

「あいあい、家を出す書類に混ぜときゃいいだろ。わざわざ確認しないだろうし。私がこっっそり混ぜとくよ渡せ。」

地味な封筒に、目立たない様に継木家の住所を入れてあるその手紙を姉はヒョイツと取って私の手物からなくなった。

本当に送られるのかどうかは、そこにたどり着くかどうかはわからないけど……

「うん、分かったよろしく。」

届くことを信じてみてでもいいかなって、そう思う事にした。いつも悪い事ばかりで埋め尽くされてしまうから、少しぐらい浮ついたってバチは当たらない。

いるかもわからない神様も、きつと目を溢してくれるはずだ。

「おー妹の頼みだちゃんと言えさ。」

窓の外、きれいな海……が見れると言っても観光用のホテルとかではなくビジネスホテルにいま泊まっている。家の者についてきてる、身の回りの事は相変わらず……どっちかって言うのと逃げ出さないように監視目的の方が理由としては強いだろう。

世話受けないとろくに生活がままならない蚕みたいなのだから、そんなに逃げる事への監視を気張らなくても良いとは思うが。誘拐ぐらいならあるかもしれないけど……

そう思い今日初めての食事を取る、栄養補給のゼリー状のパウチといくつかの栄養の錠剤。これが一番楽、味を感じずに喉を通すだけでいいから……だけでも繰り返すの

は歯を使わないことはわかってる。

味のしないガム噛んで、口の中ぐらいいやなかなるんじやないかなあとしてるのが。

「僕って……まあ貴方のことを知れるのはいいけど、毎日送っても変じやないと思うんだけどなあ。」

そんな人によつては食事とも言いたくないであろう、栄養補助食品とサプリメントだけの食事を取りながら一旦継木家にきていたらしい手紙を見る。

切手から僕が彼女に渡した手紙の返信であろうことはすぐにわかった。

封を開けると、紙が2枚入っていた。一つは色とりどりの花の絵が書かれてた愛らしい物まずはそれを食事を取りながらゆっくりと見ていく。

内容を簡潔に言えば、毎日送ってくるのに驚いた手紙を保管してたが場所が足りなくなってきたのでペースを減らしてほしいとか……あの手紙の場所は何処なんだろう禪院家から近い？みたいな質問とか割と色々。

これも次送る手紙の内容にその回答とか返答も入れないとなあと思うが……

そんなに毎日送ることは驚かれることだろうか……僕という人を知る情報として少ないと足りないような気がするが……、まあ貴方が少なくしてくれと言うならそうしたほうがいい。

それはきつと本心なのだろうから。

婚姻については、30年たてば開放される。いや20年か僕にとつてはその期間まであなたは大丈夫か?という確認の意味が強い。

禪院家も禪院家で歴史のある御三家らしく束縛や悪習が多いところなのだろうが、継木家は良くも悪くも当主以外の束縛は薄いと勝手に思ってる。

名前を捨てた家の者でも、時折継木家では抜けるから来るもの拒まず去るもの追わずが基本なのだろう。

実際に継木の姓になれば、禪院家も禪院の子としての扱いはしにくくなるだろう。例え一旦養子に出してそれを別の家の子として引き取り内々婚姻するにも、当主の嫁としての立場がその抜け道をしにくくする。

一旦の合意のない我慢を真依さんに、強いることになってしまいがその後は禪院家から自由になるだろう。きつと他に本当に好きな人を見つけて……………

「んもう一枚入ってる、えーと

私の妹真依に色目使ったらコロス

えっ怖っナニ?文字真っ赤だし。」

白い紙に、真っ赤な文字でデカデカと書かれている。インパクトが強くて色々考えてたの吹き飛びそうになった。いやあ怖っわ……………

「あーもしかしたら、姉妹だったのかな……顔とかそっくりだったもんなあ。纏っている雰囲気はそれぞれ違ってたけど。」

あの傷が心配で追いかけた女の子。その子がもしかしたら真依さんのお姉さん？なのかもしれないと思う。

縁談のときに雰囲気は違うけどなんとなく似てるなって思っただけ一度あつたか聞いたけど、会ってないって言われたなあ……

名前全く聞いてないわそういえば。

活発そうだったらあの女のコということにしよう、名前はその時にちゃんと聞こう。

真依さんしか名前わからないわ。

「年齢は同じぐらいに見えただから、もしかしたら双子かもしれない……お揃いのストラップとか手紙についたら喜ばれるかな。」

顔はそっくりだし、年齢ほぼ変わらなく見えるし、身長も一緒だし……そうなる双子かほぼおんなじ時期に生まれて見た目そっくりな仲良し同士いや後半の可能性はないか……思いつきり妹って真依さんのこと言ってるしなあ。

双子って仮定しておこう。

そっくりな仲良しさんだったとしても、お揃いのお土産ストラップは渡すのには無難な代物と考えた。

「……………で今日も仕事か。」

10才になったあたりから、県外での呪力溜まりの除去も始まった。場所は違ってもやることは特に変わりはない。

一級呪術師とても危険なら特級呪術師（何故かいつも外国などを渡り歩いている九十九さんが来てくれることが多い。理由は継木家の特殊体質に興味があるからとの事）をつけてその場所を練り歩く。

大体は一級呪術師という呪術師の上澄みが護衛してくれる事もあつて襲われることなく終わる。

その後に追加で、個人的に稽古をつけてもらったりすることもあった。

呪力操作もそうだけど特に獲物の振り方とか……何だっけなシン陰流の人とかもいてその人の太刀筋を見切れなくてポツコボコにされたけど、なかなか筋はあると褒められたっけなあ……

きつとお世辞だろうけど。

記憶による引き継ぎがないハンデは大きい、今までの当主が歴代の積み重ねを一夜で物にし更に積み重ねていくのだとするならこっちは1から積み上げていくしかなくなる。

そう言っても引き継ぎができないことは事実なのだからタラレバを並べても仕方が

ない。

「せっかく県外行つても、呪力なくして気分が悪くなつてまた別の場所ですら観光なんてできないし。」

……………正直、気分が悪くなるので継木としての仕事に行きたくない。呪力量が多いのつて本当にいい事かあ？と常日頃から思う、全部自己由来ならこんなことにはなつてないんだらうけど。

こっちは根っからの他者由来の呪力量の多さだし……………呪霊の成り立ちとほぼ同じ呪力のえかたじや無いかとは思ふけどこれを言つたら色々終わる気がする。

呪力は呪力だ、こんな副作用起こす負のエネルギーだ。大量に持つてるやつのがしれない。そう思うのはきっと僕が具合が悪いからなんだらうけど。

糸絡 3

「歩くだけで金になる仕事だからねえ、

ほぼ毎日あるし仕事ない時や仕事と仕事の合間にいれるにはちようど良い。カラスは少ない所はやりにくいが、まあこの通りってことさ。」

水色の奇抜な髪染めをしたような髪を持つ女性、呪術師とか呪いに関わる人には奇抜な髪色をしてる人間がまあまあいる。

毎回思うが地毛なのだろうか、それとも呪術師がファンキーな人が多いのだろうか？ そう言う人って何となく奇抜な髪染めしそうなイメージだし。

呪術一筋なら社会的な見た目の制約（黒髪とかピアスしないとか）受けないだろうし………いやファンキーな人が多いは呪術師ストレス貯まりやすいのだろうか。

僕は白髪が増えてきて、もはや割合的に純粹な黒髪とは言い難い白黒のコントラストがある髪染めもしてみたが………面倒くさくなってしまった。

この目の前の人は、ストレスの発散は上手くしている様に見える。軸が自己的でブレがない。

「本当に頻繁に護衛役かかってますよね、気がついたら冥冥さんがしてくれてる気がしま

す。」

呪力溜まりの呪力の除去には、毎回一級以上の呪術師ががつくがその人は固定ではなくまちまちだ。ある程度何度か会う人はいる……

今請け負ってくれている人がそのうちの一人なのだが、僕が、県外の呪力溜まりの解消をするようになってからの付き合いになるが……

割と頻繁に請け負ってくれるため縁自体は薄くはないだろう。

「まあ他の仕事と区域が被ってた時やつてるだけけどねついでにつてやつ。

私は、楽に端ではないそれなりの金をもらえる君は安全に呪力の処理ができる。

Win—Winというやつ、悪くはないと思うよ。」

この人の行動原理は、金………価値の収集だろうか。自身の命の次という言葉は恐らくつくとは思われるが、命無くなったら金を集められないだろうか？と思っているのだとしたら正にアツパレと笑いたくなくなってくる。揺るぎない人間性を獲得しているのだから。

………只の個人的な妄想なのだが、他人の感情や行動が分かるなんて勝手な思い込みに過ぎない。

一回の付き合いで渡してるのは、いくらなのだろうか？そこら辺は家の者が管理してるので僕が知る事ではないが………利害の一致として丁度いいのだろう、冥冥さんも別

に用事があるついでに出来るからやっつてるとの事だし。

予想としては、1000万〜2000万の間程度だろうか？お小遣い稼ぎと見ればまあまあとも言えなくもないと思うが……

他の呪術師だと、継木家と繋がるとか面を重視する人や恩があるからつて人もまあまあいて、流石に冥冥さん以外にもこれぐらいの金額毎回出してる訳じゃないと思う。

毎回出したら資金枯渇するだろ常識的に考えて、ほぼ毎日呪力貯めてるんだし。てかこの資金何処から出てるんだ油田でも、あるの？僕の家。

「護身ぐらいはできる程度にはなりたいたいんですけどね、もし貴方が負けた時に今のままだと逃げることもすままならない。呪霊にとって美味しい肉塊ですね。」

余った僕の死体はカラスが食べることになりませんか？都会なので野犬とかイノシシとかの狸とかの獣はあんまりいませんし。猫とかならいるかもですけど。」

そんな事を思いながら、くるくると櫻の木から作られた呪具を回す。

今車に乗ってポイントに移動してるが、毎回その間は何もすることが無い……移動時間ほどこの世で何にも使えない物はない気がする。本とか持つてくれば良かったかなあ。

「なかなか事を言うじゃないかハハハ、面白いねけど今は安心するといいよ。良い金の素は生かす価値がある私にとってね。」

後素体はナカナカと見える、護身目的だけで鍛えたとしても私ぐらいにはなるんじゃない？」

「そういう所貴方らしくて安心しますよ、貴方は何処までもお金の味方だ。

あとさつきのは僕なりのジョークです、面白かったようでありよりこういうこと言うの苦手なんですよねー

自身の身のある程度でも守れる程度だけでも、力をつけたい事はジョークではないですけれど。」

お互い慣れたように軽口を言い合いながら、時間を潰す。無言でお互いやる程気まずい物はないだろう、それは相手も何となく同じらしい。

にしても護身目的だけで、冥冥さんぐらいとか？いや無理だろちゃんと僕やるつもりだけど、かるくくじやそこまで行けないと思うよ？

よく護衛されてるから戦い方とか見てるけどすごく強いから。おじさんと僕を被せてるならともかく……正直歴代で一番不出来だと思ふし。そう思ってる暇があるなら、訓練したほうがいい？うん僕もそう思ってる。

「そう言ってもらえると、こつちもやりやすくて助かるよ。金は金には変えられない、他はだいたい変えられるのさ。命も何もかもね。」

冥冥さんはそういうと、手でお金を示す形を作った。確かに金は金には変えられな

い。だが人が無ければそもそも無意味になる。社会に紐付けられたルールの一部、だから信用はできる。

社会は数あれど、崩壊まで至れば持っていた金という価値が無くなるのだから。

日本だけ特別つてについて思い入れも特に無いだろうし、そうなったら富裕層を比較的優惠する政策を取つてる外国例えば……………

シンガポール辺りかな？に行つて器用にやるだろうけど……………個人の敵にはなるだろうが、人が作つたシステムの敵にはならないだろう。

「貯蓄だいたいぶありそうですね。」

「それを見るのが楽しいのさ。」

「数字で見れますもんね、曖昧よりかはよっぽどわかりやすくて単純で。」

数字単純に増えれば、お金を持つてる事になる。単純で分かりやすい構図だ稼いでそのぶん使わなければ減らない当たり前の仕組みだ。

曖昧な思考より、よっぽど楽な指針になるだろう。まあ貯めて何する訳でもなさそうだが。そこは人が口出すところでもないだろう。まあ貯めて何する訳でもなさそう

「弟さんとは仲良くされてますか？僕最初の時一度あつたきりなので、非常事態の時以外は基本は貴方一人だけだ。」

だいぶ車での移動は進んだだろう……………最初の繁華街か来たとは思えないほど、閑散

としたところへ向かう。最初は、デパートやインターネットの影響で廃れ閉鎖になった商店街らしい。

失業者等もでただろうし、先々代から脈々と受け継がれた店を畳むものもいただろう………そりゃ呪いの吹き溜まりとなる。

僕は行く場所の赤いバツ印が至るところにまんべんなくつけられた、地図を広げる。この度に心から嫌になる、この仕事はバツがついたところを期限内にすべて終わらす物だし。

もし終わらせたとしても、戻って違う仕事をやるだけ………負担がおおいだよね正直言つて。仕方ないものは仕方ないだろうけど。

「で今日はいくつ回るんだい？時間になつたら別の呪術師に、引き継ぐ話になっているからね。余裕を持って帰らせてもらおうよ。」

弟は元気だよ、今日新宿で落ち合うつもりでね空港に行くまでの時間なのさ。」

憂鬱さんも元気なようだ、基本的には留守番してたり仕事の請け負い窓口でもしてるのだろうか。細々としたのをソヨに任せて本人は実務した方がお金稼ぐなら効率はいだらうし。

冥冥さんの事とても慕ってるからなあ憂鬱さん、弟で良かったなあそうじゃなかったら骨の髄まで冥冥さんお金搾り取りにいきそうだし。

「ポイントには聞いてるので、最後は駅近くの方がいいですかね。空港行きやすいでしょうし。」

弟さんが元気そうでなりよりです。」

まあなにはともあれ、一回あつた縁だけでも元気で過ごしてるなら良い事だ。

空港等は近いほうがいいだろうから、最後はこの所が丁度いいかと地図に指を指してある一点を示した。すると冥冥さんは覗き込んで。

「ああそうしてくれるといいねえ、つと………こつちの方がいいかな次の事を勧めやすい。君が問題なければここに欲しいんだけど。」

すこし考え込む素振りを見せてから、別の赤いバツ印がついた場所を指さした。

「随分と便が悪い方選びますね、空港行くというのに詳しくは聞きませんけど関係ないでしょうし。さてまず一つポイント付きました貴方の、実力は十分知ってますので………サクサクいきましよう。」

時間制限付きでなければ、ゆっくりやりたいところなんですけどそうとも行かないですね。」

その場所はさつき指した空港よりも遠い場所、一体何をするんだらうか。そう少し考え込むと車がキキキツとブレーキを踏んで停車する。

もう目的地みたいだ、さて冥冥さんは時間になったら帰るしさつさとポイント消化し

ていくかあ………引き継ぎはあるけど。

「毎回人使いが荒い事で。」

「それだけ貴方には実績と信用はあるということですよ、最も貴方にはお金以外の誠意の示し方は価値を為さないでしょうが。」

「やつと終わった、だけどもまだこの区域にはいるか………何十箇所も巡るといえども何百箇所もあるからな呪いがたまる場所なんて……」

真夜中いや、もう朝日が登り始めている時にホテルに戻り整えられた寝具に飛び込む。

ここから睡眠とも呼べないが軽く寝て、またポイント巡りをする。ここまで遅くなつたのは僕のせいでもあるのだが………

「けどこれ途中で土産屋寄れて良かったなあ、大体移動車だから寄り道しようとしなくてそのまま帰ることになるし。夜遅く過ぎると閉まつてる場合もあるし。」

本当にクソ夜中に空いている、土産屋は中々無いからなあ………ちよつと大変で選ぶのにも頭回らなかつたけど。クレジットカードは使えたのも良かった、年齢的に確認されそうだし。

家の者に任せても良かったけど、これぐらいは僕自身で選びたかつたからなあ

……。

地域特有の物を選んだほうが、良いんだろうなあ。お菓子とかは、珍しい味もあるなあ美味しいかどうかの奇抜な味も、しょっぱい物じゃ無くて甘い物買ったけど。

ストラップはこれ……中々いいんじゃないかな？眠たくて頭が回らないが、僕としては可愛いしジャラジャラし過ぎてないと思うし。

布団の中で目を閉じて頭の中で考える。

「(切手は、昨日使ったの使って中に封筒と切手いれてと……送り忘れは怖いからなあ……ありや封筒もう品薄だ。明日は文具屋にも寄る必要あるな。

買ったときには使いきれるか？とか思ったけど毎日使うとあつという間にすつからかんになるし多めに買っておこうかな、手紙書けたための紙とかも。)

あつ忘れてた……」

今日書く物は明日にするとして、昨日書いたものは今日出さないと疲れてて忘れてた。

「……すこし寝るからコレ投函よろしくね。時間が来たからおこし」

眠たい体を無理やり起こして、ホテルの部屋の扉を開けて近くにいる家の者に手紙を渡す。あれ……？流石に眠い

ドサツ……

「限定味っぽいキットカット2つと二つ二組の色違いのストラップ……?」

今日来た手紙は、いつもより分厚く中に何か入ってるのがすぐにわかった。開けると地域限定味っぽいキットカットが2つそしてストラップが入っていた。

「えつと二人で分けてくださいか……お姉ちゃんに渡せばいいかな、にしても変なマスコットついでるなあ……今行ってる土地のご当地キャラってゆるキャラ奴？」

よく見れば愛嬌が……やっぱり無いわね。

嫌がらせとかそういうのじゃなくて純粹に小物選ぶセンスが無いわ。

絶対テナントとか、木彫りの熊とか買ってくるタイプでしょう……

まあ渡された物は渡しませうか……お姉ちゃんとお揃いにできるし。」

ストラップは色違いで、その地方のゆるキャラなのか知らないなにかがついていた……正直に言えばこれの姿に似た呪霊見たことがある。

どんなセンスをしてるんだアイツ

というかこの見た目でストラップの商品開発ok出た時点で狂ってると思うわ私。

とりあえずお姉ちゃんがいつもいる場所へ、かけていく。私達に専用の部屋なんてない、だけでも誰もほぼこないポロの物入れが私達のよくいられる場所だ。

「ブツホははは何だコレ、真依が選んだのか変な人形ついたストラップだな。」

お姉ちゃんはいつもおどおりにそこに居た、基本的にいても居なくてもイビられたりしない。出る杭は打たれるとは言いが出なければ打たれはしない……それぐらい家にとつてはどうでもいい、直哉はお姉ちゃんを虐めてくるどうして。

私はアイツの手紙に入つてたストラップの片割れを渡すと、お姉ちゃんは吹き出して笑つた。

「ちつ違うわよ、私が選んだわけじゃなくて送られてきたのよ！色違いで2つ。」

「つてことはアイツの、センスかあ。もうちよつとどうにかならなかつたのか……」

「多分色々とズレてるのよ。」

私だつたらもつとかわいいの選べると思う、そこにどんなものがあるかわからないけど。色違いのお揃いつて所だけは、センスいいと思うけど。

そこらへんも継木君は考えているんだなと、思つてるのが分かる。

「女心がわからねえつてやつかあ……、それとも感性が独特なのか。」

「多分来た場所のこと示そうとちやんとやつてるんだらうけどね。あつこれも入つてた渡すね、地域特有の味だと思う。」

お姉ちゃんは、すこし頭を抱えてた。

でも深刻そうでもなく、いつも見たいに苛立つてもいない。どちらかというとう仕方が無いなあという様子に、見えた。

奇妙なキャラクターがついたストラップを服の袖にしまいながら、竹を割ったようにケラケラ笑う。

「まあこのストラップ妹が届けて来てくれたって事もあるし目ただないところだけでも持っとくか。」

真依はどうする？」

「お姉ちゃんと同じ。捨てるほどでも無いしね、場所には困るけど。」

つける場所本当にどうしようかな………そういう小物なんて、中々持っていないし。

あの菓子のカンカンに入れようかな？

「所で今度いつ会うことになってるんだ？まだ顔合わせしかしてないだろ………」

「2週間後あたりか、3週間後あたりってちょっと聞いた。今度は向こうの継木家にこつちが向かうって………」

初めの縁談は、顔合わせだった。それからはまだ直接はあつてない、本当ならもつと頻繁に対面するような気がするが………

継木家側の日程が中々合わないみたいで、ズルズルと日程がずれ混んでるらしい。

「ほんん嫌ならうまくすればバックレられるな、他所んちなら。にしても案外間開くもんだな、今の時点でも結構最初から時間経ってるし。」

お姉ちゃん縁談のバックレって………流石に不味いよね？うまくって、何するの一体

?

「ちよつと当主としての仕事が多いため、最初するときも仕事で早めに切り上げた感じ。」

「当主つてコツチみたいにならぬ暇に見えるけど、案外そうでもねーんだな。」

で手紙は、返すのか。」

「……………本当によくよく考えると、いつ書いてるんだろうかコレ手書きだし。まさか睡眠時間とかそういう削つてとかね、無いよねまさか……………うんあいつならやるわ。」

「返さない理由は見当たらないし、まあと言つて積極的に出す理由もないから気が向いたときに書いて出来たら出すことにする。」

「本来手紙はそういうもんだしなー毎日毎日内容とか中身とかも、しっかりと揃えてるアイツの行動と頭が可笑しいんだよ。業務報告書つてかつてのー」

まあいいんじゃないの?」

お姉ちゃんは私の顔と行動を見てニヤリと、何か分かったような顔をする。

そうしてキットカットの袋を開けて割らずにそのままかじりついた、甘い水がほしいと呟いて。

「お姉ちゃん私のことからかつてる?」

「どーだろうな。」

「むう。あつ写真に写ってるのなんだからこの植物見たことない……………」

「妹こそ露骨に会話そらしてねえーか？ まあ良いけどさナニナニ……………コレサボテンか？」

暫くしたら次の縁談の日付は決まるだろう、その時までにはまたアイツに届くようには書き進めていこう。

そう決めた。

糸絡 4

「今日が、顔合わせの次かあ……………」

最初にあつた時と同じ服に着替えさせられ、湯気が立ち上る淹れたばかりで温かいことが、見てわかるお茶と一人前に切り分けられた羊羹がある和室で待つ。

お見合いと言つても、ほぼ両家にとつて確定事項のようなものであるがお互い形式を格式を気にする。僕や真依さんの年齢だと、法律的に結婚はアウト。

大丈夫な年齢となるまで、イイナツケで放置しておくつてのがセオリーだろうか。

「結構間空いたな、仕方ないか何処もかしこも呪力貯まるし……………普通の呪術師と違って呪霊発生してからやる訳じゃないから繁忙期閑散期なんてないに等しいし。」

僕の顔見て誰だこいつとか、言わないだろうか？特に劇的に変わつてる訳じゃないけどいつも通り白髪増えてるし……………頭に円形脱毛で十円ハゲできてないだけマシか？

もしできてたら、丸刈りにするぞ？

こんな時ぐらい髪染めしとけばよかつたかな……………面倒くさいけど、かなり時間空いたからなあやつと作れた暇に打ち込んだような構図だし今回

繁忙期とか、休みの緩急がなくいつも何かしら入っている。県外とかの今まで出来な

くて貯めていた物が減れば少しは違うだろうか……高専に行けるって話は聞いてるし。

「ここで待つけど……来なかつたら来なかつたで良いか、僕か真依さんにナニかを思い伝えることはしても。」

この状況も何もかも全て、真依さんの意思なんて入っていないから。」

ボソリとつぶやく、庭からカコンカコンと一定のリズムを取りながら響く音が聞こえるほど長く静かだ。

家の者も近くにはいない、いたらいたで鬱陶しいことが多いので別にいいが。

「ねむい……昨日寝たはず何だけどなあ、いつもと違って。」

最初の頃は家も、気分が悪かった今でも気分悪くなるし気持ち悪く苦しくて仕方が無いがヨソへ行くよりはマシだと感じる。呪力の漂う量の違いなのだろうか……

結局人なんてすべて相対的に評価するものだ、楽だからといってここに留まらなくてもいいなら、なるべくなら出て行きたいと強く思うが。

「……………」

真依さんもきつとそうなのだろう。

「いらつしやいませ、継木家へ。当主継木 櫻です、今日のごゆっくりリラックスしてお過ごし下さい。」

「気張らなくても大丈夫ですよ。」

勝手な同調に過ぎないが、襖を開けると綺麗な着物を着ていた。

肩につかない程度に整えられた髪に髪飾りをつけている。此方の黒と白だけの服とはまさしく正反对だなど結納の儀と考えるならあちらのほうが服装的にはあっている。何となく思いながら。

僕の正面にある座布団に誘導した。

「では遠慮なく失礼します。」

「今日は仕事はないので、途中で上がることは無いです。今回は早めでしたしね………話題がないと静かですよね。」

その場で座り、お互い何気なく話を進める。

禅院家の時よりは、話しやすいことも多いだろう………かなり継木家はよくも悪くも異端な部分が多いことはお互い分かっていると思う。

「……………毎日毎回欠かさずに、手紙書いて送られてきたことには、私驚きましたよ。」

コレの発言も本来なら不敬と、裏で一喝される物となるだろう。只の感想で想いなの
に。

やっぱり呪術つてろくなことないな。

分かりきってたけど。負の感情を操り扱う、呪力が強大な方がいいならそれを生み出

す環境も悪い方が負の感情は溜まりやすい。

呪術師を生み出し集団として纏められるほど数を身内の内々で確保しているなんて、それ相応の悪環境。

いくら子を生み出し、いくら子を捨ててるのだろう。そんな事を考えてもどうせ絵空事の一つとして数えられる。

「こうしてお会いする機会が、僕の関係もあつて少なくなつてしまつて……後僕こう見えても割と人並ですし？」

「どうしてですか。」

「あくまで継木家当主として据えられているつてだけで、人と何ら変わりがないですし。人と話したい、僕の事覚えてほしいとかそんな単純な願いが多いんですよ。大体の人は継木家当主が先に来て萎縮してしまふのが多くて。」

普通に話せる知れないだけでも嬉しかったんです。」

当主として据えられる前、おじさんと色々お話を聞いて寝ていた。名前すら忘れた学校で、友達と日常を過ごした。

親はいない知らないけど、ありきたりな3行で済む平穏な日々を過ごしていたと思つている。

今こうなつても呪術の世界に足を踏み入れることを余儀無くされても、奪われたとは

思ってはいいない。正直仕方が無いことと思うより良い感情の処理の仕方が分からなかった。

真依さんのほうがそこらへんの呪いには、長く触れているだろう……だけれども慣れるとか慣れないとは別問題本人自体の気質だ。

僕的には慣れないほうがいい、触らぬ神に祟りなしとは言うが悪いことに慣れると毎回ソレが基準になる。段々と基準自然と下がっていくこととなる。

最終的には幸せが分からなくなる。

ソレが、苦痛への慣れの代償。

「変わってますね。最初に会ったときから、手紙の時も思ってたけど。」

そう言うとき真依さんは、目を細めて変わっていると話した……。人それぞれ変わっている部分は当然あるが、口に出されるとはナニかがよっぼどなのだろう。

「そうかな?」

呪術師としては、一般よりな性格は持つてるきはするが……手紙だって僕個人を思って貰うためにはまだ情報不足になるだろうし。

「はつきり言って呪術師に向いてないわよ、私が言うのもなんだけど。庇護がなければ、呪詛師や呪霊にとっくに殺されてそうに見える。」

……それは、僕でも思っている。

非呪術師で呪霊も見えなかった、あの頃を今でも追想してしまうのだから。もうモノクロで、色褪せてるのに擦り切れたテープを再生するように何度も何度も。

呪術師としての強さも、あるはずの記憶の引き継ぎが行われていない……継木として積み上げてきたものが無い状態。

庇護が無ければすぐに死んでるだろう。笑えてくるよね本当に、呪力を吸い上げる勝手に与えられた僕を苦しめているであろう性質故に生かされているのだから。

「やっぱりですか。」

「……………」

僕がそう呟けば、真依さんは口を噤んだ。お話することは楽しいのでこうなってしまうのは悲しい……こういうふうにさせようとしている訳ではない。

笑い話ぐらいにはなるとは思ってたんだけど、そもそもそんなに重くなるようなものでもない気がする。

人の気持ちなんて分かるわけがないけれども、分かっていたらソレはきつと個人ではなくなってしまうし。

「正直僕今譲れないものが無いんです、多分呪術師として向いてるのは大なり小なり譲れない物

金でも、自由でも、大切な誰かでも、生き方でも、自分自身でも

何でもいいそれを持つてる人だ思うんですよ。付き添ってくれた呪術師達を見ての勝手な僕の、思い込みですけど。」

正確には譲れないもの自体は僕にもあるが、名前を忘れないことはきつと、呪術師として生きる為呪術師として強くなるための核には繋がらない。

強いて言えばこうやってまだ最後まで人と関わっていたいが呪術師として自身の存在を強くしたいに繋がるかもしれないと感じる。

きつと名前を忘れるなどというおじさんの言葉は、僕をこの世界に繋ぎ止めてくれる杭の一つであるから。

その杭が多ければ多くなるほど、僕という一つのあやふやな思考が安定するのだろう。

「そうね、貴方にはそういう人が向いてるって思うのね。私は……………どう言えばいいのかしら。」

真依さんは、目を開けて此方を見る。言葉は真依さん自身に言っているように見えるか……………本質は此方への問いかけ。

なのだろう、僕も真依さんのことは知らないことばかりだ。だから対話をもつてお互い理解した気になるしかない。

「……………そういう答えは早く見つけなくてもいいんだと思います、僕が言ったことだつ

て 今 の僕が思った事なので。

そういうえば、お昼頃でしたね。お話に霧中になってすいません、手紙だけで直接話するのは久しぶりなので。

家の者に用意をさせます。苦手な物等は………ありませんかね？」

互いが互いに分かり会えるなど、そんな事はない幻想はもう見ることはなくなった。だけど歩みよりをする価値は変わりはないそう信じている、だから真依さんのことを分かりたいし分かろうとしている。

身勝手で何処までも傲慢だ。

ああ本当に吐き気がする。

初めての継木家に、行った。

まったくと行っていいほど、よくみられる低級の呪霊も辺りに漂う呪力すらここは外界とは違うと無言で圧力をかけるかのように無かった。

呪術家なら、呪力は多いはずなのに……いや普通に人がいる空間ならば呪力は少なからずあるはずなのに。

意思なく全員死んだかのように。ぼっかり突然消えて物だけ残ったかのように。あの世というものがあり。人が認識できるのなら、こんな感じなのだろうか。

「禪院 真依様ですか？お待ちしておりました、当主継木櫻様の元へご案内いたします。」

私がある意味異様な景色に呆気を取られていると、継木家の女中らしき和服の女性が声をかけた。

その声は生気があり、見た目も全くやつれた様子はなかった。それだけでも女性の扱いとかもここでは違うのだろうと区別できた。

最初から分かつてはいたが、継木家は他の呪術家と同じに見てはいけない事を改めて認識する。

「本日はよろしくお願いします。着いていけばよろしいですかね？」

案内してくれるであろう彼女に、頭を下げて案内をお願いします。きつとそれは禪院家の特に男の前でやったら、格下の家に頭を下げるとはとどやされるだろう。

きつとその行為は、彼女への感謝ではなく誰も見てない所で行う自身が産まれた家に対する意趣返しを多く含んでいた。

「凄いですね……………」

そして今……………目の前には、懐石料理ではない西洋の食事が広がっていた。

案内され、こじんまりとした部屋で暫くゆつくり話していたのだが昼時だと言われ、簡単に苦手な物とか無いかと聞かれ、その後しばらくしてから出されたのがコレだった。

「そりやお客様ですし、家の者も張り切りますからね。いや洋食方面に行くとは僕にも思いませんでしたが。和食の方が良かった………ですかね？」

しばらく目の前の料理を見て、彼はうくと悩んで私に聞いた。

私としては、家ですつと出てくるような味のしない精進料理じみたものが出てこないだけで和食でも洋食でも中華だろうと気にはしない。

洋食とか中華とかは、口にもしたことが無いから味の想像が全くできない。

「家では、精進料理みたいなものばかりだったので新鮮ですね。」

「精進料理好きなんです？」

「嫌いです。あんな味がしない料理。」

「そうですか、ならゆつくり頂いてください。スープとかならお替りありそうなので。」

目の前の、彼はニコニコ笑って。スープなら代わりがあるといい。私の顔を見た、その時に空気にどことなく流されそうになったが………

「あの継木櫻さんは？」

私の分しか、昼食として配膳された物が無かったのだ。彼のスペースはカランと何も

無い。

それについて彼に聞いた。

すると、バレたかーとお茶目で誤魔化すように頭を少しかいて。困ったかのように目を伏せた。

「あんまりお腹減らないんですね、食べきれないので昼食は取らないことにしてて。

あつでも朝食はちゃんと、頂いてるので問題ないですよ。今日も元気です。」

「お客様を安心させるのも、当主の仕事では？これでは腹を壊しそうです。貴方が、スープの一つでも飲んで下さればある程度安心できるのですが。」

「…あつそうですよねえいません、急いで貰ってきます。」

お腹が減らないと本人がいつて余らすのが勿体ないから、と言うのは良いとして。

私だけ、というのがどうにも居心地悪い。食卓という言葉があるようにそういうのも一種の習慣だ。

居心地の悪さを軽くするために少しでもいいから、取らせよう。

そう思い、毒味が無いものは食わないとそういう類の発言をすれば。

アイツはすぐさま、さつき余っているといったスープを取りに急いでかけていった。

それに……………

「あの死人ギリギリの病人みたいな体見ると、こつちがヒヤヒヤすんのよ。いつもど

ういう生活してるんだか……」

見ているといつ折れるのか、心配になってしまいう程見るからに痩せ細っている。骨と皮だけで肉がなく、生きている。

生と死の合間を自らの身体を持って、体現している様に。

いつも着ている服も その事を前提に 造られている、そんな気がしてならない
……

「(元気というより、辛いのに苦しいのに慣れすぎて嬉しいとか楽しいとかの感覚が麻痺してるだけでしょ。)」

「……………お帰りなさい。」

「おそくなつてすいません。じゃあ飲みますね、大丈夫です温かいです何も入ってないですよ。真依さん。」

私が、彼を外に出したとはいえ割とたどたどしく何処から慣れないように入って正面に座った。

そして手に持った器には、持ってきたスープが入っている。

そしてそれを一気に毒酒だとわかりきっている液体を身体に入れるかのように飲み込んだ。次の一言には、温かいと何も入ってないと言うことだけ…………

普通少しぐらいは味の事を言わないのか？それともアイツの思考が独特なのか。

「……………頂くわ。」

「ええごゆつくり。」

でもこれで、私にはこの状況を断る理由はなくなってしまった。スープをゆつくり飲むと思いきんでいたのだ、気まずいことには変わりがないが仕方が無い。

「ご馳走さま中々だった。」

……………とても美味しかった、こんな場所じゃなかったら一品口に入れる度に騒いでお姉ちゃんにきつと注意されていたと思う。

今まで口にしたことない料理ばかりで、戸惑いが多かったけど……………

只牛肉を焼いたもの、色とりどりの野菜を寒天のような物で固めたもの、生地で魚と香草が包まれたもの、具が入ってない琥珀色のスープ、黄色みがかつてたお粥に似たもの、滑らかな茶色の氷菓

そのどれもが、技巧を凝らした逸品だと分かる繊細さと美味しさがあった。

お姉ちゃんにもコレ食べさせたかったな、そう思いながら口を用意された布で拭う。ガツガツ食べるのは、品が良くない事は分かっている。

スープ余ってるかもという思考が頭をよぎるが……………辞めておくことにする、純粹にはしたくないと言う事もそうだが私個人として食い意地がはってるようで恥ずかしいという思いがあった。

「……………まだ時間ある見たいだけどうするの？ 私なにも出来ないけど。」

私は、すっかり空になった膳を見てから彼の方を見た。彼は少し考えるようにして……………この部屋から太陽を見た、そしてその後何故覚悟を決めるようにひとりで領き切り出し。

そして一つの呪物らしきもの袖からを取り出す……………呪力が全く無いから気が付かなかったが見ただけでも禍々しい雰囲気を漂わせている。

ナニカの死蝋

人の指の形はしているが、人の物とはとても思えない悍ましいナニカ。

「ああ確か真依さんは、見たことなかったでしょう？ 僕が継木家当主と呼ばれている理由。いや継木家当主としてこの家に据えられている理由。

大したことじゃ無いんですけどね、呪力がある程度分かればやつてることはすぐに分かりますよ。仕事は入れない様にはしてたんですけどね……………

本来よりは少しして行動ズレますけど、見ている事そのものが人か土地になるだけなので。」

よく見ると膨大な呪力の流れが、彼にすべて流れてきている。あの得体の知れない呪いをその身で全て受け入れている。

「何よアレ……………まるで……………」

あれは祓ってるなんて、言わない。呪われているという方がよっぽど)」
「あつ……………」

「すいません気分悪くなりますよね、家の中ご案内するのはまた次にしましょうか
禅院家よりは比べ物にならないですけど、しっかりはしてるので……………」

「今日はこれでお別れって事ね。」

最後にとんでもないものを見られた見せつけられた気がする、あの呪物もそしてその
強大な呪いを自らを生贄のようにして受け流す事も。

呪いの方向性を自らに絞り込む、それが継木家当主としての素養なのだろう。そして
……………使い潰される。

「そうですね、あつコレコレ今日の手紙です。会うのだから直接渡したくて……………」

「んっありがとう。」

「真依さんからの、貰ったお手紙も大切にしています。ちよつと手紙書き始めてから、色々
書くために見えるようになったんですよ。あの花綺麗だったとか、店の品物新しいの
入ってたんだとか……………」

それをくれたのは真依さんです。」

……………そんな恐ろしさや得体のしれなさよりもっと根本的なこと。

「……………重いつー！」

私は継木櫻を哀れだとは思わない。

「??？」

「色々としてる行動とか感情がひたすらに重いのだよ！悪意がないのは分かってる、けどどね……………」

何事にも、限度つてもものがあるのよ。

悪意も！善意も！

受け容れられる限度つてもものが。」

それを哀れの一言で切り捨ててしまつたら、そこにある彼自身の呪いはどこに行くのだろうか。久し振りに思いっきり声を出す、慣れなくて喉が痛い。

彼を見ていると、今まで私自身の為_に殺してきた声が喉から怨嗟の声を上げて出てきそうになる。

「限度……………」

「確かに、人にもしてもらつた事だったり教えてもらわなきや分からないかもしれないわね。特に貴方なら、だってそういう思いしたこといや……………」

はつきり出したことないでしょ。

イカれてるわよ、貴方の継木家。」

彼はびつくりした表情をして疑問符を浮かべた。コイツは呪力と言う名の悪意を

ずつと際限なく受け入れることを余儀なくされた。

そしてこいつの家は、ソレを歓迎し奉っている。同等のクソな家だ。

「いや僕は……………あれ？」

反論を返そうと、彼は口にしようとした時にほとりと水が落ちた。彼は泣きながら笑っていた、守っていた物が壊れたのかそれとも付き物が落ちたのかそれはよくわからない。

「やつとちゃんと泣いたわね継木櫻。感情が読み取りにくくて分かりづらいのよ、笑った時も能面みたいで。

そう言う風に、笑って、泣いて、怒って、生きなさいよ。今の貴方私は会った中で一番好きで素敵だと思うわ。」

……………私は彼の対等であろう。

思いつきり喧嘩して、くだらない事で笑って、必要なことをつまらないと無視して。そんなのでいい。

立つ場所は違う、こっちは女でバカにされる。そっちは勝手に祭り上げられ利用された。

でも、感情まで栓をしてあいつらにお互い尽くす必要なんて全く無いのだから。

初版（原作開始前時点のキャラクター設定＆周辺設定）

（主人公について）

名前 継木 櫻（ツグキ サクラ）

紀野 楓（キノ カエデ）

誕生日 3月20日（春分辺り）

年齢 約15才

高専入学方法 家系

等級 四級呪術師

術式 不明（体質と一緒くたになりがち）

技 呪力を吸い取る、集める。

趣味 寝る、手紙、鍛錬

好きな食べ物 パンケーキ（思い出の味）

嫌いな食べ物 固形物

ストレス 強いて言えば食事全般

好みのタイプ 禪院真依

呪術高専東京校の一年生で、継木家という呪術家の現当主でもある。周囲にある呪霊など形となっていない呪力を取り込むという特異体質を持つており、残穢すら残らず集める。

その集めた呪力をうまく扱う事で、呪力の量のみ見れば術師の中でも上位となる。乙骨が無限の呪力を持つているならこちらは無尽蔵の呪力の持ち主と言えるだろう。だがあくまで扱うのは集めた性質も何もかも異なる人の呪力であり、純粋な自己の呪力を抽出し戦う呪術師とはかなり基礎自体が異なるため本来は歴代の継木の記憶からその為の方法を直接入れられるが……何故か引き継ぎがうまく行っておらず。1から色々と呪力操作等の技術を積み上げる他無くなっている。

本人曰く、強くてニューゲームが基本なのに僕の時だけセーブデータの引き継ぎ時バグって最初つからみたいになつてるとのこと。

強さ自体は四級以上の物を現時点で確実に持つてはいるが、危険な任務への投下を避ける意味合いで継木家からの圧力があり四級となっている。これからも特に何もなければ上がる事も無いだろう、その事については本人は特に気にしていない。（卒業後継木家に缶詰状態になること確実のため、肩書が特に本人にとって意味も価値もないモノ。）

呪術高専という、三年間のモラトリアム（四年目からほぼ家）を全力で楽しもうと体

調が常時悪いながらもカラオケやボウリング等の誘いには結構のつたりと活発に動いている。だけでもその行為に飲食が絡むことが多いのが本人にとって玉に傷である。

お互いの家によって決められた禪院真依という婚約者が、存在し毎日手紙を送っている。キスをしたことも無いし手も繋いだことも無い、進展が基本小学生並いや今どきの小学生より進展が遅い。

本人としては、30才で死ぬと思うので真依ちゃんには僕が死ぬまでのその間に本当に好きな人と幸せになって欲しいと思っただけだ。

本人の信念として、人と人とは根本的には理解し合えない他者はそうであろうという意識に左右され本質なんて見えやしない。があり、これだけ見ると人間不信で関係を拒絶するような性格に見えそうだが、だからこそ知ろうとする歩み寄りには尊いという思いを持つてる。

所有呪具

廻葬全書（カイソウゼンシヨ）

無限に文字絵を書き込み、そして自動的に所有者の死亡時刻などが記載される巻物の呪具。ありとあらゆる破壊や所有者以外の書き込み（改竄等）への耐性を持ち、改竄や主に破損による消滅を防ぐ。

破壊への耐性を戦闘で利用する事もあり主に敵からの攻撃防御に使われる。

見た目だけなら古びた巻物。

名前なし（櫻の木で出来た柄）

呪力を、込めると刃が出てくる呪具　刃の形は自由であるが、多くの者から教えを得やすい刀型に本人はしている。

呪力出てきた刃は、呪力に関するのみ斬るといふ力を持っており呪霊は切れるが木は切れない。もし人を切った場合呪力は奪うが人体に影響を与えることはほぼない。

ゲーム風にはHPではなくMPを削る呪具

術式だろうが、その防御方法が呪力による方法ならば防御を無視して切りつけることが出来る。逆に物理的な手段で防御しようとした時には、刃がその物体をすり抜ける。

防御する手段がほぼない呪具であるが、逆に防御手段として使えない物であり物理的な影響を与えることができないため刃で受け流す事などができない。

便宜上切るとしたが正確には、呪力を溶かすという表現のほうが近い。電動ノコギリではなくガスバーナー。

（継木家について）

継木家

御三家と同じぐらいの時にいつの間にか生まれた呪術家、継木家に関する昔の資料は

どこを調べても詳しいものが無く唯一の情報といえれば継木家が出す物ぐらいである。

強い呪術師を生み出すのではなく、血を受け継いだ者から出る呪力をその身に集める特異体質を見つけ出し当主に据えて崇め最期の時まで使い潰す。方向系が違うだけで割と腐ったミカンの家。

だが他の腐ったミカンとは違い、犠牲になるのは当主1名だけ更にその犠牲で得られる利益が呪術界全体的に見ればとてもいい為手に負えない。逆に言えばソレをやらないだけで犠牲者が目に見えて増えると言う証拠でもある。(呪霊の発生が抑えられる↓呪術師の派遣をしなくてもいい&呪霊も弱い↓全体の呪術師の死亡率低下)

体質持ちが役割を放棄すると、この流れが止まり逆のことが起こる可能性が高い) 当主が、死亡時に特異体質が次の血縁者に移る………そしてその移る法則がまだ分かってないから、その瞬間に誰が体質持ちか国内海外問わず必死こいて探さなくてはならない為。自然と呪術師家系の中でも情報収集能力や処理能力は特筆すべきほど秀でている。

継木 櫻

別名継木家当主 継木家が見つつけ出した特異体質に名付ける名前、代々当主として据えられる人物は皆同じ名前をつけられる。

元々持っていた名前を語ることはもう当主として据えられた時点でなくなってしまう。

子孫を遺すことは無く、血を繋がった者を全て子と見るように当主として教え込まれる。

主人公は例外を引いてしまったが、基本的には歴代の継木家当主継木櫻の記憶が流れ込んでくる為に特異体質継承者は継木家に引き寄せられる。

血の縛り

継木家では、血の縛りと呼んでいるが正確に言うなら血の呪いである。

現在判明しているのは

血の縛りを受けた者が子をなすと、その子にも血の縛りが与えられる。（配偶者は問題はない。）

血の縛りを受けた者すべてが、特異体質を突然受け継ぐ可能性がある。

特異体質に漏れでた呪力を取られる。

当主の血が混ざると血の縛りを受ける事となる（？）

一定以下の呪力による被害は特異体質持ちに向かう。呪いにより死亡した際に特異体質に察知される（優秀な依代の場合呪いによる死亡関係なく常時探知される。）

である。

先代当主 継木 櫻

腹の中にいる頃から、特異体質だった産まれながらの継木 櫻。紀野 楓と言う名前を与えた男でもある、産まれる前から歴代の継木 櫻の記憶をすべて見ている。

学生時代のさしすや夜蛾先生、禪院直毘人などと交流もあった。

呪術師の力としては 継木家当主としての最高傑作 と評されるぐらいに体質と記憶をものにしていた人物

五条悟曰く、みんなRPGやってんのに一人だけ何かの調整するゲームしてる。

特級呪物 万年櫻

特異体質と並んで継木家では大切にされる物。

その性質は生得領域を現実世界に投影する楔、見えている櫻は集団幻覚に近いものであり真は特異体質持ちの当主のみ立ち入ることを許される。

ダレの生得領域かは誰も知ることは無いが、継木の血を持つ者たちはこの生得領域を共有するように持っているのだと信じられている。

普通に入った場合は何事もなく、時間が経過しない空間として歴代当主は短い寿命と

特異体質からくる苦痛の2つから逃避するために使うことが多かった。

春の櫻が咲く季節になると、万年櫻への周辺に近寄ることは禁止されている。あまりにも生得領域と重なって近くなってしまいうからと言う理由らしい。

家の者

境界なき境地に至るため、名前を捨てた人達。自らの意思で捨てており名前を名乗ることはない。

継木家における元服の儀に似たようなものである、名前を捨てたからと言って自由がなくなるわけでもなく抜きたいと思えば自由に抜けられたりもする。

当主以外の束縛は緩い。

（QアンドA風補足）

Q、髪の毛ビジュアルバンドみたいになってるけど趣味なんですか？

A、ストレスによる白髪がほぼ半分侵食してるのと、髪の毛を長くしてそこも呪力を溜め込んでるから。

見た目イメージ、キャラメーカーをお借りして作成しております。見るならあくまでも参考程度に……（これのもう少し黒髪が混じったような感じでございます）

Picrewのnise様の「niseo写男子メーカー」をお借りして作成しております。

<https://picrew.me/share?cd||Y8DfTBwbck>

Q, ストレスが、食事なだけで普段どうしてる？

A, ウイ〇ーとかゼリー系の食事と各種サプリメントを取っている。

Q, 鍛錬って、誰に教えてもらってるの？

A, 夜蛾学長とか真希さんとか色々、誰もいなかったら五条。

Q, 缶詰って主にどうなの？

A, 何か、呪力溜まってそうなる人物 土地 をオールウエイズで呪力吸い取るこ

とになる。

Q, なんで約15才なの

A, 前当主が、死んだ日を誕生日とするため。元の体の誕生日と異なる可能性もあり

……お分かりでしょうが主人公の誕生日は前当主の命日です。

Q, 結構お金持ちだけどいったいどこからでんの？

A, 継木家の当主や呪術師が働いたお金や、呪いの才能がなかったり止めた人達が主

に働いている継木家会社から。

会社の事業としては表向きには、継木家は孤児院とか慈善事業法人の一部として隠してある。割と日本だけではなく海外にも広がってる。

Q、食事が、ストレスだけどぶつちやけどれぐらい？

A、もしゲロ雑巾（呪霊玉）食ったとしても、普段の食事（豪華）とあんまり変わらないと思うぐらい。（基準がとても低い）

加筆修正（項目1）

対の呪い

授業が終わり、落書きを書いた黒板、飲みかけの炭酸ジュース。夕暮れの中そんな普通の学生のように教室に居座る。まあ表向きは普通だが、中身は全く事なる。

死に近い呪術師、いつ終わるかも分からない日々を過ごす。

学生として呪術師として力をつける前に亡くなる。ましな方いや一番良い選択としては、呪術師としての方向性が会わず又は足や腕や目等の四肢臓器を失い戦えなくなつた結果只の呪いが見える一般人か窓となる。

そんな呪術師の、呪術師になる以外選択肢がない呪術家よりも多い選択がある3年間の青春とも呼ばれる淡い夢の中にいた。

「恵ー大丈夫？呪物の回収だけとはいえあの特級呪物宿儺の指……僕が言うのもなんだけど。入学の時から二級で入つてる天才と呼ばれてる才覚ある君に任されてるとはいえ。」

コレ最低でも単独でやらせることじゃないでしょ……僕もついてこれればよかつたんだけど。こつちもこつちで、なんか突然入ってきたし。」

取り敢えず僕は、そんな一抹の夢の中様な世界で机をバンッと叩いてみる。衝撃で跳ね返る感覚、手にじわじわと広がっていく痛覚からコレは現実なのだとしつかりと伝わってくる。

目の前の伏黒 恵がいるのも、僕の幻覚なのではなく現実なのだろう。

恵突然机を叩かれてびっくりしたようにするが、次の瞬間には呆れたような表情を見せた。

「お前がついてきても意味ないだろ、むしろ調べるのに必要な残穢すら無くすから邪魔だ。それに櫻お前はお前でやることがあるだろ？」

てかさボリたくてついてこようとしてないか？学長から直々に聞いてるぞ。」

確かに、残穢を辿り指の元へ行くとするなら邪魔になる。だが何本か同質の呪物の呪力を覚えている僕がいる事が助けにもあるかもと説得しようとしたが……

恵は、学長直々に任務を与えられていた事を知っていたようだ……コレは学長が逃げない様に恵にも言ったな。逃げるつもりは無いけど、一人はアレだからついていきただけなんだけど。

「いや全く？僕のこの目が嘘ついてっあ~~~~~目がア！目がア！急な目潰しは殺意高いつて！何なの、直ぐに暴力に向かう子なの？そんな風に君を育てた覚えはありません！」

助けになるから一緒に行くという言葉は、もう効かないだろう。普通に任務だけならギリ押し込めると思ったが学長直々まで知ってるから。

真面目だからなー

そう思いながら、少し茶化すために前屈みで冗談を言えば言い切る前に……………目潰しされた。

今ので真面目という認識を撤回する。何回かやられてたけど割と暴力に走る子だわ。あーまーやだー奥さんこの子どういう育て方してたんですか僕びつくりですよ？

恵の家の教育とか資金援助とか色々五条先生だったわそう言えば、忘れてたけど。

僕も本当に産んだ両親の事なんて覚えてないし、おじさんぐらいしか親と感じてないしそれも6才辺りで先に死んじゃったからそこら辺言える立場ではないとは思ってる。普通の教育は、受けてないだろうしね僕は。

……………呪術師にもまともな家族持ちいるよね？いやまともなのはこない方がいいけど例え優れた才能を持ち得ても死に近すぎる様な世界には。

「お前に育てられた覚えはない。後任務放棄すると本気で呪術界の、バランスが崩れかねないからやめろ。他と違ってーからコツコツだろうがお前の役割の変わりが見つからねえ。」

恵は、椅子から転げ落ち頭を打ち付けて目を覆いながらゴロゴロのたうち回る僕を椅

子に座りながら見ている。

一応僕割と偉い方なんだけどね継木家の当主だし、仰々しくされる方が苦手だからこれぐらいの感覚のほうがいいけど。だんだん目の感覚が戻って一瞬で起こる鋭い痛みから鈍い痛みへと変わってくる。

倒れた椅子を戻して座り直した、そうしてコップの水だけ口に含む。炭酸初めて飲んだときに思いつきり吐き出したからな、口のなか糞痛かった。

「まあソレが、やくわりだからね。

でも！宿讎の指本当に凶ネタだから、一度封印間に合わねえからって高専が持つてる指全ての漏れ出る呪力の抑え込みしてたから分かるけど。思い返すだけで気分悪くなるわ。

なんなのあの呪力量、他の特級呪物と比べ物にならないし。

悪いことは言わないから、何なら僕何とか騒いで話しつけてこようか？だから一人で行く任務じゃねーって！」

変わりがいいとは言いが、それは僕の肉体の話。精神は求められていない。まあ思っても仕方ないけどそれが与えられたやくわりであり呪術師の一派であり人々の保全のために僕の性質は必要なことでありモノだからだ。

宿讎の指の呪力をすいとり一定時間無毒化することもした。それでヤバイやつだ

から心配って事何だけどなあ………いつでも封印できる体制が整ってるならどうか
………

恵、封印術関連使えたっけ？

こう言うのって封印術使えるやつを着いていかせるか、悪くても封印術を使えるやつ
回すだろそれかなるべく階級の高いやつに迅速に向かわせる。嚴重に禁庫に入れられ
てる特級呪物だ、任務なら場所は分かっている。

コレは本当に指を探して見つけるだけか、それとも上が杜撰すぎるだけなのか。

「残念なことだが、これは一応秘匿任務だ。というか秘匿任務なのになんで内容知って
んだおまえ。」

そんなどうにもならない身勝手な想像未満の妄想を組み立てていけば、ああ本当にど
うにもならない。

「いくら秘匿でも、人の口に戸は立てられないと僕は目と耳が広いとだけ言っておく。

人に伝えるのは、その情報を何処かに刻む行為でもあるからね。」

人に伝えるという、共有する行為がある以上どこかからの漏れが発生する余地はあ
る。

内に秘めているならまだしも、出した瞬間にどこかには必ず残ってしまうものだ。そ
れが世界の法則、声なら音が残り紙なら燃やしても燃えかすが残り………と。完全に消

したと思っても、必ず後は残る

シュレッダーにかけられた書類をパズルのように組み立てるのは、中々面白いものだったりする。物凄く薄っぺらいしすぐ吹き飛ぶからやりづらいけど。

「……………好奇心で死にそうだなお前。」

好奇心は猫も殺すか。

「知ろうとして知った訳じゃないさ勝手にはいってきて、僕がそれを覚えてる。しらぬが仏とは言うが仏は死人だ、なら僕は知って死ぬことを選ぶ。例えそれがどんな事実だろうと嘘だろうと、覚えておく事が僕に出来ることだから。」

そんな簡単な話だよ。」

教育の影響か、それとも自身の素質かもう分からない。何を知ろうとしてるわけではない事は分かる、空いた空洞を埋めるようにひたすらに集めていて。

必要になった時に引っ張り出してくるそんな感覚だ、それが周りから見ればその時のために集めているように見えることが多いだけで。

先代たちの記憶を引き継いでいないのが、足りてないと思うが乾いた空洞の正体なのかもしれないけど。

「あーはあ……、五条経由の任務だからもししくじったら出てくるから問題ない。時間が無いからそろそろ行くぞ。お前も早く任務行け。」

お互い無事だといいな。」

「恵も、只の二級相応の任務と思ってくれぐれも気を抜かないようにね。いつ階級が跳ね上がってもおかしくないのが与えられるものだから。」

そんな最後かもしれない会話をすると、夕暮れから夜のトバリがいつの間にか落ちていた。

夜行バスとかに乗るのだろうか、寝ながら移動できるのはいいがアレ乗ったあと体痛くなるんだよね……そこらへんまで知つとけばよかった。

アイテム用意して渡せたかもしれないのに、100均とか安いのも結構便利なの多くなってるしね技術の進歩人様のアイデア様様だね。

「じゃあ僕もさっさと済ませますかつとー残業なんてガラじゃないしねー呪術師に時間外労働なんて無いけど。個人事業主みたいなものだし。」

面倒事は早く終わらせたほうがいい、それは何事にも共通する。後回しにするほど悪化するのも同じ、単純な時に処理したほうがいいのだ。

「本当に無いほうがいい呪いも、僕達含めた呪いに関わる何もかも全て。」

なんとなく一人だから呟いた、呪い自体を積極的に無くなれつと恨んでる訳では全くない方がいいにはいいと毎回思つて入る。

きつとコレは僕の変わらない無自覚に自覚的なスタンスなのだろう、もし今の立場が

無くなると聞かさせれども全員が捨てられるなら遠慮容赦なく捨てる。

普通に考えてトラブルは起きないほうがいい、起きるから検事と弁護士と裁判官それぞれが必要なだけであるように。

呪いがなければ、呪術師は必要なくなる。

そう考えるのは呪術師の中では少ないだろうな、だって呪いそれを用いることが自己確立の一部になっているだろうから。

「恵炭酸ジュース置いてつてるよ、飲みかけだけどそのまま捨てちゃつていいか。お互いすぐには、帰れなさそうだし。」

学長室に、入る相変わらさず可愛いぬいぐるみ多いなあ……呪骸関係ない物作つてくれないかな寝室に置きたいな。

学長からこの時間に来るようには言われたが、5分前に来れば十分だろうと客側のソファアに座った。一級呪術師だ、学長としての仕事以外もあるはずといるというのは難しい部分も多いのだろう。

座り心地のいいソファアにちよつと背を伸ばしていると、扉がぎいと音を立てて開いた。

「学長直々にとは、何か不味いことでも？」

「待たせてしまったな。

ああ本来なら特級呪術師をつけてやるのがいいぐらいの事なのだが、呪術師は万年人手不足でそういう訳にもいなくなてな。」

夜蛾学長は、中にはいると同じくソファーに座り今回の関連であろう紙を広げた。そして一体の猫をモチーフにしたような呪骸がなにかに反応するように動き出しポテポテと歩きだした。そして僕の、目の前には只の水夜蛾学長の前にはお茶が置かれる。

お茶については、暖かくこの呪骸が1から入れたのだろう。なんとなくお礼をするように飲み物を運んできた猫のような呪骸の頭を撫でた。ふわふわしている。

「いえ僕も、ついさっき来たばかりですの。

九十九さんなら、僕関係といえはる程度融通聞かせてくれそうですけど。」

今いる特級は、最強五条 呪力モンスター乙骨 海外放浪九十九 の三名。五条先生はいつもだろうしもし僕につかせるような余裕があつたら伏黒恵の方へなんとかしていかせる。乙骨さんも現在は海外に何故か行つてゐるし。

唯一は九十九さんだろうか、基本高専からの依頼は受けないが僕の継木の体質に興味があるのは知ってるし自身の身体の一部現在の变化などをエサにすればある程度の融通は効かせられるはずだ。

「九十九 由基か………予め言っておくならまだ良いが今回は突然でな、要請しても基

本海外にいるから時間的に間に合わない」と判断した。」

そうは思ったが夜蛾学長から出た言葉的には、一日二日遅らせる余裕はともじやないが無さそう指と同じである程度の急を要する案件らしい。

「……………封印の一つでも経年劣化しましたかね。」

急な案件は、数多いが……………ある程度の書類が揃っていると可能性が高いのは管理下などある程度把握している存在の異常。直接という事は、なるべくは秘匿したい都合の悪いこと。

後は純粹に昔掛けたものは劣化するという結果だろうか、日本が高度経済成長に立てた建物が一気にガタがきてるように封印にも同じことが起こつてると。

「感が良いだけはあるな、その通りだ呪霊の活発化然り近年突発的にアクセントが引き起こる。突然継木に任務を要請したのはその為。」

「学長直々について事は、高専管理下そうじゃなくても確認下にある封印が劣化して不味いつてことですよね？」
「ただ注意散漫なんですか……………」

「学長は真剣な口調で、改めて任務を斡旋される。だけれども、ちよつと小言を吐いてもいいと思う。」

重箱の隅を突くような事だけど、高専は呪術師の組織として杜撰なのは頂けない未然に防げるものは防ぐべきだ。後手後手に回るのは呪霊等の性質から仕方ないと思う

が……

「そこについては、何も言い返せないな。今回の任務の詳細は封印の劣化の軽減と劣化原因の調査になる。高専が気を抜いていたのは封印が劣化しないと考えられていた、とても安定していたこともあってだな。」

封印されている呪物の凶悪さもあるが、比重はどうして劣化したのか？と言う原因究明の方が大きい。もし人の呪詛師又は未確認の特級呪霊により行われていたとするならば……」

とても安定していたか……

「ああなるほど、それで僕に。」

封印そのものでは無く、封印の劣化原因や劣化軽減原因がメインか……最近の呪霊等の活性化の原因に繋がらないか……

そこらへんの調査目的だから、サポート助手が欲しいが主かな？補助監督……伊地知さん辺りに頼んでも良さそうだけど。補助監督なら死地になるような事はつきりしている可能性とあるかな。」

「お前なら、今から見る全てを呪力の感覚など含めて覚えていられるだろう。下手な状況保存するよりもよっぽど確実にと思つてな。」

……今回学長に買われたのは記憶力か。呪力の感覚は他じゃ残しづらいから僕

に白羽の矢が当たったと言う感じになる。

もし他人……呪詛師による故意の場合は、残穢からすぐに分かるようになるかもしれない。僕の場合残穢消しちゃうから、デメリットも多い気がする。

オンオフ出来ずに周囲の呪力を、奪うそういう術式と言う扱える力ではなく体質と言う与えられた仕組みだ。

「買いかぶりすぎですよ、株だつたら高値づかみして塩漬けになるでしょ。」

「お前は 記録や観測 に秀でてるからな、今空いている呪術師の中で一番適任だと思つた、悪かつたな。」

夜蛾学長は、そうやってお茶を飲んで何処かからかう様に信頼を織り交ぜた。上に立つだけあって、人を動かすことには慣れているのだろうそういう事が見て取れた。

何か頼むときに一番とかお前だけとか任せられるとか、手段として結構有用だ。実際僕も何か頼む時にはよくそういうこと付け加えるし。

「いえいえ、謝るよりすぐにやって終わらせましょう。人手不足なら、ゆつくりよりも回転率を上げるのが一番ですよ。」

で場所と概要をお願いします、いくつかは絞り込めてますけど決めつけるのは出来ないの。」

それに乗つてしまうのも、単純で浅はかに思えるがせつかくだ学生らしく調子に少し

乗ってしまおう。こうでできるのも後三年間のなのだから。

対の呪い 2

学長は一息ついて空気を吸った。

「都市開発や、少子化などなどの影響でとつくの昔に廃村になった土地だ。そこにある呪物は橋その物……よくある生贄だ。

6人程生贄として使われたらしい。」

いつ廃れたかもわからない村、そこに呪いが溜まっているようだ。にしても生贄か確かに橋は境界線となるもの、それ故に……

「はあこういう生贄って、覚悟とかそういう物じゃなくて権力者のパフォーマンスですからね。」

その案件なら確か、大昔ですし人の意識……ああ呪物化してたんですよ。そりや人の呪いの吹き溜まりは関係なく呪いを発生させ続けられるか。」

こちらの本業的には、逆効果でしかないのがなんとも言えないところだ。人の思いある所呪いアリ、それが今の世界の理だ。

廃れているなら、呪いほぼないはずだが……呪物が呪力供給源になっているのなら話は別だ。呪物は呪いが籠もっている死体、呪力が人が生み出すエネルギーならさしず

め呪物は石油のようなものだろう。

大量の死骸が積みさなり年月をかけるがごとく、大量の呪力が消化されないまま残った結果の呪物なのだろうから。

「ああ長い間疎まれ続け、呪物となった………。廃村化したのもそれが原因の一つとしてあるだろう。」

学長は重々しい口調で次々と語りだす、正直に言えば村単体としては自業自得として因果の巡りの一つとして自然に許しがくるまで放つておいてもいい気はするが………それで周囲が迷惑被つてはいけないと思う。

呪術師の仕事ってこんなんばっか何だけどね、割合として僕の場合やくわりも入ってるから普通の一般呪術師よりは自業自得案件は少ないと思うけど。

疎まれるの呪物へと変質する核となったであろう、捧げられた無意味な生贄は不憫で仕方がないが。寧ろ中には、村が廃れ滅んである程度は秘める呪いが安らいだ者達が、いれば良い。

「で封印は？その呪物無害化されてたんですよね。」

「その作つた橋を使わない事と範囲内の領域に近づかない、柁を埋めて回る等など色々な縛りになるような行為を行った。」

そう思う事と放置しておくのはまた違う、もう原因は滅んでいる。後はダラダラとし

た延長に過ぎない、本来は終わっていた事が……………

それは僕が思う事じゃなかったな、生み出されている呪いそのものが思うことだ。勝手に方向性をつけてはならない。身勝手に傲慢にも程がある。

にしても……………

「それが偶然にも、無力化に繋がったと……………確かに下手に手を出すとまた活性化しかない案件で安定してるなら触らないでおくか……………とそういう思考にもなりますねこれは。」

こういう色々やった末に、安定化しているつてのは具体的に何をしたら無害化されたつてのが分かりにくい。」

こういう何な色々やった末に、なんか分からんけど出来たつていう案件程今回みたいの不具合が起きた際の修繕に掛かる労力が凄まじいと思うのは僕だけだろうか？

こんがらがった糸のように、一本引つ張れば別の事象も同時に動き出す。

だからこそその学長直々の使命と、学長も直接赴く案件なのであろうが。見落しが致命傷になりかねない、ただ強いだけではだめなのだろう。

「今回はそこを含めての調査と再封印又は無力化任務だ。」

「これは骨が折れそうですね。」

高専の方から札の支給などあります？本格的な封印には後で来てもらうとして応急

処置程度は行わないと危ないですし。」

えーと言われた事を僕なりにまとめると、生贄として6人殺された上で建てられた橋が呪物にそして呪霊被害などが増加した結果対策として村が色々やった。

最終的には安定したが、どれが決定打か分からず定期的なメンテナンスがこちらで行えなかった為に放置結果封印の劣化によるほぼ崩壊状態。

今回の任務は、崩壊状態の封印の修繕か呪物自体の無効化無力化破壊そして今まで安定していた理由の調査か。基本的には封印が優先になるかな………現状維持がいいだろうし。なら出来るなら調べた方法で出来れば一番いいが。

札でも使うか、使えたら気休めでしかないけど。その後に本格的に封印術使える人に着て貰う必要はあるけど。

「札は好きなだけと言いたいが、20枚程度にしてくれ。経費も、最近厳しく見られていてな。」

金はあるだろうけど、呪具関連は少ないのだろうか………呪力持つ物体大量生産できたら呪具化させたり呪力込めたショットガンか何か呪術師全員に持たせておけばいいという話になると思う。

正直、呪詛師相手なら人が人を殺すための武器として最新の物なのだから呪力込めなくても有効だと思う、持ち運び糞面倒だけど。治安がいいね日本。呪霊、呪詛師、呪術

師わんさかの呪い大国だけだ。

純粹に封印が間に合っていないのが多いから応急処置として使う機会が多くなり、その分消費量が多いと言う単純な話も理由の一つとしてあるとは思う。僕が考える事は他の誰かも考える、思考自体にはかよることが多いもの。

汗で気持ち悪くなったら、風呂はいるみたいなものだ。なるべくならズルしたいし楽な方を選びたくなる、よく天才やらどうやら言うが普通の人間の考え方を理解したほうが世の中よっぽど回りやすいと思う。

「学長先生はある種の管轄責任者でもありますからね、では20枚全てお預かりしますねー

移動方法は、電車でそれとも車で？」

でもない中で20枚程度でも、確保できれば上々といったところか………そもそも念の為だしな使わないかも知れないがなくて困るよりはよっぽどいい。

そろそろ事前に話す事が無くなってきたし、学長から何か無ければコレで終わりにしようか。

そう思いながら、目の前にある水の残りを体の中にすべて入れ込んだ。

「いや飛行機だここからはバスや電車等では距離があつてだな………降りてからは使うが、チケットは取つてある。空港まではタクシーでも使うか………補助監督も大体が出

張っているから行き程度はこちらで済まそう。

それでいいか？」

「どうぞ、自由に。ポストには寄らせてくださいね、ちよつと出すものがあるので。」
飛行機かあ、確かにアソコは結構遠いから言うまでもなくそうだったね……………高専つ
て家用ジェット機とかあるのかなあありそうではあるけど見たことないや。緊急時
とかの移動手段呪術師の郵送手段の一つとして。

あつそうだ、今日真依ちゃんにあつてないから手紙ポストに入れないと……………基本的
に直接渡したいから持ち歩いてるけど中々合わないからなあ。

僕が東京校になんてかなくて、彼女は京都校に行つてるつても理由として大きいけ
ど。

「いつものか？まめだな。一体どこに送つてるんだ、家に報告か？」

「隠すことでは無いですけど、積極的に言うものでもないの……………知りたいなら知
うとすればすぐに分かると思いますよ。」

秘匿は暴きたくなる、それが人の利点であり欠点でありサガと思つてますし。」

「言う事の内容、先代に似てきたな……………」

学長？今の会話のどこに呆れるような要素あつたんですか!？僕今の心の底から正直
に純粹さ100%の気持ちで話したんですけど……………悲しいなあ。

「僕の、家ほどでは無いですけどアクセス悪いですね……………まあ悪い方が良かったと見るべきですかね。良かったらと思うと……………」

さてこの呪いは、あーやつぱり駄目ですねコレは完全に解けちゃってる雰囲気があります。」

いつもより、気分が悪い。呪力が多い所になると途端にコレだ、こんな時でも身体を十分に動かせるように慣らしてはいるにはいるがキツイものはキツイ。

問題なくやれる、と問題がないは全く別物。僕の場合は問題なくやれるっただけ。

「確かに、封印がちゃんとなされてるならこういう呪力満ちるようにはならない

……………呪霊も湧いてるな。

継木お前の事はカバーするつもりで入るが、ある程度戦いは覚悟してくれ。」

そういえば、学長はちゃんと戦闘用にこしらえたであろう呪骸をいくつか解き放つた。傀儡とは違いある程度は自立している……………から逆に。

「呪術界に入ってから10年程度、完全なひよっこでは無いですしソレぐらいの準備は出来てますよ。

ほらこの通り……………また、つまらぬモノを切ってしまった。」

こういう漏れも当然出てくる、ある程度はマニュアル操作はできるだろうが基本はフ

ルオートそうなればシステムから漏れ出るのは当然。

学長が動く前に、巻物を広げ呪霊から放たれた呪力の籠もった土の塊をパンツと音をたてて弾く。如何せん頑丈ではあるが、あくまで持ち歩きできる普通の巻物のため面積自体は小さい。

それにあくまで薄い布のため、弾くようにしなければ完全に防御には使えない。

コレまともに実践で使えるようになるまで、何年掛かったか………この呪具もただど。

そう思いながら、呪力を練り呪具に注ぎ込み刀身を伸ばし呪霊の核となるような部分に突き刺し振り上げる。等級は四級〜三級かなこれぐらいで祓えるところなら。この呪具刃の部分自由なのは分かるけど刀の形のまま色々長さとかだけ変えるのが応用効くんだよな。

まあそう思うのも記憶の引き継ぎが無いからなんだろうけど、1からコツコツやって今の段階なら才能なしのボンボンと罵られないと思う。

巻物を使用し終わったので一旦、開いた状態から戻す時に僕が今呪霊を祓ったと、勝手に墨で書いたようにもとからあったように何も書かれていなかった箇所新たに追記されていた。

いつの間にか、毎回書かれているんだよな。

「ふざけてないでさっさと行くぞ。」

「はい取りこぼしても、ある程度なら対応できるので安心して学長はどーんと構えてくださいよ。」

「貴方は強いんですから。」

怒られてしまった、確かにここは呪霊の発生地帯だ学長という実力者がついてくれるから気を抜いてしまった。ずっとビクビクしてるよりはのびのびとやった方が良くもいけないが……片寄りすぎは良くない。

上をみて蹴躓くのも、下をみて物に当たるのも起きる不具合はほぼ同じだ。

「褒めても、何も出さんが。」

……誉めているつもりは無かったが。

「何か出るなら学長が作ったぬいぐるみ欲しいです、呪骸の要素抜いてもいいので。ああ言うデザイン探そうとしても中々無くて……」

何か出るとするのなら、学長作のぬいぐるみが欲しい。あれっぽいデザイン中々見つからないし作ろうとしてもそれっぽくならないんだよねどうしても。触って手触りとか近い生地とかは分かっているけど……

「それはそれとして、進むほど呪力濃くなつてますねコレ封印か無力化できなかつた場合は、呪力で侵食されてる部分を区切ってこの土地ごと禁足地として封印札で囲いま

すか……………

対処ができるまで、死んだ土地 対処できたとしても暫くは……………軽く50年いや100年ぐらいは、食えるような作物も家畜も育たなくなりそうですけどね。」

にしても、これは中々にひどい……………どんだけ呪い溜め込んでるのか産み出してるのか分からないが今いる浅い区域で四級三級わらわら沸いてると言うことは奥に進めば沸いている呪霊の階級も当然高くなるだろう。

呪霊はあまり土地から動かないが、人を介して移動することはままあるが……………もしこの発生した呪霊が都市部などの人が多くいる地域に移動するとしたら……………

いつそのこと呪霊出られないように、呪力を範囲を指定して塞ぎ止めるのがいいと考える。この土地は死んだ土地になるだろうが……………広がるよりはよっぽどましだろう。

最も封印自体を成功させたり、無力化破壊等々出来るのが一番良い方法なのだから最悪の場合の一手としてだけ頭の四隅に置いておく。

「この呪力がじわじわと人が多い都市部まで広がって非呪術師の被害が増えるよりはマシかも知れないな……………、呪術界上層部にはもしもの案の一つとして提案してみよう。」

あくまでももしもの案として、封印や無力化が大前提であり調査が主目的であることを忘れるなよ。」

「あくまでも非常時の、最後の手段ですしね……僕も最初っからこの方法してとんずらして帰ろーって考えはしてないですよーイヤー」

「ここが村の跡地ですかね、かなり荒廃してますけど。家自体はいくつか残ってますね、コレ中探りました？」

そんな感じで、時々でた呪霊を学長が祓ったり僕が祓ったりしながら次の行動などの合わせ等色々話してとても整備させているとはいいい難い山道を歩いている内にいくつものボロボロな古い形式であろう木造の家がいくつもある村らしい空間につく。

昔はそれなりに人間がいたのであろうか、今となっては見る影もないし呪霊が見るからに至るところに闊歩している。

にしても調査はあまり手だし出来ない頃にはどの程度行ったのだろうか？高専的には現状保管優先で周囲探るぐらいで中に入ることはあまりなさそうとは思うが。

「探ってはいない、封印の維持として定期的に高専が人を出して現状保管に努めていたからな……」

今回は探りを入れる事については許可は出ている、もう封印は劣化し意味を成さなくなっているからな、何が封印を封印たらしめていたのかをしつかり調べろとのお達しだ。」

対の呪い 3

「つまり最初は、ナニカ文献無いか家探し墓暴きつて事ですか……………二手に別れます危ないとはいえ時間がかかり過ぎますし？」

「そうだな……………、危険性は上がるとはいえ二人ではあまりにも時間がかかり過ぎる……………そうだな継木コレを持っていけ。」

気休めぐらいには、なるだろう。」

特に高専側からの事前情報は無いみたいだ、あつたら最初つから伝えてるだろうし当然だろうけど……………もし情報を隠匿してここで暗殺つて言っても僕の肉体と学長の損失は呪術界でもそれなりに痛手になると思うし無いとは思う。

無いよね？

学長の呪骸も動員するだろうが、いささか全て調べるのには時間がかかるからお互い少々主にこちらが危険があるが手分けする手筈となり学長に小さい鳥のようなナニカを渡された。

モゾモゾ動いている、いや蠢いている。

「軽くてポケットに入りそうですね、戦闘用にはとてもじゃないけど使えなさそう。よ

わそう。」

学長の呪骸のセンスは愛らしいものが多くいいと僕は思うが、コレはちよつと日頃から持ち歩きたくはない。

「呪骸の一つだ、もしお前が危険な呪霊や対処困難な事になった際に動く。持つ一つの呪骸と対の存在でこつちも同時に動きお前の元へ向かう。」

髪とか爪のきりかすとか、血でもなんでもいいから与えておけ。」

「つまりコレが動いたら僕が危険又は危険な状況で、学長もおんなじ対となるものを持つていて。」

そつちの方は動いたら、僕の方へ向かうから場所がわからなくても危険なときに合流可能って算段ですかね？」

なるほど渡されたモゾモゾと蠢くコレは、学長へ遠隔で伝えられる仕組みを持った呪骸か……：そういえば学長は頷いた。とりあえず髪の毛を一本ぶちいつと切り蠢く呪骸に与えるすると溶けるように飲み込まれた。

これで僕の危険を察知するにはなるだろう。

なんだかうっかり入れたことに気づかず、手を突っ込みそうで嫌だが服のポケットにしまっておいた。

「ああお前か周囲の状況で、勝手に紐が抜かれる防犯ブザーの様なものだ。動いたら俺

はすぐにお前を追いかけて行く呪骸も回す諦めずに時間稼ぎでも何でも生きることが諦めるな。」

「凄い呪骸なのに、防犯ブザーって言われると一気に身近に見えますね。仕組みはほぼそうなんですけど、使わないのが一番いいんですけどね。」

危機察知能力の探查能力が備わった携帯しやすい物だ、正直コレだけでも一つの呪術として完成したものがあろうなほど……そして学長はコレを事実いくつも生産ができる。

言葉には出さないが、器用万能ここに極まれりつと言うような感じ。そこに至るまで、色々当然努力や苦悩はあったのだろうが。

……あくまでも呪い版防犯ブザーなのだが、とても凄いのだが一般商品の例えを出されてなんか呪霊≡不審者ということなのだろうか？ 実際怪奇現象の殆どが呪霊あたりを引き起こされているので大した違いはないかもしれない。

どちらも使わないに越したことはない事は、一致している。

「それもそうだな何事もなければそれが一番いい、調べ終わったら付箋を時刻を書いて貼ってくれ。お互い同じ場所を重なるって調べないようにな。終わったら………そうだなあそこの一番大きい家の玄関前で落ち合おう。」

終わって無くてもそれぞれすれ違ったら現在得ている調査結果の共有はするように

以上！」

学長は、僕があらかたの心の準備等が出来たか確認するように周囲を見回して一つの家を指さした。一番大きい家……恐らくこの村の地主か村長が住んでいたのだらう。

そしてそこで落ち合うことにすると、話す。その後も情報共有はこまめに等必要な事を共通の認識を確認し……

「始めるぞ。」

僕と学長は、お互いの無事を祈りながら目の前の必要なことを進めるため別々の方向に足を進めた。

「……………不用意すぎたかな、小型ライト持ってたからいいとして。学長は……………大丈夫か呪骸あるし、報告も当たりうろついている呪骸に話してるし。」

「というかコレ僕本当に必要だったのかなあ、今回学長だけで良くない？任されたからには、やらないとだけどね。」

「いくつ家を廻ったが、今の所めぼしいものは見当たっていない……………学長は呪骸を利用して一気に進めているのもあって見ようとしたらもう付箋が貼られていて終わっていたりもしていた。」

もう学長一人でもいいんじゃないですかね？僕いる意味ありますう？と思いつながら探す度に舞い散るホコリや塵に噓せながらペンライトで手元を倉庫で暗い中照らして探っていく。

一つの紙に手があたり何気なく開く。

「コレは家系図か………家より倉庫の様な場所のほうが収穫はあるな。

しばらくは、ここで漁るか。」

その紙は家系図のような物、これがあるという事はこの家の書類のようなものは大体ここに揃っているだろう。家の方探してもなかったしここに無かったら今までの無駄になるなと思いながら、整理をしながら進めていく。

調査なんて元々こんなものだし、そういう行為は僕は苦手でも嫌いでも苦でも無い。むしろ好きな部類でもある。

「病人食関係の物が多いな、後は民間治療法各種ねろくな医者が無さそうな感じだな。それか村の貧困側か………」

漁っていると、子供の闘病記のような親が掻き集めたり必死で書いたであろう記録を見つけ出した。症状は正直に言えばこれが書かれていた年代を考慮しても、一般的な病院など知識のある医者の方へ行けば治療が出来そうなもの。

かかるための金がなかったのか、村自体の知識がおくれはいそされたのか、その両方

か……そう思いながらページを次々とめくっていく。

調査に関係ないだろ？とか言われそうではあるが、こういうものから当時の環境や状況雰囲気を読み取っていく事こそ大切であると思っている。歴史的瞬間資料ばかり読んでも当時の状況などわからないだろうし。

こうも丁寧に、一つ一つの食べた時の反応とか皮膚とかの具合の様子とか書かれているし大事にされてたんだろう何事にも変えられないぐらいに。

「……………おつと破られてる。コレ不用意にじゃ無いよなあ、何ページも偶然うつかりでやるかあ？」

そうして読み勧めていくと、感情に任せるかのようにページが酷くビリッと破られていた。闘病虚しく死亡……………よりも俺の想像だが酷い結果なきがする、例えばやったがゆえに悪化させてしまったとか。

あともう一つは殺さ

「呪霊だな……………まだ調べ途中だったんだが、何言ってるんだかわからないな……………。負とはいえ、人の思いの塊みたいなものだから意味自体はあるのだろうけど。」

打撃が頭めがけて振り下ろされる。

殺したいのか、それとも動かなくしたいのか、知能がなさそうには見えるが人を襲うという本能は備わっている。僕は即座に後ろへ跳び跳ねる、そして倉庫に積まれていた

荷物をわざと蹴つて着地できるような足場をつくり降りる。

それと同時に、呪霊の拳が理解の出来ない叫び声と共に振り下ろされ……………

ガラガラそんな愛らしい表現は出来ないほどの、陶器が割れる音物がぶつかる音……………様々な轟音を響かせた。もつと調べることありそうなのだがこうなってしまうては無理だろう。

一先ずこの呪霊を祓うため、呪具の樹で出来た柄に手をかける。防御を破る意味はない、故に力を入れる意味はない、只祓う為に風のように速く振るう。

呪力を脚に回し、蹴る。

目の前の呪霊はソレに反応し、自身に集る虫を払うかのように拳を再度振るいながらあたりに物を撒き散らしこちらに突進してくる。

「(こつちのほうが、先に届く。)」

僕は、呪いのこもった拳を振るい向かってくる呪霊に捨て身とも思われそうな接近をした。

不思議と恐怖はない。

力の差がとてもあつて余裕というわけでも、確実に勝って生き残れる確信があるわけでも無いのに。

「無へと眠りへと還り永久の安らぎを。一時の目覚めに、祝福あらんことを。」

それはきつと自分を、心から今は信じられている。その証拠なのだろう、この一閃だけは通ると確信があった。この一撃で終わると確信があった。

鉄の鈍い光は反射しない、この呪具は物はすり抜け呪いは切る。……いや呪いとして形や方向性のあるモノから只の呪力に強制的に変換する。故に呪霊にとつて防御不可能の一撃となる、正しく数ある呪霊特攻の呪具の中一つだろう。

………今回は、図体が大きかったのも幸いした。大きさはパワーに関係するが。

「(今のは等級としては三級以上、二級未満と言ったところか………周辺にいる呪霊は大体こんなものだ。橋周辺だけど橋本体じゃ無くてもこんだけの、数いるって本格的に封印不味いな。もう完全に無くなってるんじゃないかなコレ。」

にしても、呪術的に封印に関するものが見つかからないな。僕たちの目から見て迷信ばかりだ。」

サラサラサラ積まれた砂が風に吹かれて消えるように、形を保てなくなったのか只の呪力に切り口から変わっていく呪霊を見ながら。弔うように手を合わせた、元は人から感情から生まれた目覚めたモノ人を襲うとしてもそれを祓うという事は、その考えを殺してしまう事と同義だ。

ならせめてその考えが思いが形となった姿を、覚えておく必要がある、僕にはそれぐらいしかこの責任は取れない。何度も何度も繰り返さないように、同じ所をぐるぐると

回るだけでは終わらないように。

いつかこんな繰り返しが、無くなることを切に願い動きながら。

(……カエシテ コドモコンナサムイ)

唯一聞き取れた叫びは、弱々しく儂い。最後に残った手はこちらにゆつくりゆつくりと伸ばされる。僕はそれに手を添えた、ああなんて意味のない行為なのだろうと自虐的に思いながらも、最期位は報われた幻覚だろうがなんだろうが見てもいい。

どうか安らかに

最初からそこに居なかったかのように完全に呪力となり形が消えた呪霊が、僕の中に吸い込まれていく。この呪霊ここに居たと、分かる残穢さえ消えていく。

いつもの様子だ。同じ呪術師にこうしていると云ったり見られたらきつと侮蔑されるだろう、呪霊に同胞を大切だった人達を殺されたり穢された人達も多くいるのだから。

だからこうするのは、一人の時だけ………本当の自己満足でしかない。

「付箋も、だいたい貼り終わった所ばかりみたいだし合流するかあ。実際に呪物と化した橋見ないとどうしようもないわー後のことは。」

目を閉じてから、心の中で切り替える。もうコレは終わった事、忘れることは無いが同時に引きずることも無い。

目を開いて周囲を見回す、それと同時に状況を整理する為に声に出して確認をした。確か集合場所は大きな家の前だったはずだ、僕はついた土埃を軽くはたいて壊れた倉庫から出ていった。

「……………」

「大体終わったようだな。」

「はい。」

「あれは反応しなかったからお前自身に何か無いことは分かつてはいるが……………体調は平気か？もしもなら休憩をいれることにするが。」

暫く待っていると、学長が少し駆け足で向かってくる。そしてお互いにこの調査自体は終わったと言う言う。アレってああアレの事が……………

「殆ど学長の呪骸が、調査してましたけどね。僕が調べてた所殆ど無いんじゃないですか？体調ですかね、いつも気分悪いので。残念ながらめぼしい情報は無いですかねー少し気になる事はありましたけど。」

「めぼしい物か、生け贄が6名居たとこが確定したこと……………橋を建てた後に村での行方不明者が急増した事の主に二つだな。」

「気になる事が少し聞かせてくれ。」

家の前で僕は、座りながら学長は立ったままそれぞれの調査結果の報告をしていく。

やっぱりほぼ学長が調べていて生贄の人数や様子などを共有してくれた。行方不明者の急増か、やっぱりその時に大きな呪いが生まれたことは確定になった。

僕か言う気になる事は、あのノートだ。この呪いには直接は関係ない可能性が高いのは分かっている、でも口を噤んでいるよりも報告したほうがいいと思った。

些細な伝達ミスで大事故などに繋がるのは、どこの世界でも通じる共通の理だ。

「良いですけどその前に聞きたいことがあるんですけど、橋建てられた時期は具体的に
は？」

ノートの時期が以前なら、その生贄がこの対象だったかもしれない後だったら一番良いのが何も関係のない只のありきたりな一つの悲劇。

最も悪いのは、もう一度行われた可能性だ。

「メモを書いてきたからこれを見ればいいだろう。」

「ありがとうございます。」

メモに書かれていた日付や年月は、あの書かれていた物の日付よりもはるか前だった。少なくともあの橋に、使われた生贄ではない事は確定した。

嫌な予感は、拭えないが。

「気になる事は、一つの家屋に子供の親が書いたであろう闘病記の数々がありました。時期としては橋が建てられるかなり後ですからその生贄としては使われてはいないと

思います。

なので直接の関係は、恐らく無いとは思いますが……普通に病で死んだとはとてもじゃないですけど思えなかつたんですね。」

安全に渡れる橋を作るのに生贄を使った人たちだ、呪いを鎮めるのにも同様にしていったら？

証拠はない、確証もない只の嫌な予感がするそれだけでその可能性を浮かべていた。

対の呪い 4

「そうか……もし今回の案件と関係ないとしても覚えておこう、報告してくれてありがとう。」

そして回ったところ大分呪霊が結構湧いてるみたいだが継木はどう見る？やはり封印の影響か？」

ここに湧いている呪霊の、等級は大体目測で3〜2の後半辺り麓の所よりもかなり強さは確実に上がっている。橋本体近くになれば……本当に特級案件になりそうだなコレ本来なら。

特級を使わないにせよ、二人と言う少人数チームでやるもんじゃないだろう呪術界は人手不足だから基本単独任務だし二人組出てきている時点で破格なのは一旦置いておいて。

呪霊の多さから見れば封印となる抑えが機能していないのは、学長から見ても僕から見ても確実だろう……

流石にずっとこの状態で今まで平気でしたと、思っていたら今も放置してわざわざこの場所に任務としていかせないで、別の案件に相互いを向かわせているだろうし。

そう考えながら学長をみれば、調査中に破損したであろう呪骸の簡単な修理を呪力のこもった針と糸でチクチクと縫い合わせておこなっていた。

使い捨てにするとはいかないものだし当たり前といえれば当たり前なのだろうが。

「個人的にそれ以外の嫌な感じがするんですよね、感以上のものでは無いですけど見落ししが……勘違いならそれでいいですし。」

やっぱり実物見るまでは、僕でも分かりませんね六眼みたいに便利な力はないですから。」

そんな様子を見て、いつの間にか夕暮れになった空を見上げながら言った。この調子だと夜に本格的な呪物がある所の調査になるだろう、暗くても暗くなくても危険度はほぼ変わりはない。

僕が感じ続けている呪いとは違う様な嫌な感覚も、自意識過剰又は被害妄想と言えぱそれまで確信も何もないものだ。

やはり呪物の実物をみない限りは、始まらないだろう百聞は一見にしかずとはまさにこの事だろうと僕は感じた。聞もかき集め集計し纏められるだけの量と確実性があれば一見にも勝るとも劣らないとは思いますが、少な過ぎるのと情報の裏付けがここでは取れない。

「嫌な感じだな、警戒していこう。お前の予感結構良いところまで当たる。先代も同

じ様に言つて当たつてゐること多かつたからな外れることもあつたが。

感覚が近いんだろう。」

言つたことを頷きながら学長は、聞き口を開く。手は相変わらずこなれたように修復作業をこなしながらではあるが。

先代 継木 櫻 おじさんと僕の感が似ているのか……

学長いやちゃんと呪に最初つから関わつていた人達は、僕よりもこういう時のおじさんをよく知つてゐるんだろう。

おじさんがいた頃は、僕は呪い全てを夢物語話され遠ざけるようにしてくれて本当の意味で触れても来なかつたのだから。

「未確認の事を言うなんて妄想に近いですからね、大体の輪郭が合つていれば良いんですよ。大外れだつたらそのときは笑つてください。」

何てことおじさんが死んでしまつた後では確認しようがないけど、未確認をこうだといふ思ひで仮定するのは……身勝手な盲言だ。

その盲言を積み上げそれっぽく整えられたら上出来なのだろう、100考えるうちの1当たつていれればいい。何も察知できないのが、最もまずい。

考えるだけならいくらでもできる、こうであると固まつてると視野が狭くなる。もし選択肢が多すぎて迷うなら決めたときにすぐに行為が行えるような導線だけ敷いて後

で決めればいいし、騒ぎを起こしてしまつたら基本はごめんなさいそれだけでいい。

ノストラダムスの大予言なんて世界が滅亡するオカルト話が流行つた時期もあったが、ノストラダムス本人自体はこんなこと起こらないほうがいいと思つて書き記したの
だろう。

本当に滅びろなんて思つてたら、そのまま想像通り滅びるようにわざわざ書き記したりなんかしない。

「そういうことがない方がいいからな、安心して笑つてやる。」

悪い事が外れるのはいい事だ、是非とも笑つてください、こんなこと悪い夢を幼稚に描いたような只の絵空事だつたと。

学長はいつの間にかテクテクとトコトコと歩いていて、僕が少しボーとして多分離れていた。確かに必要なことは話し終わったが……そう思いながら、少し早足で駆け寄つて距離を詰めた。

もしかして僕に話してたの、呪骸を修繕する間の暇潰じやないよね？学長。

「所で橋に向かうには、結局どこ通ればいいんですかね始めていくので？学長は知つてます？」

後は実物や実物の周囲の検証をして、詰めていくこととなる。そうなると何日か掛ける場合はここの往復が多くなるだろうな……めんどく、道覚えておかないと。

にしても何度か現状保管で足を踏み入れているなら、詳しい地図あれば貰えばよかつたな……基本高専ってそこら辺準備が悪いと言うか不親切だから。このそれなりに用意してそんな簡易的な封印札も僕が言わなきゃ貸与されなかつただろうし。

備品等申請マニュアルでも、僕高専所属の呪術師用に作っておく？なんか労働組合みたいになりそうだけど。そもそも申請して使えそうな呪具に当たる物知ってる人少なそうなんだよね……僕みたいにひ弱で臆病じゃなくてしっかりしてて自身の肉体や呪術だけで解決できるってこのなんだろうけど。

強くなつて階級が上にいくほど、そう言うもの使うことは少なくなるし。鍛えたものでやった方がはやく道具を使うまでも無くなつていく。

「それはお前の言うとおり俺が知っているから、後について行け。置いていかないようには、気をつけるがな。」

学長は、そう言つて山道に入つていく。蟲が多そうだから念のため持つてきていた虫除けシールを服に貼つたら、いくつか寄越せと言われた。

虫除け持つてきて無かつたんかい山だと分かつてたのに、お互い準備不足やつぱりあるんじゃないの？……すぐ着てすぐ調査だから細かいところはしようがないと思うけど。

旅の葉がある訳じゃあるまいし、こんなところホラースポット金貰つても個人で旅す

るのは嫌だが。

「結構険しいな大丈夫か？」

お互い無言で山道を登っていく、橋として使われる予定だったことの名残なのか道自体は存在するが整備はとももされているとは言いがたく石を埋められ出来た足場も割れたりすり減つたりとガタガタだ。

あるだけましとでも思うしかないのだろうが、踏み進める度に呪いが濃くなる……そう思いながらふと横をみるとスナック菓子のような袋が視界にはいる。

デザインのには、かなり場違いなほどに色とりどりで新しい物だった。空なようで故人のために置いたその様なものではないことがありありと認識できる。

「大丈夫ですよ、でもそれにしては新しい足跡がありそう。ちよつとここも確認しながら歩いたほうがいいかもですね。」

僕はその空のスナック菓子の袋を拾って、学長に見せてからしまった。もつと古い年代の物なら良かったが新しいものだ、コレを捨てた人間が捨てることの出来た人間がいると言う証明だ。

呪霊に、殺されなかったのが運がいいのかそれとも。運が悪く踏み行つたのか。

「人が入った、それが封印劣化の原因の一つか？周囲への注意喚起情報操作は行つてはいた………が。」

情報操作を行つていても、入る人間いる。注意喚起を聞くのはあらかじめそう言うことに気を付けている人間が殆どだろう。聞かせたい人間の耳には目には通り抜ける。

むしろそう言うやつの一部ほど。

「刺激を求める人も、自己を見せたい人も、こういう所には行きますよ。肝試しとか度胸試しとかで何も知らずにいえあえて知つていて入つていく、案外頭が悪……色々な意味で純粋な心を持つ人達は多いですよ今の環境だと余計に。」

蟲が火に飛び込むかのように入り込んでくる、この世界では自我を発散させるのはある意味容易になった。そして多くの人に知らしめることも可能になった。皆裸の王様のような行為を行うことが出来るようになった。

昔はその様な行為は、王等の権力者ぐらいいしか意味をなさない娯楽だった。それが時代と共に降りてきて、そういう娯楽をしても意味を持つようになる。

しない行動をするのが偉い、禁止されている行動をするのが偉いとはいつ誰が最初に思つたのだろうか。

「橋を渡らないという縛りが、破られてる可能性があるな、そういう輩が入り込んだのであれば……禁忌は知つていたら、寧ろ積極的に破るだろう。」

その発言に、うんうんと強く頷いて僕も学長の意見に全面的に肯定の意思を示す。大分夕日も落ちて暗くなつてきた……そう思つて光源が必要になるだろうと手元のラ

イトを再度倉庫の時のようにつけようとしたが……

学長が立ち止まり後ろを向いて神妙な顔でこちらを見てきた、ああ

「思つたより、事態は悪化しているかもですね……。呪術師は毎回手遅れですね。先代から耳がづぶれるほど、聞かされましたけど。」

呪霊に探知されるっ、て事か。

僕は手に持っていた小型のライトをしまつて、ぼやくそして呪具の柄の位置を再度確認した。学長から見ればもはや村とは比較にならないぐらいの呪霊溜まりに見えるのだろう。僕にも呪いが濃く気分が悪い場所だから、理解できる。

封印時は何となく、橋の所だけで留まつていたのだろうソレが、だんだん下の方までダムが決壊するように呪いが伝播してきた感じかな。

学長は僕がライトをしまったことをちゃんと確認すると、また前を向いて歩き出した。暗いし足場は更に劣悪になってるからこけないように自然とするようになり進むんで行くペースは確実にお互い落ちている。

お互い黙々と目的の場所へ向かう為無言で進むと石が擦れて転がる音、虫がさざめく音、何かの水音、鳥が飛ぶ羽が擦れるような音……。そんな様々な自然の環境音がいつしか僕達がこの道を進むことを拒むようにパツタリと止んだ。

そんな時に、僕のなんとなく呟いたボヤキについて学長はなぜだか知らないが口にし

た。

「呪術師は手遅れか、言えて妙だな。持論だが呪術師に、後悔の無い死はないと思ってる。それと同じかもしれないな、手遅れは生に向きこっちは死に向いている。」

手遅れと後悔、その2つはとも在り方が似ているが位置が違う物。後悔は己自身に貸す心の楔で、手遅れは結果を固定する言葉なのだろう。

もし僕の、最期が来たとして手遅れを笑うのだろうか。それとも後悔を楔として撃ち込むのだろうか。

「こっちは死は突然ではないってのはあるかもですね、突然じゃないその前にあるとするなら意識の喪失ですからね。」

寝てからずっと目覚めないとか。喉を焼かれ手足を斬られ腹から栄養材流されるだけとか。呪術師は遺書義務化したほうがいいんじゃないですかね、とりあえず。」

それともそれを思う暇すらなく、僕の意識がそして意思が喪失するか。死なくとも、死に似たような事は多くある。植物状態とか寝たきりとか、多くの人間は例え精神の死だろうともそれを本当の意味での死とは呼ばないだろう。

例えば点滴に繋がれて体が動かせず口も何も意思もない管理された只の蠢く肉塊に等しくても。

継木は肉体を生かされる。性質の喪失を死と定義される。

どんな状態であろうと、終わる時まで死と認識はされない。体質に名付けられる名が継木 櫻であり僕個人につけられるものではないのだから。

まあでも、僕には僕の名はもうあるから忘れてはいけない大切な名前。紀野 楓があるだからきつと何があるろうと平気、僕は僕としてちゃんと生きられるしそして死ぬる。

その時にどんなに手遅れだろうが、後悔をしようが……それが僕の証だと思えると思う。

「そろそろ橋に着くぞ、前に見えるのが分かるか？ 継木呪具はもう構えておけ、いつどうなるか俺にも分からん。」

話をそらしたのかそれとも、着いたことを示したかったのか学長は指を指していた。その指で指された先を僕は促された通りに頭を上げて見れば、とても人が安全には渡れそうにないほど劣化した橋が風に吹かれているのかゆらゆらと揺れている。

もう少しで、呪いの核となる場所につくのだろう。割と時間が掛かってしまったな降る時にもここを下る事になるのかと少し辟易としながら。

「呪いなんてあり得ないことはあり得ない、それがこちらの普通。夢を幻を嘘を現実に持ち出す事象ですし、濃くなれば濃くなるほど、どちらが表か裏か分からなくなる。」

学長も呪いに吞まれないように……何て僕に言わなくても大丈夫ですよ？」

この場の呪いの源泉、そこに後もう少しで近づく。ここまでいくと進む度にあちらに

むしろ手招きされているような感覚に陥る。

空に落ちるように、地に浮かぶように。

異物を直すために足を、踏み入れるのかそれともこうなってしまったからには僕達こそが異物なのか……まあどっちでもいいけど。

何にしてもやることは、変わらない。

「とりあえずだな、後ろに着いていけ。お前はそれなりに出きるそして呪術師としても精神は安定している事は分かってるがまだ守られるべき子供の一人でもある事は、忘れないように。」

「甘いと言えば、優しいと言えればいいのか分かりませんね。遠慮せず後ろにつかせてもらいますが、貰えるものは貰っておくという心持ちです。」

「そういうなら厳しくしてやろうか継木、大人しいのか生意気なのか分からないな、これは。」

「ハハハやめてくださいよー嫌だなあ。」

「どうも褒め言葉として受け取っておきますよ、学長。」

子供と言われ、こんな他愛もない会話をしながら、進めているが………そういうえば僕は単独での任務をよくよく考えれば学生じゃない時も含めて一度も行ったことが無い。

いつも誰かと居るのは、監視が主だろう事は分かりきって入るが………僕が知ってい

る限り大体いつもの一人で任務に行っている伏黒 恵はいつたいどんな景色を見ているのだろう。

今思い返しても仕方がないが、恵どうしてるかなあ心配だなあ……僕が行ってどうなるって話をしてもタラレバにすぎない。

この時を、頑張っていこう。

対の呪い 5

「コレが本題の6人の生贄を投じられた橋だ、後で検証のため渡ることになるかも知れないが……それは最後の最後の手段だ。」

分かってるな？」

「呪力量の放出が凄まじいですね、そりゃ禁足地になりますわ。……あの指ほどじゃないにしても、今の状況も十分に不味いですけど。」

道を完全に登りきり、無意味に放置されることとなった橋を間近で見る。淀みの中心点となるものであるが……ずっと感じてきた嫌な予感妙な違和感が思考に亀裂を作る。

ここまで来た中で本当に見落としては無いのだろうか、拾い溢しは無いのだろうか。

コレだけを無くすだけで、終わるのか。

事実もないまま、予感は自身の中で確認へとじわじわと変質していく……なのに当てはまる部品が足りない。

膨大な呪力それだけに注視していると、物事の本質が本来見るべきであったものが見れなくなりそうだ。もし僕が思う嫌な予感の通りにもう一度生贄が投下されていたのな

ら……………

「あの特級呪物に上回る呪物がもしあったら呪術界崩壊するぞ、呪術全盛期に倒せなかった呪いのなれ果てだからなああの指は。」

そう言っても今の状況が、不味いのは疑いようもない事実だ。なるべく持ち越さず本日中に事を終わらせた方がいいな。

……………継木顔がすごいぞ、怖気づいたか？」

くるくるくるくる同じところを回るように、考えていたら。学長が真剣にでも何処からかかう様な口調で僕に話しかけてきた、怖気づいたかにそんな事はないですよと言いついてみたい好奇心もあったが……………

正直に言えば、この己のうちにあるものはきつと怖気にも近いものではある。びつたり意味が当てはまるなんてコトは無いんだらうけど。

学長から渡された調査情報のメモを少し見返して、ちゃんと折り返したんでからポツケに再度入れた……………渡された呪骸がグニツとして少し行動には出てないとは思うがビクツとした。

我ながら今の行動物凄くカッコ悪いな……………バレてないと思っただけど学長少し震えてるけど笑ってるよねコレ只寒いだけかもしれないけど……………なんでもいいやもう。

「それには、僕も完全に同意見です。ちよつと舐めていた部分がありましたね。今まで

安定感していたと聞いていて不安定になったらコレですか。

とりあえず要を見つけることにしましょう、生贄が捧げられていた場所は彼方ですかね。こういう物つて、バラバラな地点でやるイメージでしたけどまとめてやったんですか。」

とりあえずメモで確認した内容の通り、あの呪物の要になってそうな地点に足を向け地面を蹴った。

そこにいたらしい虫が危険を感じたのか、ぴよぴよいと僕達が向かおうとしている所の反対側に逃げていく……………そして暗い暗い夜の完全にその一つの虫は見えなくなった。

なんとなく目で、その虫を追っていた。嫌悪感を感じそうな見た目をしていて妙に記憶に残った。

虫よけのシール結構貼ったのにな、とか思いながら何処か飽きたように淡々と進む。「口減らしも兼ねていたんだろう、人売りもこない程の田舎としてあつたそうだから探して見つけた文献をみたところ。むしろそっちが目的だったかもな……………」

「オイ聞いているか？」

「……………着きましたよ、墓暴きでもします？墓石すら造られてないとは思わなかったですね。」

そうして着いたところは、緑いや雑草が生い茂るぼかんと空いた空間見るからに墓石も無く碑石もない。弔い等する必要がないと言う意思が見え隠れするように。

確かに生贄は使うのであれば、本当の意味で死んでもらっては困る存在だ。

中途半端な状態で縛り付ける、生かしはしないが旅出すことを許さない。もし存在がなくなったらそれは用いた意味が無くなる。生贄は死体を使うのではない、生きた人を用いるからこそ、その性質は効果を得る。

「余裕がなかったと言うことなのだろう、掘るのはしない周囲を探す異変があつたら教えてくれ。」

「何かあるかもですしね。」

学長はそう一言言うと、いつでも戦闘になつていい様に戦闘用らしい呪骸を周囲に集めてからあたりを探り始めた。

僕もそれに習って辺りを見回す。

流石に墓を掘り返すのは、呪術師でも最初からは避けるらしい。倫理観なんて無いのがこの職の世界だ、呪いに踏み入るのが必ず必要にはなるが……触らぬ神に祟りなしという言葉がいつしか人から生まれでたように、不用意に弄くり回すのは錆が出る。

その事ぐらいはわかつているのだろう。

まあ僕から見たら呪いを扱う人間なんて呪霊と同じく、世界の予め敷かれた理を弄く

り蹂躪し己から出た錆のような新たな規則を押し付ける存在でもあるのだが。

………おつといけない、嫌な思考が出てしまった。これ以上は鍵を掛けてしまっておくように底に沈めておこう。考えれば考えるほど、僕が僕を嫌いになる。

「……………完全に壊れているな。コレは……………、壊されたのほうに近いか。オイこっちに」

「!!!!!!」

!!お互いの、位置を見失わない程度に離れた位置でそれぞれ伸びすぎた草を刈り取った。石をずらしたりなどなのしながらなにかを見つけようとしていた時に、学長が僕を呼ぶ声にまるで呼び寄せられた様に6つのどろどろに溶けた死体のような夜にできるはずも無い影が姿を表した。

そうして音もなく、気配もなく襲い掛かってくる。強い呪いは効果が広く衝撃が強いと思われがちだが……………音が無いそういう強い呪いも存在する。

理不尽に与えられそして奪われる死は、死の瞬間がさしずめ静かな轟音なら、その死へと向かう先は耳障りな静寂なのだろうから。

僕はすぐさま、柄を引き抜き巻物を開いた。巻物からシユルリと紙が擦れる音が耳障りな静寂の中に響く。

「呪物に引き寄せられた呪霊」

「いや違うぞ、いるのは六体恐らく呪物に結び付けられた人間達の思念だ………過呪怨霊とは、少しいや大分性質は違うみたいだがな！」

俺達が入ってきた時に、反応して活性化したんだろう。」

「はあ、ゆつくりとまともに調べる予定通りにはいきませぬね！」

学長と軽く目を合わせてから、互いに背を合わせる………学長自体の体格が大きく背も高いのもあるけど今思うことじゃとても無いがこうすると僕の身長が低いことがはつきりわかって中々に心に来る。

成長期がまだ来てないだけなの事を信じてる。

四方八方から来る影のような思念その一つ一つが、殺意という鋭さを持っている。

全てが死に至るような影の棘だがそれが呪い………呪力のみで、構成されているのならソレはこちらの領分だ。

棘が向かう速さや、順番………それぞれから見て巻物で弾くように食い止め呪具から顕現した刃で只の呪力に還していく。

背中合わせに刃を使っているが人を傷つけていないか気にする必要はない………

上下左右四方八方絶え間無く、バラバラに僕達に迫ってくる棘をしばらく弾いたり叩き通していると………流石に学習したのか。断続的に続いていた攻撃は嵐の前の静けさのように止んだ。

その間に手にある戦うための手段を、思考を整えていく。ご都合主義のように当然、ナニカが目覚めるなんてことはなく僕もそれに期待することはない。

今ある手札の中で何が出来るのか、そして何を出しきれるのかそのみに意識の量を割く。

「…………防ぐのは、僕がしますので。信用しているのなら防ぐ事考えずにやってください学長。」

器用な方ではない事は分かっている。

だから僕と学長に向かう攻撃を防ぐ事に…………特に学長へと向かう物に神経を注ぐ。この望んでもないのに与えられた特殊な物が無ければ、呪術師としてはとてもやってはられない。呪力の総量含めた生まれ持った才能が8割の世界とは言い過ぎではなく、僕自身の状況から分かっていた。

僕自身の生まれ持ったと、言える事は0にも等しいだろう。引き継いだ物、積み上げた物で成り立っているのだ。

「……………アレ、払う程にもう一方の気配が強くなってる気が。」

「学長！」

「戦ってる最中になんだ！」

一体ずつ確実に被われていく呪い、消えて呪力となり僕に還るように向かつて吸い込

まれていく。その度に、己の中で他の呪いの存在が鮮明になっていく、小さなヒビは見つけづらくてもそこから割れていけばはつきりと分かっってしまうように。

分かりきってはいたが嫌な予感、悪質なジョークと吹き飛ばせるものでもないようだ。

「この学長に任せてもいいですか、もう一方に僕は行きますので

要の呪いは、この他にもう一つあります。ずっと言っていた嫌な予感そのものです。」

「おいつ勝手に走っていくな！ 櫻 ちいッ」

ここまで数が減ったら、離脱は容易だ……学長のザガ的に僕の事はすぐさま追わないだろう。場所を詳しくいうより、直接行つてこの渡された呪骸を使つても知られたほうが早い。

わざわざ自身の、身を危険な状態にして場所を知らせる使い方は想定してないというより物凄く怒られるだろうな。

「……………」

暗い中、感じたどんどん大きくなっていく呪力を誘われるように導かれるように来た道に戻っていく。

そして目的の橋へとたどり着き……渡り中程あたりで頭から飛び降りた。自身と

いう質量が、重力に従い落ちていくそんな中でも心臓の鼓動の音は高鳴ることなくいつも通りで何処か安心した。

「(そう言えば今日六月か。)」

身体に雨が当たる、ポツポツとしとしとそれが瞬きの瞬間に大雨へと豹変する。

あのページの料理で使われていた材料は、6月が旬の物はばかりだった。こんなところだ家族で自身の食料を作っていたのだろう……………

「君達が殺された日もそんなような感じだったのかな？ 実際にいた訳じゃないから妄想に過ぎないけど。他の人と分かり会えるはずがないしね。」

完全に体が地面に衝突する前に、呪力を体に細胞の隅にまで巡らせ廻す。手をつくとも水の膜が僕の周囲に立ち上った。それと同時に、黒いモゾモゾとした物体は上へと場所を知らせるように黒い鳥のようななにかに変わって登っていく。

……………すぐに向かう為とはいえ無茶をしたなあと思っ。手のひらを見れば、鋭い石が手にいくつか刺さり赤い血をそこからボタボタ垂らしていた。手自体は動くが細かい骨等は折れているかもしれない……………なんの痛みかすらわからないけど。

「オマエタチノセイ オマエタチノセイ ドウシテ ドウシテ アアアア」

「同じく六人か……………」

橋の生贄として出された人達より、遥かに呪いの強さとしては劣る事は感じ取れる。

それでも呪術師を平気で殺せるような強さは一人一人持ち合わせている。

呪いを抑えるために、呪いを上乘せした……………ソレが事実なのが今ここで確定した。

「(人としての意識は、もうないだろう。今話してるのもは今までの犠牲者の反射かそれとも最後の意識の再生か。)」

なら僕がやるべき事は……………

「シネオマエガ シネオマエモ」

「今から楽にしてやる、無へと眠りへと還り永久の安らぎを。安心してくれ、お前達がこの今ここに存在していたことは僕が覚えておく。忘れやしない。」

この精神を思いを、祓い清め安らかに開放してやることだけだ。

僕はやたらと伸びた髪の毛の一部を掴み、ザクツと小刀で切り離れた。そして手から放せば散った髪の毛が籠められた呪力を糧に実態のない幻にも似た蝶へと姿を変えていく。

告死蝶と呼ばれる、ある程度学べば誰でも使える簡単な式神の一つだ。それを髪の毛一本一本に練り込むように仕込んでいる……………とても戦闘で使うものではないが、消えたら分かる背後などの見えない場所への察知ぐらいにはなるだろう……………

地面を踏みしめ前に進むたびに、水飛沫が上がる。ただ向かってくる一つの呪……………縛られた意識を斬り伏せた。最初だから通じる、その一手を迷う事なく撃つ……………上より

反応は遙かに鈍い。

「(それぞれは一級下位程度だが、六体纏めるなら……中々ヤバイな学長が相手してるのよりは遙かにましだろうが。)」

黒い棘のような、攻撃はない……只苦しみを表すかのように泥が石が混じった水が迫りくる。きつとこの人達は誰にも助けられず冷たい中肺に泥水を貯めて死んだのだろう。

この呪具で防げるのは、呪力で構成された物だけそれ故に濃い呪いだけでできた黒い棘のように切ることはできない。巻物を広げ自らのみを覆うように動かした……これで防げても学長といるときとは違う。

自ら攻撃に転ずるその一手を考えなければ通じない進まない。洪水のようにならずと同じ苦しみを味わえというかのようにそれらは襲う。

……死ぬ時はあくまでも下で死んだのだろう。なら僕は上だ。

「(足が雨でぬかるんできた。)」

脚に力を込め、上へと飛ぶ……そうして残った5つの呪いの位置を見定める。

そちらも僕が抜け出したことに気がついたのか、再度呑み込ませようと水を迫らせる……が巻物を開き水を覆うようにしてそれを蹴って移動する足場に変える。

テレビで流れる、水走りその仕組みと大体一緒だ。僕の、力だと水そのものを蹴る事

は無理いや呪い自体の効果もあって飲み込まれるように沈む。

だから間に不純物を挟み込んで、それで蹴る。巻物単体ならきつと足場に出来なかった。

「一人づつ確実に祓う。もし学長が上の呪いを倒しきったら僕の考えだとかいつらがその立場になる。」

今のまだ力が与えられない内に。」

そうやって吞まれないように地を足をつかないように、告死蝶で空中における位置感をなんとか掴むようにして移動しながら。一体一体通り魔のように祓っていく、その度に攻撃の激しさは無くなり……………

残る一つになった時に完全に攻撃はやんだ

「ドウシテ ハヤク キ」

「……………もう終わってしまったんだよ、ごめんな。僕には」

これしかできない

僕は逃げないように、抱きしめ自身の心臓ごと突き刺すように刃で最後の一つを貫いた。

「……………呪術師は、いつも手遅れなんだよ。ヒーローが来るのは被害が起きてからでしかないように。」

「勝手に離れるなどいったら。この馬鹿者が！死んだらどうする。」

「大丈夫ですよ、死にませんから。僕の肉片見つけて帰ってくれたらやくわり特に問題はないので。」

「全くお前は……食べ物食わせるぞ。」

「吐きますよ。」

「罰だからな、ちゃんと物を食べ。」

「ウヘエ鬼畜―鬼―悪魔―学長―。」

「何とでも言え。」

ゴミ袋か、雑巾か

「どうしてあの時突然離れたんだ。顛末書に書くからな。」

僕は今学長室に、最初に来たときのようにソファに座っていた。目の前にあるのは事の詳細を伝える為の複数の紙……そして僕が撮っていた写真も混じった複数の写真が資料として置かれている。

ちなみにあの橋の学長との任務が、終わったあとたらく肉食わされた時間がたった今でも油が喉とかの粘膜に張り付いているようで、気持ち悪い。食うだけならと野菜ばかり食って水で流してたのに目つけられた……いや本当に味のついた固形物自体あんまり得意じゃないのに油強めな肉はきついって。

あんまり味が無いものも今の僕じゃ受け付けないのに……うえっあの時を思い出しただけでも胃液が迫り上がってくる吐きそう。最後に甘ったるいチョコソースとキヤラメルソースが、たっぷりかかったバナアイスクリーム追加されたし。好きだった物は、精神的にもかなりダメージがある。

辛いのは、ある種のあの行動への仕置であり説教みたいな物として食わされたんだから学長からみても当たり前なのだろうが。やっぱり食事はゼリー飲料と足りないのは

サプリメントが、一番ラクなことを再度実感した。

栄養点滴で直接打ち込む方法もあるけど、時間かかるからな………動けないし。「詳しく分からないですけど、ここから僕の中だけの想定そして裏付けが取れないものですけどいいですかね？」

にしても顛末書か、確かに補助監督達に基本的に任せているとはいえ本当に事象などを確認したのは僕達だ。特に今回は補助監督さんの付き添いなどはない、呪術師のみで実行し遂行した任務となる。

多分一人の呪術師に、ある程度の補助監督をつけるのは記録の改竄を防ぐ為という目的も有るのだろう。

中の状況は本人談のみで済ますしかない事が多いだろうが、外装はごまかせなくなる。

「封印についてか。」

「恐らくあの封印は、最初に橋を作った時の生贄が主となって生まれた呪霊と。」

鎮めるためとまた生贄を投下した。その結果生まれた呪いどうしが拮抗してた結果の安定だったと思います。」

「お前が向かったのはそっちか。」

あの呪い………達が向かっていった力の主な方向は橋の方、石をちゃんと同じ力で投げ

て対称的な向きでぶつけたらエネルギーがちようどぶつかった地点で0になって2つとも落ちるように……………」

その現象に似たことが結果発生して封印として呪いを抑える作用をしていた。

「ええもう一つの、存在すら知らなかった人達です。学長があのまま最初の方を倒してももう一つの方が力をつけて成り代わるだけだったので。

弱い内にと……………無茶したなあと思ってますけど。」

「今度からちゃんと言葉。」

なので正直全部祓う必要なんて無かったのだ、封印を再度行うという観点から見れば。あの影のような人の残滓をあちらと同じぐらい弱くなるように調整すれば良かった。

……………人が手を加えなければならぬそれほどまでに差が出来ていた要因はおそらくコレだろう。

「後拮抗が崩壊した主な原因……………コレですね。」

「なんだ？ 動画か……………」

人が入っていたか、死体は発見できなかったが。……………途中で切れたな。」

学長は僕が差し出した、スマホに映る動画に首をかしげる。中に入っているのは無理矢理に作ったようなテンションが高い金髪の男が山奥に入っていく様子。

調査のときに壊れていた石を、壊す様子やゲラゲラと下品に笑い荒らしていく。そして最後にジジッと砂嵐がはしり男のつんぎくようなカエルが潰されるような短い悲鳴で動画は終わった。

「人が入っていたこと自体は、あまり問題ではありません……………この呪いが認知され動画という実物も相まって現実的に広まってしまった。その結果橋の方の呪いが、呪力を注がれ強くなり拮抗が崩壊した。

そう考えてます。」

「情報伝達による、遠方への呪いの拡大か……………負の感情が広まる範囲が増えた結果ともいえるな。」

同じ呪いの力で、ある種の無効化をおこなって今回の場合、力の拮抗が崩れるそれそのものが不安定化の材料となる。封印の印が弱まったとかそういう事はどうでもいいのだ、結局村のやった事は意味が無かったのだから。

2つの呪いのうち片方だけに、この動画……………オリジナルは会社側からなのか削除されているが複製が拡散されている事もあって村だけでだんだん退化して終わるはずが。

動画を閲覧した人々から出た、負の感情呪いが注がれ安定の前提である力の拮抗が崩れたのだろう。

「呪いの中心点を橋と誘導して、その地点でのみ循環させ続けるものという予想だな。

呪物として変質したのは膨大な呪力にあてられ続けたからか。」

学長は、暫く考え込んだあと補助監督宛に伝えるであろう資料の記入をしていく。確かに呪術としてはあり得るが、珍しい現象の一つだろう。

普通なら一つのみで閉じ込める、強大な呪いで他の呪いを寄せ付けなくするぐらいで………

呪い同士を拮抗させて、その場でのみで停滞循環させ他の地域に害が行かなくすると言う方法なのだから。

「だから、片方僕が行ったのは只の我儘なんです。あのまま放つてはおけなかつたんです。」

「……呪いは祓える物は祓っておいたほうがいい。お前がしたことは発言の不足はあるが呪術師として当ぜ

すまない席をはずす。」

学長は僕の言葉に、飲んでいたお茶を音を立てずに静かに置き、目を合わせて何処か啓す様に話しかけてくる。

やっぱり上に立つものは、強さだけではなく人望も必要になるのだらうと言葉を聞いて改めて思った。僕は当主として据えられて入るがこころへんがまだまだ不足してるな習うことは多い。

後呪術師として当然のことと言う物が、嬉しくなった。まだこんな業界捨てたものではないとか思い込める一つの理由にはなる。

「宿儺の器だど!!! どういうことだ悟説明しろ!」

私用でそれともまた別の仕事用の携帯なのか途中で音がなり学長は簡単に謝りながら席を外した。

学長室の外でなにかの会話をしているようだが……五条に対しての怒りのこもった大声に鼓膜が破れるかと思いい耳をふさいだ。

宿儺の指と関係あるよなあ絶対、恵の行った任務以外で宿儺の指と関係あるのあったけ……あつ報告が五条からだだったコレ確実に恵の案件絡みだ。

死んでないといいけど。

あの呪霊に受けた頭や体の傷を、高専配下の病院で軽く治療を受けて（本格的なものは家入さん任せになるだろうが）任務用に用意された何処かの部屋で色々ありすぎて逆に眠たい。

そんな中、何度も何度も着信を切つても電話をよこしてくる奴がいた。五条先生なら直接来るだろうし、電話番号からも恐らく。

「やっと出た出た恵、今回の任務無事と言えるのかな？まあ生きてて何よりだよ。」

「こんな真夜中に、掛けてくん。着信音が煩くて寝れねえんだよ、何度も切っただろうが。」

開口一番に来るのは俺の今回の案件での生存を喜ぶ声、口調などは明るい、相変わらずの何処か冷えた様な感覚を電話越しでも感じる。

それには、もう慣れた……俺から見ても最初に会った時よりは遥かに感情表現はマシにはなっている。裏表は少ないが濁りがある、そういう感じだ。奥に進めば進もうとするほど分からなくなりそうになるのは濁りと言って良いだろう。

俺はとりあえず、夜中に何度も電話してきたこいつに隠さず言う。はつきり言わないと通じないタイプな事は、分かりきっていることの一つだ。

「日本にも、時差あるからねー」

相変わらず砕けた口調で話してくる、電話越しに元氣そうでなりよりだと笑っている姿を幻視しそうなほどに。確かに、瀕死の重傷と言うわけではない呪術師と言う毎回死と、隣合わせにしては軽く済んだほうに数えられるだろう。

虎杖悠仁と言う巻き込んでしまった呪いに関係の無いはずだった一般人のお陰で。

……歯の奥がギリリと音を立てた。

「国内に時差なんて殆どねえよ、お前が今いる場所北海道かなにかか？何言ってるんだ安否確認だけなら寝るぞ。」

「今は高専に、任務終わって帰ってるから東京だよ。今回の案件の虎杖悠仁に助けられただけだよ？」

俺は、すぐにこいつからの電話を切ろうとしたが……痛い所をつくように虎杖悠仁と言う名前を出された。助けられたんじゃない……

「……………虎杖か虎杖悠二、そいつを俺の油断で巻き込んだ。」

俺が、この呪術界に巻き込んだんだ。宿儺の指を呑んだことは虎杖自身だとしても。

俺が時間を稼げていれば五条先生があの場合に来ていた、強ければあの呪霊をあそこまですぐに追い詰められず蹴えていた、最初から残穢に惑わされずに宿儺の指を追いさえすれば……………！

スマホを握る力が自然と強くなる、ちよつと画面が歪む……………それを見て買い替えどきかと言う思考が現実逃避するかのように横切った。

「それが偶然宿儺の指を抑え込める特異な存在だったって事だけは、僕は学長から聞いたよ。」

「そうか聞いてたか、お前。」

そういう思考をすぐに水を掛けて強制的に戻されるように、あいつは淡々と事実を確認するように陳列するように語りかける。いつの間にかあいつの取ってつけたような明るい口調は、声にあつた冷ややかで自然と通る物へと緩やかに変わっている。

誰かを責めるものでは、全く無い。けれども赦すものでは、全く無い。

「と言うより、学長が驚きすぎて声が漏れてただけなんだけどね。それを聞いて最後に戻ってきた時に学長相手に少しお話を追加でした。」

「……………秘匿死刑が決定した事もか?」

「勿論! 僕耳は早いからね。」

俺の言葉に、声の揺らぎ等の一切の動揺を見せずさも前提を全て知っているかの様に話す。継木の力は呪いを己のみに蓄積させる特異性が目立つがこいつ自体の本領は対話だと思う。

人に詰め寄るまでもなく、粗を出させるのがただひたすらに得意なのだ。そしてそれを元に、深く深く勝手に掘っていく。

あいつがこの場にいたらきつと俺は一発絞めて会話の流れを切らしてやるだろう、純粹に腹が立つのもあるがそうしなければあつとという間に毎回主導権を取られる。継木としての教育の賜物か、それともこいつ自身の素質そのものなのか。

「そうか……………今聞くのは、筋違いで場違いかもしれないけど……………お前は宿讎の器虎杖悠二の事どう思う。」

……………けれども観察眼と揺るぎ無い善性自体は、本物で完全に俺は拒絶して終わらせ

ることは出来ない。きつと完全を求めることは出来るだろう。

あいつは、高専デビューとかいつて五条という身近なちやらんぼらんを元にした様に普通そうな明るい見えるように、身の振り方を変えた。

実際に、呪術師として動く時には殆ど敬語を使っている。そして任務に抵抗するような素振り自体は見せるが一度もやらなかつたことも遅れたことも無い。

だからこそ聞いてみたかつた。

お前にとつて宿儺の器虎杖悠二は、どう思うと。

「らしく無いね、まあ実際に会つてみないとどうとも言えないかな？」

だけど、恵君が彼……虎杖悠仁と言う一人の人間を生かしたんだろう？ならそれ相應の善性を持っていることは伝わるよ。思い入れの無い人間を可哀想だから肩入れする精神性じゃないしね。」

「相変わらず、お前は一言余計だな。」

確かに俺の我儘な事は、事実だがなんでそこまで知ってるんだお前は。」
あいつはらしくないと、俺の事を言った。

その後に虎杖悠二は、俺が生かしたんだろうと説いたその後理由に理由は善人だからとまで付け加えて。グサリグサリと俺の中臍を潰すように、淡々と突き刺す。

こいつと話してるとたまに隠していた嫌な所が切開され、暴かれるそんな気分にな

る。

「知ってる訳じゃない、事実のない憶測だよ。呪術規定に沿えば宿儺の指を呑んだ彼は即刻死刑だろうし……五条先生はそう言うことあんまりやら無そうだし、現在特級呪術師の乙骨さんという秘匿死刑からの高専請け負いの前例はあるけど。」

そうなると思君の影響しかないかなあって、只の勘だけ。そして普通の人だったらしないだろうし思君からみでの善人だろうなあと。」

「あーお前はそういう奴だよな、本当に！」

……たまにどこまで知っているんだ、と思うことはあるがこいつは知っている事を組み立てるに過ぎないことが多い。それを対話でぶつけて、反応で真偽を確認する。

会話はキャッチボールに例えられるが、こいつはまれに壁当てのような行為を行う。会話によって得た言葉による答えではなく、声の変化や揺らぎ行動をみて心情を図る。

きつとそれをされた。電話越しでだ。

「……………で、僕からちよつと聞きたいことがあるコレ終わったら切るからさ。宿儺の指を百葉箱から本当に持ち出したのか？虎杖悠仁は。」

「見た時には、百葉箱にはもう宿儺の指はなかったとしてあいつは宿儺の指が入った箱を持っていた。俺から見れば確実に持ち出したのはあいつだ。」

暫くの沈黙の後、あいつはふと思ひ出したかのように口を開く。本当に持ち出したの

は虎杖悠二なのだろうか？と俺の目から見ればあいつは確実に宿儺の指が入っていた空箱を持っていた。

参考に渡された写真通りの箱をだ。

「うんそっか。」

今でも僕の中では、まだ違和感の多い案件だから恵も忘れないようにね……宿儺の器が偶然見つかって指を消せて呪術界としては幸せとかそういう単純な物では決してないから。」

「分かってる……………」

そう言えば、あいつは最初っからこの任務が俺に割り振られていたことに気がついた時異常な程警戒をして他の呪術師もつけた方がいいと騒いでいた。この任務以外では恵の実力には妥当だね、かちよつと難しいかもしれないから気をつけてぐらいで終っていた。

実際にそのとおりに俺はこの任務で死にかけた、まだその警戒はあいつの中では解けてないらしい。

こういうのも何だか、あいつの嫌な予感はずかしく遅かれ早かれかなり当たる。まだ解消されていないと言うことは……つまりそういうことなんだろう。

「こっちゃんが何度も電話したから言う事じゃないけど体休めるには寝るのが一番だから

ね、じゃあおやすみ。

明日には恵も高専戻るでしょ、その時に虎杖君紹介してね。僕としても色々楽しくお話しできそうだし。」

「……………言いたいことだけ言って切りやがった、あいつ。寝るか俺も。」

スマホの奥からツーツーと切れたような音がする、時刻をみれば午後0時を過ぎていた。俺は今日を忘れるようにベットに潜り込む、明日も騒がしくなりそうだと臆気に思いながら。

ゴミ袋か、雑巾か 2

僕は、恵と繋いだ通話を切った。とりあえず普通より広めに作ってもらった机の上に、ノートやら色々必要な道具を取り出し広げ自身の中で内容を整理する。

纏めるのは、関連させて可能性を広げるのは後。事柄だけ、ある程度の内容が書き込めるような大きめの付箋に頭に浮かんだ事をひたすら書き連ねていく。記憶力がそれなりにあるだけで、頭の良さ自体は恵よりも下だという自覚はある。僕が出来るのは、ただそうかもしれないという頭の中の道筋を増やすことだけ。

良い選択肢を選ぶのではなく、闇雲に増やしているだけ。……口に出すのは何となくそうかなと思っただけだからいくつも想像は壊れて頭の底に沈んでる。

だからといってしない理由にはならない、そう思いながらひたすらに剥がしては書いていく。頭の中だけで考えるより、文字として出してそれを見ながら組み合わせる方が僕にとっては良い。性に合ってる。

項目としてぱっと思い浮かぶ事が少なくなった。そう思った時、カツンと付箋という紙に書いたような音ではなく固い物にぶつかかった音がした。

手元を見るといつの間にか付箋が無くなっていて、机にはびっしりと剥がされた付箋

が隙間なくくつついていた。ああこんなに使ったのか。……地味にこういう細々とした消耗品の出費が痛い、高専の方から学生なので貰えませんか？とか言つて最初はオーケー貰えたが度合いが酷かつたらしく制限つけられたなそういえば……

共同購入の方が、普通に文房具屋とかでいちいち買うよりまだ安く済むから、それだけでも有り難いけど。

記憶引き継いでたら、こんな事しなくてもすぐに分かつていい選択の仕方とかも分かつていたりしてたのかな……。今は出来るとしても嫌だと言えるけど、僕が僕で無くなりそうだし。

「虎杖悠仁 宿儺の器かあ……。五条的には、すぐにこの高専に入学させるだろうし。」
とりあえずびっしりと貼つてある付箋を机を伝えるようある程度どかして、一枚の紙を取り出す。そしてそこにさつき書いた付箋を、僕なりに纏めるようにペタペタと貼り付けていく。

そこに矢印や囲う様に、円をつけて追記もする。虎杖 悠仁 は必ず呪術高専に入学するだろう、比較的似た前例である 乙骨 憂太 も同様に呪術高専に入学させられている。

違うのは……

「(僕が雑巾だとしたら、彼の立場というか求められている役割はゴミ袋のような物だろ

う。」

乙骨 憂太がコントロールが効かないが故に、本人同意の上秘匿死刑として処理が決定し呪いのコントロールを得た故に死刑の撤廃が成された。

虎杖 悠仁は宿儺の指の器として、適性があつたが故に喰らうことによつて死なず。更に意識を保ちコントロールがある程度の可能だと分かつていても呪術規程上で死刑自体は強固な決定事項だ。

……純粋な危険度からみても、僕も虎杖 悠仁いや宿儺の指の思念のほうが危ないつてのもあるか、乙骨 憂太の折本里香場合は最初から 手を出さない 口を出さない 何もしない と言うある意味での安全牌自体は存在してたし。

主となる寄生者に突つかかつて出てくると、突つかかつてなくても出てくるのどつちが恐ろしいかという話だ。

待遇は違うと思うが、虎杖 悠仁と僕の求められている傾向としては似たようなものだろう……宿儺の指と言う廃棄物をすべて入れる為のゴミ袋か、呪いと言う様々な雑多な汚れを移し替え何度も何度も洗い使い潰してから捨てる雑巾か。

そう思いながら、ある程度紙の中の情報が多くなったら部屋においたプリンターで印刷し付箋を剥がしまつさらな白紙の紙に印刷した物を見ながら完全に同じにならないように貼り付けていく。

「虎杖 悠仁に全員の前で頭下げて土下座してもいいな、完全なるお飾り故に一定の抑止効果はあるだろう。」

虎杖 悠仁の宿讎の指の摂取は、確実にこちら呪術界側の失態となる。本音で言えば、呪いをあちらに混ぜさせないそれがこちらの存在意義の一つなのに今回の案件はあらあまあまあといいところなのだが。

継木家としての決定権は、少ないが錦の旗には近いだろう。それが地に頭をつけるという事は結構な意味を表すことができる。

「けどその後の対応がクソ面倒くさいな、やっぱり呪術界糞ですわ。この業界やめよ、僕の場合はするなら二階級特進のみだろうけど。」

……まあでも色々考えると、不都合やデメリットがでかすぎるからな……継木家のみなら家の者達にも思想的に納得してもらえらるだろうし何とかなるが、婚約者の禪院真衣の方禪院家にも僕の行動は、確実に飛び火する。

ただでさえ御三家は、基本的に修羅に近い様相なのに刺激する物を与えてはいけな。色々と思考の形質が異なるからなあ……こっちの方が、呪術師の家としては異端な事は知ってはいる。

そう考えて、土下座と書いてあった付箋を剥して破って捨てた。考えると虎杖 悠仁の為に僕が最低限出来るのは今の所、調整 根回し 牽制ぐらいか……いつも通りだ

な僕らしいけど。

本当ににも出来やしない。見事なまでの御飾りだ、まあそれが周囲にとって一番いいのだろうけど。

「本当に、仕組まれてないよな。宿儺の指が杜撰に魔除けとして置いてあつた学校に偶然宿儺の器つて……任務も最初つから違和感凄いし。」

そもそも魔除けとして、不適合だしね。

呪いを、喰うことで強化される事がある程度分かつてるとか純粹に知識なかつただけかもだけど……」

夜も遅い、がまだ今やっていることは中途半端で残ることになる。寝るにはスッキリしない、思考を死なずには死にきれない。

一番の不安点は、コレがある程度または最初から予期していた事象または仕組まれた事象である可能性だ。正直に言えば、宿儺の指が雑に放置されていた学校で丁度いた生徒が宿儺の器となる適性持ちだったとか……偶然にしても出来すぎていると思ってしまう。

後、何故か喰つた……

器としての確認は喰つたからできたのだが、最初の前提あの呪物を喰うという思考を持たなければならぬ。力を得るとしてもそれを食べることで、得ようとか……僕な

ら宿儺の指で呪霊を殴るだろう。

でもここらへんの思考は虎杖悠仁という個体の性質を知らないがゆえだ、そこに至るまでの経緯としてわかっているのは恵含む民間市民の呪霊の除去による救命のため。

そこに至るまでの会話二人共覚えてるかなあ……覚えてないよね普通そこまで気にしないもん、流れるには物凄く気になるけど……

「うーんでも仕組まれたとなると、むしろ任務の方が目的には邪魔になるし。アー本当に気のせいでもいいのかーこれー」

もしも、宿儺の指を器として目をつけた人間に喰わせる事だけが目的ならばむしろ高専の任務は邪魔としか言いようがない……こつそり吞ませればいいだけだ。それに見つかったら死刑となることは確定している、実際に五条悟を伏黒恵が動かし五条悟の上層部への宿儺の指20本摂取後の処刑で通っている。

……こつそり吞ませるなら、高専が元々持っていた指のネットワークはあるが全部揃うとは中々いかなくなる。

合点がある程度ついて最も最悪なのが、上層部の一部もグルになつての仕込み。それならば、高専所属にしたほうが指の投与スピードも行動のコントロールも自在にできる。

表向き怪しいのも五条の意見だった、そうカバーできてしまう。恵の提言はあつたに

せよ、乙骨憂太の秘匿死刑を蹴り飛ばした男だ宿儺の器という呪術適性の高い個体を見逃すはず無いだろう。

まあ色々考えても、そこに事実としてある根拠はない皆ただの空想だ。

思考がバラバラだな、分けよう。

そう思い貼っては印刷していた紙の方向性が似通ったものに同じ番号をつけていく……どうやら僕が今思っているのはグループとして分ければ3通りぐらいらしい。

1, 雑に宿儺の指が、魔除けとして置かれていたことも適合者がいた事も何もかも偶然か。

2, 呪術師外部の……呪師と置いておこうか、呪師が今回の案件のコントロールをしていた。

3, そして最後、仕組みられた上でこちら側もグルかそもそも最初からこちらが仕込んだことか。グルだとするなら任務を指定できるのは上層部でも……

「……………悩んでもしやあないか。」

呪術の世界にあり得ない事はあるが、どんな不条理であろうとも持っている術式又は呪物や呪具等でなんとでもなりかねない。ことを成す為の手段なんて、どうとでもなる。

故に思考を止めたら、ソレは未然への対応の諦めと僕にとっては同じになる。呪術師

は手遅れだつて、何度もおじさんが言っていたけどね。

僕は、散らかった使つてない付箋やそれなりにコピーした紙を一つのファイルに纏め本日の日付のタグをつけて仕舞い込んだ。ある程度の終わつたことに安堵かそれともしたことによる疲れか眠気が欠伸を一つついた。

「学長に相談するしかないけど、僕個人の中でどこまで口外してもいいか。京都校の学長は、割としっかりしてる人だからゴミ袋はパンパンに溢れ出るまで使つておくタイプじゃなくてきつちり捨てようとするからな……………」

方向性が決まつたところで、次に考えるべきは手段であろう。呪術の世界では手段なんてどうとでもなるといったが、ソレは力あるものにだけ適応できる話だ。

生憎僕には、そういうものではない。だからそういうものからしてみれば鼻で笑つて一蹴されるかも知れないが地味に積み上げていくしか方法はない。後はせいぜいすぐ首を縄に繋がれないように輪郭を避けながら外堀を埋めていく、それぐらいだ。

そうなると3の想定がもし、真実と近かつた場合は上層部に近いこの場所高専もある意味警戒対象に入る……………二人の親しい学長も範囲内だ、まあだからといってどうした？とも言うることにもなるが。

2. 3の場合から見て、虎杖悠仁に宿儺の指を喰わせるという目的は確實。

個を無視するのであれば、すぐに虎杖悠仁は予感からしても殺したほうがいい。溢れ

るまで入れるか入れないかそういう程度の問題ではない、仕組まれている以上歯車の核となる彼を殺せば新たに作られない限りは時間稼ぎができるからだ。

……時間稼ぎに過ぎないけど。

あくまで歯車の一つなら、入れ替え又はソレ抜き計画の再編等いくらでもやりようがある……僕ぐらいの平凡な思考でも思い浮かぶのだから当然だろう。

「呪いに適合しただけの、一般人だ。いつか殺されるとしてもソレは宿儺の器としてではなく一人の人間として死ぬ必要がある。殺されるにしても死ぬにしても。」

ここからは、予感ではなく僕個人としての勝手で身勝手な考えだ。

会ったこともないが、まあ明日には会いにくし会うことになるだろうけど。呪いは関係のない生活を送ってきた人だ、例えば器となり忌み者として見られるようになるのが、器としての役割ではなく彼個人として保ってほしい。

「アレはもう死んだ物だ、どれだけ強大でも似た何かにしかなり得ない。」

宿儺の指を、取り込んで彼の中に宿儺がいるとしても結局は力のコピー複製物でしかない。本当の両面宿儺彼自身はもうそこにはいない。

見ているのは思考の影に似たようなものにしかならないと僕は思ってる。

「死は救済とは僕はとても言えないが、死はあらゆる物の最後の襖にはなる。ソレははつきりと思ってる、だから宿儺の器としてだけで殺さないでくれ。」

とか言っても、どうなるかなあ………僕に出来るだけのことはやっておこう。」
だからこそ、死ぬ時は器ではなく彼自身と認識してほしい。死は、救済ではないなるべくなら避けたほうがいいそれを遠ざけるために人は労力を裂き呪いという幻想に頼らなくても長くあり続けることが出来るようになった。

死の形自体も、在り方も少しづつ世界歪めず理解して変質させてきた。

……でも救済ではないが、最後の禊の儀であるとは思っている。罪があるのなら赦しも合わせて必要になる、罰は赦しを得るための通過儀礼のようなものだろう。

子供が、コケて血が出て後々傷が塞がっていくのをコケたという原因が罪 その結果血が出るのが罰 傷が塞がるのが赦しのようなものだ。

だからその最後の赦しを、両面宿儺という自身に巣食った影のため消費してほしくない。
い。

死ぬなら、そして殺すなら、彼として殺してくれそう切に願うのだ。僕が僕としてあるように、彼も彼としてあってほしいそんな身勝手な思いだ。

「……………」

片付けられて、綺麗になった机から離れてそんな思考を切り離すように指でとつくに覚えてしまった携帯番号を押ししていく。

「夜遅くに申し訳ない、ちよつとこつちの方荒れそうだから………ゆつくり比重を海外

の方にうつしてくれないかな？

日本を捨てるわけじゃない、一旦展開を抑える。大丈夫かな？百鬼夜行の時と同じように。」

継木家は、ある程度大きい家だそれも呪いとは関係のない部分が……だから他よりも呪いに関わらない人を背負う。

ああ本当に慣れた、精神的に辛いのも慣れた嫌になる。けどしなければどうなるのだろう、考えたこともあつた純粹に呪いで死ぬ人の数が増えるだけと思つた。

「継木 櫻様が言うのであれば。」

「……………今代継木はこの僕だよ。」

ああ気分が悪い、そう思つて当主としての役割は果たしたと思ひ返答も待たず、すぐに通話を切つた。

幸せの味 小話 東京高専サイド

「今日も例年通り……か。」

2月14日、恋人や親しい人間にチョコを主とした菓子類を贈る日……と製菓業界が唄った日。

継木家のある一室には今回も大量の菓子類、酒、その他が雑多に届いていた。宗教みたいなお供え物や、会社からのチョコ菓子の試供品や、純粋な贈り物として等、理由は様々だ。

おじさんの時にも、大体同じような事になっていたらしい。そういえば僕がチョコ好きだったのって、よくくれるお菓子がそれだったというのもあったような……

絶対消費しきれないから、僕に回してたって部分あるよね……おじさんの立場だったら僕だってそうするし。

「とりあえず手作りは、廃棄して……」

そう言おうと思つたとき。

「もう分けております。」

「あつそうなんだ……手作りは食べないようにね、何入ってるか分からないから。廃

棄した上で貰ったのが、この量か。確かに手作りは受け取りませんかとか前々に話したことあつたけど。」

家の者がもう分けたと、返答を返す。毎度の事だから仕事が早いというよりは一種のルーティーンみたいな感じになつてゐるのだろう。家族持ちの家の者が遠慮しつつもある程度取つていつた後に残つたのがコレであり、ここにいる者達のお茶菓子として暫く出す分を差し引いたとしても大分残るのは目に見えていた。

「高専の人達で消費頑張つてもらうか……生チョコとか期限早いのも混ぜてるからなあ。後高専の先生ぐらいいしか食べられないお酒強めのやつとか五条にも食べさせられないな、すぐ酔つ払うし。」

昔は御三家にも、貢物を分けるという名目で勝手に送つていたそうだがあつちも量送られても迷惑という話や、バレンタインは西洋の新しい行事であることも相まつて何回かやつた後断られたらしい。

個人的におじさんは、嫌がらせか何かはわからないけど今の禪院家当主にお酒とお酒のチョコレートは送つてた事は聞いた。

「……ひとまず東京の方から分けに行くかあ、一応代理立てずに僕個人も行くから車お願いするね。」

いいかい？

京都の方は、明日行くことにする。」

「継木 櫻様の仰ることであれば。」

ここにある荷物を家の人達が、ちよつとしたトラックに積めるだけ積んでいく。まるで業者だなあとこの光景を見るたびに毎回思う……中身は手作りのものはないといえバラバラ過ぎるが。

さてどれぐらい引き取ってもらえるだろうか……学生だけではなく高専所属の呪術師にも配ってもらえるだろうか、とりあえず僕は車に乗り込んだ。

走るたびにガタゴト荷物が音をたてる、そんな雑音を聞きながら目的地に着くまで朝の光を遮るように顔に布を被せて眠りについた。

ひとまず駐車できるスペースに車を置かせてもらい、起こされてまだ覚醒しきつてない頭と寝起き特有のぼやけた視界をなんとかしようと思いを擦りながら、それなりの大きさの荷台に菓子や小物を載せてガラガラと運んでいく……

学長にお話したいが、学長室に直接向かった方がいいのだろうか。

「相変わらず、すごい量だなコレ」

そう思っていれば、動物園で人気者のパンダの姿をした夜蛾さんのパンダさんがポテポテと歩いて近寄ってきた。思わず僕はその真っ白くてふわふわの身体に抱きつき体

を埋めた。

「こんにちはパンダさん今日も真つ白でフワフワもふもふですね……………えーと乙骨憂太さんは何処に、海外でしたか。確か……………秤さんと綺羅々さんも今停学で……………」

そう考えると、ちよつと持つてきすぎましたかね？一応まだ積んではあるんですけど。」

砂糖が主食の五条が、持つてきた大部分を消費するとは考えてはいる。けれども今の東京校は随分と欠員が多い、停学然り海外研修然り……………知つてたけど分ける量ももう少し考えれば良かったかなあと反省する。見ての通りのふわふわだなあパンダさんの毛皮……………毎日仕事で疲れた。

呪力取るためにあつちに行つたりこつちに行つたり、精神弱つてる人たちの相手したりとか色々。ずつと何も考えずふわふわに埋もれてたい。

「貰えるものなら貰つておく、主義のパンダだから問題ないぜー。後勝手に抱きつくなよなー」

「ワフツモゴッ」

まあそんな訳にも、いかないんだけどね。顔に肉球の感触がして息が詰まる。そのあとすぐにべりいっと音がするようにふわふわのパンダさんからひつぺがされた。

終わってしまった……………。

「シヤケ」

「そうですね、狗巻棘さん。まあでも消費期限短いものから頑張ってください。」

「騒がしいなどいつなんだあ……うわっ継木来てんのかよ。まだ高専生じゃねーだろ部外者は帰れ。」

「こんにちは、義姉さん。ちよつとバレンタイン関連できた食料品とかの消費手伝ってもらいたくて高専にきました。」

ちよつとへたり込んで剥がされたことに落ち込んでいれば、狗巻さんが僕を覗き込むように動き、真希義姉さんが僕を見るやいなや、呆れたように手をしっしつと払うようにしながらため息を溢した。

確かに部外者といえば部外者ではあるが、でも呪術の関係者と広い目で見れば関係者のうちには入れると思う。そろそろ僕、高専生になるし。東京高専に決まったから、この人達は先輩にあたるのだろう。義姉さん先輩は語呂が悪いな……どっち優先しよう。

そう頭で思いながら、二人に精一杯の笑みを造り返答をする。だいぶ慣れた、表情を造ることにぎこちなさはなくなつてると自負してる。

「義姉さん言うな、私は家で決めた婚約なんて認めてねえからな！」

……嫌われちゃつてみたいだね僕、知ってたけど。仲良し姉妹それを家の都合と

して本人の了承もなく婚約になつてゐるのだ。僕の了承があるかはもう気にしてない、真衣さんからは無いことだけははっきりとわかつてゐる。

まだ嫌われてない時もあつたような気がするけど……いつからか段々となつた。仕方ないよね僕が悪い全部。

「そう言つて―あくまでも家で決めた婚約であることに反発してるだけ……」

「うるせえパンダ！ 白兵戦で負けるような弱ちくくて力が無い頼りねえ奴に、私の妹任せたくねえつてだけだ。」

「おかか いくら」

「ハハハ、真衣を任せてもいいと義姉さんの方から言つてもらえるぐらいに精神的にも肉体的にも強く立派になれるように頑張りますね。」

真衣さんの婚約相手として真希義姉さんに認めてもらうには、やつぱり強くならないと……原因は他にも沢山あるけど僕にすぐできるのはこれぐらいしかない。

毎回白兵戦の訓練をすると、一本を取れない。だけでも一本も、取れないことが多い。

舐めている訳ではない、真剣に純粹にやつたら自然とそうなる……いやなつてしまう。体が覚えているように、一本取れると思う前に一本取られるのを防ぐ行動が体から出てしまうような感じ。

パンダさんや狗巻さん相手だと、千日手のようになり……真希義姉さん相手だとその癖が分かっているのか僕が一本取れないことを前提に考えているように力で無理矢理突破され一本を取られる事が多い、後純粹に体力切れで……

最低限一本は取れるようにしないと……後真希義姉さんに一本取られないようにもつと行動対処法考えて覚えなないと。

「だから義姉さんと言うな！ 継木。」

「まあいいじゃねーか。」

「メンタイコ ネギトロ」

そうやって4人やかましく喋っていれば。

「賑やかだねえ4人とも！ うわあチヨコとか菓子こんもりとコレ何日分？」

五条が来た。

「ちよつとバレンタインデー関連で貰ったものを今消費しきれない分を分けてるんですよ。まあ五条悟さんなら、学生時代から先代もしていたというので分かっているとってますが。」

相変わらず、元気な方だなあとと思う。五条さんも高専に入っていたそうだしそこらへんはもう知ってるだろう。継木家との付き合いも御三家の一つ五条家としてあることも相まって。

「ウイスキーボンボン知らずに皆喰ったときは酷かったねー。サクラー、コレの中にお酒入りはないよね? 僕、酒弱くてさー」

「コレ学生さん達用なので抜いてますよ。お酒入りは学長とかの先生用で分けてます。」
五条さんは、持ってきた菓子などが積み上がった山をふざけた様な砕けた口調で指を差して。酒入りのチョコがないかを笑いながら確認してくる。

それに僕は、最初っからお酒入りのチョコは分けてあると返答した。

お酒に弱い……まあ結局お酒なんて軽い神経作用のある毒のようなものなのだが、外部からには強くても内部からは中々難しいようだ。百薬の長としてお酒は言われるが、薬は毒だ。百毒の長と言い換えても意味合い自体は変わらない。

何事も過ぎる事は害となる。自己にあった割合を、結局はそういうものなのだろう。夢に浸りすぎれば、現に戻れなくなるとは耳が腐るほど僕は言われてきた。

「五条先任務とか聞いてたが、帰ってきてやがったのか。」

「うーんまあ終わって、報告行こうと思つたら。ちよーどの所に君達の色々と賑やかで元気な声が聞こえてね、ついつい気になって寄つたらつとところさ。」

黒いアイマスクで、目元から表情が読み取れない代わりに口元がよく動く。意識してるんだかしてないんだか僕には分からないが、いつの間にか彼の手元には大量の甘いお菓子が取られていた。

きつと戦つて死ぬよりも、糖尿病とかの生活習慣病になる方が早そうだ。負傷はともかく本当の病氣つて反転術式で治るのか酒で酔うのに？と思ひながら空を見る。空気は冷たいが日差しがあつて眩しい、コレを晴天と呼ぶのだろう。

「とりあえず、保存効かないやつを冷蔵庫に仕舞つておきたいので学長とか他の先生いないですかね？ ひとまず職員室の冷蔵庫に詰めておこうかと。」

「それぐらいなら許可取らなくても良くない？ 僕がすぐに消費するだろうし。まあいいや、櫻は真面目だからねえ。」

学長は、あつちらへんで見かけたよ。というか僕も先生なんだけどー」

とりあえずそろそろ学長探しに動いた方がいいだろう、ドライアイスや保冷剤の時間は魔法や呪術なのではないのだから無限というわけにもいかない。ちよつと愉しくて長く居すぎてしまった事を反省しながら。ここにいる4人に学長が何処にいるだろうか？と聞けば五条さん以外は首をかしげ五条さんは指だけで方向を示す。

適当なことが多いから、心配になる。

けれどもそれしか当てがないわけで、行つて居なかつたら無駄足になるだけだなそう思つて歩いていく……

「訓練所付近ですかね、では2月で涼しいですが溶けてしまふといけないので失礼しますね。4月に僕新入することになりましたので。」

今度会うときは パンダさん 狗巻棘さん 義姉さん 新入生としてよろしくお願
いいたします。」

ととつ、挨拶はしておこうかな……東京高専に入ることが決まったからにはここに
いる人は先輩となる人達でもある。五条さんはまあいいだろう……付き合い長いし。

そう振り返って笑い、すぐに足を進めた。

「おうっその時は、たっぷり扱いてやるからな！楽しみにしておけ。」

「たらこ そぼろ シャケ シャケ」

「何度言ったら分かるんだアイツ。」

「ねえ聞いて、えっ、さり気なく僕抜かれた？」

「嫌われてるんだろ。」

五条さんが指した方向とは真逆の場所に、学長はいらっしゃった。

彼は度数の高いだけの安酒か劣悪なMDMAでも飲んで幻覚でも見てたのだろうか
？ そう思いながら、ノックができない空いている扉の前でお辞儀をしてから入る。

「こんにちは、学長連絡もなく申し訳ありません……………」

「もはや恒例行事に近いようなものだからな、そこまで気にしなくていい。いつも通り、
冷蔵庫を借りたいという話だろう。」

なるべく静かに音を立てないように入ると、ここに座れというかのように学長は横の床をポンポンと叩いた僕はそれに促されるまま横にしゃがみ座る。

学長の手元と周辺には、呪術関連の任務の割り振りなのだろうか起こったことと調査依頼など書かれており依頼する人の名前の付箋が大量に貼つてある。

本場に忙しいよね、西日本周辺は京都高専が担つてくれるとはいえ東日本とそして天元様関連は主に東京高専が担つているのだから。内容は気にはなる………があんまり見ないことにしよう僕は部外者だ深く突つ込むのは良くない。

するとしたらちゃんとした方法で、調べ上げる。

「ええそうですね、今回も要冷蔵と要冷凍のものがありました。時間を喰いまして保冷剤とかドライアイスが溶けて要冷凍の物が危ないかなという感じです。」

僕は学長の方を見た、すると書類を一旦置いて手をパンパンと鯉を呼ぶ様に叩く。すると何処からか呪骸達が現れて書類から何から何まで、運んでいく。

大きいものは、流石に一人？では持てないらしく複数で運んでいる。この光景を見るたびに何処かのニン○ンドーのピク○ンのようだなと思うのは、仕方ないと思う。

「人気者も大変なことだ。後は呪骸に運ばせる、お前は気にしなくていい。」

「ありがたいございませう、結構量が多くて………疲れるんですよね。呪骸ですか、凄いですよね本当に。仕組み知ったら僕にも作れますかねなんちゃって………人気者という

より、崇拜に近い人達が多いのがまあなんとも言ったところですけど。

会社の付き合いで、新商品みたいなものありますし。ちよつとしたお歳暮みたいな。」最後の一つになるまで、ぼてぼて運ぶその様子を見ていたいと思つたが上に立つ者らしい威厳を感じる学長の声に意識を戻される。

僕にもこんな感じのもの作れないかなあとぼんやりと口にしつつ手をまごまごさせながら。

人気者か……と考えていた。確かにこんなにも量を貫うのは、ある意味でそうかもしれない。けど純粋に芸能人みたいな感じーかと言われるとなんか違う気がする。呪力を溜め込んでたり、呪霊に憑かれている人の相手をするのが主なもの、そう言うことになる原因かもしれないが……純粋な好感よりも依存や執着の方が色合いが強い。

呪霊に憑かれている人間以外は呪力という負の感情を吸いとっても、根本的な解決にはならない。一時的に気分は安らぐかもしれないが、その気分の安らぎに惑わされる人達はどうしても多くなってしまうのだろう。甘味のように酒のように麻薬のように。

呪力が、多ければ多いほどに。

突然大金持つてこられたり、周囲を巻き込むように勝手に色々僕のためと他人を思っている様な自己陶醉してやられるよりもよつぽどチョコ菓子などの贈り物の方がましであるが。量が多いと、処理が大変になるけど。

それに中には、企業という組織から貰うものもある。正確には僕宛ではなく、継木家というある程度の企業を運営している組織として宛られたものだ。そこら辺は今の僕はあまり関与していない。関連のある企業や、継木家の配下企業は一応覚えただけ。

「お前が使っている式神と感覚は似たようなものだ、簡単なものならいけるかもしれないぞ。」

呪力……負の感情を取られれば、崇拜にも近くなるだろう呪術師の中でもお前は特異な存在としてあるしな。」

と学長は何処か励ますような口調で、話し出す。

告死蝶とは、似たようなものかなあ……核がない呪力だけの単純な式神の一種なんだけど量が凄く多く扱えるっただけで……傀儡の第一人者である学長が言うならそう言うところもあると思う……

特異な存在か。

「実感は無いんですけどね、吸い取ろうって意識してやってるわけではないので。なんだろ感覚としては呼吸ですかね、呼吸と違って意識しても止めることはできませんけど。」

偉大なる先代達なら違ってたかもしれません。」

呪術界では、とりわけてそう見られている自覚はある。良くも悪くも呪術師というマ

イノリテイの中のマイノリテイ……だけでもコントロールが効かないが故にいまいち僕個人としてナニかをしているという認識は薄くなってしまおう。他人の呪力を取っているせいか気分とか体調は毎回悪いけど……

量が多いと呪力を取る量も多くなる、少なければ少ない……そんな感じでスイッチのオンオフとか強弱を自身で決めることが出来ない……だから余計に気分悪くなってるんだらうけど。

おじさんは、どうだったのかな。気分が悪そうにしてたけど……きつと僕よりは上手くやっていた。それは揺るぎ無い事実だ。

「……………上手く行かないなあ。」

小さく小さく、少しの物音で掻き消えるような声でボソリと呟く。

呪具の扱いはある程度出来るようになった、けどそれはそれまでの事。全ての基礎となる呪力の操作がいまいち掴みきれてない。負の感情を火種として練り上げ、呪力として抽出し運用するのが呪術師……呪いを操る者の基礎だが、こちらから見れば負の感情を元にする呪力は外部から勝手に己の内に入ってくる物であって己の内部から練り上げて出すものではない。

力の方向が逆回転とは、よく言ったものだ。何とか身体強化とかの基礎中の基礎までこぎつけられはしたが……繊細なコントロールには程遠い。

「高専は呪術に関して学ぶ場所だ、お前がいくら特殊だとしても少しは呪力操作とかの助けにはなるだろう……それに呪術の才覚自体はある方だぞ継木、二級呪霊をほぼ単独で倒したその話は聞いている。歳を重ねた呪術師でも二級止まりが殆どとなるのにこの年だ。」

記憶はまだ引き継がれてはいない様だしな、お前の様子だと。それに引つ張られすぎてないか？」

呪術について学ぶか、学んだ所でコレどうにかなるのかなと思うのが正直な所ではあるが……。他の人の呪力の練出し方や呪術から何かを、掴むのもアリなのかもしれない。僕がまだ使えてない生得術式以外の物も多いだろうし。

「才覚に年は関係ありませんよ、若くして刹那のように散る者もいれば老年にて開花させる人間もいます。それに武器の影響が殆どですよ、きつと素手だったら三級すら祓い鎮めてあげられないと思います。」

んっええそんなんですよ、時間が経てばって問題でも無かったようですよ。でもそれはそれで良いかなって思っていたりもしますよ、ちゃんと今は僕が積み上げた物だったって実感できるので。」

二級を倒したから才能はある、と言われても正直ほぼ呪具による力が殆どを占めていると考えてる。どれだけ手酷く扱おうがシワすらつかない巻物もそうだが、柄のみの剣

が呪霊に対しては無法と言つていいほどの力を誇つてる。

その上での二級呪霊の鎮魂なのだ、鎮魂の功績の中の僕自身の力としては呪具を使わなければ殆ど無いに等しい。

それに呪術の力は、基本的に不安定その一言に尽きる。生まれつきが8割とは言うが成長の伸び代が良くも悪くも読めない世界だ。更に呪力自体解明しきれていない部分が多く、それ故に才能が重視されるのではないだろうかとも考えている。素人が剣を持つのか達人が剣を持つのかの違い。呪術には銃は無い。そういうこと。

新しい才能ある新芽が踏み潰され、芽もでない種が少しの切っ掛けで大樹になる。

そんなものだ、そう言う世界に若いのにコレだけできるから凄いとというのは呪術師としてまだペーパーの僕が思うのもなんではあるがナンセンスだと感じる。

んっにしても記憶に引っ張られてるか……、確かにあれば違っていたかもしれないと毎回のように思つてる。反転術式や領域展開歴代から脈々と引き継いで繋ぐ事こそが、継木家のもう一つの利点で他の呪術師には無いことだ。

僕にはそれがない。

自分が今していることは、自身で積み上げたという自覚があるから嬉しいとは言つてはいるが………実際には只の劣等感の誤魔化しに過ぎないと思うことはある。もつとも突然やられたとしたら記憶で脳がパンクして僕いう微かな自我が消し飛びそうな気

しかない。

「……………受け継いだとしても、お前はお前だ。先代とはだいぶ違うぞ。」

「僕と先代は別人ですから、当然の事です。お酒のチョコは結構量持ってきたので……………高専ですし他の成人の術師方も任務を受けにいらっしやると思うので、適当な配分で色々分けてください。」

とりあえず話を切り替えよう、頭が色々痛くなってきた。久しぶりの休日に限りなく近い日をアンニュイな気分で過ごしたくはない。

適当な、話題の切り替えとして本来の話であったチョコの分配の件について話し出す。

学生達は、未成年なのでアルコール度数が高いウイスキーボンボン等のお酒のチョコはどうしても配れない。だから別途で分けたのだが……………大人の方にもお酒に弱い人はいるもの、全員が全員強かったら忘年会の十八番急性アルコール中毒による病院への搬送は無いだらうし。

……………まあ必要なことだったとはいえ未成年の身でお酒飲んだこと数えきれない程ある僕が、ダメとか云々あんまり言えないと思ってるけど。

それはそれだ、ひとまず置いておこう。

高専なら、一般呪術師の依頼の仲介を多くするなら分けるのも造作もないことだろ

う。だから持つてきすぎとは、言わせない。

「細い飴のようなチョコでもあるか？」

「チョコ味の飴なら、棒付きですよ。」

「ああ日下部が、禁煙中だな。」

日下部さんか……禁煙していたのは知っていたが、理由は妹さん関係かな？詳しくは知らないけど、彼の妹さんが赤子を身籠った辺りだったかなあ。

タバコは副流煙とかもあるしね、妊婦さんは基本妊娠中にタバコ吸うことを禁止されるから。いや妊娠終わったら良いって訳でもないとは思うけど。

家族愛言うなればそんなものかな？

「自身の、体を気遣うことはとても良い心掛けだと思います。どんな理由でも。」

「継木なら、もう知っているだろう。今知ったような感じで話しやがって。」

そうやって僕が純粹に思ったことを言えば、何故かそれが学長の気に障ってしまったようで頭をゴリゴリされる。力が強い、頭割れる頭本気で割れる！何で！僕悪いこと言った覚え全く無いよ！

『自身の、体を気遣うことはとても良い心掛けだと思います。どんな理由でも。』

って笑顔で言ったことの何処にそんなにされる要素ある?! 理不尽ここに極まれりだと感じるよ！

「ちよつと頭ぐりぐりするのはい！ 痛いんですって。僕が言うのもなんですけどひ弱なんですよー！」

「呪術師として、こんなことでピーピー言うようでは務まらんぞ。」

「それとこれとは全く違うような気がしますけど！ 理不尽圧倒的に理不尽……！」

十数分間頭をゴリゴリされ続けられた……本当に僕そういうことされるような事した？

「酷い目にあつた……！」

そう思いながら、ちよつとボロつとした様子でまだ痛む頭を抱えて目に涙を溜めた。呪霊と戦っている時とは違い脳内でアドレナリンが出てないせいとか地味に痛みが続く。

戦っているからと言って、痛みとかそういうのに日常から強いかと言われればそうじゃない。僕だつてある程度の切り替えは必要だ。常在戦場のような戦闘狂の思考回路持つてないし。

普通に紙で、指切るの今でも痛い。

「せいぜい言葉遣いには気をつけることだ、人には触れられたくない領域と見られてるとは思つてない領域がある。それに踏み入るとこうなるぞ。」

「それにわざわざ踏み入ろうとしてる訳じゃないですよ、知ろうとしたらそこに近かったりするだけで。僕そんなに悪趣味じゃないですよ。」

触れてはいけない領域には、ちゃんと気を付けているつもりではある。そこらへんは言葉には出してないし、もし僕が何も考えてなかったら最初の学長が任務依頼の資料広げてたのを静かにガン見している。

それに僕そこまで悪趣味じゃない……………

「ハア……………まあいい、先代は勝手に人の記憶引っこ抜いてくるようなやつだったからな。自分の手の内でできるだけで済んでるからまだマシだ。」

「……………本当に毎回思うんだけど、何やったんですか先代？」

「……………」

僕と学長の間には重い沈黙が、漂う。

うんこれが、学長のいう踏み入ってはいけない領域だな……………また頭をグリグリされて何故かミシミシ聞こえそうなものやられたくないしここは素直に。

「わかりました、聞きません。」

とはつきりと言う。おじさんは、僕が見てきて思ったより悪趣味で性格悪かったのかも……………それでも僕の大切な親のような存在には変わりないけど。

「それでいい、明日は京都の方に向かうんだろう？ 特に手間でもないしこつちからそつちの学長に話しておく。俺からの電話ならある程度出るだろうしな。」

「ありがとうございます。もう知ってるとは思いますが、僕東京高専の方でお世話にな

ることになりました。これからよろしくお願いいたします！」

京都高専の学長には、学長が連絡つけてくれるそうだ。

明日は京都高専に、チヨコの分配と。お兄さんや真衣に会えるかな？ 僕は東京高専に通う事になってから学生といえども二人に会う機会は減ってしまう。だから今のうちにたくさん話したいなあ……そう頭の中では思いながら。

学長に向かって、お世話になることをお辞儀しながら言う。もう東京高専に行くことは学長だし知っているだろうが、礼節は大切なこと。それで人間関係などが上手くいくなら良いことである。

それに三年間のモラトリアムを過ぎす場所の責任者だ、意識しなくても世話になることは多いだろう。

後純粹に、継木 櫻としても卒業後に関わる機会は東京高専を担う学長として長い付き合いにもなるだろうし。30才で呪いに芯まで侵され死ぬこととなるのに長い付き合いというのもまた可笑しな話であるが。

「……………その話は全く聞いておらんが継木が、ここ東京校に通うだと??? まだ話し合っておらんぞ向こうの学長とは……………」

「えっ？ 学長が決めたんじや……………」

学長なら当然知っていると思っていた……………じゃあいったい誰がそういうことに、特

に利点も何も無いはずであるが……………

「あー五条先生か？」

思い当たるのは五条悟しかいなかった。

そういえばよくアポ無しで突撃してきては、貴重な休みを潰され、話せば途中離脱しまくってたなあ五条……………よく恵君やらなんやら連れてきてたけどアレ僕の食い止め役の意味合いもあつたのか？

なんだか思わずため息をついてしまった。

「五条か……………とりあえず今から学長同士で調整すれば何とか東京高専か京都高専か選べる様な状態にはなるとは思うが。」

学長は僕の様子を見て、そういう心優しい提案をしてくれたがそういう訳にもいかない。

「いいです、家の者たちが決めたことですので僕に特に介入権とかの権力はないので……………」

家の者たちが決めたことには基本的に従うのが基本、わがままを簡単に通せるほど権力は無い。

「そうか、なら東京高専学長夜蛾正道として継木櫻お前を高専生として歓迎する。」

「はい、よろしくお願いいたします。」

幸せの味 小話 京都高専サイド 1

東京と特に変わらず、京都も芯が冷えるように寒い……。そう思いながら同じようにチヨコレートやらのお菓子を入れた箱荷台に乗せてガラガラと持つていく。

そう言えば午後から雪だと、家の者達から聞いています。店への物の運搬の関係は大丈夫であろうかこっちから事前に多めにと話せば良かっただろうか……。そこら辺は僕から言わなくてもなんとかなっているか。

違いといえば、こちらのほうが古くからあるせいなのかちよつとスムーズに押せずにとりおりガツタンガツタンと音をたてたり力をいれないと詰まる地面の状況があるぐらいか。

「継木 櫻久しいな！元気にしてたか？」

誰かが後ろから笑顔で声をかけてくる。

少し驚いたように振り返れば久し振りに会う、懐かしい姿が見える。加茂憲紀お兄さんだ。それと同時に荷物が軽くなったと感じたが、荷物を一緒に押してくれている。

一人でも大丈夫なのに……

心配して貰える事自体はとても嬉しいけど、兄さんからみたらまだまだ幼いのかなあ

僕。いや確かに年二つも違うけど、顔つきも呪術師としてひよっ子だとは思うけどねえうん。

何だか悲しくなってきた。僕が悪いんだけどね、こういう何故かよくマイナスの思考回路にいくところとか。ポジティブ過ぎるのもよくないとは思うけど。

「ええー！元気にやってますよ、せっかくなので英語の勉強もしましょー！」

元気にやっているかと言えば、正直いつも気分が悪くたまに胃液吐いてたりするから嘘になってしまいが……血反吐吐くよりはまだまだましだろう。いつも通りと言えぱいつも通りなのでここは元気にやっているということにしておく。

悪化はしてない、元々悪いだけで慣れたけど。

そう言えば兄さんは、TOEICの学習をしていると暫くの前に聞いていた。海外からの営業所等の記事に目を通す為に僕もそれなりには英語などの海外語の習得はしていると言う自負はある。

こういうテスト程度ならちよつとみれば癖分かるだろうし、教師という本職には及ばないが……少しは教えられるだろう。やれるように出来るようにはなく、点数を取るための勉強なら人に教えるのも出来る。

「ああ継木は、勉強は人より頭一つ抜けているからな。ちよつと組み合わせの表現の仕方ですまずいてるところがあつてな、それ教えてもらえると助かる。」

勉強は、頭がいいわけではなく記憶力がやたらと何故か良くなったただけなんだけどね……見当違いや勘違いとかすることも多いし。基本ネガティブだから、悪い予感ばかり思い付くし。

でも出来ないよりはまだいいだろう、こうやってお兄さんとかの役にもたてるしそれはとても僕は嬉しいことだと思う。

「もちろん、僕がやれることなら何でもやりますよーあつすいませんなんでもはちよつと嘘つきましたね。やれる範囲でお願いします。」

「そうだな、とても友好で親しい仲とはいえお互い呪術界にとつてどれだけ小さい行動や発言でも影響がある立場だからそれ故に見合った行動や発言をしなければならぬ。」

ちよつと気分が乗って、失言してしまった。そう思いちよつと誤魔化すように笑えば、悪戯のようにお兄さんは頭をポンポンとたたいてきとすような口調でほだらかに話す。

その様子は何処か、楽しげだ。

どれだけ仲がいいと多分一方的じゃないから、お互い思っていたとしても。お互いに立場というものがある、お兄さんには加茂家の次期当主の僕には継木家当主としての、本来ならばこういう風に仲良くしているのも加茂家としては良い目では見られないだ

ろう。

穢れた血と呼ばれもするのだから。

こうやっているのは、僕のがままでもある。本来ならば見合つた行動ではないけど……：……：そう言う立場以前に人間だ別にいいだろう。高専という場所で、学生の一人と仲良くしているそう言い換えればそんなものだ。

もうお兄さんには最初から短い付き合いになる事は、もう話してしまっているだからこそでもあるのかも知れない。かなり幼い頃に言つたから忘れてるかもだけど。まあお兄さんには忘れててほしいからいいむしろその方が。

「加茂家次期当主らしいですね。」

僕の気は楽だ、正直あの時の発言は失言だと思つているし。恥ずかしい思い出の一つでもある。

いや体調とかとても慣れてはいなかったとは言え、あの態度とかは酷かつたな今思い返しても穴のなかに入りたくなる。そもそもこんな年にあんなことされてるのが可笑しいと心から思つてはいはするがソレはソレコレはコレだ。

他が悪い事から自身の悪い事が正当化されるわけではない、また逆もしかりだ。他が良い事をしようが、それが自動的に自身の良い事となるわけではない。

「君こそ、継木家当主として立派に日々努めているじゃないか？ 京都高専にいる間も話

には聞くぐらいだぞ、私の事でもないのに鼻が高いぐらいだ。」

こう言われるのも、僕としては家の功績であると別けて否定したくなってしまう………けれども過剰な自身の卑下は相手の称賛に対する侮辱になる事は分かっている。

「僕もすぐに高専に入ってから、一級の推薦を受けたと聞いてますよ！」

だからそれに触れず、お兄さんに対する称賛を返した誤魔化しのように僕自身の気分は少し悪いが………

思っている事自体は、本場で嘘偽り等無い。それは僕の中でもはっきりしている。一級は実質的な呪術師の天井であり、特級は目指すものではないそれ近いと認められたその事自体凄いと感じているし尊敬もする。

そう言うってから様子を伺うように、隣を見れば誇らしげなお兄さんがいた。大丈夫だったみたいだ、そう胸を撫で下ろした。

「加茂家次代当主として、当然だよ。立派な呪術師として強く聴く家を納めていかなくてはいかない立場だからね。」

お兄さんは、当然のように淡々と話すが言葉のそして動きの節々に喜びのようなものが隠せないでいた。正直持つ少し腹芸というか、内心を押し殺す術とか加茂家内部の計略とか有るだろうし覚えたほうがいい気はするけどこういうところが僕は好きだ。

立場はあれど、それに吞まれきってなく自己を出せるその綺麗な心情が見える姿が。……それも僕の思い込みの一つでしかないのだろうけど、他者の心情なんてわかるはずもないし。

「おに……おつといけない、憲紀さんを見習って僕も頑張つていけないとですね。継木家当主としても、一人の呪術師としても。」

そういう所も、見習つていきたい。

おじさんが居なくなつた後の僕人としての、立ち振舞や行動の仕方の指針の一人でもあるのだから。小さい頃はおじさんしか僕の中には居なかつたから、その時の反省もあるけど。

基本的になにかに依存しているものだ、それが多いか少ないか質がいいか悪いかだけの話で。

もし誰かに、そのことを依存してるだけと言われたのなら……そうですとはつきり言つて貴方はと逆に質問を返したいと思つてる。

「勉強を教えて貰つている恩もある、君が良ければ時間がある時にいつでも呪術の鍛錬に付き合おうよ。で今日来たのは私に会うためでは無いだろう？この荷物からして、毎年の貢物の処理とかか？」

……後私としては気にせず兄と呼んで貰つても構わないが。」

「そういえば、そうだ……お兄さんと久しぶりに話せるのが嬉しくて思わず話が弾んで話し込んでしまった。本来の来た目的は、処理しきれない物の処理だ。」

京都高専は、僕の知る限り欠員は少ないし量の問題は特にないだろう。女性も東京高専の方より多いし、男性も甘い物好きな人はいるが女性の方が好む人は多いとは感じている。

「まあ少しバレンタインデーで、色々貰ったり送られてきてまして。手作りとかはもう除いてあるので毒物とかはあまり入ってないと思います……」

「気になるなら手を付けないほうがいいかも？」

僕もちゃんとお兄さんと呼んでみたいが……そうは行かない。あくまでここは呪術高専と言う学校だ、他の人に見られる確率が高い……

「下手にやれば足を掬われる、そういう世界だほんとクソだなあと呪術界。」

「もう見て入るんだろう？」

「まあそうですね、家の者たちで分ける物でもありますし。」

毒の心配はない、ちゃん見たものを渡しているが心配なら取らないほうがいい何事も完璧にこなすなんて不可能なのだから。

それに僕も悪意ならある程度わかる、どうしても呪い負の感情を、込めてものを渡すとそれに呪力が籠もる。そういう意味でも分けられているし。

「わつつつごいお菓子いっぱい！」

「これはすごい量だな。」

そうやってガラガラとずっと動かしながら話していれば、機械人形にコツンとぶつかる。

いたのは一人と一体、三輪さんと与さんが操る機械人形。

機械人形の部品とかの提供に、ちよつと珍しい素材とかも必要らしくそこに継木家も関わってるからそこら辺で中の人との付き合いはある。僕より酷い体調不良引き起こしているから、たまーに直接よく使ってる鎮痛剤の差し入れにいたりとかしてる。

後お気に入りのプラネタリウムとか……色々と僕に似たような状態だから気にしてる、いやきつとこつちのほうがよっぽどマシなんだろうけど。

おじさんがよく反転術式しにいてたらしいけど、直すには至らなくせいぜい苦痛を軽減させるぐらいだったみたいだし。

「こんにちは、三輪霞さんと……メカ丸さんぶつかつてすいません。去年同様今日はお菓子とか色々差し入れに来ました。好きなだけ取って構いませんよ。」

そう言えば、真つ先に嬉しそうに三輪さんが飛び出してくる甘いものは好きだろうというのもあるだろうが……

「後……貴方だけにこつそり教えますが、この入れ物の左奥に高めのチョコレート

菓子多かつたりしますゴデイバとかそういう感じの。

家で食べきれなかつたら棄てるだけなのでもつたいないということだ。」

彼女の家は、とてもじゃないが経済的に健全で潤つてるとは言えない呪術師をしてるのもその辺りの関係だろうスカウト経由なので才能はあることは前提だが。

正直に言えば、三輪さんは呪いの世界から早く脚を洗うべき人間の一人とは思つて
る。性格というよりは、戻りやすい段階で手遅れではないから。

……：そうは思つても、本人がある意味でその道を選び進んでいるのならその歩みを
止める資格は僕は持つていない。

三輪さんにごつそりと、高めのチヨコやお菓子を寄せている場所を伝える。その後
に怪しまれないようにすぐになるべく自然には三輪さんから離れた。

僕には味音痴なのかどれも気持ちが悪くなるの一言で終るが、ちゃんとした体を持つ
たものには酒肴品の一つとして精神的に安らぐものだろう。

そういうものは、ちゃんと喜んでくれる人達に多く渡したい。

「ありがとう弟達も喜ぶよ！というか本当に、好きだけ貰つていいの？貰うけど。ポ
テチとかじゃがりことかのしよっぱいやつもあるー」

「ええ、遠慮なく持つていつて下さい。けど食べすぎないようにですけどね、あくまで酒
肴品ですからお菓子つて。」

「分かつてる！しばらく買わなくてよくなるよ、やつぱり余裕少なくてえへへ。」

持ってきたお菓子が入った、荷台をがさごそしながら持ってきたのかいつも携帯して
るのか100均で買ったような薄い携帯できるようなバッグに綺麗に詰め込んでいく。

……詰め放題とかしたことあるのかな、僕も一回やってみたいけど機会が無いんだ
よね。何に使うでもないし。

今までは気にしてなかったけど、それよりの袋とか今度から持つてくるべきだったか
もしれない。次回からの反省点にしよう……、今までは適当にみんな持つていつてた
し。

兄弟分もつてのは無かった。

でも多く持つていってくれるのは、数が減って嬉しいことだが……食べ過ぎるのは
良くない。そこら辺は限度を守って楽しんでほしい。

「三輪、凄い詰め込んでるな持つてるのか？」

「俺ならもテルガ……」

「お菓子つて大体軽いからハイキハイキ。弟達にも家族にも沢山渡りたいしね。」

にしても凄いなあ……こう言うのつてコツいるよねやつぱり、正直にお菓子と言え
どとこの量も一度に持つと重そうであるがいつも持つてる刀よりはとても軽いのだろ
うその大量に詰め込まれたお菓子達をひよいと彼女は持ち上げた。

そりや呪霊を退治するのにひ弱じや話しになら無いよね、特殊な力や体質等々ある場合を除いて。与さんとかその典例だし……僕の場合は護衛前提で呪術界に運用されてるからまた別枠だとも思う。

「ムリなら、すぐにイエヨ三輪。」

与さん、三輪さんと仲いいのかなあそれとも仲良くしたい？うーんダメだなあ機械だとだどうしても肌の色とか、いつもと違う指の動き瞳孔の揺らぎとかそう言う変化無くてそこから読み取れないや。

まだまだ勉強不足かな。

人の心を読み取るなんて結局は無理な事だけど。

「……………お金ならこつちから任務一部斡旋しましょうか？一応四級程度の依頼は湧いて出てくるので。高専経由にはなりません。」

「いやっそんなことしなくていいよ！それで一回やったけど、何回もやったらなんか私駄目になる気がする！」

金欠なら、直接お金ポーンと現金でも口座経由でも渡せもする。だけれどもそれだと周囲の納得が得られない。なら高専経由とはなるが、軽い任務を受けてもらってその報酬として渡せば騒ぎにはなりにくいだろう。

わりと低級の呪いの任務として依頼できそうな案件は、商業等の世界にも入ってるせ

いか発生しやすい……。普段なら継木家の人間が向かい内々で呪いの処理に入る、高専に行く前の練習含めてしている継木の血を持つ人間もいるが……。並行して進められている多数の案件の内少しを高専経由の任務として回すぐらい問題ないだろう。

継木家内部の負担も軽くなる分他に呪以外の業務なんで沢山あるからそっち回せばいいいし。

だから気にしなくていいのに、そう思いながらアワアワとした様子で額に何故か冷や汗を浮かべている三輪さんをどうしてなんだろうなーそうぼけーと見る。

……呪力を無くせるだろお前が片付けろよと言われるかもだが、僕の肉体は生憎一つしかない。そしてそもそも僕は溜まった呪力を吸い取るだけで、呪霊は無理だし。

軽い案件なら、従来の方法でした方が手っ取り早いし他に軽い案件より重要な案件で大体僕が出る。それは継木家としても呪術界としても運用法として同じだ。

「そうだよ継木、あんまり私の後輩甘やかしすぎないように！男駄目にしそうな女みたになんかそういう感じなんだから。」

そうしていると、空の上からさしずめ魔女の宅○便の魔女のようにふわりと空から箒で僕を嗜め注意する様な言葉を吐きながら呆れたように降りてくる。

西宮さんだ、確か今年2年生だったかな……。去年も直接僕が直接高専に行つてはないにしろ家の者達がチョコとか配布にきてるし分かりそうだなあ。お菓子持つてきて

ることか。

「西宮桃さん、お空からこんにちは。桃さんもお菓子とか色々あるので持つていって下さい。後へアアクセ変えました？色合いがとても似合って可愛らしいと僕思います。」

そういうえば、いつもと違う格好をしている。基本的に呪術高専はかなり自由なアレンジをきかせて制服を作れるがずっとそれつてもそのまま飽きるものだ。

……基本的に制服のアレンジ自由にさせてるのは、死んだときのドックダグ的な意味合いもあるのだろうけど个性的で尚且ずっと同じならその役割としてぴったりだ。

それはひとまず置いておいて、今日は西宮さんはピンクにへアゴムとピアスも変えているみたいだ。とても新鮮で似合ってると思ったから、口に出す。

いいと思ったことは口に出しておいて、損はない。それが僕の短い人生の中での一つの哲学だ。

「変わってるのか!？」

「殆ど変わってない俺から見レバ。」

「あつ確かに、よく見ると花がらのへアゴムだかわいいー桃先輩」

……確かに小物は気が付きにくいかなあ、結構目立つ色合いに変わってはいたけど。というかへアゴム花がらだったんだ……色だけ変わったの見てたから気が付かなかった。

花がらかあ、真衣にも喜ばれるのかな………どんな花の柄かにもよるだろうけど。

真衣に僕が似合うと思うのは、向日葵かなずっと太陽に向いていて明るい色合いだし。

「ほんつとそういう所可愛く無い、ずっとこんな事してるならいつか背中刺されるわよ。」

「………何度か経験ありますね。」

「あるんかいっ！」

「いやっサラツと言った！」

「アルトは思つてはいたガ………」

「継木はそういう奴だぞ。」

いや皆して、お兄さんも含めて僕をどんな人物として見てるのさ………かなり精神的ダメージくるよ。色々なことで慣れてるけど辛いもんは辛いからね。

そう思いながら、ちよつと皆の目線をさけるように顔をそらした。

「何度か、精神的が不安定な方から………僕には心に決めた相手がいるとちやんと断つたらこうさつくり。というか、僕まだ15にも満たない未成年なんですけどね。」

呪いに精神やられてたり、元々精神不安定が故に呪いを溜めやすい人とか情緒不安定な相手ばかりしているからそういうこともまあ稀によくある。

僕の事を怪訝に見るなら立場変わってやろうか？とドスの効いた声で言える気がする。

おじさんの仕事も見てはいたから、なんか大変だなあと思ってたけど……やること自体というよりは相手自体のほうが大変だったという感じである。

基本的にこちらかは手を挙げることは象徴に近いため、いい顔をされたいはされない。何度かあったその時も、家の者に引ッ剥がして貰って警察行きになってたっけ。

呪力とかでの強化してたから、死んだり後遺症は残ったりしなかつたけど……痛かつたなあ。ズブツじゃなくてザツクリという感じだったな。

教祖みたいな事してるからなあ……ガチガチではないけど、でも呪い貯めている人間を集めるのには都合がいいし呪術規程からも特別に許可貰って運営してるし。

歴史自体も古しいし、天理教が呪術師の為の心得を教える宗教ならばこっちは、呪を扱う者や呪いの被害を受けるしかない弱者のために自然とそうなった。

という話し自体も聞いている。

まあ継木家の、成り立ち自体他の家の人達と違ってかなり曖昧な部分が多いけどなんかいつの間にか継木家が成り立っていたとしか言いようがない。

「……もういいわ、継木家当主としての仕事の範疇なのでしょうけど……」

「……………傷跡凄うひゃあ。」

「継木私が言うのもなんだが、本当に痴情のもつれには気をつけるよ?」

「……………」

いや本当皆僕をなんだと思ってるの?

呪術師として受ける呪霊からの傷よりよっぽどましだし軽いと思うんだけど? それと、不安定な人間ばかり相手取るからそれぐらいよくあることでしょ。

「……………親身になってお話し聞いたり、共感してるだけなんですけどどうしてそうなるんですかね?」

疲れてるなら甘いもの食べます? ありますよ沢山ここに。」

精神科みたいなものだ、薬は出さないけど。

本当に人相手にするより、場所に貯まった呪力取って歩く方が楽なのだが……………お布施とかも継木家のそれなりの収入源にもなってますよ……………何より今の継木櫻という存在を人に認知させなければという家の者達の考えもあるそうなの。

どうでもいいけど。

「誰のせいで、疲れてるんだと。」

そう、西宮さんは改めて髪の毛を少しへたりとさせて話す。

「僕のせいですよ、ハハハ心配してくれてありがとうございます。それだけでも嬉しいです。」

僕のせいだろうな、と言うことは流石に察しはつく。そこまで鈍くはない、けれども僕を心配してくれての事だろう。

その事をとて嬉しく感じている。

そう思う事は決して悪いものでは無いだろう。

「本当に、可愛くないーなんだろうこの……生意気というより心象が。」

「とりあえず僕、暫くの京都高専には居ますので……学長に挨拶したいなと思つてますけどどこにいますか分かります？」

返答を返した後、僕は学長のいる場所を知らないか聞く。東京高専の時と同じく通例みたいなものだが一応許可は必要だろう。東京高専の学長から連絡してくれたのもあつて話しも早いだろうし。

「うーんちよつと楽器の調整とか言つてたから……音楽室かなあつて。」

「ロック関係ナラバ、演奏しているカラすぐにわかると思うゾ。学長の演奏は、音が大きいカラナ。」

「歌姫先生もいるかもな……途中で東堂とかと会わないように気をつけろ。君は変な好かれ方をしているからな……」

なるほど音楽室か……そう言えばドラマー募集してたなあ、やつてみたいけど東京高専だとかかなり幽霊部員になりそうで引け目が出てしまう。

勿論高専卒業したら、当然さらに頻度は減るだろうしそのことを踏まえた上で良いって言われたら入ってもいいかな僕でも。

そう言えば東堂さんかあ、好きなものに一直線で嫌いなものには素直な骨太な方だよな。好きタイプと聞かれて答えたら、ちよつと暴力振るわれたけど……威力はともかく殴る蹴るの内容自体は呪霊のように、殺しにきてはいないから大丈夫だったけど。

思っただけコレだいぶ理不尽な方だな、呪術師とかって大概理不尽な人多いけど。

その後、高田ちゃんの曲を気に入っていると云ったらなんか……

「高田ちゃんのライブ行かないかとか言われてますけど、毎回断ってるのが不味かったですかね……純粋に行く時間がなくて楽しそうではあるんですけど……じゃあいつてきますね。」

その事についてたくさん聞かれた後、お前はちゃんとしたファンだ！と言われて物凄くライブとか握手会に参加しないかとむっちゃ誘われ聞かれるようになった、さしずめ一度登録したサイトの宣伝メールがずっと放置してても来るような感じだろうか。

特にしつこいとも思っていないし、むしろ時間があれば体験してみたい一つであるのだが……どうしても行く時間も捻出が出来ないし休みの日がライブや握手会と言われる日とずれる。

だから毎回断ってる。

ああそつだ。

「お菓子はまだ後でこの量ですしあると思うので、三輪さん安心してください。」

三輪さんはまだお菓子あるだけほしいだろうし、余るであろう事は言っておこう。

それだけ言つて僕は学長に会うため、音楽室へと向かつた。

「あつ行つちやつた。」

「……………行けないつてひよつとして、毎日殆ど仕事詰めてんの継木。」

「そのまさかだよ、呪力を吸い取るなんて異常彼以外に起こせる存在今現在確認されて

はいないからね。」

「大変なコトダナ。」

「ひよえー」

幸せの味 小話 京都高専サイド 2

けたたましい、ギターの音が完全に防音されている音楽室の遙か遠くから聞こえてくる。

後もう少し、きつと学長はそこにいるだろう。誰もいなかったら楽器の音はするはずもなく、さらにその楽器の音がギターなのだから。

「音楽室まで後すこ……あつ」

「継木 櫻ー！今度こそ高田ちゃんのライブ一緒に行ってくれるなッ！」

ギターの音が掻き消されるような大声で、僕の名前を呼ばれる。

東堂さんに見つかってしまった。

用事がない時ならば、いくらでも時間を使っても僕としては問題ないのだが……生

憎今日は純粹な休みではない。

「こんにちは、東堂さん今日もお元気そうですね。新曲のお披露目があるとは聞いてますよ楽しみですね。」

CDの予約はもうしました？高田ちゃんの歌いいですよ、気分をあげたいときに聞けてます。新曲はどんな感じなんでしょうか楽しみです。」

上手く切り上げられるように、そして機嫌を保つようにうまく話す。今とても頭を回転させてる気がする、仕事の時でも毎回こうなってること多い気がするけど。

東堂さんは、ちゃんと考えをもって動くタイプだ。法律とかよりも自身の指針を主として。

よく言えば自我をもつてしつかりしている、悪く言えば行動的なマイペース。

「ああそうだな、高田ちゃんの新曲のCDもちろん限定特装版を保存用も含めて買う………とっお前の話に流されるところだったそういう話ではない！」

生ライブの感動を、お前にも味わってもらいたいのだが毎回何かと付けて居なかったり断られたりしている。」

「ハハハ、ソレは本当にすいません………本当に中々暇が取れなくて取れててもずれてる日付で。」

二人つきりだとしても自然と切りにくい、どちらかが別れる素振りを見せる必要がどうしてもあるから………そう言えば高田さんのテレビ出演の時間は今から二時間程度か、最高それぐらいで済むならまだいいな。

今日出ているテレビあって良かった。

きつと東堂さんは、僕との会話より当然そちらを優先するだろうし。

「そんなもの一回でもいいから、その日に合わせて取れるように調整すれば良いだろう

！俺のこと避けてるのか！マイフレンド悲しい俺はとても悲しいぞ。」

物凄いや量の涙を流されながら、首根っこ捕まれてガクツンガクツンされる身長差も相まって浮遊感が凄まじい。

多分ここにお兄さんがいたら止めに入りそうな気がする……、とっここから抜けられそうかな。

そう思いながら東堂さんの腹を蹴り、掴まれている手からではなく二の腕部分から離して抜け出す。正面からの力強いな……、やっぱり筋肉の問題？プロテイン一度飲んでみたけど駄目すぎて吐き出した。

「そういうわけじゃなくて……基本的に合わせての休暇取ったことがないんですよ。まず最初に仕事というか役割入れて空いていた日が休みとなるだけで。」

本当は僕だって楽しそうだし行ってみたいけど、まだそういうことを赦される期間ではない。高専生として入れればまだ緩やかにはなるだろうが……今はそうではない。

モラトリアム前の詰め時でもあるのか、ここ一年は何も呪に関わらない様な休息は無かった気がする。

……今みたいに比較的休みに近い、緩いものも入ってたりしているが。

「……マイフレンドよ、人生は一回だぞ。少しぐらいは我だけで行動しても文句は言われまい。」

離れて抜け出したのはいいが、ちょっとジリジリ東堂さんが迫ってくる。少し怖い……距離感の差が激しい方はこういう業務柄何人かあっているが。

基本マイナス要因が多いのに対して、東堂さんはプラス要因できている。多くの人間には会って入るが似たようなサンプルが少ない……

「その一回を繰り返す事が怖いんですよ、僕はきつと弱虫ですからね。心配してくれてありがとうございます、けどそこまで言うなら何とかしてみますね。」

高専に入れば、一時の休息としてそこら辺は緩和されるだろう。唯一のモラトリアムなのだから、その後はずっと呪いの除去の為に僕の行動を仕組まれるとしても。

曲ばかり聞いて本人に、会ったことは全く無いと言うのも僕としてもアレだし。純粹に声綺麗だし、作曲は別だけど作詞はしている曲も含まれてるし。

三年間でやり残しの無いよう、精一杯見て感じてそのままに動くつもりだ。

「ストイックで勤勉なのが、お前の長所だが同時に短所でもあるな。最初はつまらん男とは思っていた、だが何者の加害にも我関しない鉄壁の鱗を持っている……だが牙を出せない。」

牙を出せるようになれば、一皮向けるぞ。お前は確実に。この俺が言うのだから確実だ。」

そうして、東堂さんを見れば何処か満足したのかジリジリと寄ってくることをやめて

ウンウンと勝手に自己解釈をするように腕を組んだ。

僕にもその自覚はある、他の人間を害を与えるその前に強制的にストッパーが入るよ
うなまるで自分の意思じゃないように怒りが嫌悪が憎悪がどれだけ深く淀んでいたと
してもスツと冷えて虚無に消えるように収まってしまふ。コレはコレで良いこともある
、冷静でいやすいから……けれども東堂さんから見れば牙を抜かれたつまらなさが
あると感じるようだ。

それをカバーする、東堂さんから見た面白さもあるようだけれど理解はできないしあま
りぴんとこない。

「次回は……お前の首根っこ引っ付かんでも必ず高田ちゃん生ライブに連れていく
！」

行くまでの記憶失うような、連れて行かれ方しそうだな……アレこれ誘拐？

「人から見てうまく使えるのが利点、扱いにくいのが欠点でしかないものでそんなもので
すよ。後チョコとかいりますか？消費しきれなくて差し入れとして持ってきたんです
けどね。」

まあいいや早く話を切り上げたい。

しばらくして頭に浮かぶのはそんな単純で軽い気持ちだけだった。

「なら、一つ貰っておこう。でお前に一つ聞きたい、禪院真衣とは今どんな感じだ！」

「唐突ですね、びっくりしました。」

「好みのタイプと聞かれて、個人名を出されたのは今の所マイフレンドぐらいだからな。更に即答でだ。」

好みのお話はまだ覚えてたんだ、頭良いからな………にしても九十九さんと最初の質問自体は同じなんだよね。

弟子っていう面もあるのだろうか。

九十九さんに、決まってるじゃない時何度も同じ事聞かれたから驚かなかったけど普通に慣れてない人だったなら一瞬でも硬直する類いの質問だよね………

いやそもそも10才児にも満たない相手に好みのタイプ聞くのは、だいぶヤバイよね九十九さん。なんかそういうちよつとずれた人達ばかり関わってきたから呪術師はキチ………少々個性的な方達が多いし個性のインフレ起きて大分一般的な感覚麻痺してたけど。

「……………一緒に散歩しました、楽しかったです。今度は落語とか行ってみたいけど水族館から先かなあとか思ってたります。」

「驚くほど、進展ないな継木。つまらん。」

「進めようとして、進めるものでも無くないですかね？例え僕の目が焼かれようとも、手足がもげても、真衣がどれほど変わろうとも思いは変わりません。」

キスとか、性行を伴えば進展するというのはどうか思う。家の縛りとして子をもうけることはしないというのを散々教えられた影響もあるにはあるが。

想いはお互い通じてなくてもいい、僕は真衣さんに幸せになつてほしいがそれは僕の手そのものでなくてもいい。むしろ最終的には、離れていつてほしい。ちゃんと生きられたら僕の死によつて縛ることになるかもしれないのは呪いでしかない。

精一杯の僕に出来るだけの祝福を真衣に、そういう気持ちはきつとこれからもこの先も短い生の中変わることに無い……いや決して変えたくない想いだ。

想うことは赦して欲しい、だが真衣は縛りたくない思うがままで幸せであつて幸せになつて欲しいそんな身勝手な事だ。

「俺の高田ちゃんへの思いと似ているな、聞けば聞くほどそう思う。だが思いと、行動と
思いはきちんと伝えたほうがいい俺みたいになつマイフレンド!」

「是非とも伝授してほしいですね、東堂先生。」

「……………物凄く時間使つた。」

結局、東堂さんのファンとしてしていることや高田さんの想いの話を高田ちゃんのテレビ出演が始まるギリギリまで続いた。一緒にテレビ番組を見ようと連れていかれそうになつたが、それはなんとか抵抗できた……………

まだ学長はまだ音楽室にいるだろうか。

ギターの音は、もう消えている。

「継木か？夜蛾から聞いておる、処理しきれない貢物の一部を差し入れとして渡すという話じゃろう？」

「……………」

「はあ……………、音楽室に居なかつたら前の東京高専みたいに自力で探すことになるのか高専って広いからな。」

「学長が行動する範囲は、ある程度限られるとしても……………学長室に戻ってたりしないかなでもギターのチューニングとかそういうものの後だし術式の鳴らしも兼ねて軽い呪霊祓いに行つてる可能性も……………」

「そう考えていると、誰かにポンつと肩を叩かれた。」

「大丈夫か？お主疲れておらんか？」

「叩かれた方に視線を向ければ、かなり心配そうな顔をした京都高専学長の姿があった。」

「……………僕は半分疲れているように見えていたようだ、この学長の様子だと。普通の子だったらきつと叱責の方が先に来るだろうし、目上の人に非礼してしまつてるからね。」

学長はそのへんきちんとしてるし。

「反応できなくて申し訳ないです、正直ちよつと疲れてます………お話しするのは楽しいんですけど久しぶりに来たので高専の人達に声かけられたりとかですぐに学長の元に来れなくてあはは。」

ちよつとした疲れでボートしていた頭を切り替えて、すぐに話を返す。

実際にお兄さんや、三輪さんとさん西宮さん東堂さん沢山の人達に会えて話せた。真衣はまだ見かけてないけど会いたいなあ………京都高専にいるってことは分かっているし。

「結構親しい友人も継木は多いじゃろう、よいよいはっはっはその様子だと座つておらん………学長室まで案内するぞ。そこでお茶の一つでも出してやろう。」

そう僕が言えば、頭にぼんつと手を乗せられた。………なんだかやらたと頭に手を載せられる気がするが、なんでだろう丁度いい位置なのだろうか。

その後に着いてこいと言うように、前を学長は歩いていく。歩く速度は遅く僕を氣遣つてくれるのがすぐにわかった。

「ありがとうございます。」

僕はそれに着いていく、ここからは学長室はそう遠くはない………一度来たときは東京高専と違って和室のような風貌の記憶があつた。

「失礼します。」

促されるままに、先に入った学長の跡をついていき。入り口で挨拶してから中に入る、目に入る光景は前と一切変わらないしいて言えば盆栽が丁寧に入手入れされて成長しより立派になっていることぐらいだ。

補助監督さんなどの事務の方がしているのか、それとも学長が直々に選定などをしていのかは知らないが……丁寧大切にされている物であるということは確実だろう。

「遠慮せずゆっくりしなさい。」

「はい。」

そんなものを見ながら、少し古ぼけたソファ―腰をかける。目の前には、僕が味がついているものが駄目なことを分かっているのか氷も何も入っていない常温にしてあるだろう水が置かれていた。

それに手を付けて、胃に入れる。

そういえば朝以外は、食事に手を付けていない学長室にある時計を見れば時間はもう昼を過ぎていた。夕食は継木家に帰るから食べさせられることになるが……：昼食はうまく行けばしなくてもいいかもなあ。

「京都高専ではなく、東京高専の方に通うようになるのか継木……：少し寂しいような

気もするなあ。」

「まあそれは、僕が決めたことじゃないので正直に言えば京都高専の方が僕個人としては良かったかなあと。」

東京高専がいやっていう訳じゃないですよ、パンダさんも狗巻さんも乙骨さんも義姉さんも向こうの学長さんもとてもいい人達ですし……………」

他にも色々な方がいると聞いてますけどその方には会っていないですし。」

もう決まっちゃったし、その決定を変える権限はない。それが継木家の当主としての在り方、当主が家の在り方を決めるのではなく家が当主の在り方を決定づける。

僕個人としては、お兄さんや真衣がいるこの京都高専で唯一与えられたモラトリアム……………3年間の一時的な自由な時間を過ごしていたかった。別に東京高専がいやというわけでは全くない、皆いい人達である。

只、京都高専と東京高専で別れて離れて必然的に会う機会も少なくなるのが、目に見えて分かるのが何処か寂しく辛いような気がするだけで。

「そう言わんでもいい、暇な時ならいつでも京都高専に来てもよいぞ。場所が違うだけで同じ呪術を学び呪術師としての心構えを知るための場だ極度に区別する必要も無かろうて。」

学長は僕の事を真っ直ぐ見て、真剣に一つ一つ紡ぐように話し出す。

変わらないなあ、最初にあった時から……擦り潰れるまで使うものには、同情しすぎるその後が辛いのに。そういう所が好きなのひとつなのだが。

「ありがとうございます。コレ一応お酒入りのチョコなので学生さん達……未成年の形はうっかり分けられないように先生方とか高専経由で依頼受けている呪術師達で分けてください。」

とりあえず話を今日の本題に戻そう、そう思いながら心を込めるようにありがとうございますとのお礼を言つて。持つてきたものを分けてくださいと話す……東京高専の時とは違い呪骸が終わらせてくれるわけではない、僕も当然話の区切りが付けば荷物を運ぼうと思う。

「フムわかった、保存が聞かないのは冷蔵庫を貸そうそこに入れておけ。このお酒のは補助監督等で分けるとする、毎回のこの時期になると妙にソワソワしだす者がおつてなあ。」

「庵歌姫先生ですかね、やっぱり甘い物は好きな女性の方多いですし。是非ともお茶の時間にも使つてください。」

特に減らしたりとかしなくていいようにで安心した……期限がある消耗品費の扱いには困るのがある、いつそのこと渡された物が、全てペンとか洗剤などの保存しやすい消耗品費だったらなあ……

そういうものは、継木家として使わせてもらつてるけどキャラものだど飾りで書きにくいっていう意見あつてそれはこうやつて分ける物に混ぜてるけどね。

にしてもコーヒートか紅茶の方が、西洋菓子に合わせるのはいいと思うが……ずつと緑茶なのだろうか。結局は僕はあんまり飲んだり食べたりしないから想像はつかないけど。大体の気持ち悪くなるしどんなもの食つても。

「そうさせてもらおう、後関係の無いそして野暮な話にもなつてしまうが……向この夜蛾からも聞いた、記憶の件について焦らなくても良い。焦つて体調を崩したり不調を起こす方が」

そうやつて手元に半分残つた水を眺めていけば、向この学長から聞いた僕について気になる話してもあつたのだろうか話し出す。

何となく、その先の言葉が分かつて。

「呪術界では、損失だけですよね学長。」

そう言葉を差し込んだ、何となく声を出したがよく考えればかなり失礼になつてしまふだろうか。……本当は、ちよつと嫌だつたのだろうか。カツとなつて、てことはないけど。

僕でも、よくわからないな。

もつとうまく隠さないと、ちゃんと自分自身を制御出来るようにしないと………継

木当主として特に必要な事だから。

「うむ。」

「分かってますよ、僕が求められているのは呪いを呪力の淀みを、吸い取る性質ですから。」

「呪術師の一端として継木櫻お主は、呪術界には大事な存在じゃ、居なかつたらどれだけの呪霊の発生や呪いよる被害それによる呪術師や無辜の市民の犠牲が出ていることか。」

学長は何処か悩むように、噛み潰すように、祈るように、呪霊……ひいては呪いの被害を語っていく。使えるの物は使うべき、……特別に何ができるわけでもない、与えられ望まれたなら動く。そういう風に、皆が望んで生まれ組み込まれた仕組みだ。

当たり前という思考停止に、心地よく身を委ねている。……まあ呪いに当たり前としてあり得ない事なんてないのだが。

正直、自分の身の上そして仕組みについては嫌ってはいない……僕としてはどうでもいい。おじさんが居なくなつてから考えすぎて、マイナスにもプラスにも思わなくなつた。

「弁えてます、そのへんは高専に行つても変わるつもりはありませんから。今までもこれからも、むしろこういう一時的にでも高専生という時間を与えてくれた事に感謝して

ます。

本来ならば、こういう期間を与えることも惜しい程に人々の呪いはすぐに溜まり淀む。

それに僕にできるのは無辜な方向性のない呪いだけで呪霊として形を得た物や呪師の方は、どうにもできませんから……………」

それにこれから何度も言うし、何度も思うが、あくまで時折生まれる特殊であるだけで万能ではないし最強にもなれない。

呪霊を祓う事において、右に出る者はいないとも言われることもあるが……………本来の呪術師が祓う呪霊を呪いという胎で育まれた赤子かその後ある程度育つた子達とするなら。

継木 櫻……………そう名を与えられた者達の呪霊を祓う行為の意味は、呪いという胎自体を壊して、なり損ないの未熟児を断末魔すら出せないうちに外に無理やり引き摺り出すようなものだろう。

人間の出産と同じだ、赤子として産み落とし殺す事となれば殺人となるが、墮ろす事そのものは周囲の目は厳しくなるだろうが殺人にはならないそんなものだ。

「……………だが同時にお主自身も大切だと思っておる、30年じやろう継木としての余命は……………」

「言いふらすと色々と面倒なので、言わなくなりりましたがそうですね……今がちょうど折り返し地点というところですか。」

「いやはや、時間が過ぎるのは早いものです。」

「呪術師としては、すぐ呪霊に襲われ短い生を終えるものも少なくはない。だが30はとてもしゃないが長いとは言えない……だから。」

「そうだ、それはとても実感している。」

何度も逃げて、足止めした呪術師が後で死んだことを知らされた。庇われて頭から一緒に来た呪術師の血と内蔵を被った事もあった。

何人も何人も何人も、死んだ。

名前も覚えている、最後になんて言ったのかも覚えてる、手足の動き何もかも。

……呪術師として力がある、一級呪術師でもこうなる。

呪いが溜まる淀みを、歩くのならそうなる。狩る者と狩られる者の話はあるが、狩るならば狩られもする。それに尽きる。

初めて僕が呪霊から逃げて、そして死んだ時。最初は、なんにも食べてないのに吐き出した。頭から血を内蔵を被った時は体温の暖かさすら嫌になって。ひたすら人の手を執拗に払ったそんなときもあった。

でももう慣れた。

「大丈夫ですよ、高専の3年間色々やってみようと思います。これで話は終わりですよね、時間取らせてしまつてすいません。」

最初の時より、辛くはない痛くはない。

「そうだな、いつでも来るといい継木櫻……………わたしには相談に乗ることぐらいしか出らんが。一人で、悩むよりはよっぽど良かろう。」

「ありがとうございます、学長。」

そうやって僕は笑つた。

時間は夕暮れ、冷蔵庫や冷凍庫に消費期限が短い菓子類を詰めるだけ学長や補助監督さんたちと詰めているうちに時間がこんなにもたつてしまった。

本当に何かをしているとあつという間に、1〜2時間平気で過ぎてしまう。

かなり詰め込んだが、それなりにまだお菓子は余つてしまった。一応常温保管できないものはなんとか工夫したり整理して空いたスペースに入れたりなどで全部入つたけど。

今はそんなこんなで入りきらなかつたお菓子を、補助監督さん等会つていなかつた人に配り歩いている所……………なのだが真衣見かけないなあ。他の高専生の人には大体会つたと思うんだけど……………任務に行つている人を除いて、真衣も今日任務だったのか

な？

そう思いながら、なんとなく進んでいくすると真衣の呪力を感じた。その呪いを辿るように導かれるように人数が少く使わなくなったであろう教室の一室の扉を開ける。

「……………真衣！こんなところにいたんだ。」

そこには紅色に染まった窓の外を、ぼんやりと眺めていた真衣がいた。

どことなく視界が、鮮明で艶やかで夕日のせいか眩しいような気がした。扉を開けてから、椅子を借りて真衣が座っている机の近くに腰を掛ける。

すると真衣は、少し目を細めて何かを呟いたかと思えばこちら見て何処か呆れたような分かっていたような神秘的な表情を見せた。少し考えるように、時間を取ってから彼女は口を開く。

「三輪とか西宮先輩とかの、高専生があんたが来たってみんな騒がしいから、避けてたのに。見つかったわね……………見つかるとは思ってたけど。」

そう言えば、少し舌打ちのようなチツと音がなった。それに僕はなんとなく可笑しくなって思わず笑ってしまった。

そんな僕を見て真衣は、本当に理解ができないと首を振りならぼやいた。

「京都高専にいるって話は、聞いてたからね。後真衣らしい呪力が何となくね。任務に行って無かったみたいだし。」

中々僕忙しくて直接は行けなかったけど。はい、これ今日の手紙。」

そりゃ結局は他人だから、理解できる事はない。そう僕は思っているのだから……まあでもそれでも知りたいと思うのはヒトのサガ……僕らしくないことを言うなら。やっぱり好きだからなのかな。

そんなことを思いながら、服の横についているポケットから昨日書いた手紙を取り出す。直接話せるのならいいんじゃないか、いらないと相手も思ってるかもだが……

毎日の区切りの一つとなったから、やらないとなにかしつくりこない。それに……言葉には出さないが、遺書みたいなものでもあるから。

いつでも、大丈夫。

僕が居なくなっても、真衣を守れるできる限りの用意はしてある。……まあ僕にできることぐらいだけだけど。

「……………任務入れればよかった。

内容はマシになったけど、頻度は何度行っても変わらないわね……………後呪力私出してもいいんだけどそれで見つけてくるって本当頭にイカれてるんじゃないあんだ。

下手に言うとう引かれるわよ。」

……………僕にとっては、もはや遺書の一つのようなものだしね。他の人に渡せば、見えずに消えるということもない……………捨ててるかもと思ってるし実際捨ててくれてもい

いと毎回思ってるけど。

ちやんと真衣は見てくれてる。

そう思うと、この行為はきつと男が好きなたに反応してほしくていたずらを仕掛けるそんなくだらない心も含んでるのかもと思えば、また笑えてきた。

それに呪力は、呪術師なら殆ど漏れがないって言うけど全く出ないわけではない。おかしな話ではない、それに真衣の呪力だし。どれだけ微かであろうが、僕には分かる。

「何ちよつと色々あんたがアレで気が逸れてたけどナニこのお菓子の量、あんた食わないでしょ。」

そう言つて真衣は、僕から見てかなり減つた菓子の山を怪訝そうにつついた少し崩れてカラカラ紙と中の物がぶつかる軽い音がする。

いやアレつて、僕は他のエキセントリックな呪術師達（東堂さんとか五条とか）よりだいぶまともだとは思うんだけど……体質とかそこらへんのどうしようもない部分は省いて。

とりあえず僕は崩れて床に落ちたお菓子の箱を拾つて、地面についた汚れはわからないうがパンパンとはたいて。

「ちよつと色々もらつて、家で消費しきれなくてアハハそれで配つて歩いてる。冷蔵庫とか借りて入れたりとか、後みんなに配つてこれなんだけどね。」

「真衣もいる?」

真衣に、向かってこれいる?と手に持ったお菓子の箱を差し出す。中身は丸いチョコが、紙に包まれた物。味が色々あるみたい、食べたこと無いけど。

実際に食わないから配り歩いて……………冷蔵庫借りたりして色々配った後でもこの量かあ。まあここにあるのは常温で放置できるから空き教室に突っ込んで保管してもらえばいいかな。

「選ぶなら勝手に選ぶわよ、戻しなさい。」

昨日のバレンタインデー関連か、そりゃあんたの家がやってることとしていること考えたらそうなるわ……………」

「まあちよつとしたご挨拶として貰うものが多いからね、食べてほしいってわけじゃないし。」

とりあえずいらないと真衣に手で払われた、お菓子を再度山に突っ込む。

……………コレは好みじゃなかったのかな、まあこれだけあれば真衣が好きなものあると思うし。僕が選ぶよりもいいよね、美味しそうとか分からないし。

宗教みたいなことしてるからっていうのが真衣の考えている主な理由なのだろう、実際そうでもあるのだが。

会社からも貰ってるからなあ、会社としての付き合いを実際に、ゴリゴリ僕自身はし

てないけど家の者達がやってる事だし……一応纏められた書類は毎月全ての継木家に関連する会社の見せられる。その時に書類に違和感感じたて頼んでしばらくして、横領発覚したらしくビックリしたなあ。

「羽化した蚕みたいに、ろくに食べないものね。」

「いやっ昔よりはまだマシだって、会食とかそこらへんは胃に入れられるし。普段はまあ……」

「そんなんだから、ひよろいのよ……身長も私よりも低いし。」

「まだ成長期きてないだけだよ、真衣。同い年の男の子と比較しても低いことは僕にも分かるけどさ、気にしてるんだよ低いこと。」

「ならちゃんと食べて動きなさい……」

ちよっと見たけど、何なのあのゼリー飲料のゴミとサプリメントの容器？あんたが食事嫌いだしとしても流石に限度があるわよ。」

手厳しい、正直にあまり反論ができない。

会食では、ちゃんと食事を取っているように見られるようやってるのは本当だが毎日そういう付き合いがあるわけでもないし。

後身長は女子のほうが伸びるのが早いってこともあると思う、僕はまだ成長期が来ないだけ……うんそうだよきてないだけだよ。

あー、ゼリー飲料とかサプリメントとか……完全栄養食の飲み物とかの。

もつと昔は、美味しそうとか色合いとかそういうの見た気がした様な感じはしてるけどもう皆気分が悪くなるけど取らなきゃいけないものでしかないからなあ。

「ハハハ」

「笑って誤魔化さない。」

「夕つ……ハイすいませんでした。」

都合が悪くなると笑って誤魔化すのは、僕の悪い癖だな。嫌になる。

真衣に頭からチョップを食らった、言い訳がましいけど栄養自体はちゃん取ってるよ……サプリメントとゼリー飲料でも正直あんまりしたくないし。

ちよつとじんじんする頭を抱えて、真衣の方を見る。すると腕を組んでこちらをいつものように呆れたようにでも中に心配を含んだような顔をしていた。

僕そんなに生活できてないのかな……、ここまで極端なのは中々無いとしてある程度忙しい人なら似たりよったりだとは思っただけ……家の人達の中でも僕と似たような生活忙しくてしてる人いるし。

その人には給金は、多くしてるけど。

確かに一人で、ほっぽりだされたら生活できない自覚はある。

外からコツコツ音がする。

「全く、栄養バランスうんぬんかんぬん以前の問題。医者がいたら、殴られてるわ。」

「真衣も義姉さんと同じくジャンクフード好きだもんね。ハンバーガーとか、ピザとか。」

医者にはよくお世話になつてるけど……健康体じゃなくてよく生きてられるねいつ倒れても同じくない身体状況不思議と毎回言われてる。おじさんも同じ状態だったらしいし、これ正直継木故のアレコレみたいなもんだと思う。

呪を溜め込んで普通と同じで居られるわけがない、普通じゃないのは良い方向と悪い方向の2つがあるがその悪い方向に普通ではない方を引いたのがこっちというだけ。

まあ真衣が言ってるのはそういうことじゃないんだらうけど、サプリメントやゼリー飲料とかで済まさずちゃんと食えということ。

栄養バランスだけというのも、歪なのだろう。ジャンクフードとか僕は全く食べられる気がしないが……好きな人も多くいる真衣もそうだし義姉さんも。

「どういう意味で言ってるのあんた？喧嘩売ってるなら買うけど。」

「うんそのままだけど……、普段から気をつけてるんだなあって姉妹揃つて。」

でも、カロリーがやたらと高かったり脂質が多かったりで肥満になりやすかったりで生活習慣病が主であるが、病気の原因になることもあるとは聞いている。

完全な食事というよりは、ここに積んであるお菓子のように生活に色を付ける酒肴品

に近いものなのだろう。

だからこそそれを食べて体型とか健康とか保ってるから、他にも色々気をつけてることあるんだなーってそう思ってるし僕はそういう所も尊敬している……それ以外にも沢山あるけどね。

義姉さんは力持ちだし、真衣は細かいところに気を使ってるし。

後、教室の外に人いそうな感じだけど用事なのだろうかなら少し邪魔かもしれない真衣といられるから退きたくないけどそれぐらいはいいだろう。

「はあ………なにずっとニヤニヤしてんのよ気色悪いわね、忘れるところだったはいコレ。」

どうせあんたなら食べるんじゃないやなくて保管しそうな気がしないでもないけど。」

そう言つて一つの箱を机から出したのか、上にのせられる。僕はそれを、受け取った。飾りつ気のないシンプルな箱、バレンタインとしてはかなり地味に見られるだろう。

だけれども、どの高級菓子の志向が凝らされた入れ物よりも僕には輝いて見えた。

「好きな人といられてそうならないのも、可笑しいと僕は思うけど真衣。」

「ありがとうコレはチョコかな？バレンタインかなもう終わってるけど。大切にする。」

「バレンタインの日に受け取りたかつたらその日に来なさいよ、たく………高専に来

てから周囲が五月蠅くてね。

東堂に好みのタイプ聞かれたからって、ほぼ全員の生徒の前で私の名前上げる？ 頭おかしいでしょう、あんた知ってたけど。」

.....？

「別に、そのに人がいるか居ないかは関係ないよ。僕は真衣さんが好きというだけだよ。恥ずかしがる必要も隠す必要も無いでしょ？」

真衣を好きだ、と心の底から思っただけなのに何処を恥ずべき所は無いのには恥ずかしがる必要があるのだろう。人の時間は有限だ、なら良い事なら隠さずに伝えるべきだろう後悔が少しでもないように。

ただでさえ、呪術師は死に近いや呪術師としてでなくても人は死ぬに限らず突然の引越や離職とかどんな時でも居なくなるかもしれないのだから。

.....なんだか騒がしいなあ、何やってるんだろ。

空き教室なら他に沢山あるけど、忘れ物かな？

「手紙渡されたこともあって、あんたが京都高専に来るたびに私からかわれてるのよ.....」

京都高専ほぼ全員から！あの場に居なかった人たち含めてねっ！」

真衣は僕の話した、言葉にしばらく黙ると。腕や額に青筋を浮かべ少しいや結構腹を

立てたように一息で捲したてた。

かなり大きな声で、耳がキーンと鳴る。

「それはごめん……………」

「まあいいわ京都高専じゃなくて東京高専行くんでしょ、なら私の事案内できるぐらいにはなりなさい。

それで許してあげるわ。」

「東京観光かな？」

僕は俯き、謝る。

その後、デコピンされた……………いつものことだけど何回か妙に僕に対して軽い暴力行為が多くない？なんかそういうふうになるナニカあるのかな考えてもどうしようもないけど。

「そうよ、記憶力がいいことがぐらいいしか取り柄無いんだから朝飯前よね。」

「真衣が行きたい所あるなら、そこにつけていけるようにするよ。まあ東京高専に行く前から、仕事で何回か行ってるから大丈夫。」

「あなたのそういう所、ホンッと生意気。」

東京なら呪いの、淀みが溜まりやすい関係でよく行つて案内なら出来るだろう。案内つて言つても、ちゃんとホラースポット的なものは避けるけど……………普通の観光名所

よりそういう知識のほうが溜まつてるんだよな……………

「チヨココんなんなんだ、ガトーシヨコラかな……………?」

僕はこうやって話せる事がとても楽しいと、思いながら貰った箱を開ける。すると入っていたのは一切れの茶色いお菓子……………ガトーシヨコラなのだろう。

「私の話少し無視したでしょ、作ったのはガトーシヨコラよ周りが騒ぐから大人しくさせるためにね。3日たったら捨てるつもりだったわ。」

「幸せだな。」

ケーキを一口に齧る。

ねつとりと濃い味なのは分かる、すぐに吐き出して水で口をゆすぎたい気分になる。でもこの不快感すら、幸福に感じる。

「……………本当に美味しいと言わないわね。食事してる時とか食べ物の話とかで聞かないわ。」

「……………」

いやだって、大体が不快だし。

そう思つて真顔で、真衣を見つめた。

「ほんとそういう所よ。」

「特に真衣に嘘はつきたくないんだ。」

そう僕が言えば、真衣は席を立ち教室のドアの前に立つ。

「謝ることもないわ。で……………あんたらいつから見えたの?」

「お出迎えですか?ありがとうございます。生チヨコとかの溶けやすいのは職員室の冷蔵庫におかせてもらったので……………」

真衣が開けた扉の先には、京都高専の人達が学長や補助監督さんを除いて大体いた。

「ここまで人数いるとは思わなかったけど。」

「……………あんた気づいてたでしょう?」

「言う必要あるかなって?」

「はあ……………、ちよつと付き合いなさいあいつらのからかいあんたならうまくかわせるでしょ。」

今日のお昼は、ガトーシヨコ一口か栄養バランスもクソもないなそう思いながら真衣につれられ夜になり月が綺麗に見える教室を後にした。

はじめまして、今晚は

……家入さんの手が空いていた為少し見てもらい、それなりには回復した好調とは流石にならないがだいぶマシにはなった。

授業や訓練は任務で起きた出来事の精神的負担も考慮され、今日は無かった。次に備えてしっかり休めとのことのお達しの意味も含まれているだろう。

なら早く寝よう。煩くなる前に。

そう考えて、部屋に戻ろうとすれば俺の部屋の近くに二人の人影が見える。近づけば、居たのは五条先生と虎杖の二人……………

「げっ隣かよ。」

俺の部屋の隣の扉が空いている、きつと二人はそこから廊下に出てきたのだろう。やかましいのは継木だけで十分なんだが……………

「空室なんて、他にいくらでもあつたでしょ。」

「おっ伏黒！今度こそ元氣そうだな!!」

「だって賑やかな方がいいでしょ。」

俺が居ることを二人が認識すると、三者三様という熟語が似合うように。

虎杖は朝の俺の様子と比べて安心そして喜びを表現し、五条先生はその虎杖の方を一瞬見て何処か生暖かい様な気色の悪い笑顔で賑やかな方がいいと言いつつ放った。

……………ああ鬱陶しい。

「もう隣りにいる煩いのでそれで十分です、ありがた迷惑。むしろあいつの部屋変えてください、夜カリカリカリ何やってんだかわからないですけど引つ掻くような音が煩いんですよ。」

虎杖、お前も夜中には静かにしろよ案外薄いぞこの部屋同士の壁。ぐつすり眠れやしない。」

純粹に休んだほうがいいというのもあるが早く寝たいのも、そういう理由がある……………物音が壁が薄いのもあってよく響くのだ。

一応音楽を大音量で流して大音量ではなく、普通の生活音なのだが……………明日から虎杖のも加わるとなると二人を移動させるのを諦めて、俺個人で防音対策でもした方がいいのだろうか。

そう思いながら、虎杖の方を向いて壁が薄っぺらい事を伝えた。知らずに生活してくよりはまだまだしにはなるだろうお互いに。

「……………伏黒以外のもう一人って、五条先生が言ってた四人目か？」

「うーん正確に言うとう、伏黒が一人目で、今話してるもう一人が二人目。悠二、君が三人

目で……………一番最後の四人目は明日皆でお迎えに行くところ。

つと恵、高専内部の建て付けの文句いうねー確かに少し古いからそうだけどさ。改修、あんまりしてないし。」

……………壁が薄いいや、防音性皆無なのは襲撃を受けた際にすぐに気がつけるようにという意味もあるのだろうか、流石に色々と酷いと俺は思う。

今のところ新入生最後の一人は、明日来るのか……………

今年度の呪術高専生は、計四名。呪術師としては、大分多い人数が揃ったな。そう感じながら虎杖にあいつが取っている部屋に指を指しながら。

すうつと一つ息を吸って。

「俺の部屋のもう一つの隣に、部屋取ってる。お前からみて俺挟んだ部屋だな……………油断するといや油断しなくても個人情報ぶっこ抜いてくるから気をつけろ。」

あいつ継木の事について、注意喚起の意味を多く込めて口にした。

害をなすような、事はしないが油断すると何もかも隠していると思ってることさえ継木はひん剥いてくる。それも基本的にその事を知ろうとしてやってるわけではなく、ほぼ無尽蔵に無秩序に無作法にやった結果が故に目も当てられない。

継木がやってる闇雲に情報を集める方法も、呪力とか全く関係なく純粹に手間やスキルが必要なことを無視すれば普通の人間でも出来てしまう。

流石にシュレッダーゴミを、暇だからパズルで遊んでると言つて細かいカスを組み立てていた時には鶴の電撃で紙くずを焦がした。

……それに継木は、割と気にすることは出来る知るだけで無闇矢鱈に誰かに話すことは少ないだからこそ何処まで知っているのか？ またはた知ったのか、知らないのか？ が掴めないのだが。

正直言つても無駄とは思ふが、事前の心構えができるのはいいだろう。

「今伏黒なんつった!?!」

信じがたいだろうが、俺が虎杖に言つたことは紛れもない事実だ。

「櫻ねー、僕から見えてちよつと好奇心が旺盛な子でね。悪い子ではないよ。単純にいい子とは、はつきり僕には言えないけど。」

「継木 櫻のは、ちよつとで済まないですよ……そのたびにしばき回すのでいいですけど。」

確かに、継木は悪い奴ではない。揺るぎない善性持っているが、価値観やそこらへんが呪術師からみても独特に形成されている。家による教育の影響が、それとも真正のズレなのか理解はできない。

……今は確実に、少し精神が常時アッパーな状態になつてるのだけはわかる。

最後だから、さしずめそういう理由で。

虎杖ならなんとか継木の性格についていけるか、とか考えながら五条先生の方を見る。

「まあ同じ高専生として仲良くしてよねー」

相変わらず、おちやらけて何を言うわけでもなく仲良くしてねの一言で終わらせた。

五条先生は基本こういうこと考えないから、期待するだけ損だったか……

「おつおう、それにしても高専今日回ったけど継木 櫻か？ それらしい人見かけねえけど。」

「継木今日は、任務か。」

虎杖は五条先生に、高専校内を案内されたのだからある程度はまわっているか………それで見つからないとなると、任務しかないだろう。

任務がなかったら探さなくても継木の方から、虎杖に接触してくるだろうしな。

会ったらずくに継木だと、分かるはずだ外見含めて何もかも色々と癖が強い。

「ちよつと特殊だからね、櫻は明日わかると思うけど。それに夜会えると思うよ。きつと君に櫻の事だし、興味あるだろうしね。」

「今日は特に戸締まりちゃんとしておけよ、虎杖。気休めにしかならないが………」

きつと夜には帰校の予定か、絶対何かやらかすだろう………そういう変な信頼はある、そう言えば継木楽に開けられる鍵無くしたとか言つて棒で鍵穴弄つてたな。

しかも普通に開けてたし。

「なんかこえーよ。まあ見たことねえー奴に会えるのは楽しみだけだな。」

悠二の方を見れば、覇気のない声を漏らしていた。

はあ、今日は任務入っていたからなあ………恵が認めた善人や恵が善人と認識した虎杖悠仁君に昼間から会いたかったんだけどなあ………

とりあえず部屋が閉まっていたから、髪から色々開けられる鍵を取り出して穴に突っ込んでハマる場所を探る。まあ手間はかかるけどアナログ式なら、大体開けられるから中々良いよね。

おじさんも、便利だって使っていた。

「コレでいいかな？流石に寝てるみたいだね、部屋も真つ暗だ………」

感覚で空いたのが分かった、手元が軽くなる。カランとドアを開ければ明かりはなくベツトがもりあがっている。

僕は布団を少しめくり、しゃがむ。

ピンクの頭だ、やっぱり髪の色がファンキーな色がどうしても呪いに纏わると多くなってるのだろうか。

「今晚は、はじめまして虎杖悠二君 僕は継木櫻と呼ばれてるよ。」

ああやつぱり最初は、自己紹介しないと何か何だかわからないよね？そこらへんは大切だし……………そう寝起きなのかボケつとした悠仁であろう人。

「……………えっ俺鍵閉めてたよな？なっ？」

そう困惑を口にしていた。僕は虎杖の顔を見ながら僕はそうか、鍵分からず空いてたら怖いもんねと思った。理由知らなきや気分悪いし。

知らないことはひたすらに気持ち悪いに、変換されることは割とある。

「閉めてたよ、話したいことがあったから開けたけど……………寝たいなら出るね。」

「いやどうやって入った！」

「ちよつとマスターキーで。」

無理やり起こしたのは、本当に悪かったからな今日も悠仁は色々あっただろうし。そう思いながら、髪からまた鍵を抜いてみせた。

まだ寝たいならすぐに出るつもりだ、顔だけでも見たいって思ってたしね。自己紹介して、起きなかつたらそのまま出るつもりだったし。

「それ完全にピッキングじゃねーか!？」

「いやいや少し手順がある万能鍵だよ、持ち運びもかなり楽だし。」

「だからそれピッキング」

「万能な鍵だよ。」

悠仁そんなに驚くと、疲れるよ？そんなことを僕は思いながらちよつと特殊な開け方をするだけだと言う。本当に便利なものにな……………

「アーまあいいや、俺に話つてなに？伏黒から高専一年生もう一人いるつて聞いてたけど。お前が継木だよ……………な？」

「うんそうだよ、ちよつと顔だけでも見たいと思つて起きなかつたらそのまま帰るつもりだったよ。」

あーと切り替えるように、頭を一つかいて僕を指さして恵から聞いたのだろうか？高専一年生のもう一人なのかと問う。

それに僕は、隠す理由もない。

そう思い、そのまま口に出した。実際に顔だけでも存在が確認できただけでも十分な収穫だと僕は思っているし。

「起こしちゃつたしちよつとお話したいと思つて、後ここ東京としても結構都会ではないからさ星見に行こうよ雲一つないみたいだし、きつと綺麗に見えるよ。」

でも起きたなら……………正確には起こしてしまったなら、せつかくだしお話でもしようと思ふ。そうだせつかくなら外に行こう、悠仁は仙台から来ていてど田舎というほどではない地域から出ていたはずだ。

高専は、東京といえども光は少ないから星がよく見える。それに今日は雲ひとつない

空模様だ、格別の景色になるだろう。

そう思つてにっこり笑つた。

「グイグイ来るな……悪い気はしねーけど、こういうのつて」

「初対面だしね？」

初対面だから、僕は悠仁のことについて知らないことが多すぎる。だから知りたいと思つて動いてる。

モゴモゴして引きこもっているのは何にもならないだろう、時間は人によつて差異はあるが有限なのは確かなことだ。

今は継木家当主として周りの目を気にする必要は、まああるにはあるが……多めには見てもらえる。いつかはさようならがこの世界の理のなら、はじめましては記憶に残してほしい。

「寧ろ逆じゃね？」

「まあそんなもんだよ。」

「そんなもんかーつてならねえよー」

悠仁、割とツツコミの才覚あるね。

僕ボケてるつもりは全く無いけど、基本的に言つてることは真剣だよ。……伝わることは形作らないとあんまり無いけど。

「そっかあ……………まあでも、これから仲良くしていきたいのは僕の本心だしね？」

「……………なんか継木ノリが五条先生に似てんな。」

純粹に嫌だ、そう思われてんの。

「…………………………」

思わず、目の前に悠仁がいるのに真顔になってちよつと考え込んでしまう。

確かに、五条のマネをしている部分は割とある。当主として使う言葉遣いだとしても固くなりすぎるし、友達に使うにはどうしても距離が遠い。

恵を参考にしても良かったけど、恵は恵で言葉がちよつとトゲトゲしている部分があるし……………

お兄さんは、当主として使う言葉遣いとどうしても似通ってしまおうし。パンダさんはパンダだし、狗巻さんは語彙おにぎりだし……………

消去法的に、五条から真似た。

多少不味いと思う部分に修正や調整は入れてるけど、ベースはソレだ……………やっぱり髪の毛の色とかもふまえてそう見えるのだろうか、ストレスで白髪増えてるだけなんだけどなあ。

「そんなに落ち込むことかあ？」

「ハハハ、これから分かって貰えばいいか。明日のお迎えは10時頃からだしゆっくり

話そ。」

まあ、もうちよつと個性？みたいなのだしていかないとこう言われるのかなあ……：……仕方ないかなあ実際に参考にしたらそりや似るよね。

確か明日の新入生のお迎えは午前10時からだから夜ふかしも問題ないだろう。
ゆつくり話そう。

「忙しいって訳じゃねーしいいか、俺分かんねーから継木案内よろしく。誘ったのも、継木だしな。」

「外6月とはいえ、冬は肌寒いから上着は着てね。ちよつと今日の夜は風が強いみたいだから。」

「分かりましたよつと。」

さて僕も温かい飲み物の準備しないとなあ、悠仁用にクッキーやせんべいでも持つていけばいいかな。

河川敷の殴り合い（河川敷ではない）

懐から札を取り出し、灯りとして燃やす。ほんのりと甘つたるい香の匂いが辺りに漂い、まるで燃えた煙の中から現れるようにいるはずのない蝶が散る。

いつも使ってる式神、使いたいなら髪でも切って使えばいいかもしれないが……伸びるまで時間はかかるから急ぎない場合は札から使うのが一番いい。

少し邪魔されたくはないから、場を整えよう。そう思つて何処か迷つてる振りをしてそれを誤魔化すように歌を口ずさみながら歩いた。

歌が終わる、それと同時に悠仁の方に顔を向けた。呪力の流れが変わるある程度場は整つた。

「……………結構遠いけど、大丈夫かな？」

場を整えるのにそれなりに、時間を使つてしまった為それを怪訝に見られてないか確かめるためでもあるが……………歩くのにも体力は使うそれに今歩いてる所はとても整備されているとは言えない。

まああえてその道を使っているのだが。

「大丈夫だって、俺高専内回ったけど見たことねーとこいっぱいあるんだなやっぱり。」

高専内部は、基本的に呪術的に防壁を張られている。呪霊も来ないし安心と本当に言えるのだろうか、それによって監視されているかもしれないと僕は思った。

まず最初に比較的結果が曖昧でゆるい場所を探し回った、そこが……

「あつこつだよ、開けてる場所。」

こつだ。

鬱蒼とした木々の中に、ポカリと空いた開けた空間……きつと昔僕と同じような考えをした人が作ったのだろう座れるようにか切り株が2つだけ残されて後は綺麗に整えられていた。

あんまり人にはこの場所は話さない、話したら秘匿性が失われて価値が目減りする。

きつとマトモな高専の人間が知っていたら、それを欠陥としてこの場所の結果を再度強固なものにされるだろうから。なるべく薄くなるように日々ちよつとずつ細していった……それが積み重なった結果でこの場所が作られたのだろうか。

「おー！星よく見えんな。」

悠仁は、空を見上げている。

喜んでくれてよかった、そう僕は思いながら切り株を叩いて悠仁に向けてここに座れば？と促しながら、荷物に入れていた望遠鏡を組み立て横に設置しようとする。

敵地を遠方から見るために、組み立て慣れてはいる。普段から星見るために使つて

わけではないけど……やっぱり本格的に見るならこういう物も使ったほうが気分は上がるだろう。

双眼鏡ではなかなか無い、気分の上がり方が望遠鏡にはあるものだ。

森の中に近いから葉で、少し安定しない……手で葉をどかせば虫が手に登ってきたので払った。その拍子で何匹か潰れた透明な汗が体についた。

設置し終わった望遠鏡の中を覗く、ちゃんと拡大されて見える……ちよつとぼやけて入るからカチカチと調整をしていると。

「……………思ったより本格的だな。」

悠仁は、興味を持ったように話しかけてくる。せつかくやるのならひとりじゃないし盛大に行こう。一人で準備して盛大するのも可笑しいけど。

僕は準備が終わったので、悠仁が座ってないもう一つの切り株に腰を掛けた。

辺りが光一つもなく暗いのもあって、星の光が強い光で掻き消えることもなくよく見える。……でもやっぱり、6月とはいえ夜は冷えるな。

「明り少ないからね山奥だし、星は暗いほどよく見えるし輝くんだよ、東京高専で夜時間ある時にブーツと星見ることも好きなんだ。

開けてるし、いいでしょ。昔の高専の人達が使っていたのかもね。」

指先が寒い、息を吐いて温める。手袋ぐらいはつけてくればよかったとちよつとした

後悔した。ふと見れば手がちよつと紫に染まっている……、本当に弱いなあ僕の体。
なんで、生きてんの？

いや僕だつて分からないけど、きつと体質上の影響が大きいんだろうし。

ここには空を遮るものは何も無い、星がキレイな場所だ。嫌な事から切り替えるように思うことにした、僕にはよくあることだ。そうしなければ、やっていけなかつたからなあ。

肉体から見れば、30年の使用期限の折り返しだし……最初よりボロが出るのは当然だよな。

「星座とか知ってたりするの？」

「簡単なものなら。」

「なら教えてくれよ、俺あんまりそういうの知らなくてさ、星見るならどうせなら知りたくなんね？」

隣の悠仁は、星を指さして笑った。

言つた言葉に確かにそうだな、と僕は思いながら星座の本の6月の星のページを開いて悠仁に渡す。受け取るとページを開いた意味がないと思うほどパラパラと見返している。

その間に二つの水筒から、それぞれお茶とお湯を出して悠二にお茶の方を差し出す。

湯気が出てはいるが、熱すぎはしないはず……急いで熱湯から入れはしたけど。そう思いながらお湯を飲んだ、まあこのぐらいの温度なら大丈夫だろう……お茶も同じぐらいだろうし。

「……………話すからこれ見るといいよ、星見るの誘ったの僕だしね。指さしだけじゃ、星座って分かりにくいでしょー。」

「サンキュつと後これお茶か？せんべい貰うわ。」

「ゴミは……………」

お茶を受け取って、切り株の間に置いたせんべいの袋を開けた。

あーゴミ捨てる場所ってわからなくなるよね、ちよつとおかしくなつて笑いながら。悠仁からゴミ取ってコンビニ二袋を取り出して入れた。

「外で飲む、暖かい物は格別だからね。クツキーも持つてきたよ。好きに食べなよ。」

「ゴミはここにいれてね、コンビニ二袋。」

基本的に不味いとは思えない、口に入れる物だが。水は別らしい不快感はないし寒いところで呑むお湯は身体にしみるような気分になる。

ありきたりな言葉で言うなら、美味しいなのだろうが………空気が美味しいと同じ様に味覚として美味しいと言うのと違う気はする。

「継木は白湯かこれ？」

僕のコップを覗くと悠仁は、何処か不思議そうに尋ねてくる。

それもそうか、中々お湯のみは珍しいといえは珍しい………コーヒーやら紅茶やらココアとか他に好きで選べるものは多い中でのお湯だ。

「味のついた物が苦手で………」

「あーなんか、おじいちゃんみたいだな。」

………いや、おじいちゃんって。

「いや、僕まだピッチピチの15才だからね。」

確かに年取ると食細くなったりとか、普通に絶好調というようなきぶんがほぼ無かったり色々と老化した人に近い部分あるけど。

まだ僕若いからね、悠仁と同じ年だよきつと正確な誕生日よく知らんから思ったより年上だったり年下だったりするかもだけどおじいちゃん呼びされるほど年は離れてないよ。

カラオケとか色々活発だし………活発だよね僕。新しいこと好きだよいやそれは関係ないか。

なんか、焦ってるな。

「俺とタメでピッチピチ使う奴始めてみたわ。」

………えっ、そうなの？

僕は思わず口をぽかんとさせて、悠二の方を見れば、彼はあーと何処か遠い目をさせていた。

「……………何で同年代なのにジエネレーションギャップみたいなの感じなければいけないんだろコノ。」

そういえば、きちんとハイカラな子と話す経験はほぼ悠仁だけだ……………大体頭とか精神が弱い人達とか、企業のお偉いさんとか、御三家とかの呪術のお偉いさんとか……………

お偉いさんばつかじゃねーか。

お兄さんは、御三家の人だし……………真衣も御三家だし。どうしてもそういうの、古くなりがちだよねあえて古くしてる人とかもいるし俗物的とかで。

……………いや最新みたいと、思ってたんだけど。古いんだコレ。

「大丈夫だって、俺の友達にも似たような奴多分いたし。」

そう思って、お湯を眺めていれば肩をぽんつとされる。うん……………慰めてくれてるんだらうけどね。

「そのフォロワーありがとう、心にきたよ。」

寧ろダメージくる、いつそのこと嘲笑ってくれそんな気分になった。本当にメガティブ寄りだよなあ僕……………

切り替えようそうだ、星を見に来ていたんだ。その話にする、深掘したくない。

「じゃあ6月の星の話ね。大三角形を見つけるのが、わかりやすいんだけど……」
キラキラ光る星それを指を指して、2つの三角をなぞるように動かした。

6月は、夏の大三角形と春の大三角形2つ見える。

夏は ベガ デネブ アルタイル

春は スピカ デネボラ アルクトゥールス

それぞれを繋いだもの、それを起点に他の星を探しやすくする。間にはオリオン座が、ある等空を見て渡した本を見て、色々と話す。

本当の意味で、興味を持つてるのかそれともただ話を合わせるためだったのか……
まあ人の思考なんて分かるわけないんだけど。

「分かりやすいな！小学校の時のプラネタリウム以来だこんな真面目に、星見んの。」

と言つてもそういう校外学習でだから、本物の空見てじゃねーけどな。」

説明しながら空を見ていれば、悠仁は何処か熱があるように感激を籠めるように……望遠鏡を、覗いてはこの星座はどこだそこだ！

等色々と楽しんでいた。僕も悠仁が言う見たい星座に向けて、望遠鏡を何度も調整していた。

「皆あんまり気にしないからね、綺麗なのに。」

最初からそこにあるものを、わざわざ使わず人工的に同じ様なものを見るのはよくあ

ること。本物は多くの人に気にされない。

偽た物でも、それが本物に近ければいいし本物すら見えなくなれば偽物が本物として扱われるのだろう。絶滅した生物の剥製のように、そんなものだ。

「確かに、俺も気にしてなかったし。改めて見ると悪くないってのは思うけどな。」
「それは良かった、誘ったかいがあったよ。」

僕は、笑顔を造りながら。

「僕として君、悠二に聞きたいことがあるんだ。もう学長から言われてるかもしれないけど。」

何のためにここに来たの？」

僕にとつての、本題を切り出した。

最大の懸念それは、宿儺の指を宿儺の器となりうる素養を持った人間が飲み込んだことそのものが、ある程度仕組まれた事象であるそのものだ。それに関する全体的な嫌な予感、とでも言った方がいいかもしれない。

何処までの範囲なのか、何処まで仕組まれているのか僕には分かりようがない。

悠仁を処刑し、中にある宿儺の影を処理したとしてもそれが仕組まれたことであれば、一度問題を単純におさめてもすぐに何かの目的のために次の器……器とは限らないか。

きつとそれだけでは、終わりはしない。

「宿儺の指を全部喰う。俺にしか出来ないことだしそこから逃げたら宿儺の指のせいで誰かが死んでんのかなとか、そんなことずつと思つて生き様に後悔が残る気がするんだ。」

「そっか。」

例えそれが仕組まれたこと、そうだとしても悠仁そのものは悪いものではきつと無いだろう。

呪いで起きる悲劇は、宿儺の指だけのものではない。全てが偶然だったとして全部の宿儺の指が器に収まり処刑にためたしめでたしめでたしで終わつたとしても。

あくまで宿儺の指での呪いの被害が無くなるだけ、他の凶悪な呪いなんて星の数ほどある。

悠仁の話を聞いて、そんな冷えた考えがまず浮かぶ僕が心底嫌だなあとか思いながら口に出そうと思つた言葉を喉で潰す。下手に出すと不味いものは、流石に僕にも識別はつく。

「継木は？」

「僕かあ……………」

聞かれても、立派な物ではない……………立派だからどうした貧相な理由だからどうした

という話でもある。そう思いながら、うぐんとちよつとどろろという言葉を使つて表そうか悩んで僕は黙つた。

「伏黒には聞いてないからさ、継木には聞きやすいような気がするんだ。それに俺が言つたんだから、聞く権利はあんだろ。」

暫く気まずい沈黙が流れていけば、恵にはまだ聞いてないそう言つて俺が言つたんだから聞いてもいいだろと悠仁は何処かいたずらっぽく笑つている。

本当に、会話のテンポを読み紡いでいくのが僕なら見て上手い人だ……それも計算ではなく真正。そりゃ恵も短い間に、深入りするし気に入りもする。

「それもそうだね、悠仁。」

「いいよ、僕が高専にいる理由教えるよ。」

僕は、頭の中で纏めた理由を一つ息を吸つて声に出す。とても立派なものではないと、内心苦笑しながら。

「君が言う使命というものから、少しでも逃げられるから。」

「……………継木も宿儺の指でも喰つてんのか？でも俺だけって言われてるしな？」

……………考えて言つたんだけど、かなり説明が足りなかつた見たいと少ししよげた。そりゃそうなるかと思ひ訂正を加える為悠仁の方を向いて何でもないので、精一杯笑つて話を続ける。

別に、心底つまらないそういわけではないちよつと人より気兼ねなく話すときに表情筋をつい使い忘れる事が意識しないと多いだけだ。

お兄さんや恵とかと話してゐる時に、真顔を注意される言葉は何回言われたんだろう。「軽く言うとモラトリアムつてことだよ、後流石に喰つてはないよ呪い抑えていることはあつたけど……」

安心すると、取り繕う事を忘れるのかな？それとも本当に極度に表情に出にくい個性なのか。まあどうでもいい、ちよつと面倒なだけで、本気で考えるほど支障あるわけじゃないし。

にしても、あの宿儺の指を抑えてきた……おじさん含めて抑えることしかできなかったを宿儺の指を喰らいその身に納める、呪術界の中でも異端寄りの僕が言えた話じゃないけど……悠仁に起きている現象は異常。

呪術界は才能が、8割とはよく言われる話だが。それに纏わる理由は割とあることが多い、五条なら六眼と無下限の組み合わせ菅原道真の血……乙骨先輩も菅原道真の系譜の一つか、一般家庭と言つても現代だ自身の体にナニが混ざつてゐるか分かりようがない。

「封印って奴か？」

悠仁は僕の話で、宿儺の指を喰つてゐるわけではないと分かつてはくれたようだ。

呪力を吸い取ることによる押さえ付けだから厳密に言えば、封印とはまた別の枠なのだか……

「呪術界に入ったばかりだし、そんなふうには封印してぎつくり考えていいよこんがらがらうし。そんな感じで、僕は呪いを対処できる力を持っている。」

直接祓う以外のね。」

入ったばかりの悠仁に、そこらへんを詳しく言う頭がこんがらがらう……僕の性質は基礎の呪術の知識がある時のほうがいい。

初手で例外を知るのは、全体を勘違いさせかねない。……まあ五条という存在をしっている時点で全体にかける期待というか戦力のアベレージは上がってるだろうけど。

それに伏黒も、今回は ナゼか ヘマというか任務が合わなかっただけで基本呪術界で見れば心配することの無い実力持ちだし。

本当に考えれば、考えるほど嫌な感じがするなコレ……いや悩んでも僕の立場じゃどうしようもないけど。

河川敷の殴り合い（河川敷ではない） 2

「伏黒みたくに戦うとは、また違うみたいだな……いや戦つてると思うけどさ。」

横を見ればそう言いながら、犬の形やら出てきてさーと見たであろう戦いの様子を見様見真似で恵の影絵の真似をしながら悠仁は、話し出す。

鶴や脱兎、蛇……はまだ見てないようだった。恵は無闇矢鱈と式神展開するような戦い方じゃないからそりやそうだけど。基本は玉犬の展開から入るし。

呪力にも限りがあるし、でも積極的に前線に出るのはちよつと相変わらずみたいだね、せつかく式神があるんだからもう少し間合い取ればいいのに。

勿論ちゃんど体鍛えた上での話になるけど、呪霊とか割と初見殺し多いからね……。「ハハハどちらかというど、後方支援で前線に張つてドンパチするような感じじゃないからね。」

だから家でそのための知識得られれば、後は高専に通う必要もなくずつと呪いの封印をしていけばいい。」

後方支援と言っても、呪いの澱みに足を突つ込むことも多い護衛とかの人は監視目的も含みつけられるけど、完全に安全地帯でやつてるって訳ではない。護衛の人が、割と

何人も何人も数えるのが面倒になるほどに、死んだのを目の前で見てるし。

本当に毎回よく生きてるよなと思ってしまう、きちんと惨めに逃げ延びてられるが。

でも他の呪術師よりは、確実に安全な状況に置かれていることは確かな自覚はある。僕に求められているのは個の強さでは決してないから、実際高専に通う必要性は割と薄い。

ずっと淀んだ呪力さえ、吸い取ればそれでいいから積極的に強くなることは求められない。

「下手すると、ずっと仕事ばかりやることになるって感じか？」

……確かにそれは、高専行く気持ちも分かる。同じ事ずつとするの飽きるよな、特に好きでも嫌いでもないこととか。」

うーんとどうしたものかと考えるように、悠仁は疑問とともに共感を示すように分かる分かと話している。

なんか妙に経験がありそうな言い方だが……まあ色々あるだろう、明るそうだし積極的に何かをするような感じではないが、何かを期待されたりとかは結構ありそうな人柄に僕からは、見える。

「そうそう、3年間の自由時間。それが僕にとっての高専に通う意味。周りの人達にとつては、少し違ったりもするけど。」

30才になったら封印の為の力失うから、それが僕にとつての定年。」

僕にとつての高専は、比較的自由な時間を誇示できる空間だ……完全にとは立場上どうしてもいけないけど。本気で与えられた役割を放棄したら、呪霊の発生は目に見えて増えることは散々家の中からも外からも言われてきている。

呪術界から見たら、こうしている間も時間が惜しいとしか言えない心境だろう。

時間があるだけ、呪い押し付けられればその分強力な呪霊も呪霊自体の数も減ると分かっているのだから呪術師全体で考えれば僕を高専に行かせず小さい頃と同じ程度にそれ以上に使うほうがいい。

でもそれは、あくまで呪術師側であり僕に対しての影響力は継木家という家の方が、現状強い御三家程の呪術界の影響力はないが自らに深く関わることの決定権は行使できざるぐらいの力は全体としてある。

高専に行けるのは継木家の事情だ、曰く呪術師との外部交流と最低限身を守れる程度程度の身を身につける為とのことだ。

わりとその辺の策略陰謀あるのだろうが……僕には高専にいけるといふ事実が嬉しいと感じてしまうのは本当にある意味不謹慎だな。こうしている間にも、呪霊は増えているのだろう。

「わりと、普通なんだな。」

「根本的には、変わらないものだよ。ちよつと特殊で色々と古い部分も多いけど、割と現代社会には馴染んでるよ隠れてるし隠してるだけで。」

呪術界以外でも、そんな回りくどい小競り合いなんて割と起きているものとりわけ変わったものでも無い。

ちよつと時間が経てば忘れたと思つたかどうなのか分からないけど、契約書の内容が不利なものに変えられていたりとか……頼んだ物が不良品だったりとかまあいろいろ。

そういう経験は、こつちでも役に立つ場合は多い全体的に上層にいくほど使つてるシステムは、前時代的な物になるのは呪術界の方が顕著であるが。格式というものなのだろう、それはそれで大切なことだとは思ふがある程度は効率というか速さを意識することとは必要だと思ふ。

格式を守ることを固執するのは、皆が新幹線に乗っているときに、馬車で目的地に行こうとするようなものだ。……平安時代が最盛期なら牛車の方が例えの収まりがいいか？

矢文とかは、マジかってなったよね。いや流石にコレが、上層の主流つてわけではないだろうけど無いよねたぶん？

「考えればそりゃそうか………ジュリヨクつてはじめて聞いたし、ジュレイも見たばつ

かりだけど動いてるのは人だしな見たいだしな。

高専も回ったとき古めだけど、コピー機とかはしつかりあるし。」

呪力という負の何でもパワーが主となる世界でも、組織として行使しているのは人間だ。なら人の範疇に収まるのが、自然って事なのだろう。

それに基本的に、力があるとはいえ数で劣るなら大きな流れにある程度沿う。

それにしても、本当に悠仁は呪いについては何も知らないでここまで来てしまったみたいだ。基本的に素養があれば、窓としての話がかかって呪いについては知ることになる場合が多いし……………

元々は見えなかった側の人であるのは、間違いはないだろう。義姉さんみたいに呪いに関わる家の血脈でも無さそう……………そういう血脈持ちなら恵は、気付いてすぐに反応するか。

「でもこの世界に関わる人間は、元々呪術界と関わりがある人達かワケアリがどうしても多くなるからね。

君とか恵とか……………真つ当な人はすぐに出ていくんだよ、僕も出て行ってほしいとは思う。」

悠二が、呪術を全くしらない状態なら現状を知る権利も必要もあるだろう。そもそもこういう状態に、彼がなっているのは呪術界の失態が大きい。

いくら宿儺の指を摂食しそして受肉を経て抑えつけられる人物が存在することが、想定範囲外だとしてもあらかじめ呪術界で出来る事は山程あったであろうと考える。わざとじゃなければ、純粋なケアレスミスが連続しすぎている。重量オーバーで、止まれなくなった列車事故かっつての。

基本的に処刑沿うよう、最初は綺麗な部分を取り繕う典型的でベターな様相。

これから直に降れることになるなら、皮を剥いだ後の見た目も知つていても教えてもいい。本当の意味の醜悪さ、なんてそれぐらいじゃ伝わりはしないから。

もし呪術界から離れられるきっかけがあるのなら、それを増幅して余力があるなら本来の呪いという歪みが比較的少ない世界に出そうと僕はする。

けれどもそれは、イヤイヤやつてる場合にだけ。そういうのは無理やり引つ剥がすと本人にも傷がつく、バツがつくのは呪術界で十分だ。

……そんな所が臆病なんだろうけど、本当にやんなるね。

「そのせいで、この業界万年人手不足だけどね。人数少ない&いなくなる人達が多い、そのダブルパンチいやー厳しい厳しい。」

目を手で覆いながら、星が見えない真っ暗な視界で冗談のように話そうとする。

が続く言葉は、自分でも驚くぐらいに棒読みになってしまった。

呪術界は人手不足なぐらいが丁度いい、もし増えたら使い捨てが多くなるだけだろう

……数が少なければある程度は担保はされる。

それでもある程度止まりだし、数が少ないゆえの学徒出陣もするような構図になつて
るのだが。

「あんまり良いつて訳じゃねーんだな。」

悠仁は、落ち込むわけでもなくそう一言つぶやくように静かな声で話す。五条から処
刑の選択を言われた時好きな地獄を選べと言われたから何となくそういう感じは最初
から伝わったと。

心の底から本当に

「……………呪いに関わるモノ、何もかも消える。」

「何か言ったか？」

？

悠二少し疑問符を浮かべながらこつちを見てきた。彼は何を言ってるのだろうか、初
日という日色々と疲れるし緊張もするからそうなるのもしようがない。早く慣れてほ
しいような、慣れてほしくないようなそんな心境。

初々しさと言ってしまうと、物凄くおじさんくさいような心境になるがまあ呪術界に
おいては先人だしそれぐらいはいいだろう。

「何でもないよ、悠二。まあそんなわけで、正直に言えば恵には悠二。

君を逃がして貰いたかった……例えそれで恵が殉職したとしてもね。

他に二人一般人の人達もいたし。恵を悠二が助けてくれたのには感謝してる、だがそれとこれとは話はまた別になる。」

目を閉じてから、体を悠仁の方に向けて。真っ直ぐ目を見て僕は話しを始める。

嘘偽りのない、紛れもない本心。

呪術師としての仕事の基本は、呪霊の祓い清めることそして呪詛師の非活性化であるが僕が勝手に思っている本質は、呪いを呪術の世界の中に閉じ込めてそこで巡らせ続けること。

それに尽きると思っている。

もし世界平和等歌っているのなら、呪詛師以外の凶悪な犯罪者も呪術師は手を下す対象になるがそうはならない。

呪いは、呪いのまま終わらせべきであり。現実の呪いのない世界は、そのまま呪いに犯さず動かす。だからこそ、呪いの世界に足を踏み外したのかそれとも踏み入れたのかそれははっきりと区別する、僕は悠仁を呪いの世界に足を踏み外した人と見ている。

確かに恵そして一般人二人を自ら動き助けたのは、紛れもなく美德だ、嫌悪を覚えるほどの尊いと一周され何も感動もなくさりと報告書上で読まれ次の報告書に進められる事だ。

でも確実に、呪いの世界に身を浸すようなことをするべきではなかった。知らなかったとしても、……正確には本来に来て欲しくはなかったという方が正しいか。

まあそんなことも、きつと僕の身勝手な考えだ。呪術界の考えでは、犠牲者の数字の一つでしかなくその中で危険な外れ値というだけなのだろう。

「俺が勝手に動いた、伏黒はちゃんとしていた行くことも止めていた。俺が全員を助けようとしてやったことだ。恵になんも責任はねえよ、あるとするなら俺にある。」

言葉を言い終わるちょうどその時に、悠二はすこし機嫌を損ねたように淡々とだがはつきりと淀みの無い声でこちらを深く刺すように言葉を切り出す。

自己責任感強い人間なのだろう、まあそれはここまで処刑から逃げずにわざわざ絞首刑台の近くとも言える高専に入ることになったからなんとなくは察してはいた。

悠二のナニがここまで動かすのかは分かりようがない、僕の名前を忘れるなど似たようなナニか……とは違うよね流石に彼に重ねすぎてはいけない。結局は、他人だ。

「……………そうか」

目を詰むってすこし考える。

本人には、本当に違和感もなくその行動をしていったようだ。操られたとかはつきり自覚してたらそれを包み隠さず言う性質を持つてるだろうし。

宿讎の影と悠二との分解が一番出来ればいいが、それが現代の呪術の技術的にも分解

した後の宿儺の側の危険度的にも出来ないからまとめつつることになってる訳でおじさんならこんな時どうしたのかな本当に。

いやおじさんならっていうけど、全能でも何でもないことは分かってる。でもやれることはやったのは、確かだと思う。

僕もそうするしかない。

呪術師は総じて手遅れ、よくおじさんが言っていたと聞かされた言葉だ。全くもってその通りだと思う呪術師とはそういう世界でそういう生き物だ。

「突然だけど少し手合わせしようか。明日きつと五条先生のことだしいきなり実践出すと思うから、慣らしということだ。」

僕は切り株から立ち上がり、巻物と柄の位置を確認するように服をちよつと探つてから土ぼこりをはたくように払った。

宿儺の指を摂食して死ななかつた、それだけではなく純粹に恵が瀕死となるような状況にて宿儺の指を摂食する前でも生きて至れた。

封印が解かれた状態で乗り込んだと、考えられるし……封印が施された状態だったら恵だから無傷で回収できたと思うから怪我している時点で封印が解かれた状態で階級の高い呪霊がうようよしてたのは確実。

その状態で、勝手に摂食したのではなく、助けるために 飲み込んだのであればその

危険な呪霊うじゃうじゃモンスターハウスに呪いの前提知識&呪力無しの状態で突撃して。

その 助けるタイミング まで呪いを扱えない非呪術師の状態ですと悠二は家入さんに治療を受けていない様子からほぼ無傷の状態で接触出来るほどの力が 宿儺の指関係なく あらかじめ備わっていた。

呪いが無い状態、それだけなら義姉さんと同様の天与呪縛のフィジカルギフトに よる力の可能性もあるが。

その力をちよつと見てみたい、あくまで手合わせだから死とかそういう風な感じには ならないしししないしさせないけど。

「いいけど、継木あんま荒事とか得意なように見えねえけど……………」

確かに、僕はひ弱だ。けれどもある程度は呪霊も祓えるし、まあ弱いとは思うけど、すぐにやられるほどではないはず……………多分。

一瞬でやられるのだけは、気をつけないとな。他の人達と比べることができない。

そう思いながら、神経をとがらせるように周囲を探るために出していた告死蝶の一部を僕の回りに戻ってこさせる。柄と巻物は使わなくていいか……………いつも先輩達とやるときも使っていないし。

「まあガタイとか恵と比べても僕あんまり良くはないしね……………、恵も呪術師の中でも

華奢なほうだしだけど簡単に取られるほど緩くもないよ。」

ちよつと挑発的に、煽るように言葉を紡いだ。まあなるようになるだろう、まだまだ話すことは多い。

河川敷の殴り合い（河川敷ではない） 3

「突然だけど少し手合わせしようか。明日きつと五条先生のことだしいきなり実践出すと思うから、慣らしということだ。」

横の切り株に、座っていた継木がすつと音も立てず立ち上がり俺の方を向けて手合わせしようと言い出してきた。

さも当たり前の事のように、抑揚も何もなく。

思わず俺は、継木の体を見て。

「いいけど、継木あんま荒事とか得意なように見えねえけど……」

あんなので大丈夫なのかと、思い思わず言ってしまった。

あんまり前線でドンパチするようない方はあんまりしないと、継木本人が明言していた。そうとはつきりする分かる程に、死んだ爺ちゃんの末期にとてもよく似ている体をしている。

夜の暗さでとても良く見えるとは言い難いが……それでも血管の浮き方や点滴をしたことがあるのだろうか青い点々とした痣のようなものが、腕の至るところについている所とか……見慣れた自然治癒が自然と弱まって出来てしまう様な跡だ。

俺が殴れば、そのままぼっくり御陀仏してしまいたいと思うほど。

「まあガタイとか恵と比べても僕あんまり良くはないしね……、恵も呪術師の中でも華奢なほうだしだけど簡単に取られるほど緩くもないよ。」

俺の何処か慌てるような心配するようなその様子を見て、くすりと笑ったかと思えば。

次の瞬間には静かな声色であるが、挑発するように言い返される。継木の回りにはここに連れてこられた時に現れた淡い様々な色の光を放つ蝶の一部が、ヒラヒラと守るように囲うようにいつの間にか飛んでいた。

夜に起こされて、なんかここに連れてこられて星を見ていてなんか色々話したし話された。で手合わせしないかと言われこの状況になつていた。

……いやまとめても訳が分からねえよ、この状況。どうなつてんだよ。

確かに、継木が見せたいうて誘つたのも分かるぐらいに夜空が綺麗で俺が色々騒いで聞いてたときも小学校の時プラネタリウム思い返すほど分かりやすかった。

ひよつとして夢か？と理解できない現状から何度かそう思っている。

眠てえのに、今妙に頭が冴えてる。外のきりりとした夜の外気の肌寒さのせいもあるだろうが。

「じゃあ気にしなくて良いってことだな。」

……そう思いながら口にして、土を固めるように踏んで拳を構えた。
やるとしても、あくまで手合わせ。

継木がどんぐらいでできるのか、分かんねえし……大丈夫と言われてもやっぱりに罪悪感とは違うが心配になるんだよな。

そうして継木に近づこうと、足に力を入れていけば……

「あつやっぱりちよつとまつて。」

唐突に静止の声を投げられた。

「何だよ継木。」

キキツと音が立ちそうなほどに、すぐに止まってちよつと勢いを殺しきれず全方向に二、三步進むようにふらつく。

なんだ?と思つたが次に継木が言つた言葉は、

「望遠鏡その前に、片す。」

と言うせつかく気合を入れたのに……拍子抜けさせる様な事だつた。

その場で立ちすくむ、俺を素通りして真つ直ぐと星を見るために置いていた。望遠鏡に継木は、手を付けてカチャカチャと折りたたむ前の準備なのか弄り始めた。

「………良いけど。」

何処か気が抜けたような声で、返答をして。

俺はその様子を、ただ眺めていた。仕舞うのを手伝おうにもどうすればいいのかわからない、というかわかりしまいこむのが慣れているのか早い。

確実に下手に手伝うと遅くなるような気がする……………いや絶対に遅くなる。

「こつちから言ったのに唐突に止めてごめんね……………僕は壊れてもいいけど200万壊すつてなつたら、心臓に普通に悪いと思うし。」

「うっわ、そんな物俺使つてたのか。コエー確かに色々立派だなあとと思つてたけど。」

「割と結構使つてたお下がりで、まあ価値で見たらそこまでじゃないよ？プレミア付くもんでもないし……………」

継木は、望遠鏡を持ってきたバッグにしまい終わつてから……………ちよつと邪魔になら無いような離れた場所に置いて。

両手を合わせて謝つて来るが……………確かにずつと置かれてるのは邪魔だし壊しかねないからそんつてえつ200万？あの望遠鏡がかマジ？割ととんでもないことしれつと言つてんな？

壊さなくてよかつた……………マジで。

「さてさてさーてつと……………真つ直ぐ掛かつてくるといいよ、本番では不意打ちとかそう言うものもあるけどね。」

まあ手合わせだし、ゆるーく気軽にやろうよ。」

「おうっ！」

俺が継木との手合わせで真っ先に思ったこと。

「身体能力凄いな、義姉さんみたいだ。」

「全く打撃与えられてる気がしねーんだけど!?!」

まるで柔らかい布団を叩いているように、手応えが殆どしない。確かに殴ったり打撃は与えているが、殆ど避けられたりそらされ続ける。

壁のように受けて守っているのではなく、反らして避けて少ない力で力の方向を自身に向かないようにしていた。

「防衛だけは、仕込まれてるし。」

「このっ……………」

それに妙に、俺の動きが読まれている。正直に言えば五条先生に感じたような、圧倒的強者というような感覚は全く無い。向こうも殴ってきたりもする、けれど俺には当たらないし速さはあるが避けられた。

右から来た継木の拳を受けて、弾いて。

顎を狙って拳を振れば極度に詰められ狙いがぶれたところを、逸らされる。

飽きるほど似たようなことの繰り返し、集中が途切れているわけではないし手を抜い

てるわけでもない。有効打を打ったと思えばその前に勢いを殺され潰されて、結局できない。手合わせをしてから、ずっとそんな感じだ。

継木も手を抜いてる訳ではないのは、伝わってくる。ただ進展がない停滞を押し付けてくるだけで……

「いや僕正直に体力切れ狙いみたいなものあるから、それも一つの戦法だよ。」

「そりやそうだけどさあ！なんかあるだろ!？」

どちらかが諦めたら終わる、そういう精神論に無理やり誘導される。倒れはしないが、突破口が見えてもすぐに反応され動けばするが勢いは完全に殺される。

圧倒的な強さではない、だからここそこまでさばかれることに苛立ちとはまた違う感情が湧いてくる。

……にしても本当にあの体でよく動いているな、ジユリヨクとかのせいなのか？よくわかんねえけど。

「よいしょつと………」

「(本当に、手応えがねえ!)」

そんなことを考えながら、手合わせ前のついさつきまで殴ったら大変なことになりかねないと心配していたのは、どこに行ったのか継木をどうやったら倒せるかに思考を巡らせていた。

腹に一本キメたはずなのに、継木は何事もなかったかのようにケロツと起き上がってきた、下を見れば土が少し抉れている……

今度は後ろにタイミングを合わせて、バックで打撃を抑えられた。継木は、服に土がついたなんて言いながらここまでずっと殴り合ったり蹴り合ってるのに、汗一つ見せずこちらによってきた。

「基本は、ペースを握ることだしね……まあ悠仁落ち着いて落ち着いて。怒りとか割と呪力出す火種には、しやすいけど……」

まあこねくり回すような事なんて、基本対人相手だけど呪霊にも理解できるのはいい。」「

「ジュレイにそういう奴いるように思えなーけど？ 最初に見たの完全に話せなー奴だし。」「

突然説明するような論す声色に継木は変えてくる、だが相変わらず右へ左へ揺さぶりをかけてくる。

それに対応しながら、こつちも拳を振り出した。

ジュレイとやらに知性とかあるようにはとてもじゃないが見えなかった、幽霊って感じでもねーしどつちかかって言うとかバケモンってしか思わない。

「呪術界では、ある程度強さにランクがあるんだよ。上から順に特級、一級、二級、三級、

四級って……細かくすると準もあるけどね。」

強さにランクがあるのか……四級が一番強いってわけは無いだろうし特級が一番強い階級なんだろう。呪術界ってことは呪霊以外にもソレつけられてるのか？

「なるほっ……あつぶね。」

「で基本的には、呪霊は人間に近く……分かりやすく言えば知能が人に近付くほど強く階級が高くなる傾向にある。」

素直に知らないことに感心していれば、俺の脇腹に足が迫っていた。後退して、避けたが継木はそんな様子も気にせず呪術界についての話をし続けながら打撃を与えてくる。

内容自体は、ふざけてもなくしつかりしているような感じはするが……

間髪いれずに白兵してくるからまともに聞けない、継木の言動と言葉が食い違いすぎている。説明したいならちゃんとやれよっ

「タメになるけど、ペラペラ話しながらやるの止めてくれね？どっち集中すればいいんだよ！そこまで俺器用じゃねーよ！」

「まあ話す呪霊は特級という上位の中の、上澄みの上澄み位だから……ブラフとかそういう思考回すのに本格的に意味があるのは呪師とかになる。」

「俺の話聞いてるか!？」

継木から仕掛けてくる、攻撃を捌きながら自らも顔に肘に腹にそれぞれ攻撃を仕掛け防がれを繰り返しそう思い言葉を吐き出すが……………

聞こえなかったのかソレとも、聞かぬふりなのか表情も何もかも変える様子も変わった様子もない。

逆にそこまでやってどうして舌を噛まないで、饒舌に話たおす事が出来るのかと逆に感心を覚えるほどだ。

「後基本的には、呪を扱う人間を階級付けする時はその階級の呪霊を確実に祓えるが、目安になるね。」

二級の呪霊に、二級の呪術師または呪師は勝てて当たり前って感覚だよ。

聞いている聞いている、今までのことで何かわからないことある?」

「どうやって、この状況になつてんのが分かんねえよ。」

「呪いって割と、何でもありだからどういいう状況になつてんのかわからないことつてあるあるな事だよ。イツダ……………」

「……………」

舌ではなく、口の中を噛んだみたいだ。俺はその怯んだ隙に無言で顔に向けて真正面で殴る。いや本当にいつの間にか心配をしなくなったのだろうか。

伏黒の継木に対する反応の理由も、何となくわかった気がする。

悪いやつではないのは、十分に分かるがそれ以上に………確実にどこかの頭のネジが外れてる。

「で恵は、その二級呪術師凄いやね階級でみれば上から3番目。だから単独任務とかよく行くしいける。」

継木は、俺の様子に何故か面白げに笑顔を浮かべながらなぜかさつきまで呪術界の階級について話してたのに伏黒の話に変えてくる。

………相変わらず手も足もだしてるが。

顔を正面から殴ったものは、腕を出されてそらされた。隙をついたと思っても対応しなきゃがる。本当に頭で話しまとめながら、俺にも反応するとか器用なことだな！

「つまり伏黒は、単独任務中だったってことか？宿儺の指探してることはわかつけど。」
「大人でも大体準一か二級止まりだからね、高専に入る段階から二級というのはわりと異例なんだよ五条先生付きつてもあるだろうけど有力株つてところなのかな。」

そして宿儺の指つて特級呪物つてのは、何回も聞かされて飽きてるよね………
「特級呪物の中でも、やべえつてのはなんとなく雰囲気で分かる。」

全部喰わせるか、それともすぐ死刑執行するかで揉めるぐらいだしな………」

何かの琴線に触れたのか、突然継木はスニツと表情を無くした。そして手を出すのを止めて俺の攻撃を避けるだけになった。今まで周囲を鬱陶しく勝手に飛んでいた淡い

光を放っていた蝶達も光を無くして殺虫剤にやられ死んだかのその場で少し痙攣した後、ポトリポトリと落ちていく。

下を見れば、そこにはあつたのは燃えカスだけだった。

淡い光でも光ではあつたのか、視界がより夜が時間がたつて深くなつたのもあるだろうが暗い。

「そう、特級しかもその中でも危険な部類。

そのの、予め封印が弱まつてる事が分かりきつてるその上で最初から二級で才覚あるとはいえ単独で行かせると悠二は思う？

元々別の人が受けた任務が、放り投げられてやられたなら別枠だとは思うけどね。」

継木に、暗い中ぐんつと手を引かれ耳元で囁くように言われる。勝手にピースを見せられて目の前で組み立てられるように、詰め込まされていく気味の悪い感覚が走る。

殴り殴られ手を出されながら話された呪霊、呪術界の階級、宿讎の指の危険性、それらが全て今からの前提のように……

とりあえず引かれた手を、巻き込んで無理やり体制を戻し足を払い崩し力の限り継木放り投げた。

「ガッ」

軽い羽毛のように、高く吹き飛び木にぶつかり下に堕ちていった。……ぶつかった

所の場所は少し決れている。

「継木 お前は一体何を言いたいんだ？」

「……………」

ぱらりと落ちていく木片を眺めるように俺は落ちた継木を見下ろす、何をしたいのか問いたです。そこに悪意が無いのは、分かってるのだがナニが本心なのかナニが本当なのか全く見えない。

悪意は俺の目にはあるように見えない、けれども継木の真意は何重にも布を被せ鍵をかけられて得体のしれない物としか分からなくなっている。

「……………偶然ならそれでいいんだ、で悠二何で指を呑んだの？」

「それは、皆を助け」

「どうして呑むことで、呪力を得られると思ったのさ。宿讎の指で、ぶん殴るとかあったじゃん。」

僕から見ても呪い抜きで、力とてつもないよ。」

「……………確かにな、ごめん継木。って頭、血大丈夫か!」

夜の闇のような、焦点の無い黒い目がこちらを凝視してくる。

そして木に寄りかかって俯いたまま静かに、冷たいと感じるようなヒヤリとした声でお前は どうして指を呑んだと聞かれた。

オカルト部の皆を伏黒を助けるジュリヨクを得るために宿儺の指を飲み込んだ。
「そう言い切る前に……………」

どうしてそれでジュリヨクを得られると思ったのか、そう返される。ジュレイが強力な呪物を食って強化しようとしていると伏黒から聞いてそれで……………そもそもジュリヨク持たなければあのジュレイというバケモノを倒すのは無理と言われたからだ。

……………あの指でジュレイぶん殴るのは、素直に思い付かなかったな。そんなことを考えていれば、やつと継木の頭から血がつうつと垂れていることに気がつき駆け寄った。

「大丈夫大丈夫呪霊でも、よくあるし。個人の焦りとか、あると思うけど……………一番僕が懸念というか嫌だと思うことって。」

「仕組まれてるかもって、話なんだよね。」

焦った俺を見て、継木は大丈夫と一言で終わらせて。フラフラとバツクの中を漁って包帯を取り出してジュレイで良くあるといいながら慣れた手付きで頭に止血の為に巻き付けながら。

まるで仕事の不満をぼやくかのように、俺の方を改めて見ながら仕組まれていると苦笑いしていた。

「仕組まれてるって何をだよ?」

そういう風に言われても、仕組まれてるって何の事だか訳が分からない。多分こいつ

が言うなら俺が宿儺の指を飲んだ事辺りなのだろうがあれば俺の意思で飲んだ。

何かに誘導されてではない。

それは確かだ、俺が拾って俺が呑んだんだ。

その悩むような改めて思い返すような様子を俺は見せていたのか、頭の血を止めるための包帯を巻き終わった継木は切り株に座ってにこりと笑いながら首をこてりとさせた。

「簡単に言えば、両面宿儺完全復活とか？」

「本当に突拍子もない事言うなあ……そんな事あるか？五条先生もいるし最悪の自体にはならないと思うけど……」

両面宿儺の完全復活、本当に突拍子もない事を言うやつだ。両面宿儺はやばいやつなのは十分に分かる、寧ろそんなやつを復活させて誰が嬉しいって思うのだろうか。

呪いを悪用する奴でもあくまで利益があるからだし、スイッチすらわからない自動的に爆発し続ける爆弾なんて誰がほしいかという話だ。

五条先生がいるから、本当に最悪の自体にはならないと思ってる……それに俺が抑え込めてるのをどうやって出すつもりなのかそういう問題もある。抑え込めれているのがちゃんと分かっているから、全ての宿儺の指を取り込むまで死刑が延期になってる面もあるのだし。

「だって僕にだって何となく嫌な予感ってだけで、言ってるんだから目的わかんないって。」

「そこまで頭回らんよ。」

「思いつきかよー！」

「いや考えなかい！さつきまでの神妙な空気や雰囲気は何だったんだ。」

「予感なんてそんなもんでしょ、大抵。」

「けど……頭の隅っこぐらいには入れてほしいかなあつて正直悠二と話ししたかった事ってコレが主だし。」

「呪術界としてみても、僕の視点から見て今回の案件合点が行かない部分が多すぎる。」
「……………注意喚起ってコトか。」

「予感も思いつきも似たような物だ、と継木は俺の言葉を切り捨てて星だけ見える暗闇の空を見て。」

「俺に俺が巻き込まれた原因伏黒の任務や、その周辺の事象に不自然なことが多すぎると前例と今回の特例等つらつらと淡々と本など無いのに読み聞かせをするように……………」

「もしもこれら全てが、偶然でなかったら。」

「そうそう。信じてても信じなくてもいいよ。」

「なら、普通にすればいいじゃんこんな感じにする必要無くね？伏黒の前でも。それにこんな真夜中に俺だけ、連れ出してやらなくてもなあ。」

その事を伝えたかったのは分かった、けれども夜中に起こして山奥に連れていって、こんな星見せたり手合わせしたりまどろっこしい事をしなくてもいいはずだろうと俺は呆れなのか自然とため息をつきながら溢す。

オカルト部で山奥はオカルトスポット多いし付き添いで巡りでそれなりに慣れてはいるが、普通のやつがそうやられたら体びつくりするだろう。

確かに内容は、かなりきな臭い物だが……

「下手したら高専も一枚か二枚噛んでる可能性もある、なら夜の方が色々と秘匿するにいい。」

それにここ比較的高専校内としては整備されてなくて訓練にも使われてない仕込みにくい場所だし。とても遠くて行きにくかったでしょー？」

「星見ようと誘ったのも、それ目的か？」

高専も関わってるかもしれない、そんな理由をまどろっこしい事をした訳としていたずらっぽく足をパタパタさせながら継木は茶化していた。

トンデモ論だと俺でも一蹴しそうになったが、さっきまでの継木が違和感を感じている部分とそして高専側になるべく知られないようにしている、用意周到さから一蹴は出

来なかった。

いや用意周到さからではない、継木の言うことを真実に近いとするなら高専側も組んだの一部と考えれば割とすんなりもしこれらが仕組まれてる事ならばの困難な点疑問な点が大体解決してしまうのだ。

………そもそも仕組まれてるかも知れないと言う話かなり、論理が飛んでいる事でもあるのだが。

「それも本当だよ、僕あんまり嘘はつきたくないからね隠し事は良くするし、誤魔化すのも結構するけど。」

嘘全くつかないわけじゃないし。

実際ここから見る星、綺麗だし？」

「そうだな、なんか伏黒や五条先生からも継木のこと聞いてたけど………掴みにくいな。」

悪いやつではない、悪意は無かった。けれども全てが善意で出来てるようなやつではないそれが俺がこいつと会って暫く話して思った事だった。

あのトンデモな提言も、俺を思つての事かもしれないがそれ以上に他の理由も含んでいるのだろう。何重にもくるんで、相手が剥いできた面を正解している。

自由だが同時に、自身を見つめ直す鏡を見ているようだとも思つてしまう。している

ことは大体本心なのだろう、そのどれを俺が継木の一番したかった事と捉えるかどうか
なだけで。

「そりや初対面だからね、コレからも仲良くしてくれると僕は嬉しいな。手合わせ終わ
りにしようかあ悠二の動きの癖それなりに見れたし、ずっと動くと明日に差し支える。

わがままに、付き合ってくれてありがとう。虎杖 悠二、君にとって呪術界が悪い所
じゃないのを祈るよ。」

四人目

今日は一点も曇りない綺麗な蒼い空だ、空気も心地よいとは言えないか都心だしちよつと実家とか高専よりは濁っている。

気分悪い、いつものことなただけだね。

つまり何事もないいつも通りだ。

「新入生楽しみだね、恵、悠二。」

今日は新入生のお迎えで、五条から現地集合との話を受けて学生服を今回はちやんと着て。3人揃って集まっている………時間は僕が一番遅かった、ちよつと寝坊したというより身支度に時間かかっちゃったかな。

新しく来る人は、釘崎野薔薇と言う女の子らしい。

大体話せるような女性は年上つてこともあつて、同い年は割と初めてな気がする。ちやんと小学校通つてた時は話してたけど、もう名前も変わつて縁が切れてるし。

………そういえば結局一度も中学校いかずじまいだったな、ちよつと雰囲気感じてみたかったけど仕方ないね。知って辛くなるなら、知らない方がいいとも言おうけど。

仲良くなれたら真衣に渡す贈り物の相談とかしたいな………、僕だけで考えてるとな

んか不安になってくるし。東京高専で、すぐ会える女の人は義姉さんだけだし冥冥さんとか九十九さんとかも含めるなら割といるけどちよつと年上過ぎるし……

付き合ってもらったら、少し趣向が懐かしいようなものになってしまったことがあった。でも普通に綺麗な物渡したら、何故か真衣にどんびかれた後ため息をつかれた。

大丈夫結婚指輪の貯金は、ちゃんと別でしてる。金額的にもはやティアラまで、追加でいけそうな感じまである。仕立て関係は、こつちに関係あるのはあるからドレスとか着物の心配はいいか。

そんなことをポヤポヤと、五条を待つ長い間に考えていると。恵が僕の方を怪訝そうに指さしてくる……今日は、特に何もしてないんだけどな。

「継木お前は何で頭の怪我してんだよ、任務とかでの話聞いてねえが。」

入ること自体は、だいぶ前から決まっていたぞ。色々と事情があつて遅くなつたみたいだが、お前ならもう知ってるだろ。」

ああ頭の怪我の事か、そう思い包帯を指でなぞれば思ったより血が出ていたのか湿つていて手元を見れば赤黒く指先が少し染まった。

血が出るのは久しぶりだったから気がつかなかった、薬飲んでるせいか血が止まりにくいだったけな。

「雰囲気だよ雰囲気。それに知ってたとしても楽しみなものだよ?」

まあ釘崎野薔薇ちゃんが、来ることは結構前から知っていた。仲良くなりたいたいならその人を知ることが一番なんてよく言われるし。

掛けてはないけど携帯と、電子メールも見つけた。大分田舎住まいみたいでちよつと難しかったかな。普段と比較しての話になるけど。

顔とかも写真とかそういうのだけだし、実物では初めて会う。百聞は一見にしかずそれは楽しみなことになると思うよ？ 友好関係とかは、わざわざ地元まで赴く必要あるから調べてないし。

「どんなやつが来るんだろううな。」

伏黒、継木の頭、それ俺のせいだわ。」

「ちよつと誘ってねー」

「……………バカか？」

悠二は、少しバツが悪そうに新生生を楽しみにする楽しげな口調の後に言葉を発した。

いや悠二のせいじゃないって、割と性質みたかったから誘った僕が大体悪いし別にそこまで大きな怪我でもないしね。骨折れてない。

「まあまあちよつとした河川敷の殴り合いみたいなものだよ、いやー力凄かったね。」

後患バカとはなんだ？ バカとは、少しムカついているようだけどそんなに頻繁にして

たら眉間にシワがつくよ、もつと柔らかくしないよ。呪術師としては、怒りとか呪力が抽出しやすい火種だからいいんだけどさ。

悠仁は、本当に力が強かった……義姉さんよりひよつとしたら身体諸々上なのは驚いたけど。

恵と同じで等級やったらすでに、二級判定は軽く行くだろうな一級にはまだ一步足りない感覚ではあるけど。呪力抜きで、二級相当にいくのだから扱えるようになったら、どんな風になるのだろう。

見た目だけで気に入ってコンビニで買ったカードのはいった袋を開ければ、ウエハースが入っていた。猫とかのカードだけほしいんだけどなあ……

「夜に突然入られたのには驚いたけど……今度からちゃんと入れよ継木。

心臓にわりいから！」

このウエハースどうしようか、ああ。

「ごめんごめん、ウエハースあげるから。」

悠二に、謝罪も込めて渡そう。

「いらぬのか、サンキュ。」

「やっぱりバカだろ、お前ら。」

「悠仁割と頭いいよっ！」

寝起きだけでも、頭の回転自体は早かったし。僕の話もある程度理解してくれてたし。臨機応変が効くタイプ。恵も頭いいし、僕は正直いって知識あるだけで頭がいいとはとても言えないけど。

でもバカといわれるのは傷つくな。

そう思いながら、恵の方を向けばそっぽ向かれてしまった。何が悪かったのだろうかまあ何か悪いのだろう。

「そういう意味じゃない。」

どういう意味なのだろうか。

「ハハハ、後制服中々似合ってるね。ピシツとして見えるよ悠仁。」

「おうありがとうな、全部一緒ってわけじゃねーんだな。継木のは外套みてーの伏黒と違って羽織ってるし、俺はパーカーあるし。」

いつものように話を切り替えて、高専の制服が出来たのか身にまとっていた悠仁のパーカー部分を少しつまんで言う。仕事が早いなあ、生地もしっかりしてるし……でも呪霊との先頭を考えるならもう少し呪具的なものを混ぜ混んだ方がいいと思うけど、特にそういう仕組みもないからな。

強力な呪霊には、そういうもの仕込んでもお守り程度の効力ぐらいしか無いだろうけど。

後純粹に、コストがかさむし。それは、高望みか高専にある程度はこつちからも資金援助してるけど通常運営でも余裕があるとは言えない……………もつと注ぎ込んでもいいけどそれはそれで問題あるからなあ。

安価な方法ができたとしても、元々の既得權益を脅かされる層の反発もある……………もし方法ができたらその人たちも納得する方法を捏ねればいいか。

「制服は頼めば細工してくれるから……………知らねえつてことは虎杖が頼んだわけじゃないさそうだな。ああ五条先生に、勝手にやられたか。

そういうところあるからな、五条先生。」

「気に入らなかつたら追加で仕立て貰えばいいから、そこまで気にするものじゃないよ。僕も、制服のカスタム違い持つてるしね。」

恵は特に細工はしてないそのままの制服着てる、僕は制服自体は普通だけど呪札とか色々持ち出せるようにと体つきを隠すために外套を別で作って貰った。

悠二のパーカーみたいなものだね、基本的に高専の制服は色々と規定のボタンさえつけていけば自由。京都校だとスーツに魔女服、和服やらあるし。

僕も人のこと言えないけど、お兄さんみたいに和服の制服あるし正確に言うとな家からの服にボタンつけたものを制服として認定を貰ってるだけけど。

「まあいいがこのパーカーの制服、俺中々気に入ったし。」

「おまたせく、おつちよーど制服の話？3人仲良くてなりよりじゃあ張り切って迎えに行こうか4人目。」

五条本人の口から言った時間を一時間以上過ぎて、やっと彼が到着したどこでも油売りするのが得意な人だ営業成績も高いに違いない。

僕達の姿を見たとき、待ち合わせの方向にさつさと歩き始めはぐれないようにについていけば恵が不思議げに五条に質問をぶつけている。

「なんで原宿集合なんですか、待ち合わせするにも人が多い場所は向かないですよ。」
「本人の希望でね。」

それに野薔薇ちゃんの希望と答えた、東京への憧れが強い子なのだろうか……………
「アレポップコインか、食いたい！」

「東京は、色々あるからね。」

悠二も東京で始めてみるものに興味が強いみたいとポップコインの路上売りにかけていく様子を見ながら微笑ましいなあと僕は思った。

ああ、あの子が釘崎 野薔薇ちゃんかー

はつきりしてる人だな、義姉さんに似てる感じかな？あの人は、社交で一度会ったと思う顔つきと声だけど覚えてるかな……………上司さんの付き添いっぽかったな今は昇進

している訳じゃないかスカウトしてたみたいだし。

とりあえず野薔薇は、こつちに気が付いてないみたい……顔も知らないから当然か分かるといったら制服ぐらいだし。

「何だコラ逃げんなや、はつきり言えや。」

「取り込み中のところごめんね、高専の人達来たよ。野薔薇ちゃん？」

僕は、近づいて野薔薇の顔を覗き込むとびつくりしたのか彼を手放した。その後、すぐに光のような早さで逃げていく危険を感じると本当に早くなるものだなあスカウトっていう仕事上のスキルかも知れないけど。

「うわっスゲ、躊躇なく話しかけやがった。」

「分かってるだろ、ああいうやつだ。」

………恵、悠二ヒソヒソ声で言ってるけど僕聞こえてるからね？それと悠二、色々買ってるなああしまう場所ある大丈夫？無かったらレンタルロッカーでも使って貰えばいいか都心なら割とあるし。

「こつちだよー！」

野薔薇と無事合流できた後に五条先生に連れられて少し場所を移した。流石にあんなに人がいるところで、立ち話を長くするのは迷惑にもなるからね。

「そんじゃ改めまして。」

釘崎野薔薇

喜べ男子 紅一点よ。」

「俺 虎杖悠仁 仙台から。」

「伏黒 恵」

「わーい 継木 櫻 1年生の呪術高专同士。これから野薔薇よろしくね。」

人通りが少ない、ビルの間なのだろう場所でそこではじめましてとお互いの紹介を済ませると……………

「私って、つくづく環境に恵まれないのね……………」

野薔薇は、環境に恵まれないとため息をついた。呪術界にマトモな環境は求めないほうがいいと言うのは思っても言っちゃだめだなと思ひ。

「住めば都だよ。」

とだけ口にした。

その環境でなければ、息が苦しい人間も一定数いるのだから文字通りの住めば都みないなものだろう。

「このまま駄弁ってるのが、目的なわけじゃないですよね。」

「フッフッフよくぞ聞いてくれた。」

恵は、さっさと終わらせたいのか五条に話しかけた。そうすれば、どこか勿体ぶった

様子を見せた。

時間が勿体ないので早く言えと、口に出さなかつた僕は誉められてもいいと思うなんて心のなかで思った。

「せっかく1年生が4人揃つたんだ、そのうち2人はお上りさんときている……………」

友好をお互いに深めることを踏まえて……………、行くでしよ東京観光!」

悠二と野薔薇の二人は、五条の口から東京観光と言ふ言葉が出た瞬間沸き立つように騒ぎ始めた。

二人とも、東京デイズニーは千葉だし横浜は神奈川だよ。まあ有名なところは大体縁がないとごつちやになる気持ちも分かるけど……………温泉とかも場所ごつちやになるし。名前だけ、知っているとかだと特にね。

僕のオススメの東京の観光地は、浅草とか東京国技館とかかなー東京スカイツリーとかそつちの方が目立つちやうけど……………後アメ横とか。

「うわつ凄いい喜んでるなー」

「騒ぎすぎだろこいつら……………」

「楽しんでくれればそれでいいと思うよ?」

恵はちよつと騒がしいのは苦手だからなあ、僕は基本的に騒がしいのは嫌いじゃないしむしろ好きな方だけでも。寂しさとかは紛らわせられるからね。

仏のように、なにもなく静かよりはよっぽど人らしい。

「まあ二人共 静まれ

行き先を發表します……六本木。」

「あははーやつぱり。」

「いますね呪い。」

「嘘つきー!!!」

「立地的に、六本木にはまあまあ近いけどね……」

ついて歩いていく、途中で「ああ六本木に向かつてないな。」と思った。方向が近いには近いが別の方向に行っていた。途中で五条に迷子ですか？と耳打ちしたが、そのままだったし言わないでねーと言われたので……

でも二人の失望は、割とあるだろうなーと思う。せっかく期待してたのに……後で行きたい場所でも聞いて時間とって埋め合わせしておこうかな？行きたい場所に向かうガイド……いやナビなら僕こなせるし。

にしてもこのビル買収候補に出てたやつかなあ……廃ビルだけど靈園も近くにある。収益だけで見ると、立地が悪すぎるといふほか無いが呪いの吹き溜まりの解消として見るなら……

今の段階でも、幾つか呪霊発生してるし買い取ってから周辺状況からちよつと一部作り直す必要あるかな。

霊園があるっていつても、それなら墓参りの人間やそれを管理する人間も存在するから、完全に廃れると言うものでもないだろう。今から二人が呪霊を祓うために入るけど、それを繰り返しても結局また発生するし。

なら根本からの対応は、継木家で考える必要がある。……きつと最初からその為に現代社会への影響が、自然と強くなった家なんだろうけど。

「まあ、悠二、野薔薇ちゃん。頑張つてね。」

そうやって二人の肩を、廃ビルに送り出す前に叩いた。

「やっぱり俺行きますよ。」

「恵大丈夫だってー多分。」

僕と恵と五条は、廃ビルに入っていく悠二と野薔薇を見送ってそれぞれ座れる場所に腰かけた。悠二が持ってた呪具トザマって言ってたよね五条義姉さんのかな？それとももう一つの物？一応後で義姉さんに聞いてみよう……

「そうそう櫻の言うとおりで恵は病み上がりなんだし無理しない、後相変わらず継木は過保護だねえ。」

「バレてましたか相変わらずそういう所には、すぐ気が付きますね。」

でも何かあったからじゃ遅いですよ、ただでさえ呪術師は手後れだ。」

一応二人には告死蝶は、一匹づつ隠してそれぞれ作つたが、五条にはバレていたみたいだ。呪力が見える目を持っていたらそりや呪い関係の行動は筒抜けか。

告死蝶は、弱い式神 だから周囲に影響を受けやすい。今回は野薔薇と悠二の呪力をそれぞれに、主に混ぜ混んで二つ生成した。もしその二つのどちらかが弱るか、消えるようなことがあつたら、確実に何かトラブルが起きているその確認になる。

今は、二つともまだ元気だ。

「虎杖は監視対象でもある。」

「まあまあ、僕が今日試したいのは釘崎野薔薇の方だよ。」

確かに、悠二は二級相当の腕はもう持ち合わせている。野薔薇の方は、まだ腕前的にもメンタル的にも未知数な部分が多い………芻霊呪法だったけ。

アレかなり呪術の中でも、特異な性質持ち合わせてるよね。なんとというか肉体の損傷というより魂寄りの損傷でそれが肉体にフィードバックがくるような。

そもそも呪術なのにほぼ全員物理とは、これいかに………いや回りで言われてるのと本物は違うのは当然なんだけど。イメージ画像と実物の剥離は、割とすごいからそれほどほぼ一緒だよ。

呪霊からして、物理だからまず物理高くないとその前に居なくなるから………なんか

レベル上げて、基礎力で殴れ見たいな話になってきた。

「元々呪いに触れてきたと言つても、地方と都心じゃ呪霊の質が異なりますからね。でもそれを言うなら悠仁もじゃないですか？」

「櫻、悠仁は最初からイカれてるんだよ。異形とはいえ生き物の形をした呪いを、自身を殺そうとしている呪いを、躊躇なく殺りに行く。」

「それも君達みたいに、昔から呪いに触れてきたわけではない普通の高校生活を送つていた男の子がだ。」

「……………そうかなあ、宿難の指がガバガバ保管されていた高校を普通の学校とは僕は言えないけど。」

「順序が逆と思つてるからなのかな、適合した人間が学校に通わされていたとかそんな感じに。悠二自体は、恵が懐にされるぐらいにとってもいい人だけだね。」

「もしそれさえも、計算だとしたら末恐ろしいと思つてしまう。誰にもそれは話さない話すつもりも無いけどね。悠二は悠二だ、それは以外の何でも無い。」

「……………」

「呪術の才能があつても、この恐怖と嫌悪に打ち勝てず挫折する呪術師は山程いる。僕は、彼女しつかりイカれてるかを確かめたいんだ。」

「ここで揺らいでたら、これからも無理だろうからね。」

「それには、同意します。」

恵は僕と五条の様子を一目見てから押し黙った。

基本的には、呪術界なんて人手不足ぐらいが丁度いいと思ってる僕はそれには完全に同意見だ。生きているうちに挫折して、戻れるのなら戻った方がいい死んでからじゃ遅いのだから。

「今更な気もしますけどね。釘崎も俺達と同じ様に呪いには長く触れている人だ。」

「……………?」

野薔薇の告死蝶の動きが、不自然にかくついている。何かあつてのかわでも、恐らく本人が怪我などの負傷を負った訳ではなさそうだし……………

そう考えていれば、廃ビルから呪霊が飛び出してくる。腕が斬られてるな……………それで逃げたのか、逃げられそうになったらそりや動揺するよね。

「祓います。」

「ちよつと待つて。」

恵は逃げようとする呪霊を見た瞬間、鶴の構えをとるが……………五条に制止され次の瞬間。

内側からまるで釘が大量に出るように、黒い棘が呪霊の身体中から生えつんぎくような断末魔をあげながらその呪霊は地面に着く前に灰のように消えた。

「うん、彼女はしつかりイカれてたね。」

そんな五条の満足げな声を聞きながら、無言で呪霊に対して手を合わせ黙祷をする。どんな悪質だろうと人から生まれた物だ、ならば弔う人間が居なければそれは本当に死んだことにはならないのだから。

ちゃんと、殺すために。弔うのだ。

「お疲れサマンサー子供は無事親御さんが迎えに着たよ。

じゃあ飯食いに行こうか。」

「ビフテキ!!」

「スーシー!!」

「お冷やあるかな?」

「こういう時ぐらい食えよ……」

あの廃ビル内には、子供が一人迷い混んでいたらしく無事親御さんの元へと送り届けられた。

………時間的にはもう夕食だろうか、今日の功労者二人が希望してるのはお肉と寿司かあ。僕は水さえ出してもらええる飲食店なら何でもいいけど、でも店側としてはそれじゃ迷惑客なんだよね。

「野菜なら、なんとか。まあでも皆で騒がしいのはそれなりに好きだよ。楽しいし。」

インク漏れ

曇り空の中、伊地知さんに車に送られ四人で林の中で今回請け負った任務の詳細を確認する。

事前に少年院等々のデータ自体は貰ってはいるが……

「今回の任務、かなりヤバイやつですよ？伊地知さん諸々の避難誘導などは済んでますか？」

コレはヤバイ案件だろうと、言う感覚がビシビシと感じてくる。

今回はもはや入らなくても空気で分かる、強大な呪力の中微かに宿難の指の呪力の感覚を感じる。ここからでも感じるんだ中に入ったらより強くなるだろう。

今回の受胎の呪霊が宿難の指を取り込んでる可能性はまああるな、正直まだ呪霊に見つかっていないいいけど。

少年院の内部地図は、もう読み込んだ。中々無いものではあるが、今回の案件の核となる呪霊が生得領域を少年院の内部に構成していなければ、迷うことはないだろう。

「ええそうですね、今回は受胎が確認されました。中にいる人数は5名……その生存確認と存命していれば救出の任務となります。」

「受胎が変態した呪霊の場合特級になると想定されます。」

伊地知さんは、普段より深刻そうな面持ちで話を続ける。特級かあ………特級と言っても上ブレしてるか下ブレしてるかの差が激しいんだよ。

特級って一級辺りの物差しで図れないのをまとめてぶちこむ分類だからなあ………特級の中でも区分更に分けてくれればいいのに。そこまで個体数も居ないか。

生得が展開されていたら、中の人間はほぼ生きてないものとして認識していいだろう。生得領域を作つてると言うことはその場所全部胃袋みたいなものだ、居るだけで呪いに犯され呪霊に襲われるか襲われないか限らず死ぬだろう。

まあごく少量の呪力の放出を一般人はしてるから、焼け石に水だろうが時間はほんのちよつと稼げて生きてるかもしれない後がどうかは僕は知らないけど。

「………確かに、等級と同じ呪術師が派遣されるんじゃないか？俺達特級ではないと思うけど？五条先生は？」

「たしかにそうだが、今出張中なんだよ。高専内をブラブラしていい人材じゃない。」

特級を確実に倒せると思われ呪術高専で認定されてるのは、現時点で三人その内の二人が海外に行ってる。いや一番の発生地の日置いておいて特級二人が海外って状況もどうなのさ。

強すぎて暴走時対処できない人達、とも言い換えられるけどさ。

そんなわけで、本当の意味で特級に当たるのは一級が多くなる。二級〜三級複数人で相手することは、ないね。まさしく異常事態一級誰も居なくてで張ってるのかな。

一人ぐらい一級の待機者はいるもんかと、思ったけど。

家から直接伝えて、継木家の呪術師引つ張ってくるのもアリだけど、それは流石に職権乱用になりかねない突つ込まれたらそれはそれで後処理が面倒だ。

「この業界は人手不足がっね、身に余る任務を受けることも多々あります……ですが今回は緊急事態で異常事態です。

絶対に戦わないこと。特級と会敵した時は逃げるか死ぬかです。自身の恐怖に従って下さい。」

「あのっ正は大丈夫なんですか!」

逃げることなら、毎回してる。倒すことは僕は元々基本的に期待されてないしね………逃がすのは苦手というかやるとするなら初めてだけでやれるだけやろうか。

少年院の親御さんかな?

ここまで抜け出して走ってくるとはなかなかだなあ、避難誘導はされているはずだけど。息子さん思いなのか、子連れできていないのかどっちでもいいか。

正さんは、交通事故二回目だったかなあ。少年院の人は、大なり小なりそんなものだろうけど。

「釘崎、伏黒、継木 助けるぞ。」

「当然。」

「……………」

恵は今回の捜索対象は大体引ってくるめて嫌いなタイプだろうね、そもそも懐に居れた人間以外はそれなりって性質ではあるけど。野薔薇と悠二は……………今回の案件、士気はバツチりって感じだね。

「やる気満々って感じだね、でも生きてこそだから逃げる選択は入れとくことは忘れずね。」

うんうんやる気はあることはいいいことだ、正直に言えば今回の案件について……………五人はもう死亡しているとして見ている。生存したら幸運それぐらいに思った方がいい、只行方不明ではなく死んでいると言う結果また生きているという結果を示したい。生きていれば、それはそれで次に行ける。死んでいればきちんと終わらせることが出来る。

行方不明の曖昧で終わらせるのは、個人的にはいただけくない。あくまで個人的な感性のお話になるけど。

「お気をつけて……………」

僕達の4人は、伊地知さんに見送られて少年院の内部に向かうため歩いていく。その

後帳が降ろされる……………

「おー夜になつてるー」

「帳だよ、市街地が近いからね。一般人迷い込んだら大変だし見られたら不味いからね。人が壁ぶつ壊したりなにもないところでシャドーボクシングしていたりするの見られたくないでしょ。」

ビツクリドツキリ人間としてワイドショーの人気者だよ。」

そういうえば、悠二にある程度の事教えたけど帳の事忘れてたなあ……………基本帳使わない現場がほとんどだったし。僕に、とっても帳は久しぶりだ。

帳は、呪の秘匿を担保する一つの仕組みだ。

降ろさなければ、呪術師はバケモノとして排斥されるだろうね。普通の人間を守るためじゃない、馴染むための事だ。知性があるだけのいつ暴れるか分からないヒグマなんて迎え入れられるわけがないだろう？

にしても、毎回帳は夜だけど星が見えないのが残念だ。星があるからこそその、夜なのに。

「継木、緊張感持て。そろそろ着くぞ。」

先頭を歩いていて、恵に悠二にした説明の例えがあんまりだつてらしく少し怒りがこもったように言われてしまった。でも呪術に入ったばかりなんだしこういう風に堅苦

しくなくやった方が頭に入りやすいと思うんだけどなあ。

そう思いながら、恵の横にたつて意識を向けて貰おうと肩を叩いたら無言で振り払われた。せめて、何か言葉の反応ほしかったな。

「今回は二つ手に分かれようか、四人で纏まるよりも分かれた方が早いし危険度は少ない。」

「どう分かれるのよ。」

「恵と悠二、僕と野薔薇ちゃんでもいいんじゃないかな？今回は特級相手かも知れないからねまとめてお陀仏より会うかもしれない人数は減らした方がいい。」

ねっ恵。」

今回の案件は呪霊の沈静化また祓う事ではなく、生死不明者の生死の確定と内部状況の確認等々普通の任務とは達成条件が異なる。それは恵も十分に理解しているだろう、五条や憂太さん相当呪術師が本来の当たるべき案件と言うことだし。

特級に今まで当たったことが無くても、対応する人である程度見積もることはできる。

僕から見てもここにいる僕含めて、特級はムリだろうし弱いつて思ってるわけじゃないけどね。特級相手には下手すれば一級でも死ぬ呪霊だ時間稼ぎなら、相当の甘めに見積もって出来るとするなら僕と恵ぐらいかな……

悠二もまあ僕の間で見て、時間稼ぎが可能な人に入るだろうけど宿儺の案件があるし下手に暴走させたらこっちの方が惨事になるだろう。爆弾解除に別の爆弾起爆させますは本末転倒だ。

戦力差が、離れすぎてるなら量が集まってもまとめて潰されるだけなら分散させた方が生存率は上がる。片方が危険ならそれを囮に、もう片方は逃亡確率は確実に上がるから。

それに純粹にいる時間が短ければ短いほど、合敵率は低くなる。

「継木

わかった、俺にお前の式神五つ寄越せ。こっちも黒い方の玉犬を渡す。

それを減らして、お前が見つけた数搜索対象の数をこっちに伝えてくれ。」

「もし五人発見して出る時や、特級相当の呪霊と会敵時にその黒い方の玉犬は恵に戻すね。逆に恵の方が特級にあつたり合敵したときや出る時はそっちの方こっちの玉犬戻して。」

それでお互いの状況は、見ていこう。」

「俺は、コレが弱まったら。継木の方が不味いとして虎杖と一緒に少年院から逃げる。

それいいんだな。」

「それでいいよ。まあお互いの付き添いはちゃんとかえしていこうね。悠二は恵に任せ

る、野薔薇ちゃんは僕に任せておいて。」

恵は頷き、白と黒の二頭一対の式神玉犬を影から顕現させ。俺がやったんだからわかつてるだろうと言うように僕に連絡のための式神の譲渡を求めてくる。

外套に仕込んだ、一つの呪札を燃し式神をこちらも発生させ5つのみを恵の回りに漂わせた。

その後簡単な、お互いの離脱の合図の確認などを行う。お互いが危険な状態になった時に、式神も同時に弱るそれも離脱のサインだ。助けに向かうのではない真つ先に逃げることをお互いに確認した。

見捨てるというのは確認がなければしにくい、僕も最初はそうだったからね。野薔薇や悠二はまだ違うと思うし………恵なら悠仁の方に付かせたほうが心情的に気が乗らない任務でも、少しは気が入るだろう。

僕も野薔薇とはあんまり交流できている感じはしないけど、うん流石に仲間割れはする可能性はないよね………うんないってこんな危険な状態で多分。

「後宿儺の指に近い呪力がある、ここに近づいて更に感じてるからもし発見したらそれも見かけたら回収はしておいて。杞憂だといいいけど。」

「!? ああ分かった、継木見つけたら回収しろ。」

「二人で、ボソボソ話しているんだ?」

「さっさと行きましようよ、ここで時間潰している暇なんて無いわよ?」

「うーん何でもない!緊張しちやっつてね。」

「行くぞ。」

少年院の扉を開けて中に入れば、そこには身勝手に混沌に組み立てられたようなスラムのような空間が広がっていた。

踏むたびにぐちよりと音を立つ肉塊からできてくるような、生々しい空間じゃなくてまだ良かったな……危険地帯練り歩くのが仕事だし色々なものは見た事自体あるけど。今回ののはかなり大きいね。

そして全体から宿讎の指の呪力を感じる、核となる呪霊が喰ったとは思いたくはないけど……でもそのまま危ないから逃げますというのは、言い訳が立たなすぎる。

「生得領域か、術式は入ってないみたい。今回の核となる呪霊は一級は確実にあるね。」

……一級上位く特級下位程度かな。二級や一級下位の可能性は限りなくなつた。特級上位なら、むしろこんな生得領域なんか作らずに直接暴れまわる方がおおいし。

「生得領域ってこんなのに、なるんか?違法建築!?!」

「私こんなの見たことないわよ!最初の廃ビルしかり東京ってこんなものばかりなの!?!」

「俺でもこんなに大きいものは、初めて見た………扉は!？」

それぞれが、方向性の違う困惑を口にする。こんなものに慣れてるのなかないからね、呪術師でも生得領域内部に入るって三級辺りだったら基本的に死を意味するぐらいの実力差になるし。

恵はいくつか入ったことあるみたいけど、ここまで大きいのは始めてらしいね。強力な呪霊なのは恵から見てもわかっているようで良かった。

ああ扉か。

「ないっ!? 私達ここから入ってきたわよね?」

「うんうん!」

「まあ落ち着いて落ち着いて。僕なんとなく入ってきた場所わかるし………」

術式が組み込まれてない生得領域なら、ハリボテに近い物だ。組み込まれていたとしても、領域なら区切りが存在するましてや僕達は招かれたわけではなく自ら入ったのだから出口はもう現実世界に癒着するように存在してる。

基本的に生得領域は、核となる呪霊の腹の中だ。境は呪いの質が少し違うように感じている。

区切りはあるが、大抵は頑丈ではない。現実のものに影響を与える空間なら現実と隔離しすぎてはならないのだ。完全に隔離しているのならそれは影響を与えることすら

出来ない存在になる。

「……………こいつも、出口の臭い分かるから出られるぞ。」

恵の玉犬も呪力から生まれ現実には則している存在として似たようなものなのだろうか？分かるようでよかった。そう思いながら、野薔薇の方を見てから僕達が進む予定の道を指差して。

歩いていく。

「とりあえずこんな危険な場所に長居できないし、手筈通りに二手に別れて五人探そうか。」

行こうか、野薔薇ちゃん。」

「継木いっちょまえに仕切るな、イラつく。しばらくしたら外で会いませよ、伏黒と虎杖四人全員揃ってね。」

「おうつ、継木と釘崎も頑張れよ。」

「さっさと行くぞ、着いてこい虎杖。」

さあ早く終わらせようこんなこと。」

インク漏れ 2

私は正直に継木 櫻時間がある程度たつた今でもこいつの事が苦手だ。

伏黒と虎杖と別れて熱病に犯されたときに見る悪夢をそのまま形にしたような場所をこいつと揃って淡々と歩いている。呪霊は、何故だが現れてはいないや的確に何かを感じ取って避けているからなんだろうか。

「本当に入り組んでるわね。」

私は呪霊が作る生得領域という空間には初めて入った、一旦戻って引き返すときには道すら変わってる。まるで入った獲物を奥へ奥へと誘うようにそうなっているのではないかと思ってしまうほど。

もし呪術師として、呪い知識がない人間にとつては入った時点で恐怖に陥り何もできなくなるそういう想像に至るのは難しくない。

初対面の印象

距離が近そうに見えて、胡散臭い。片手に刃物を持って握手しそうな奴。

それがまだ変わってない、他の二人と違ってそもそもその交流の機会が少ないってこともあると思うけど……高専の授業にもほぼ任務やらなんやらで継木は欠席してるし

食堂すらほぼいないし。

虎杖と同じぐらい表情は豊か……に見せているが、伏黒よりもこう見せた方がいいという様子が先行している。そんな感じがひしひしと感じてしまうのだ。継木のやることなすこと何か別のために使っているような、話している内容と違うことを頭に隠しながらやっている。

立場が上とか下とかじゃやない、外れているのが妙に苛立つ。

「呪霊の生得だしね、ハハハおつと呪霊来たね。」

「流石に私でもわかるわよ、祓う……」

「いや無視する、襲ってこないみたいだし大量で襲ってくるならまだしも撒けるなら撒く。いちいち相手にしてたら時間がない。

走れないならいいけど。」

後純粹にそれ抜きでも、悪い意味で割といい性格してる。自覚しているのかしていないのかそれは私を知る由もないけれども、一言多い。

基本的に文脈からは気を遣ってるまた確認なんだろうとは思うのだが。

「走れるわよ?! いちいち本当に言い方が癪にさわるね!」

「その調子だよ、ビクビクしているよりはよっほどいい。さて逃げるよ野薔薇ちゃん。」

継木は、怯えているよりはよっほどいいとケラケラとからからと笑いながら私の様子

を見て駆けていく。それに引つ張られるように私も着いていった、はぐれたら一人では迷うしかない事は流石に察している。

そして継木は、この生得領域中である程度の危険を認識してそれを避けて進んでいることも。

良くも悪くもこういう自体に慣れきっているのだろう、何回か伏黒から任務が多くなるのはどうしてもあいつの仕事上仕方ないと聞いている。軽く聞いたただけだけど、呪力そのものをどうたらこうたらとか。

「……………私も、あいつらと同じ様に呼び捨てでいいわ。」

「そう?じゃあ野薔薇。」

完全に呪霊の群れを撒いた後、また奥へ奥へと進んでいく。探索なのだから同じ場所をぐるぐるしないほうがいい……………今更だけどこいつの回り飛んでるやつチカチカと鬱陶しいわね。

「で何今書いてるのよ。蝶も飛んでるし鬱陶しい。」

これのせいで、呪霊に見つかったんじゃないかしら。そう思いパツパツと手でその継木の周りをくるくると飛び回る邪魔な蝶を振り払ってノートでもなく巻物に何を書いているのか気になって継木の手元を覗き込むと……………

「地図、生得領域だからほぼ意味ないけど無いよりはマシかなって。後その蝶式神だか

ら………潰さないでね。」

「潰さないわ、それで私の手が汚れるのは嫌だし。ずいぶん呪術師としては、メルヘンなやつね。」

おどろおどろしい呪霊みたいな式神も多いけど、蝶って………伏黒は色々種類あるみたいだけど。」

歩いた歩数まで書き込んで、マッピングをしていた。

頭パンクするでしょこんなことしてたら、アホじゃないの？と真っ先に思ったが大体継木は素でバカな事をやらかすことが多い通常運転だとこれ以上その事について考えるのは止めた。

毎回やる行動のリソースをつぎ込む量が、普通の考えよりも遥かに多いのが本当にアレ。私は軽く見ただけだけど、伏黒が毎回目をそらしながら答えるって相当よね。にしても簡易的な式神ね………私おばあちゃんにちよつと気になって教えて貰おうとはしたけどそんなものに手を出す時間があるなら、生得術式を極めた方がいいと言われて結局分からなかった。

純粹に労力と効力の割が合わないってのと、時間は有限って耳にタコが出来そうなほどにさんざん言われた。

呪術師で、そんなもの極めてるのはそれ以外やるのがなにもないから仕方なくやつ

てる奴だつて。そういうえば、継木つて生得術式あるのかしら？

呪術師でも無い奴は、珍しくもないけど。

「……………幻想的と言つてほしいなあ、流石にメルヘンつて言われるとちよつと恥ずかしい気分になる。

ああここに二人居たみたいだね、流石にこの状態じゃ生きては居ないか。この状態で、生きていたら寧ろ苦痛だろうけど。」

そうやって、進んでいけば。血が貯まったドロリとした水溜まりが真つ先に目に入りおずおずと前を見ればまるでミキサーにかけられたかのように骨や臓物が混じつたミンチが目の前にあつた。

「惨い……………」

「形があるだけ、まだましかもね。」

そう一言言うと、継木はその肉塊の前にすつと歩いていきしゃがめば……………しばらく眺めて首を傾げた。私が瞬きした次の瞬間に一切躊躇する様子を見せずその二人の犠牲者の肉塊に片腕を肩が埋まるぐらい突っ込んでいた。

？

ちよつと私こんなところにいるから疲れてるのかもしれない、と思ひ一度反対の方向を向いてからまた見る……………

「うわっ唐突に、何してんのよ！」

「探し物ここにあるかなって……………」

私が見た継木の奇行は、幻覚ではなく現実だったようでぐちゅりぐちゅりと中をまざる音が静かな空間のなかで小さく響いている。

それに探し物って、捜索対象はあるけど捜索物は無かったはずだけど……………落とし物もしてないでしょこんなところで。それにこの中にあると思うってどういう思考回路してんの？

そう呆然としていれば、継木は少ししよんぼりとした顔をして目玉を二つ赤黒く肉片もへばりつき染まった腕で取って引き抜きそれぞれのポリ袋へ捜索対象の後々の人物確認のためなのかいれていた。

「暫く私に触らないで、絶対に触らないでいや近づくな。本当衛生概念なってないやつばっかりなの？ 虎杖然り。」

「まあ悠二は迫られていたからねえ、焦ってうっかりみたいな感じで。」

私は、片腕を肉片で染め上げた継木を見て2, 3歩後ろに思わず下がった……………宿儺の指食べた虎杖といい東京高専の呪術師はこんなやつばっかか！ そうじゃなくても同年の同期にこんな集まってるって本当に改めて環境に恵まれないわと思わずため息混じりに言葉を吐き連ねる。

それに制服の上からかけられた外套の中を汚れた手を気にしていないように探りながら、お香のようなものを取り出し床においてライターのカチリという音とともにゆりと細くか弱い煙が立ち上った。

「……………安らかな眠りを、永久に祈ります。」

「そりやそうね。」

穏やかにそして心を込めるように静かな冷えた声音で冥福を祈る継木の様子を見ながら、さつきまでその遺体に手突つ込んでまさぐつてたのに切り替え早いわね……………と心の中で思っていた。

だけれども継木の言葉に私も、それはそうだと思いながら簡単にだけれども目を閉じて冥福を祈った。

「僕達に出来るのは、ここに居たことを証明することぐらいだよ。うんちゃんも写ってる、呪霊の術式によるものではないね。」

「真正正銘の人間の死体だ。」

「そう、後三人も見つける必要があるわね……………伏黒と虎杖の方はどうなってるでしょうね。」

「かるーくみかけたようなレベルの呪霊にヤラれてるとは思わないけど。」

その後、継木が念の為なのかポラロイドカメラで二人の死体の写真を撮ってそのすぐ

に印刷された写真を見て人間の死体だと分かりきつてることを言っていた。

その後何かを振り払うように、空を握りつぶすような動作を2回継木はとった。

札やお香やらライターやらさっきのカメラやら外套にどれだけ物仕込んでいるだろうか……外して床に落としたらズシンと音を立てそうだ。

さてと、私は次の事を考え始めた。任務で言われたのは五人残念だけどその内の二人は死亡しているのを私達が発見した。後の残りの三人を見つける必要がある……この二人の犠牲者の様子を見ると、もし生存していたら奇跡ねと暗い予感がたつてしまう。

下手に期待すると、精神的にダメージがくる。それはどんな時でも同じ……にしてもし伏黒と虎杖の二人は上手くやってるのかしら？

継木はなにか避けている様には見ていたから、本来より呪霊に遭遇してはないだろうけれど見てきた呪霊はすぐに祓えそうならいだったし……大丈夫だろうだけれども。

「それなりに、やれてるんじゃないかな？ 遺体はここに置いておくしか無いけどね……他の三人探しに行こうか。」

「……………」

私達は、二つの遺体を置いてきぼりにして進んでいく。早く改めて残りの三人も探し

て行かないとね。早くこの任務を終わらせたいという気持ち以外にも、あの無残な死体の様子も探しに向かうための強い動機になっているのだろう。

東京じゃなくてクソ田舎の地元でも、呪術はおばあちゃんに習っていたし、ここに来る前にも呪霊に殺された死体も何回か見たことある……けれどあそこまで酷い死体は生まれて初めてだった。

なんとなくおばあちゃんが、この東京高専に行く事を止めていた理由がなんとなくわかったきつと私にああなって欲しくないからなのだろう。

でも、後悔はしてない。

それが私として生きるために必要な事であるのは分かりきっているから。改めて思っ得領域を強く踏みつけるようにして進んだ。

「おいつ勝手に行くなっ危な」

入って伏黒と虎杖と別れて二手になって行動してから、ずっと付いてきていた黒い伏黒の犬のような狼のような姿をした式神が何かを察知したかのようにどこかに向かっ
ていく。

私は思わず、追いかけてやろうとするが……

「あつ玉犬が、走ってくね。あつちも見つけたみたいだし、野薔薇帰ろうか。」

「見つけたって、継木何をよ？あの伏黒の式神がどっかに行った理由知ってるの？」

継木の一声に、静止させられる。

あつちも見つけたって……あんまり良く聞いてなかったけどそういえばここに入る前に継木と伏黒なんかココソコ話していたわね。

「恵と二手に、分かれる際に合図を決めたからね。出る時に犬を送り返すか戻すって。僕はあの玉犬に帰ってとら指示してないから、恐らくあの黒い玉犬は恵の操作で恵と悠二の元へと向かっている。」

「あの二人がこの生得領域から、出る合図って事ね。もう搜索対象の五人見つけたのかしら、早いわね。」

後そう言うことは早く言いなさいよ、私びっくりしたわ。」

なるほど………二手に別れたときの連絡手段だったって事ね。であの式神は今伏黒の方に行ってるから私達もこの生得領域から出るって事で………

もう全員搜索対象見つけたのかしら速いわね、と言うことはあの死体も見つけたのでしようね。

………ここから出られるからいいものの、出るための合図とかは私も教えてほしかった急に式神がどつか行ったかと思つて肝が冷えたわ。

「ごめんごめん、野薔薇。」

二人見つけたことこちらから知らせましたし、向こうは三人だったのかもね。恵と悠

二が出るならこんな嫌な場所僕もここから早く出たいし……横から空けようか。

後ちよつとやばいかも？」

そう私が文句を垂れば、頭をかきながらごめんごめんと軽く私に向けて謝ってきた後……早く出たいとケラケラと空に向かってぼやいてどこかに向かったかと思えば。

足を止めて私の方を向いた、継木の一瞬見えた表情は虚無その後どこか分かった様に木出てきた柄だけの呪具らしきものと歩いてるときに使っていた巻物を広げるようにして取り出していた。

その直後に、ぬらりとねたりと首筋に冷水の水滴が伝うような感覚が私の体を襲い後ろを振り向けば。

「ちよつとどころじやないわよ！ 継木呪霊が、急に活発になつてる。出るにしてもコレ何とかしないとこの生得領域から出るに出不れない!？」

ここにつながる、ありとあらゆる場所から呪霊共が何に感化されたのか皆目検討もつかないが私達を獲物としてギラギラとした目をこちらに向けている。

すぐさま、芻霊呪法を使えるように仕事道具に手をかけるが……

呪霊の個々のレベルなら倒せばがこの量を私達だけで、捌ききれるとはとても思えないその前に確実に私達の呪力切れが来る。そう思つて継木になにかないのかと目配せをした。

「そうだね、野薔薇。

囲まれてるし全部は相手にするのは、ムリだから道を作りながら行く。僕に着いてきて。」

継木は、そう言えば呪霊の中に突っ込んで行った。一瞬自殺志願者なのか!?!と肝の抜かれたが、声色から様子何もかもが生き残る為の行動でしていると私は確信できた。

なら私が今するべきなのは。

「分かったわよ!私は、ここを抜けるまであんたを信じて着いてく。」

ここで立ち止まらないこと、そして出口があると信じて進んでいくそれだけだ。ここで震えて待つてるだけなのはあいつ等にも合わせる顔がない。

危険度の差はあれあいつ等もこの生得領域から出ている最中なのは間違いないのだから………これであつちが安全にノウノウと帰つてるならメシの一つでも奢らせよう。

「ありがとう、こつち!」

「本当に慣れてるわね!継木。」

継木は、こちらにも振り向かずただひたすらに分かつているのであるう出口に走り出していく。呪霊の間を抜けて振り下ろしてきた腕をいつの間にかあつた木の柄から生えた刃で切り裂く。

私も簪で呪霊の足を潰していく。

不快な呪霊の鳴き声や断末魔がこだまし続ける、空間をお互いにろくに呪霊の相手もしないで走る。

この状況では共鳴りは、とてもじゃないけど使えない……多数の呪霊を一掃できる方法もこれから考えたほうがいいわね。

こんな状況でよく立ち止まらずに走り続けられるわね、こんなに大量にいと呪霊の合間って見つけるの難しいと思う。

慣れてるわねという私の漏れた発言に。

「逃げるごと、多かつたし。」

継木は逃げるが多かつたとだけ口にしていた。

インク漏れ 3

今日は本当に、気分が悪い。

呪霊の騒ぐ声も断末魔も金切り声も、斬った先から出る形を保てなくなつた呪力の感触も。野薔薇ちゃんはやんちゃんについてきているだろうか、恵にお互いの付き添いは必ず生かして返そうって言つたし。

自身の言葉を破るつもりはない。

置いていかないように、時折わざと立ち止まって呪霊の相手をする……：……一体一体は僕から見ても大したことはないでもないかんせん量が多い。

生憎僕にも、野薔薇ちゃんにも一掃できるような技術は持ち合わせては居ない。持つていたらお互い真つ先に使うだろうし。

「簪………本当に、この量どこから湧いてくんのよ?! きりがない!」

まだ野薔薇ちゃんの呪力は、余裕はあるみたいと感じながら四方八方から迫りくる攻撃を弾いてはきつてを繰り返しただひたすらに繰り返し二人で全力で進んでいく。

「生得領域なんて、相手の腹のなかみたいなものだからね。他に現れる呪霊は核となる呪霊にとって胃液みたいなものだよ!」

流石の僕でも、この量はなかなか見ないけどね。」

「本当に出口あるんでしょうね！もう行き止まりに追い詰められておるとしか私は見えないけど。」

最後の最後でたどり着いたのが、廃品のステッカーがたくさん貼られスプレーが吹き付けられた治安が悪い路地裏にあるような壁。

もうここから別の場所に向かうことはできない、本来であれば行き止まりの場所だ。目の前にある壁を叩く、うん大丈夫だ。

「大丈夫ここ境目。今から、空ける。」

「今から!?!」

躊躇なく、手に持った呪具を壁に差し込む。術式が付与されていなくても生得領域内部分だ、ならば基本的に呪力で作られているし現実で展開しているのだから現実世界との境目も当然ある。

その呪力で境ができているんだから、出口じゃなくても境さえ壊してしまえば出られる。力を込めてそして思いっきり下に引っ張って引き裂く。

やっぱり正規の方法じゃないから、変な所になるなまあここしか場所ないし仕方ないか……………

「出るよ、野薔薇。」

「ちよつと!?! あああ」 あ「あ」

パリンつとガラスが割れる音がする、少年院の3階とは運がないなあ……そう思いながら野薔薇を抱えて足に呪力を込める。あの橋の時よりはまだ、高く落ちてはいないからまだマシだけど。

地面に落ちて辺りを見回せば、ちよつと少年院の運動場に使われるグラウンドあたりかな。

やつと呪力が満ちた生得領域からでれて、毒ガスが満ちた部屋から外に出られた気分だ。……結局宿儺の指は見つけられなかったな。

「何したのよあんた! ってここどこよー?!?!」

「ああこつちに出たのか、とりあえず伊地知さん呼んで元の入った入口なんとなくわかるから急いで行こう。」

次の瞬間には、野薔薇は困惑の音が少年院の中に響き渡った。そりやそうか……最初に入った場所と全く違うもんね。

呪術的にもむりやりこじ開けて出てきた場所だし……普通の出口から出るのとは口から出てくる感じで、僕のは腹一部だけ引き裂いてそこからだしね。

「伏黒と虎杖も、そつちにいるかもね。何したのか聞きたいけど後で聞いわ。後さつさと降ろせっ!」

「そうしてくれれば、助かるよ。」

野薔薇ちゃんをおろして様子を見るうんきちんと呪術師だね、異常事態への飲み込みが早いのは助かる。

悠二と恵は、ちゃんと生得領域から出られてるだろうか……？消えてはいないみたいだけ。

一番いいのは、三人または五人全て見つけて出口に向かっていること……：特級遭遇の可能性が最もまずいな、でも生得領域の呪霊の活発化を察知して任務の帰還を知らせた可能性もあるけど。

野薔薇と、生得領域に最初に入った少年院の入口に戻っていく。そこには恵と悠二の二人の姿は見えなかった……：

「居ないわね。」

「ちよつと遅れて来たり先に伊地知さんに合ってるかも知れないから、伊地知さんに報告行こう？野薔薇。」

先に行ってる可能性もあるけど、まだ内部にいる可能性が高いな……：増援依頼はしておこう。兎にも角にも伊地知さんに合わないと話が進まないな。

「継木、言っちゃ悪いけど私に何か隠してないかしら？」

「どう言うことだか、わからないな。あつ伊地知さんこつちは行方不明2名の搜索終わ

りました。後コレお疲れ様です、すぐに頂いてくださいね。」
「ちよつと、勝手に。」

少年院から、伊地知さんが待つ車へどこか焦るように向かつていく。野薔薇ちゃんは、怪しむようにどこかいいながら指定された場所に向かう。

隠しきれてないほどに、僕は装丁を繕うのが苦手だっただろうか得意と言うかなれと思うのにそう感じながら車の方を見ればそこに一人の影しか見えなかった。

ああこれは、僕は恵と悠二を置いてきぼりにしたな。そう確信した瞬間に、驚くほど冷たく何かがさめていく。本来なら怒りや情けなさのさまざまな負の感情で震えるのがちやんとしているんだらう。

けどよくある一つの事象。

自分が生きるために、置いていく事は何回も数えるのが億劫になるほどあった。伊地知さんに僕の予想していることを紙に書いて飴をくるんで渡す。

書いたことは、

生得領域が内部で展開されている

呪霊が活発化して離脱

恵と悠二はまだここに居ないなら領域内にいる可能性が高い。

伊地知さんは、内容を読めば顔を青く染めて渡した紙がぐしやりと音を立てた。

「私としては、ここから迅速に離れることを勧めます。釘崎さん………そして継木さんも。」

虎杖さんと伏黒さんは、………特級に近しい呪霊に合敵している可能性が高いです。」

「野薔薇は、恵と悠仁待つかい？」

震えた声で、歯を食いしばりながらなんとか捻り出すように伊地知さんは言葉を捻り出していく………うんやっぱり特級に合敵してる可能性が高いか。

わかってたけど。

僕は野薔薇に確認するように声をかけるため、体を向ければそこには拳を握りながら俯いていた。話聞こえてるかな、と思つて近づけば喉が締まった。

ふわり体が浮く感覚がする。

頭に酸素が回ってない。

「継木！ 気付いていただけろ！」

「釘崎さん、一体落ち着いて下さい。特級相手に逃げるといふ行為は当然のことです。

例えそこに仲間を、置いてきてしまったとしても。生き延びるそれが………」

その後にすぐに、引き剥がされた。………本当ならこうやってなるのがちゃんとしてるんだろうな。何故か悲しくなってしまう、頭に酸素が戻っていく。

「うん、僕が悪いよ。でも野薔薇、ナニカできたかい？ それともナニカ出きることも思

い付いてるの？

なら教えてほしいな？

僕が出来ることは、君を確実に逃がすことだったとは言っておくけど。」

「継木さん！」

「……………それも、そうね。」

「分かってくれて嬉しいよ、野薔薇。」

僕が悪いよね、わかっている。でもそれ以外やることなかったしやれることが無かった、後は慣れ。

野薔薇は、グダリと力を無くした。

「……………継木はどうするのよ。」

「ちよつと待つよ。」

「伊地知さん避難区域を10kmまで広げてください、ところで継木は？釘崎は？」

「釘崎さんは、先に避難させました。継木さんは、伏黒さんと虎杖さんを待つと

……………あ」

「……………すれ違った!？」

伊地知さんと、野薔薇の二人と別れて少年院からちよつと離れた場所ではがみこん

で伏黒と悠二の二人を待つ。

きつと伏黒は、悠二だけでも生かして返してくれると思ってるなら帰ってきたら迎える人が必要だろう。

本当に天気悪いな今日雨の一つでも降ってきそうだ、折りたたみ傘でも車の中においてくれば良かったかな………外套頭覆えばあんまり濡れにくいけど。

「……………悠二も、伏黒も来ないな。」

コツコツと誰かが歩いていく音がする、足音の数は一つ。振り向けば……………

「悠二、生き」

視界がブツンつとむりやり電源を切られたテレビのように黒く黒く染まった。

「……………?」

ああ僕死んだのか、悠二に殺されたのかその割には真つ暗でしかないけど後純粹に動けないし。」

最初は理解できなかった、けれどしばらくするうちに動けない何もできないしなんとなくコレが死なのか? 即死のような感覚過ぎてもはや痛みすらなかった、感覚も無いし……………

いや死んだら体から意識が離れるようなイメージだったが……………、へばりついてる? 「まるで、寝てるみたいだな。夢を見る前のただ意識があるだけで、体が動かない感じ

の。

遺書は、もう毎回真衣に渡してるし後の事は問題ないかな……継木家の運営も僕が主導権を完全には持ってないから引き継ぎは必要ないし。」

いや寝ていたら、僕基本的に意識ないしどちらかという和金縛りか……もう動けなくなってもある程度大丈夫な様に用意はしてある。

殺される以外にも突然動けなくなるなんて継木ではよくある事だ……、ひよつとして死んだというより精神より肉体が先に駄目になる感じなのかな。

意識だけある、だけれども何処にも行く気はしない。

「下手するところのまま、何も見えなくて聞こえない状態で30年いや15年か。」

もしかすると永遠かもしれないな……と苦笑気味に思った。今までの継木の記憶ではなく記録であった物を見てもこういう状況はなかったし……万年桜とかのうんぬんかんぬんはあったけど言葉古すぎてよくわかんないし。

「気が狂いそうだなあ……そんなこと考えても、どうしようもないけど。俺の意志関係なく肉体には呪力は溜まっていくんだろうし。」

まあ生きてても求められる事象にはきつと問題はないだろう、遺体を見つけてもらえば呪力を吸い上げ溜め込む性質は変わらないし。真衣は冥婚みたいになっちゃうけど、僕という道具を嬪院家で手放さないためそのままだろうし継木の一人となるなら自ら

離れていけない限りは他者による害はこっちの家を防ぐ。

良くも悪くも当主は継木家にとって、錦の旗のような象徴だその花嫁ならば悪くはない。

大丈夫、僕がいなくても巡り廻る。

……正直かなりキツイけどね、ゲームはやりかけだし完結して面白いと思つたなそう感じた本はあと少しで読み終わりで。

お兄さんには、英語まだ教えきれてない部分沢山あるし……新しい技作り上げた今度見てくれて連絡きたけど見はぐっちゃつたなあ……

高田ちゃんのリイブにも、結局は色々忙しくていけてないし。東堂君と一緒にいったら楽しみ方とか熱弁してくれそうだけどそういう機会ないや。

与幸さんの、治療支援はどうなるかな……関わり自体はあるから無下にはならないと思うけど。

結局義姉さんから、認めては貰えなかったなあ……こうなる前ぐらいには認めてもらいたかつたけど。

……もつと真衣とちゃんと話したかつたな。

ずっと暗く感覚も音も感じもない意識だけが、無理やりへばりつくようにある中。

「誰？」

「俺の■を本当に雑に使ってくれるよなあ、■り物の癖に。■りた物は大切に使えと習わないのか？ここでくたばったら俺が困るんだよ。」

真つ暗で何もなかった空間から、まるで霧から現れるように僕に似たナニカが文句を言いたげに言葉を話す。

鏡で見た様なそのままの姿、だけど違うのはハッキリしていた……髪の色が僕みたいに白髪が半分以上あるんじゃないやなくて全て黒色。逆に言えば、それ以外ほぼ違いが見つけられないほど同じなのだが。

……いや本当に、誰だコイツ。こういう時つて、だいたい見知った人間の想像すると思うけど……言葉もノイズ掛かっているみたいに聞き取りにくい部分あるし。

「何て言ってるんだ？僕にそっくりだなあ、ひよつとして双子な〜んて。」

深く考えたら、負けな気がしてくる。

「お前は俺の■■だから、当然だろう。」

「重要なところが、聞こえない。」

ああ話を通じるみたいで、こっちの声はナニカには聞こえてるみたいだ。にしてもお前は俺のナニ？聞こえなくて分からない、当然だろうと唐突に言われてもそもそも僕ナニカのこと知らない。

でも言い方とか言葉の抑揚やテンポが記憶にあるものに似ていてどこか懐かしい気

がしてくる。

「それはお前が、聞こうとしないからだ。人は見たいものを見る、知りたくない部分には蓋をする当然の事だ。」

「……………くたばったら困るってことは、今の状況どうにかしてくるって事だよね？」
「そうだな、忌々しい事この上無いが。」

ああおじさんに、なんとなく似ているんだ。先代継木と呼ばれていた僕の家族に。姿は似てないけどね、僕の姿だし……………

にしても多分僕頭脳ごと碎かれて髄液やら脳髄とかが溢れたインクみたいになつて
と思うけど……………こんな状況なんとかできるって、僕がわかる限りでは継木の記憶の
話ぐらいしかない……………

他にそういう事できるの、僕が知らないだけでもつとあるだろうけど。

「記憶の栓をしたの、もしかして君なの？」

「問屋と同じだ、お前は俺から■つたなら俺もお前から■う権利があつただけの事。■
しの担保というだけ餓鬼でも分かることだ。」

「僕の事とても嫌ってるね、僕何かしたみたいだけ……………どうしたの？」

餓鬼って呼ばれて、昔頭圧迫されたっけ……………そんな懐かしいこんな状態だけほん
の少し思う。

相変わらずノイズが酷い、ナニカが言うには聞きたくないから聞こえない事にしていてるって言うてるけどなら僕が聞きたくないのって一体何なんだろうね……でもずつと昔から記憶の栓をしていた壁は今話しているナニカみたいで。

ナニカもその自覚は持っていたようだった。

僕も代償を取られるような事をずつとしていたし、しているようだけど……呪いは基本足し引き過度に求め過ぎれば代償を支払う事となる、逆もまた然り奪われればその分代償を求めることもできるという事。

「……………まあいいこれ以上お前と話したくもない、眠れば終わる。」

「また会える?」

「二度と、来るな。■が。」

僕に似た姿をした、おじさんのようなナニカは空間の闇にじわじわと消えていく。強い眠気のような感覚に襲われる、その中でひねり出すように出た言葉がまた会えると言う希望のような疑問のような言葉だった。

そう言うのと、ナニカは淡々とした表情をはじめて崩して二度と来るなと言う。

「また会えたらいいね。」

本当に、おじさんに似ている……な。そう思いながらまた会いたいなそう漠然と思っ
て意識を消した。

「……………悠二と、恵はっ!？」

えっと宿儺にやられて、そのまま興味なくされて……………。今悠二の体は何処だ?」

えっと僕は、悠二と恵を待っていたはずいや……………そして悠二の体の主導権を奪った宿儺にあつさりやられて頭打ちつけてそこまで意識が切れて……………

寝起きのように時間と事象の繋がりがまたくつきり嵌まらない。なんでこんな事になつているんだ……………

そう思つていれば、遠くからドオンツと崩れるような何が発破する様な音が響き渡つた。そちらの方向に顔を向ければ……………

「ごんだけ遠くに居るんだよっ!？」

少年院から住宅街つて、離れすぎだろ。」

少年院から、かけ離れた住宅街の方面。鶴で移動したのか、宿儺に吹っ飛ばされたのかわからないけど……………そっちに急いで向かおう。僕は脇芽も振らず、呪力を全力で込めて駆け出した。

雨が降る中、伊地知さんに連絡をしてまた温かさの残る虎杖の体を背負つて歩いていく……………体が痛いけれども人が来るまで雨曝しにはとても出来なかった。

後、虎杖を運んだらすぐに……………

そう俯いていれば、足音が近づいていくここは伊地知さんに言つて避難区域になつて
いるはずだ高専関係者か？そう思いながら、雨に濡れないように建物の影に虎杖を置い
て念の為様子を見る。

俺は高専関係者以外の可能性も考えて、隠れるようにして足音の先を覗き込んだ。

「!?」

「悠二！恵！……あつ、恵だけでも良かったよ。悠二は、残念だったね。」

そこで見た光景は、足音の主は、あり得ない。継木は、あの時確かに俺の目には……
そんな困惑を他所に、俺の生還を喜ぶように俺の様子を見て何を思ったのか虎杖の死
を勝手に察していつもの様子で悲しんでいた。

まるであの出来事が全て幻覚だったと、そんな考えすらよぎる程に。

「どうしたの、恵。顔怖いよ?」

立ち尽くしていれば、継木が心配そうな顔を見せて俺に近づいてくる……呪力が空
に近いなか玉犬の構えがすぐできるように用意をしながら……継木が一步進むたび
俺も一步下がる。

「どうして……継木、お前が生きてるんだ?」

「えっ?」

「お前は宿儺に殺されたはずだ、虎杖もお前を殺してしまつたと言つていた。」

俺が、あの時見たのは頭が砕け血を流し脳髓や脳漿が飛び散った継木と同じ服そして同じ体格をした人間の死体だ。

宿儺は、ゲラゲラ笑いながらああアレか殺したとその死体をよく見ると頭砕け顔すら見えないその死体を俺に向かって投げつけ。

虎杖は、最後に継木を殺してしまったと俺達に長生きしろと言う時話した。

……もしかしたら宿儺が、俺を精神的に追い詰めるため言ったのかも知れないが虎杖もそう言っていたそして実際に今目の前にいるあいつの死体もこの目で見ているのだ。

「何を言ってるんだ大丈夫かい？冗談言うにしてもタイピングが悪いよ？」

恵、僕はちゃんと生きている……少し頭は強くうっちゃったけど。今日は色々ありすぎて疲れてるんだよ悠二と一緒に帰ってゆっくり寝よう。」

「いや確かに……」

そういうえば、本当に大丈夫か休んだほうがいい疲れているんだと俺の言っていることが可笑しい一蹴して終わらせようとした。本当に、俺の言っていることが理解できず通じていないかのように……

「帰ろう、高専に。恵かなり怪我してるし、虎杖は僕が持つよ。」

「そう……だな。」

頭が考えが纏まらない、話していてもあいつの言動として違和感はない呪力も紛れもなく継木の呪力だ。

だがあの時死んでいないとしたら………

あの時見た死体はなんなんだ？

溢れた水

目が覚めると、ほだらかな日差しの中。

いつも見ている庭には、見ている夢は春頃なのだろうか？櫻が咲き誇り花弁を散らし
ていく。人工的に整えられた池には、錦鯉が水面を揺らしながら泳いでいた。

僕は女性になつてるようだった。髪は短い髪飾りがつけられている横には友達な
のかそれとも恋仲なのかよくわからない短髪の恐らく呪術師であろう男がいて縁側で
談笑している。

体が、勝手に動く。そして、思うようには動かせない。

この感覚を僕は知っている、あの時は幼い僕から見た風景だったけど。

「■■■君、頻繁に来なくていいよ。」

映画をととも現実的に、そして主観的に見れるのならこうなるだろうかと僕は思いな
がら彼女が口を呆れたような声色を出して聞く。

湯呑にちらりと移った彼女の表情は、何回か見た先代の顔にとてもよく似ている
………まあ僕が見た彼女写真はモノクロ口だったけど。この継木が生きていた時代は大
正辺りだっただろうか………

女が当主とは呪術師としても珍しいし、この時代の価値観としても珍しいがまあ家にとつては相変わらざる関係ないのだろう。

それが継木家の当主たる素質を持つていけば、関係ない当主かそれ以外かの価値観の家だ。だからある意味での男女差別も、呪術が弱かろうと良くも悪くも何も無いのだが………

隣にいる男を見れば、どこか彼女の機嫌を取るようにそれなりにいいお店で買ったことが分かる袋から小綺麗に整えられたお菓子を出してくる。

カステラに似ているが、間にアンが挟まれているように見える………見た目的には羊羹だろうか。初めて見たけれどもこんな風に出すものならよつぽど良い品何だろう。

「近くだから来てただけだよ、櫻ちゃん。はいこれお土産、シベリア。」

お菓子の名前は、シベリアと言うらしい。洋菓子みたいな名前ではあるが………ロシアとは全く関係なさそうだ。羊羹なんて日本生まれの極みの菓子だろうし。

にしても、この屋敷は僕の現代でも全く代わり映えはない。まるで時が止まって人だけ入れ替わつたみたいに退屈でつまらなく何も音もなく静かだ。

だから………

「………ハイカラなお菓子持つてくるけど、こういうのつて高いけどちゃんと貯金してんの？」

気に入ってる味だから、いいけど。」

彼女もきつと同じ事を思つて、笑つているのだろうか……口に含まれた菓子は夢の中でも洗ひ物で使うスポンジで柔らかい練り消しのような物を挟んだような感覚だった。吐きそうになる。

夢ぐらいちゃんと言ふ昔のように普通の味を感じることが出来ると思つたのだがそれは僕の見当違いの思い上がりだったようで、実際は現実と何も変わりなく同じだった期待して損をした。

それとも、今この時代の継木も今の僕と同じような味覚だったのだろうか……？これを気に入ってる味とは、なかなかと言つたものだ僕のパンケーキが好きなのと似たような理由かも知れないけど。

「呪術の給金は、いい方だからね。それが良くなかつたら土方とか他の激務でも給金いい場所選んでるよ。頭はないけど、体力はあるしそれに呪力使えたからそのなかで一番良かっただけだし。」

「ふーん」

金銭面の心配はないと男は、言いながらお茶を啜つた。今も昔も呪術師は進んでなるものでもないようだ……進んでなるような物だったら偶像として祀り上げられる事あるだろうしそれもそうか。

そもそも呪術師になれる人物が少ないし、その割には危険性があるから給金など弾みやすいのも変わらない。平安時代ならば色々と数も状況も異なつて違ふのだろうが………

そう思つていれば、彼女は彼の言葉をつまらなそうにふーんと一つつぶやき聞いた後。

「で■■■ちゃんとの進展はどうよ。抱擁の一つでも済んだかい？」

「いやっ！■■■とはそんなんじゃないって！急にびつくりゴホつゲホツあつっ」

その後の言葉を彼は聞いた瞬間に、ちまちまと呑んでいたお茶を吹きこぼした。

その後、暫くむせていた、急に聞いたらそりやそうなるだろうと僕は真衣のことを思つて感じたが彼女は楽しそうにケラケラと笑いながら。

彼の背中を擦る。妙に手慣れている様子で………継木の仕事として精神ヤバイ人達相手にすることもあるからそう言うのは自然と身に付くのだろう。

僕の代からつてのはなくて、いつのまにかとかそう言うのが分からなくなる程色々続いている。

「そんなに慌てることでも無いだろう、落ち着け。

まあいいさ、君達の様子が相変わらずなのは分かつたよ。せめて私の目が黒いうちに、結納ぐらいは済ませてくれまどろっこしい。」

彼女は、楽しそうにそして呆れたような口調で彼と仲のいいらしい人とさっさと結びついてくれまどろっこしい話す。

嫉妬も何もなく、呪術の世界はいつ死ぬかわからないそういうこともあるのだろう……。それに呪術師が長生きする場合なら、僕と同じく彼女も早く死ぬ。一緒に段階で死ぬるなんて贅沢はない。

先に逝く人を見るか、それとも置いて逝くかそれが殆どだ。継木 櫻 継木当主に限らず普通の呪術師でもそういうことも多いのだが。

「俺とあいつともほぼ同じ年の癖に、目が黒いうちつてもうババ……。」

「女性に年齢を問うのは、礼節が成ってないと言ったらわかるのだらうなあ……。」
「イダダダっどこで覚えてくるんだよ！そういうの……。櫻ちゃんろくに外出てねーのに！」

お茶を吹き出した男は、憎まれ口を叩く。ババアと言いかけた辺りで、彼女の体は素早く動き体格としては遥かに劣るが、その劣りを感じさせないほどに見事に締め上げざりざりと音が聞こえそうな程に締め付けていた。

表情筋が張っており、彼女の声は先程までとは違いドスが効いていて確実な怒りがこもっていた。自分の祖先の様なものだとしても、女性って強いなと思っていた。

……僕は絶対に女性に年齢関係に触れないようにしよう、あんなふうに締められた

くない。死ぬ。

「■■■■君も、私も呪術師だ。絞め技ぐらいできなくてどうするのだよ。あと相変わらず不意に弱いな、神経尖らせておけよ。」

それにろくに外に出てない事には同意するが、国内なら回ってるぞ。」

「櫻ちゃん程じゃないけどちゃんとしてるわ！呪力の感じ方が可笑しいんだよ！」

飽きたのか、もう反省したと思ったのか彼女は手を話して欠伸をしながら昼寝すると
言ってお前も帰れと言って手を降った。

開放された男は、やれやれという様子をしながら人間関係をからかわれたせいか顔を
少しザク口の実のように赤くしていた。

……………彼女が、寝室に入り眠りについた時。

「……………やっぱり先代の記憶だよな、アレ。」

まるで入れ替わるようにして、俺は目が覚めた。普通の夢よりかなり鮮明に記憶に
残っている……………、あのほだらかな春の陽気も会話の声色や表情の動きや風もさえも。

僕は、初夏の蒸し暑さが出てきた朝に頭を冷ますために時期としては早めに冷房をつ
けて普段よりボケた頭で、準備をしていたが。

いつものように朝継木家から送られてくる情報を確認するために、スマホを見れば

……

「うわっヤバ遅刻だ。」

1時間も呪術高専の始業の時間から遅れていた、思わず歯ブラシを落としカランと音が響く。今までこんな事は、無かったのだが……

昨日のこともあるし、疲れてるのかな……？

「おはよう野薔薇 恵。遅刻した。」

「遅っぞ。」

珍しいわね、毎回あんたが一番早いぐらいなのに。」

「ハハハ」

いつも使っている教室の扉を、開けるといつものようにはないか……悠仁はいない。いつもの位置に二人はいるが、悠仁いつも座っていた机には花瓶の花が一つ寂しく揺れていた。

野薔薇も、恵も、いつもより遥かに調子は悪そうだ……僕もそうだけど同級生が死んだ事なんて簡単に受け入れられる事が出来たら呪術師の素養は持ち得ないだろう。

別れとは、負の感情の最もわかりやすいものの一つなのだから。何も感じないなら他の事象でも、火種は出ない。僕はこの空気を誤魔化すように、隠すように笑えば……

「……………遅れてるが大丈夫だ。」

「自習って、たしか五条先生の授業だったはず……だよね気の所為？」

「かなりの案件だったから、休んでねー僕も休むーって教室出ていったわよ。」

恵は、遅刻しても対して変わらないというように黒板を見ると僕に向けて指を指した。

そこには……

(自習 昨日は皆お疲れちゃん!!)

と大きな文字で書いてあった。僕はそれを見て思わずため息をついてしまったが二人もこれを見た時のいや目の前で書かれたときの心境はほぼ同じだったらしく。

野薔薇が呆れたように、五条は黒板に書いたその後教室からどっか行つたと付け加えた。

「教師としてどうなの？」

「五条先生だから仕方がないだろう。」

暫く気まずい沈黙が、三人だけいる教室を支配する。それを破るかのようにガタリと椅子から野薔薇は立ち上がる。

そうして教室の扉に手をかけた。ガラリと、音がする。その音に何故だが、悠仁がここにいたらきつともつと騒がしかったんだらうなそういう確信を持ってしまつて花の花瓶を見つめ寂しくなった。

「……………私少し、外に空気吸いに行つてくる。休めつて言われてるんだから教室の外出でもなんにも言われてないでしょ。」

「そうだな、俺もそうする。継木お前は どうするんだ。」

恵も野薔薇について行くように、教室から出ようとする。その時に僕はこうすると、言われる。

たしかにこのまま一人は何も、収穫も進展も無いだろう少し考え込み。

「ちよつと彷徨くよ、学長に会おうかな。」

学長に会おうと思うと、返答を返した。

本当なら、嫌だけど五条先生に訓練頼もうかなと考えてもいたがいらないなら学長なら付き合つてくれるだろう。僕は正直に言えば、戦うことはあまり求められていない欲も抵抗もなく只呪力を吸い上げるそれだけなのだ。……………

弱ければ、手を伸ばそうとそのはしから水のようにすり抜ける。だから今までも強くなろうと思つてやつてきた、それはこれからも変わりはない。

後ろを向いて立ち止まる時間なんて僕には、最初つからその権利すらない。

今まで何人も見捨ててるし、殺してるのにわざわざ後ろを向いたらきつと屍の山を眺めることになる。

そうやって二人にちよつと笑つていつてらっしやいと見送ろうとすれば……………

「今日一日はなぜか五条先生全て担当だ、全部自習になってると思う。」

「……………ゆっくり休めよ、いつもより顔色酷いぞいつも酷いが今日は特にな。」

「寝坊しちゃったしねー疲れてるんかなあ……………」

恵に、何故か心配をされた。珍しいな心配してくれるの、たしかに寝坊したし色々調子が悪い……………。調子が悪いのはいつものことだけど、いつもよりも調子が悪い。

「そうじゃねえよ。」

「そっか。恵も野薔薇も、ゆっくりね。」

……………僕にはこれ以上なんとも言えなかった。

それなりに広い演習用の空間に、バシンバシンと物を撃ち落とす竹刀の音が幾重にも響く。

普通の人間ならばこの音を聞けば、この空間に何人も熱心に剣道などの訓練をしていると思うだろう。だがここにいるのは、継木と夜蛾と夜蛾の操る大量の呪骸のみ。

呪力を全身に巡らせ、音が重なるほどの速さで自身に向かつていく呪骸を竹刀で打ち落とす。確実に今日は調子が悪いのに妙に何度もやったかのように体が、自然についていく。

何回も付き合ってもらってるしやってるから、かつては分かっている。だけれどもそれ

以上に……まるで知らない経験が僕を引っ張って動かしているようだ。

「もつと早くした方がいいか？いつもより馴れてるようだが。ここまで一つもお前に呪骸が当たってない。」

「いや、ちよつとお話いいですか？」

夜蛾学長は、襲ってくる速さやパワーを一段階あげるか？と僕の打ち落としていた様子を見て聞いてくる。一度も打ち落とすはぐれはなく全て叩き落とせていたから当然と言えば当然か。

ずっと夢のことについて、心配してくれてたし一番最初にお話しした方がいいかな？そう思つて僕は、打ち落とすのを止めずに動き続けながら口を開いた。

「言え。」

「すいません、昨日の夜に多分歴代継木らしい夢見たんですよ。でちよつと遅刻しました。」

「…………急だな、普通は継木は見れることが当たり前とは謳っているが。今か…………」

「いやー不思議ですよね。なんとなく全部は見えてない気がするのかもしれませんが、さうです。つて勝手にスピードあげてませんか？学長!？」

僕の先代の夢を見た、ということを知れば良かったなどは返らなかつた。今なんて起きたのかを少し考え込むように夜蛾は、頭を少し回した。

理由は、僕にも分からない。人死にを見てしまったのが条件ならもうとつくのとうに夢は見られてはいるはずだ。条件が分からない限り偶然と言うしかない。

……だけでもなんとなく、先代の夢はまだまだこの一回で終わらず暫く続きそうな予感だけはあった。

急に呪骸が、加速する。

「軽口叩いてるだけの余裕はあるみたいだしな。」

「速いですって!」

もはや弾丸並みの速度とも、思ってしまう。これ打ち落とすまでにいかなくてもかすらせてそらさないと呪骸の衝突で僕の体に穴が空きそうだ。

……でも学長の言うとおりだ、不確定をよくよくか考えても仕方がない。

「ところでいつまでコレを続けるんだ、申し訳ないが俺はそろそろ職員合同会議で離れたいのだが。」

「時間がある限り、なので呪力最後に込めて動かなくなるまでやりたいですけど大丈夫ですかね?」

「わかった夜明けまでぶっ通しになると思うが、後で後悔して文句言うな。」

「大丈夫です、埋まったら笑ってください。」

やれるところまでやろう。

溢れた水 2

ふあみれすとやらに入つて、目の端にチラチラと入つてくる鬱陶しい羽虫を燃やした。その後、夏油という男からの提案その結果。

五条の来る場所を聞いた後ワシはすぐにオハナを連れてダゴンと真人の元へ一旦戻ろうする……

ワシのみで五条を殺せたら、もう夏油という人間あやつに頼る必要もない獄門疆だけ蒐集に加えた後に真の人間の世界にはいらん殺してやろう。

そう思えば思わず口角が上がり、それを見たオハナも同意するかのように静かに首をこくりと上下に振つた。

「ああ後君達が気にするべきは、五条、虎杖と言つたけど……後継木もいたね忘れてたよ。」

やっていることを知られたくないならむやみに人を殺すのもオススメは出来ないかな？」

残り火の心地よいパチパチとした熱が立ち昇る中、オハナ共に完全に立ち去る前。夏油という男は、ふと思ひ出したかのように声を出す。

心のどこかで、貶すようなからかうような感覚が癪に障る。

「五条をワシが殺すのだから、別に関係ないだろう？ ソイツが殺せたら後は雑魚のみだろう。」

「継木は五条と違って、殺せるのは確かだね。」

今の人の中ではつきりと認識する必要があるのは今この時最強と呼ばれ認識される五条。そして虎杖の中に巢食う呪いの王 宿儺……………

それらをワシらが、真の人間として世界君臨し存在する偽りの人間どもを蹂躪するためにそれ以外を知る必要なんてないだろう。更にわざわざ殺せると分かりきっているのだ、何故我々に言う必要がある。

雑魚以下とでも目の前の男は言いたいのか？

「ならばなぜわざわざ話に出す。もしワシを侮る為の適当な理由であれば、お主も今ここで燃やすぞ？」

「ハハハ話しは最後まで聞くべきだよ怖い怖い。」

並の人間ならば、死を意味するであろう程度の火を見せるが……………男はケラケラとカラカラと笑うだけだ。話は最後まで聞くべきと、理性のない獣ではワシはないここは辛抱して聞くべきか。

そう思い、手にある熱を消すと理由と思われるものをその男は淡々と話し始めた。

「特有の性質の問題だよ私にとっても興味深いね、確固とした肉体が無い君達にとって継木の血肉は毒に等しい。もし遺体があったら私に渡してくれば勝手に処理するよ。」

五条や、虎杖の中に巢食う宿儺より矢鱈とこの男から語られるとしては詳細と言っても良いものだ。前者が圧倒的な個の武を語るとするならば、継木とやらは抗いようのない仕組みとでも言いたいかのようだ。

……今は呪の世ではなく、人の世である。その一つの証が継木なのであろうか。全くもって忌々しい。

一言一句事実だとしても、虫酸が走るような不快感しか感じることが出来ぬ。真の間は我々なのだ何故偽物どもが我が物顔で地を歩いているのだろうか。

「くれぐれも、継木を殺しても長くその場にいずに放れて触らないようにね。」

「どうだが、愚かで矮小な人間共の一人。粉塵にすれば関係かならう……」「忠告だけはしておいたよ。」

男の眼は相変わらず、どこか嘲笑うようだった。

あくまで夏油は今協力関係というだけじゃ、事が済み呪いの……いや違うな。我々の世になつたら用済みだ。真っ先に殺してやろう。

やっぱり人の目盗んでここにくるって大変だねー、それなりに呪いは秘匿のため仕込んで入るんだけどさー。虎杖が生きてるってこと夜蛾にもいつてないし？そこら辺調整効かないのやんなるやんなる。

……………にしても。

表情がどこか暗いかなー正直今回の案件は任務が悪かった部分が多いと俺でも思う灰原と七海の件といい……………ほんつとうに任務の認識できとーだなあ、ここは最強のグレートティーチャー五条の出番ってところか。

「……………どうしたん？悠仁そんな浮かない顔してさ。」

悠仁は眼を伏せながら、俺にとっても予想できない事を口にした。

「……………継木を殺しちゃった。」

「……………!？」

殺したその言葉が空虚にコダマしていく。

いやー俺自身の領域展開受けるとうなるのかなーって思ってしまうほど一瞬思考止まったよね。悠仁は冗談でこういうこと言う性格でもないし……………殺したと思いついてるそんな状況だったんだろうか。

でも こっちには伏黒とかと違って怪我状況すら担当受け持ち生徒として報告が無い。殺してたら、呪術界はちよつとしたお祭り騒ぎになるから……………殺した問題とか

そう言うのじゃなくて遺体の利権争いで。

考えて嫌になるね、それでも呪術では比較的マシな地獄に置かれているのかも知れないと思うと。

とりあえず継木生きていて安心して言い事は言っておこう、今の悠仁みたいに隠して鼓舞してもいいけど暫くしたら他の呪術師に実働訓練させるつもりだしね。それに呪力の出力訓練中だし。

そこから辺で齟齬でたらめんどく

悠仁大変だろうし。

「悠仁、櫻は生きてるよー。もし死んでたら、僕も呪術界も大騒ぎでこんなところに来る余裕ないない。」

悠仁、君病み上がりならぬ死に上がりだし。あつ僕うまいこと言った？」

「アレで生きて……………」

俺の気のせいだったかもな、イツデエ！」

「もう呪力はどんな時でも、一定。でも、ちよつと聞きたいかなー変な呪術かけられてたら大変だし。」

話しかけられて、別の事考えても出力一定にする訓練ってことで。まあ楽にしていよよ。」

まあ恵も、野薔薇もそんな事出来ないししないとは思うけど。でも悠仁の中にいる宿難は何かしているのはほぼ確実だろうね、実際悠仁が乗っ取られて心臓抜かれて死んだ状態から生き返ってるし。

俺みたいに反転術式を、悠仁が死に際で覚えた訳じゃないだろうから十中八九直したとしたら宿難しかない。櫻にも何かと引き換えに反転術式を施した可能性はあるにはあるし。

恵にも後で聞こうか、悠仁から聞いたことは隠せば大丈夫だろう発言は信用してくれろとは思うしね。一応今夜蛾に合う予定あるし伝えておこうか、情報共有は迅速にと言うのは基本だからね。

俺エラーい。

にしても、悠仁からざっと聞いて悠仁は蘇生された記憶曖昧だし櫻は脳やられてるって話してるし。いやコレ本当にどうなってんだろ。悠仁はそこら辺も宿難が何か仕込んだとかそういう可能性見つかるけど。

櫻は、反転術式で悠仁同様に蘇生かと思っただら脳やられてるって……何度も思うけど嘘つくとは思わないし俺でも脳やられたら反転術式使えないし。

「ウンウンじゃあ頑張ってるね、僕ちよつと用事があるから。」

もつと詳しいこと聞きたい気はするけど。流星にこれ以上いると遅刻するなあ、夜蛾

に下手に勘繰りされてこのことバレたりするのもヤダだしさつさと出ていくか。にしても初めてにしてはなかなかじゃないかな悠仁、あの任務で個人的に感覚つかんだけで自称するだけはあるね。

この調子で続けられれば、アレには十分間に合うだろ。まあボツコボコにされてるけど。

「今から夜蛾の所行くから車だしてー。」

「はいっ今からですな。場所は………」

「高専内にいるからいつもの場所。」

コツコツと、高らかに俺としてもご機嫌に靴を鳴らしながら垂れ流しにされた映画の音が全く聞こえない高専内の場所に移動してから伊地知に電話をかける。

呼び出し音三回以内に大体出る。

大体いつ呼び出してもそうなんだから俺から見ても凄いやねー、とつまあ今伊地知に悠仁の家系も調べて貰ってはいたけど普通っぽいしか今のところ分からなかった。乙骨もなかなか調べるのムズかったらしいし、情報もコレからに期待ってところかな？

そう思いながら、小石を蹴つ飛ばせば力加減を少し間違つて小石がパンつと勢いを付けて飛んでいくよりもまえに紙風船のように碎け砂に消えた。

「遅れて申し訳ないです、お乗りくださいー！」

「サンキュー」

しばらく表に出せない腹いせのように、石を蹴り碎いて砂にして暇を持って余してあれば10〜20分後位だろうか。

現代の車特有の静かな走行音が聞こえてきて、運転席に伊地知がいるのが見えた。俺の目の前で丁度止まったので乗り込んだ。しばらく車に揺られながら、外を見たにしても夜蛾もわざわざ遠い料亭にしないでいいのにそんな事を思いながら。

「伊地知ー、継木ってちゃんと生きてるの確認できてるよね？」

悠仁から聞いた、継木を殺したいやこの場合は継木が死んだ事を伊地知にゆつくりと聞く。運転中に驚かせ過ぎて事故ったら俺はへーきだけど伊地知はそうではないし。

上澄みが高いだけで他はわりと耐久自体は呪扱えない人間とも変わらないの結構いる、歌姫だつてわりと俺から見たらそうだしねー。

……まあ死んでたら真つ先に俺に報告あるだろうしほぼ意味の無い確認といえばそうだけだ。あの任務みたいに呪術界から見たらごく一部の犠牲とは違って継木当主の力を失う前の死は全体を良くも悪くも大幅に動かす事態だし。

「ええ生きてます。」

「それ 継木家基準 の生きてるじゃないよね、念の為だけだ。」

「勿論そうですよ！」

もしそうだったら御三家、高専、継木家で継木当主の亡骸……呪力を吸い上げる呪物としてすぐさま利権の取り合いで泥沼になります……」

伊地知は、勿論とはつきりとした声で返した後だんだん後に続く言葉は小さくなるように話していた。

あんまり言いにくい事ではある、継木当主が人である事をはつきり認識できるほど関わってきたのだから。立場としてはほぼ星漿体と変わったものではない。

もし死んでいたら誰もが真つ先に死体を探すことになる、その後何故死んだかの理由を探して押し付けその死体をより活用できる立場に皆揃って争うだろう。櫻が死んだその事自体には誰も哀しまない……いや継木家は全体として哀しむこともあるだろうが。

その場合、死んだ原因として真つ先に非難されるのは高専側。比較的利権を得るのに優位なのは禅院家か……櫻自身に真希の妹の真衣を許嫁として今回は縁結んでるし。

高専側が俺の嫌がらせとしてあの任務組んだとしても、継木の件で非難されるのは結構な痛手だと思うし隠し玉でもあるのかもしれないそれもあつたら探らないとな。

「そうだもんねえ……だから、継木家はどんな状況になつても当主は生きてるって言い張る部分もあるわけだし。」

「夜蛾学長からも少し話しでも聞くかな。」

色々纏めて聞いてみようか、一人で考えても堂々巡りで其までだ新しい情報は確実に手にははいるだろうし。

俺が親しくて信用できる上層の人間は夜蛾くらいしかいねーし……

「ちよつと早めに付きそうですね、どこかによりますか？」

「いや、そのままでは早めについてあげよう。」

そう言うこともあるし今回は心証良くしておこう、珍しく約束より早く来たつてなれば夜蛾も驚いてどう言うことだとか思うだろうし……

ビリつと空気が変わった、伊地知は気がついてないらしいでもこのまましておくといつも危ないな。

「止めて………先に行つてて。」

本当に最近妙な事が頻繁に続いてワクワクするやら疲れるやら、まあ俺が対処すれば良いでしょ。

「遅いっ！」

「すいません………」

目の前の、夜蛾学長にただ謝ることしか出来なかった。五条さんから先に行つてくれとの事を伝えられたこと等々話して30分程度は仕方がないと話していたが1〜2時

間となると流石に……………

知っている五条さんの予定などの打ち合わせ等は先に出来る分だけ済ませ時間を稼いでいたがこれ以上は無理だった。

そんな死んだ空気を壊すように携帯の着信が静かな料亭に鳴り響いた……………あつ振動だけにするのをてつきり忘れていた。

「あつ電話、失礼します。」

「おそらく悟だろう、伊地知そのままでもいい。」

「本当に申し訳ありません。」

直ぐ様申し訳なさに震える手をなんとか押さえながら直ぐ様出ると。

「ごめーん今から急いでいくから、その事夜蛾に伝えてー。」

呑気な五条さんの声が聞こえた……………、夜蛾学長にも漏れて聞こえていたのか反省の無い様子に青筋が顔にいくつも浮かんでいるようだった。

「伊地知電話を貸せ！」

「えっ!?!はい、どうぞ。」

夜蛾学長の強い口調に促されるまま、五条さんには繋がってる電話を渡した。本当なら五条さんに夜蛾学長に今から変わることをお伝えした方が良かったとは思う。

「こんな時間まで伊地知を先に向かわせどこで油を売ってる悟。一時間以上も遅刻だ

ぞ、早く来い。」

渡したすぐ後に、怒りの言葉が飛んだ。本来ならスケジュール管理や時間管理はこちらの仕事でもある。だから今回の事は私の失態だ、ああ胃が痛い…………

家にまだ腹痛の薬とまだ残ってる書類仕事のためのエナジードリンクの在庫はまだあるのだろうか…………

「いやー、未確認の特級呪霊ほいのに接触してねえ。ちよつと後始末してから向かうよー」

「仕方ないかその未確認の特級呪霊は祓ったのか？」

特級呪霊!?!私を先に夜蛾さんのところに行かせた時に接触を……………あのままいたら確実に私は死んでいた。いやこんな補助監督として主に五条さんについて仕事している身だ、身の危険はよくあることとはいえ…………

特級しかも、未確認のものとは。もし倒されていても五条さんにここまで時間をかけさせられるというのも…………

「とーぜん最強五条が祓いましたと、言いたいけど徒党組んでたみたいで逃げられちゃったー。」

「逃してどうするんだお前は……………なるべくすぐに来い！来たら特徴等はこちらに伝えろ。」

特級呪霊の徒党？しかも あの五条さんを巻いて逃げた!? 本来群れをなすのは弱い呪霊だ、二級程度になればなにかの呪物に引き寄せられない限り単独で巣を作り出す。

助けられて逃げたのなら危険や巻く方法や逃げ方がわかる高い知能があることは確実だ。特級としても確実に更に上位だろう。

「はいはい切るよ。」

「五条アイツ勝手に切りやがった……………」

夜蛾学園が、五条さんに折り返し電話するが留守電話サービスにしか繋がらないことを確認してから呆れたようにため息をついて私に携帯電話を返してくれた。

「本当に、すいません。」

「伊地知のせいじゃないさ、突然携帯とってすまかったな……………未確認の呪霊について話したいこともある。待つか……………」

小腹すくだろう勝手に頼んでくれ、いつも悟の面倒お疲れ様だ。」